

Harry Potter Ultimatemode 再会と因縁の章

純白の翼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

存在を忘却されし男の赤ん坊。

密かに世界中に大きな影響を及ぼす団体に保護され、日本で育つ。

男の赤ん坊、清潔感溢れる黒髪と綺麗なアーモンド状の緑の目を持つ美少年へと成長する。

ある日、異形の力と生き別れた妹の存在を知り、自らの力を高め始める。

日本の魔法学校にも行きながらそう言った日々を過ごしていたある日、祖国イギリスからの魔法学校の手紙を受け取る。留学生という形で行く事になった。

その少年の名は、ハリー・ポッター。そこから彼の運命は動き出す。

ハリー・ポッターの二次創作です。兄のハリー・ポッター、妹のエリナ・ポッターのダブル主人公です。見た目は、ハリーが「顔と髪がジエームズで目がリリーな少年」、エリナが「顔と髪はリリーで目がジエームズの少女」です。また、エリナが原作のハリーの立ち位置です。今作のハリーは、性格、実力、知力、運などあらゆる能力が別物レベルで超強化されています。

また、このシリーズは3つに分けられています。今作は、賢者の石と秘密の部屋に相当します。

スピノフとして、『Harry Potter Ultimate
mode EXシナリオ』も書いております。もつと世界観にのめ
り込みたい方向けのものです。

目次

プロローグ

賢者の石	
第0話 引き裂かれた兄妹	1
第1話 マホウトコロの英国人	11
第2話 イギリスへの帰還	19
第3話 ファースト・コンタクト	25
第4話 エリナ・ポッターとの再会	30
第5話 新たなる4本の杖	36
第6話 ホグワーツ特急からの大冒険(前編)	41
第7話 ホグワーツ特急からの大冒険(中編)	46
第8話 ホグワーツ特急からの大冒険(後編)	54
第9話 組み分けの儀式(前編)	61
第10話 組み分けの儀式(後編)	66
第11話 最初の一週間の授業	75
第12話 呼び出し	85
第13話 飛行訓練	91
第14話 ハロウィーン(日常編)	102
第15話 ハロウィーン(激闘編)	111
第16話 クリスマス	119
第17話 みぞの鏡	124
第18話 ドラゴンの卵	130
第19話 情報漏洩にご注意せよ	135
第20話 石を守る罫	141
第21話 2つの顔を持つ男	146

第22話 解放たれし力 | 153

第23話 マクゴナガルとの面談 | 165

第24話 1年生修了 | 173

秘密の部屋

第1話 ホークラックス | 182

第2話 ウイルスモードの力 | 187

第3話 隠れ穴へ | 192

第4話 乱闘騒ぎ | 200

第5話 魔法道具専門店 | 207

第6話 乗り遅れ | 213

第7話 12の夜 | 218

第8話 説教 | 225

第9話 ギルデロイ・ロックハート | 231

第10話 穢れた血 | 238

第11話 継承者は誰だ? | 246

第12話 狂ったブラッジャー | 256

第13話 決闘クラブ (前編) | 263

第14話 決闘クラブ (後編) | 268

第15話 クリスマスの作戦 | 274

第16話 リドルの日記 | 279

第17話 奪われたレッドスパーク (前編) | 286

第18話 奪われたレッドスパーク (後編) | 292

第19話 クイディッチ決勝戦 | 298

第20話 ハグリッド更迭 | 302

第21話 いざ秘密の部屋へ | 308

第22話	毒蛇の王と闇の帝王	314
第23話	ネオ・バジリスク	322
第24話	ラストバトル	330
第25話	ルシウスへの警告	337
第26話	監獄での会話	346
第27話	2年生修了	351
おまけ		
設定集		358

プロローグ

第0話 引き裂かれた兄妹

1981年10月31日。一見何も変わらない日常があるように見えた。一人の男がいた。名を『闇の帝王』と称されるヴォルデモート。男は、ある一軒家を目指していた。一見簡単なことのように思えたが、実はあの腹黒く、それでいてこの男をも凌駕する欲望と傲慢さを持つ老人アルバス・ダンブルドアの差し金で、簡単に見つからなかった。

だが、密かにダンブルドアの一味を裏切っていた配下は、すぐにヴォルデモートにターゲットの居場所を報告した。途中で子供がぶつかってきた。いつもなら殺すつもりだったが、それ以上の獲物が居るので無関心を貫いた。

『ここか。』ヴォルデモートはほくそ笑む。

『忌まわしきジェームズ・ポッターめ。今まで、散々俺様をコケにしておって。挙句の果てに、駄犬や人狼と組んで俺様の左腕を切り落とすおった。だが……』

密かに連れ添っていたネズミを見る。

『友を信じ過ぎた事で、貴様は破滅するのだ。今に見ている。家族共々、貴様の兄がいる場所にまとめて送ってやる。開錠せよ。』

家をこじ開ける。中には、若い男女がいた。

「……やはり、来たか。死の飛翔。それに、成る程な。ピーター。自身……心の弱さに屈してしまうとは。僕にも非はあったってわけだね。」

若い男ジェームズ・ポッターは、妻であるリリー・ポッターに2人を連れて逃げろと叫んだ。全てを悟ったような表情となるジェームズ。彼は、杖を持っていなかった。だが、ヴォルデモートとネズミを見つめるハシバミの眼は、とても悲しそうであった。

「覚悟するが良い。ここを、貴様らの墓場にしてくれる。」

「アンタは、とても哀れな奴だな。」

「この期に及んで、そんな事を言えるのか？」

「ピーター。決して見つかるなよ！シリウスとリーマスに！」

「……………ワームテールよ。俺様の帰りを待つのだ。」

ヴォルデモートは、ネズミを解放した。

「覚悟しろ。終わりだ。」

ヴォルデモートは、杖から緑の閃光を放つ。そして、ジェームズは倒れた。まるで、糸が切れたマリオネットの様に。ヴォルデモートはすぐさま2階へ駆け上る。

『こんなので、俺様の行く手を遮るとはな。』

バリケード張ってあった。だが、ヴォルデモートにしてみれば障害物にもならなかった。

「どうか——どうか、この子だけは！」

リリー・ポッターは、子供の命だけは助けてくれと懇願した。

「退くが良い。1人しかいない様だが、もう1人も見つけて始末してくれる。」

「この子は——エリナだけは許して！ハリーも！私だけにして！」

ヴォルデモートは、リリーの行動を嘲笑った。

「リリー・ポッター。貴様は死ぬ事は無かったが——もう1人の子供の隠し場所を吐かないなら、後でじっくりと俺様を探してみせよう。

だが今は、貴様も夫の元へ送ってやろうではないか。息絶えよ！」
アバダ・ケダブラ

リリーを死の呪文で殺害した。赤ん坊は1人だけだった。もう片方はどこかに隠されたに違いない。この際どちらでも構わん。どちらも始末してしまおう。隠された方も、後でゆっくりと殺す。

赤ん坊が突然泣き出す。不快そうに見つめるヴォルデモート。

「ゴイツが、俺様の天敵に？笑わせる。何の力も無い、孤児院にいたゴミ共と同じ様に泣き喚いているだけの、只の赤子に過ぎないではないか。」

だが、それも全て終わる。杖を向けるヴォルデモート。

「同じ日に生を受けた片割れも、両親と同じ所に送ってやろう。お辞儀も出来ぬ赤子よ。息絶えよ！」
アバダ・ケダブラ

そう決めたヴォルデモートは、目の前の無抵抗の赤子を殺そうとい

う言語道断の悪行を平然とやってのけた。しかし、赤ん坊には効かなかった。

「な、何?！」

そればかりか、緑の線光が跳ね返って来たのだ。男が密かに習得したあの秘術のおかげで死にはしなかったが、逃げるしかなかった。なぜなら、今の男はそこら辺のゴミ虫にも劣る生命体と化したからだ。

男が狙いを定めたのは、女の赤ん坊だった。こうして、男を破った赤ん坊は『生き残った女の子』と呼ばれるようになった。

*

ゴドリツクの谷のポッター家よりある程度離れた場所。ここには、ヴォルデモートの配下たる死喰い人が50人いた。だが、次々と殺されて行っている。不気味な姿をした、何かを纏った様な、正体も分からないその者によって。

「何なんだコイツは!」

「知らん!我々の、大いなる闇の力が全く通用しないのだ!」

「うおおおおおおお!」

その者が咆哮を上げる。絶望とも、悲しみとも取れるそれを。声かまして男であろう。男の左手から、炎を纏ったピラニアを出して、死喰い人に襲わせる。更に、男の両腕が翼に変化した。その風圧だけで、死喰い人達を即死させていく。

「どうなっているんだ!動物を出したり、あの一族の能力を出したり、すり抜けたり!」

「こ、こいつ……一体何者なのだ?」

そんな言葉を洩らした死喰い人が1人、また1人惨殺されていく。逃げようとしたが、出来なかった。

30分後、その者の周りには死喰い人の死体が転がっていた。地面は、血の海と化していた。

「そうか……俺は今………地獄にいる……!」

*

「急ぐんだ!シリウス!まだ間に合うかもしれないよ!」

「頼む!生きていてくれ!ジェームズ、リリー、エリナ……そして、ハ

リー！」

2人の男が、ポッターの家に入り込む。

「光よー！」
ルーモス

黒髪で、左眼に包帯を巻いている男シリウス・ブラックが呪文を唱える。もう1人のライトブラウンの髪の男、リーマス・ルーピンの方に顔を向け、互いに頷く。

2人は、辺りを見渡す。すると、床に横たわるジェームズを発見した。

「ジェームズ！……すまない。俺の提案が、君をこんな目に遭わせてしまった……」

自分の提案がこんな最悪な事態を引き起こしてしまったと嘆いている。

「シリウス。それを言うなら、私だって同罪だ。ピーターを守り人にするという提案をしたから……とにかく、リリー達はまだ生きてるかもしれないよ。探してみよう。」

リーマスは、そんなシリウスを慰める。

「ああ。分かっている。行こうか。」

2人は、2階へ駆け上る。1階と違って、争った形跡はない。精々、バリケードに使ったであろう備品や赤ん坊用のおもちやが散らかっているだけだった。

「準備は良いか？リーマス。」

「いつでも大丈夫。」

1つの部屋のドアを開けた。そこには、ベビーベッドにもたれかかったリリーが倒れていた。

「リリー！」リーマスがリリーに触れる。彼女の身体は、氷の様に冷たかった。

「何て事だ！ヴォルデモート！ピーター！よくも！」

シリウスが、怒りと憎しみの混じった声となる。その時だった。ベビーベッドからひよっこりと赤ん坊が出て来た。

「エリナか！」

「良かった！エリナは生きているみたいだ！……だが、この額の傷は

？それに、ハリーはどこだ？」

リーマスがエリナを抱いていると、突然泣き声が聞こえた。

「……隣の部屋か！」

シリウスは、急いで隣の部屋に駆け込む。物置を開けると、大きな声で泣いていた男の赤ん坊が出て来たのだ。

「ハリー……生きてたか！偉かったぞ！あいつをやり過ぎして！でも、もう大丈夫。俺やリーマスがいるからな。」

ハリーと呼ばれた赤ん坊を抱えるシリウス。リーマスと合流する。

「どうしようか？」

「考えがある。俺の妹に事情を話して、2人を匿って貰おう。」

「アリエス……だったっけ？確か、同じ年の子供がいた筈だよ。メイナードが、その子の後見人をしていたんだから。」

メイナードの名が出た瞬間、シリウスは左眼を隠している包帯をクイツと整える。

「……早速、やろうか。戻りたくはなかったが、グリモールド・プレイス12番地へ。」

「おお！シリウス！リーマス！来ておったか！」

大男が、2人の元に現れた。

「ハグリッドか。」

「何があったかは……説明しよう。」

シリウスとリーマスは、ルビウス・ハグリッドに事情を話した。驚愕するハグリッド。

「ピーターめ。よくもそんな事を……俺が出会ったら、殴り飛ばしてやる。」

ピーターへの怒りを露わにするハグリッド。

「だから、俺の実家に預けようかと思ってたんだ。それをやろうとした矢先に……」

「君が来たってわけさ。」

「そう言う事だったか。ダンブルドア先生は、もう手を打ってあるそう。うだ。リリーの姉一家、ダーズリー家に行く様にしろとの事だ。」

ダーズリーの名が出た瞬間、2人共反対の姿勢を見せる。

「ハグリッド……正気か？」

「私もリリーから聞いていただけに過ぎないが……あの一家がハリーとエリナを素直に歓迎するとも思ってるのか？」

「シリウスの言う通りだ！冗談じゃない！」

「……俺だって、何でダンブルドア先生がこんな事を考えているのかは分からん。正直、他の不死鳥の騎士団員からも反対の声が上がっている。だが、先生様には何かしらの考えがアリなのは間違いないねえ。そこにいる限り、2人共安全だ。」

2人共、当然の如く難色を示したが、ダンブルドアからの指令を理由に渋々ながら同意し、2人の赤ん坊をハグリッドに引き渡した。

「ただな、誰かしらを近くにいられる様にするともおっしやっていた。来るべき日まで、素性を明かさないと条件に。俺の方から、お前さんらを推薦しておこうと思っちやる。」

「分かった。それならば、このオートバイを、俺の相棒を連れて行ってくれ。」

シリウスは、ハグリッドに自分のオートバイを貸した。

「ありがとうよ。使わせて貰う。」

ハグリッドは、オートバイに双子の赤ん坊を乗せ、空の旅に出た。

それを見届けたシリウスはすぐさま、裏切り者であり、かつての友に復讐する為に、その裏切り者を、ピーターを追跡しようとした。

「シリウス！」リーマスが声を掛ける。

「ピーターの事は……俺が後始末を付ける。だから……放してくれ！

リーマス！」

「そう言うわけにはいかない！私は、君を止める！」

リーマスが杖を構える。

「仕方が無い。骨の5、6本は覚悟して貰うぞ。」

シリウスが、左眼の包帯を外した。右眼は灰色だが、左眼はルビーレッドだった。そして、杖をリーマスに向けた。

『ストゥーピッファイ
麻痺せよ!!!』

赤い閃光が、相殺し合った。

「ハアッ！」

サバイバルナイフを左手に、逆手持ちにしたシリウス。リーマスに襲い掛かる。

「そう簡単にやられないよ!」

笛の形状をしたハンマーでシリウスの攻撃を防ぐリーマス。

「それはどうかな?」左眼を見せつけるシリウス。

「まさか!」

「そう。幻術だ。」倒れ込むリーマス。

「悪く思うなよ。ケジメは付けに行くんだから。」

シリウスは、走り去っていった。

「待て……シリウス!早まるな!戻って……来るんだ!」

リーマスは、意識が遠退いてしまった。彼はシリウスの執念の前に、成す術が無かったのだ。裏切り者に引導を渡す為、そして何より亡き親友の無念を晴らす為にシリウスは走った。

一方、ハグリッドはオートバイで双子の赤ん坊を乗せて空の旅に出る。

「待て。」

しかし、透き通るほどの銀色の髪、万物を威圧する七色に光る眼を持った男が立ち塞がる。

「誰だ!?!」

「俺の名はマクルト。全知全能の神だ。男の赤ん坊を、引き渡して貰おうか。我が組織が、それ相応に育てよう。」

「断る。ハリーは、ダンブルドア先生様の命により、ダーズリー家に行くんだ!それに、どこの馬の骨とも分らん奴に、引き渡す気はねえ!」

「フン。どいつもこいつもダンブルドアか。下らん、全く以って下らん。あの老いぼれの実態を見抜けぬお前が、奴を知った気ているな。目障りなんだよ。」

「俺の前で!2度と!アルバス・ダンブルドアを侮辱するな!」

「どうとでも言え。狸ジジイの捨て駒である半巨人よ。」

虹の眼の男とハグリッドが空中で激突する。終始、虹の眼の男が圧倒していたが、必死に抵抗したハグリッドはどうか退けた。

「ハア……ハア……あいつは、危険過ぎる。例のあの人以上に……?!?ハリー?」

しかし、呪いを受けていない兄が、オートバイから手紙と一緒に落ちてしまった。深い樹海に墜落したので、生存は絶望的だった。ハグリッドは探そうとしたが、尊敬するダンブルドアからの仕事を優先した。そして、伯母の所に連れていかれた選ばれた妹は、ダンブルドアに幸運を祈ると言われ、伯母の家に置き去りにされた。

こうして、史上最悪と言われた男は破滅した。女の子は、彼女の世界の者から英雄として崇められた。女の子の家族の死をその世界の人々は嘆き悲しむ結果となってしまった。闇は晴れていく。しかし、一時的な物に過ぎないだろう。「生き残った女の子」と称された妹と死んだとされ、存在を黒き闇に葬り去られた兄。2人が齎すのは、光か、闇か。希望か、絶望か。それはまた先の話になる。とにかく、今は史上最悪の男の失墜を喜ぶべきなのだ。

「生き残った女の子、エリナ・ポッターに乾杯!!!」

11月3日。樹海にて。

「会長。3日前、ヴォルデモートが破滅したと聞きましたが。」

白い服を着た男性が、20代後半ほどのイギリス紳士の格好をした男にそう語り掛ける。

「確か、生き残った女の子によるものだよ。ポッター家の子だそうだが、アルフレッドが世話になった先輩のね。」

「という事は、奥様や息子夫婦、アルフレッド様も安心なされている筈ですよ。」

「イヤ。奴は、ヴォルデモートは死を異常に恐れていた。何かしらの手段で生き永らえている可能性が高い。尤も、何も出来ない状態にまで弱体化したのは本当だが。」

「まさか。という事は、あの男はまた戻って来ると?」

「その通りだ。ポッター家の子と連絡手段を取りたいものだ。リリー・エバンズがマグル世界の出身だった筈だから、彼女の情報を集めないかね。」

会長と呼ばれた男は、白い服を着た数人の男女とそんな会話をしている。

その時だった。何かの泣き声が聞こえて来た。

「近いですね。行ってみましょう。」

その団体は、声が聞こえる方へ向かう。そこには、衰弱しながらも泣き叫んでいる赤ん坊がいたのだった。

「これは……」

女性が、赤ん坊を抱きかかえる。若干冷たい。

「会長。今すぐ、本部に戻りましょう。この子は、衰弱しています！一刻も早い処置をしなければ！」

「分かった。戻ろうか。」

一団は、ブライトンにある拠点に戻った。リーダー格の男は、赤ん坊が持っていた手紙をじっくりと読む。

『つまり、この手紙が本当ならば、ポッター家の子なのか？』

「予想外の展開だが、ポッター家の子を保護出来たのは幸運だったな。それにしても、ダンブルドア。奴が絡んでいたとは。」

不快そうな顔をする男。彼はこう考える。ダンブルドアは、正義の為ならば年端も行かない子供すら平気で犠牲にする様な男だと。

「それで、あの子はどうなっている？」

「少しずつですが、確実に衰弱しています。そして、性別も男の子でございます。」

「という事は、双子の兄であるハリー・ポッターだな……医療チームに伝えておいてくれないか。必要であれば、アレを使っても良いと。」

「左様でございますか？」

「人の命がかかっている。例え、禁忌と言われようとも。私が、責任を全て取ろう。」

「了解致しました。」

男性は出て行った。遠い地で、人生を全うさせよう。これからは、平和な世界で生きるべきだ。

「もう誰も、死なせるものか。このアラン・ローガーの名の下に。だから、ハリー・ポッター。生きろ。」

アランは、赤ん坊にそう願ったのであった。その後、医療チームの奮闘の甲斐もあって赤ん坊は体調が少しずつ良くなっていった。彼は、保護された団体によって1982年初めに日本へ送られたのであった。無論、戸籍も取得して。

賢者の石

第1話 マホウトコロの英国人

1991年7月7日。南硫黄島。一見何もない無人島に見える。しかし、その島の頂上には羊脂玉（ヒスイの中でも最上質のもの）で飾られている豪華絢爛な校舎が存在していた。ここはれっきとした学校なのだ。それも、ただの学校ではない。魔法という特殊能力を持った者達の養成機関、魔法学校である。名を魔法処^{マホウトコロ}という。

この学校は、世界の優れた魔法学校11校の一角として知られる。生徒数は少ないが、評判は高い。魔法の腕前においても、クイディッチにおいても。マグル文化との融合も理念に取り入れており、マグル世界とは密接な関係を持っている為、純血主義は殆ど絶滅している。4月から始まる3学期制である。

7歳から学校に通うことが出来るが、寄宿出来るのは11歳からなのだ。11歳になるまでの間は、大きなウミツバメの群れの背中に乗せられ、毎日家に送り返される。

入学すると、体格や成長に合わせて大きさが変わる魔法のローブを受け取る。初めは淡いピンク色。しかし、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫、黒、銀、金の順番にランクが上がっていく。後から挙げた物ほど優秀と見做される。

一方、ローブが白に変わってしまった場合、これは大変不名誉な事とされている。法律を破ったり、機密を漏らした事になるからだ。ヨーロッパで闇の魔術を使ったと言えば分かりやすいだろうか。白いローブの者は、問答無用で退学処分となり、日本の魔法省で尋問を受ける事になるのだ。

そんなマホウトコロで今日も授業が終わり、11歳未満の生徒が帰ろうとする。殆どが日本やアジアの国から来ている。しかし、ここにはただ唯一のイギリス人の男子生徒がいる。彼は、同級生5人とウミツバメの所まで向かいながら雑談していた。ナナカマドに猫又の尻尾の毛で作られた25センチの杖を弄びながら。

「今日のマグル学面白かったよな。」

「そうだな。週に1回アニメ映画見るからね。」

「この学校がマグルの製品を普通に使えるってのも大きいよね。イギリスの学校とは大違いだよ。」

「そうは言うけどさ。ハリー。曲がりなりにもイギリスって君の故郷じゃん。デイスっちゃっても大丈夫なの？」

大抵の生徒のローブは淡いピンク色。しかし、他者とは違う異国風の顔立ちをした銀色のローブを着たハリーと呼ばれた少年は、同級生からそう聞かれる。

「別に。俺自身、日本での生活の方が長いからね。自分で言うのもアレだけど、日本の方が住みやすいよ。しかも、イギリスの魔法界は今も中世的なシステムだってエイダ義姉さんが散々愚痴ってたんだよ。」

「ここではローガー先生って言った方がよくないか？」

「授業終わった後だから問題無いだろうね。」

「そうか。日本語が流暢だし、英語も問題なく話せるよな。」

「英語と日本語は叩き込まれたからね。将来イギリスで暮らす事になっても、日本で暮らす事になっても良いようについて保護者から言われててね。」

大きなウミツバメの前まで辿り着く。ハリー達6人は最後の1羽に乗りうとした。しかし、走りながらハリーの名を呼ぶ若い女性の声がした。

「ハリー！ちょっと待ってください!!」

黒髪黒目の腰まで伸びている髪と日本の着物を着ることで気品さを出している女性が駆けつけた。

「皆、また明日ね。」

「分かった。じゃあな。」

ハリーは、同級生を先に帰らせた。

「どうしました、ローガー先生。」

「今授業は終わりましたから、普通にエイダと呼んで大丈夫ですよ。」

エイダと名乗る女性がハリーに優しく微笑む。

「校長先生とお爺様が待っています。」

「義祖父ちゃんもいるんだ。今、イルヴァーモーニーのキットの所に行行って無かったっけ？」

「予想以上に早く用事が住んだようですよ。だから1日早く日本に來れたのですから。詳しい話は、校長室で。」

校長室に辿り着き、中に入る。見た目20代後半から30代前半の白衣を着たメガネの女性と30代後半のスーツ姿のイギリス紳士が出迎えた。

「ハリー。よく來たわね。」

「どうもです。校長先生。」

「罰則じゃないから、緊張しなくても良いわ、ハリー。」

イギリス紳士の方が、アラン・ローガー。ハリーの育ての親であり、義理の祖父であり、保護者だ。樹海にいた赤ん坊のハリーを保護してくれたのもこの人なのだ。ちなみにハリーは、何で樹海にいたのか、何があったのかはロイヤル・レインボー財団で全て教えて貰っている。

マホウトコロの校長先生。校長という割にノリが軽いのだ。ただ、年齢の話はNGだ。話題を振って來た者が翌日、ビクビクしていたのだから。

「佐緒里。そろそろ話した方が良い。」

「そうね。アラン。ハリー、あなたもそろそろ11歳よね。あと4週間弱で。」

「はい。」

「11歳になる寸前で銀色のローブになっているあなたを2学期から寄宿制度の下に入学させようと思っています。」

「もうそれは確定事項じゃないですか。その最終確認ですか？」

「いいや。ところが、ある書類がロイヤル・レインボー財団の新宿支部宛で、今日の昼に來たのだよ。」

アランは、懐から手紙を取り出し、ハリーに手渡す。ホグワーツ魔法魔術学校と書かれていたのだ。手紙もパラパラと読む。

「まさか、この俺にイギリスに行けって事!?!」

ハリーは動揺していた。イギリスなんて記憶が殆ど無いのに。そして何よりも、住み慣れた日本と、それまで出来た友人といきなり離れるなんて理不尽にも程がある。

「私もそう言っちゃったよ。だが、あそこの校長は何が何でもハリーを引き抜きたいらしい。本人の意思を無視して無理やり来させるのは、本人にとつて苦痛以外の何物でもないと言っておいた。」

「それで、どうなったの?」

「最終的には、ホグワーツに行くのかはハリーの決断が最優先されるという事になった。」

「メリットは?」

「この学校のカリキュラムと、イーニアスによるホグワーツ式の魔法を終了させているハリーなら、成績に関しては問題ない。ホグワーツを卒業出来た時点で、マホウトコロの卒業も同時に出来るわけだ。」

「ふくん。それは良いけどさ。何か条件を加えたんじゃないの?」

「ああ。言っちゃったさ。もしホグワーツに行く事になっても、あくまでマホウトコロの留学生という形で入学だと。そして、条件も付け加えた。ハリーを危険な目に遭わせない事。月に1回、報告をする事。そして、本当に危険な事態になったらハリーは問答無用でマホウトコロに戻すという魔法契約を交わした。」

「そうか。俺の事をそこまで……行くよ。元々、卒業してから生き別れた妹を探すつもりだったけど、それが早まるからね。それに、ヴォルデモートの一味とのけじめもつけておこうと思っただけね。」

ハリーは、今までの真実をおさらいする。1985年。5歳になったばかりの頃だ。もうこの時には、ハリー自身では行けそうにない場所に行こうと思ったら、気が付かないうちに到着しているし、近くの遊び場で常識では考えられない危ない遊びを無傷でやったりしていた。

それにアランは気が付き、ハリーを呼び出した。ハリーは、覚醒した超能力がバレて怒鳴られるのではと内心冷や汗をかきながら、新宿支部に来ていたアランのいる部屋に入った。

「ハリー。良く聞きなさい。お前が最近超能力と呼んでいるものだ

が、半分正解で半分間違いだ。その目覚めた力の名前は魔力。お前は、生まれながらの魔法使いだよ。」

怒られなかったが、屹然とした態度で告げられたのだ。この時、ハリーは一瞬頭がフリーズした。いきなり魔法使いだと言われて素直に受け入れる奴なんざいないに決まっているからだ。

「お養祖父ちゃん。冗談キツイよ。僕が、魔法使い？受け止める方がおかしいけど。」

「そうだな。あの時お前だけを見つけていたら、私はこんな事は一言も言わないだろう。だがな、ハリーよ。お前の持っていたこの手紙を見て本当のことだと確信したのだよ。」

そう言っつて、デスクに一枚の封筒を置いた。そして、アランは話を再開する。

「この手紙を書いた者を知っている。何故なら、私も魔法使いだからだ。」

その言葉はハリーに、今までにない衝撃を与えた。それだけ、インパクトが強かった。冗談を言う人ではなかったし、真顔で魔法使いだと言ったのだ。

「魔法使いの世界にいらなくてもいいの？」

「ああ。こちらの方が住みやすい。……話を戻そう。お前の素性を教える。今も、仲間の魔法使いに調べてもらっているが、まだ謎が多くてな。分かったことだけ話す。」

アランの話では、1970年からヴォルデモートという最悪の魔法使いが魔法界を支配しようとしたそうだ。一家全滅したところもあるそうだ。アランも妻と息子夫婦、初めての孫を失っている。ところが、そのヴォルデモートを倒せる子供が生まれるという情報が入ったのだ。

ターゲットは、ポッター家の子供。どちらも殺そうとしたそうだ。ハリーの実父と実母は死んだが、彼と妹は何故か助かった。というか、実の妹の存在をそこで初めて知ったハリーである。呪いを受けたのは妹の方で、ハリー自身は何の外傷も無いとの事。

そして本来ならば、2人共プリペッド通りのダーズリー家に預けら

れる予定だった。しかし、どういった経緯かは分からないがハリーだけアランがトップを務めるロイヤル・レインボー財団に保護されたということだ。

それを聞いてから、ハリーは7歳になるまでに色々やった。エイダ・ローガーはマホウトコロの先生もやっているが、ハリーには加えて剣術と魔法の実技を、彼女の2歳下のイーニアス・ローガーは、ホグワーツでの自分の教科書を使って戦略と魔法の理論、更に2歳下のアドレー・ローガーは、護身術と砲術、ロイヤル・レインボー財団会長であり彼ら3人の実の祖父であるアラン・ローガーは交渉術と精神と心に関する魔法をそれぞれ教えた。

元々飲み込みは早い方だと言われていたので、9歳の時点で大抵の事はこなせる様になった。更に、もう1つ所持している新しい魔法の創造に最適な杖。27センチの、マツの木に人魚の髪で作られた杖で幾つか魔法も自作した。

また、ブローチが無事な限り半永久的に再生し続ける白色のマントを使った体術にも自分の力で着手し始めた。マントの究極奥義テレポーテーション『瞬間移動』も最近身に付けた。

ハリーは、周りからは天才だと言われている。しかし、いつも一発で成功をさせていたわけではない。むしろ、自分ほど失敗を重ねている人間はそうそういないと思っっている。

それでも、血の滲む様な努力に成功への機転や閃き、執念や計画性があったからこそ成功していると思っっている。ただ、努力の度合いが他の人間よりも強いだけの平凡な人間だと思っっている。

それに、8歳の時に謎の熱で2か月間生死を彷徨ったことがある。今こうして生きているので、完治している。そこから時々、過去の自分に関係する出来事を夢で見えるようになった。なぜ自分と妹が襲われたか、そしてそう仕向けたのは誰なのか等、だ。

見たのは、1つ目が7月とヴォルデモートを倒すみたいなこと言っている女性で、どこかラリっていた。一種のトランス状態なのだろうか。それをねっとりした髪の男が割り込んでくるところ。

2つ目は、ネズミみたいな男が変態へビ顔の男に何か言っつて、変態

へビ顔の男が高笑いしてるところ。いい年したおっさんがあんな笑い方では流石のハリーでも引いた。あの変態へビ。見た目は大人、中身は中二病の末期患者だと。夢にしてはリアル過ぎなので、ロイヤル・レインボー財団が作り上げた再生の水晶玉フレバク・ピラクリスタルに保存しておくことにした。

義理の祖父であるアラン・ローガーにも予知夢のことを伝えた。

ハリーのやる事は決まった。目標はこうだ。まずは、崩壊したポッター家の再興。ヴォルデモートと死喰い人の完全抹殺だ。当事者は勿論のこと、一族もろとも死んだ奴以外は滅ぼす。何故なら、そういった一面を知りながら放置してきたせいすらも同罪だからだ。

法が裁かない。いいや、裁けないのであれば、俺自身の手で裁いてやろう。シロだろうが関係ない。自らの人生を歪ませたのだから、それ相応の代償を奴らには払ってもらおう事にしよう。ハリーは、そう心に誓った。

とはいえ、今行ったら物理的にも社会的にも抹殺されるのがオチ。ならば、連中が行動を再開するまでは力を蓄える事にする。そこまで心の底から湧き上がる憎悪の感情を押し殺して耐え忍ぼうとハリーは思ったのだ。

現に、マホウトコロの授業と並行して呪文の創造を行っている。それが、ついに完成させた。どんな呪文かというと、悪霊の火よりも威力の高い碧い炎を出す呪文「邪神フアーマル・フレイティオの碧炎」と、それを始めとする全ての炎を自在に操る呪文「炎フアーマル・フレイティオよ我に従え」の2つを作ったのだ。

「邪神の碧炎」は、悪霊の火すら焼き尽くす紺碧の炎を出す。水をかけても消えない代物だ。悪霊の火以上にコントロールが困難で、並大抵の者には扱える呪文ではない。

それを解決したのが2つ目の「炎フアーマル・フレイティオよ我に従え」だ。紺碧の炎を鎮火させるだけでなく、形態変化させることが出来る。応用すれば、碧炎以外の炎も操れるのだ。しかも、魔力消費は少ない。その他にも、作った呪文はあるが、それはいづれ明かすつもりだ。

そこまでの回想を終了させる。どうやら2人の間で話は纏まったらしく、すぐに留学の返事をホグワーツに送ったのだった。

「それでは、ハリー。英断感謝します。」

「1週間後にイギリスへ行くのか。それまでは準備を終わらせておくように。」

「了解。」

「それでは、私と共に帰りましょう。」

ハリーとエイダは出て行った。

「アランさん。ここから先は、お願い致します。」

「分かっている。もし、ヴォルデモートの脅威が本格的になったらすぐさまマホウトコロに戻す。あの時ダンブルドアに付けた条件は、それを見越しての事だ。まあ、途中で戻る事になっても、元々入学時点の段階で能力自体は卒業レベルまで到達しているから問題は無いだろう。勿論、マグル世界の知識もこの国で言う所の高校卒業レベルまでな。」

「そうですね。やはり、hogwartsの校長は信用出来ませんか？」

「絶対何かを強要してくるのは明白だ。だから牽制を掛けておいた。では、失礼しよう。」

アランも出て行く。初孫があんな事になったのだ。絶対にハリーを二の舞にさせてなるものか。そう誓ったアランであった。

第2話 イギリスへの帰還

ここは、ホグワーツ魔法魔術学校の校長室。この部屋には、複数人の男女がいた。白く長いひげ、折れ曲がった鼻をした老人、緑の帽子をかぶった魔女、ねっとりした髪を持つ男性、この中でも一際小さい老人、ずんぐりしていて、ふわふわと散らばった髪に継ぎ接ぎだらけの帽子を被っている女性、ターバンを頭部に巻いている男性、その他多数。

何をしているのかというと、簡単に言えば会議である。ただ、その内容が極めて重要だった。白いひげの老人もといアルバス・ダンブルドアは全員に見られながら重い口を開け始めた。

「さてと。皆、突然で申し訳ないのじゃが、エリナ・ポッターの名前は知っているであろう？」

全員が頷く。当然だ。英国魔法界では老若男女、その名を知らぬ者などいるわけがない。というか、知らない方がおかしい。例のあの人を打ち破った生き残った女の子なのだから。

「今回の話は、彼女の双子の兄であるハリー・ポッターについてじゃ。」
彼は10年前、謎の男とハグリッドとの間に起った空中戦にて空から落ちて死んだ筈だ。何故死んだ人間についての話題になるのか。それは、次の発言で明らかとなる。

「うむ。その事についてなのじゃが……彼女の双子の兄であるハリー・ポッターが生きておる事が最近になって分かったのじゃ。ようやく彼の居場所が分かったの。故に、彼を今年入学させたいと思っておる。皆には面倒を見て欲しい。正確には入学というより、留学になる訳じゃが。」

周りがざわついた。当然だ。死んだと思っていた人間が生きていて学校に招くと言ったのだから。ダンブルドアに対して、どういこうとだ説明しろと無言で睨む者までいる始末だ。

「ハリーが落ちた場所が運良くハイキングに来ていた者たち通りかかっていたようで、その者達の手で保護されての。その者たちの組織が、この国のマグル世界だけでなく全世界に大きな影響を与えている

ロイヤル・レインボー財団なのじゃ。その組織のトップが、昔ホグワーツを卒業してマグルの世界に渡ったアラン・ローガーじゃ。」

「アルバス！それは本当ですか!？それはつまり、アランがハリーを育てていたと。そうおっしゃりたいのですか!？」

「うむ。確かな情報じゃ。じゃが彼は、魔法界に見切りをつけておる。魔法使い、特に少しでもマグルに偏見を持った者がロイヤル・レインボー財団に近づこうとすると、あらゆる仕掛けが作動するようにしているじゃ。そうと知らずに近づいた者が全治半年の重傷を負ったくらいじゃからのお。」

「そしてハリーは、今どこに!？」

「ロイヤル・レインボー財団の日本支部からマホウトコロという学校に通っておる。」

「少なくとも彼は4年間、魔法のイロハを学んでいるわけですか。」

「それにハリーは、他の同年代の魔法使いよりも使い方や制御に優れておるようじゃ。マホウトコロの校長が、誇らしげに言っておった。」

一旦区切るアルバス・ダンブルドア。また口を開く。

「あの者の様になるとは絶対に思っておらん。じゃが、彼がどう転ぶかは見当がつかぬ。故に、この中の誰かに早く行ってもらおうと思っておるのじゃが。」

今度はシーンとなった。ハリー・ポッターの保護者は、英国魔法界の魔法使いを招かれざる者としての認識を持っているらしい。

「失礼ですが校長。貴方が直接出向くのが良いのでは?」

ねっとりした髪を持つ男性が、ダンブルドアに進言する。

「アランは、わしを信用しておらんのじゃよセブルス。残念ながらアルフレッドの一件があった以上、わしが行っても火に油を注ぐだけなんじゃ。」

「ではどうするのです?」

「うむ。そこで、マクゴナガル先生の出番というわけじゃよ。良くも悪くも公平性を持つ彼女なら、ハリーのいる場所に辿り着くことが出来るじゃろうて。」

「そうですね、分かりましたアルバス。一度、ハリーと話をしてみま

しよう。私であれば、アランも融通を聞かせてくれるかもしれない。」

マクゴナガル先生と呼ばれた緑の帽子をかぶった魔女が頷く。

「お任せしますぞ。それでは次の話じや。皆にはもうすでに伝えておるが、フリットウィック先生がこれからの余生を有意義に使いたいとおっしゃっているの。今年度で退職される。」

フリットウィックという小さな老人は、この教師陣の中では結構な古株である。その彼が退職をするということは、呪文学とレイブンクローの寮監の後釜を探さなくてはいけない。しかし、ダンブルドアはすでに後任を探し当てていた。

「後任は誰になるのかという疑問を持つ者もおるじやろう。安心するがよい。フリットウィック先生からの推薦があった。それに、その者からも了承の挨拶は頂いておる。」

「それは誰ですか？」

「レイブンクロー出身の卒業生で10年に一人の逸材と言われた闇払いのフォルテ・フィールド君じやよ。彼は卒業してから4か月で闇払いの訓練を修了させた。そこからまた5年近くは軽犯罪を中心に取り締まりを行い、治安をよくしたのじや。23歳と若い、実力と知識、人格、全てにおいて申し分ない。これ以上の適任はいないはずじや。」

「みなさん、彼であれば私の後も難無く引き継ぐことが出来ますぞ。勿論、私も時々フィールド君のフォローや特別講義にも参加しますからな。」

フリットウィックがキーキー声で他の先生方に伝える。

「では、伝える事は以上になるかの。これにて解散としよう。」

そんなわけで教員会議は終了し、一人また一人と会議の場になっていた校長室から出ていく。マクゴナガルも出ていこうとする。

「ミネルバ。もしかしたら、ハリーの将来は君やアランの決断で未来が変わってくるのかもしれない。わしは、出来るならハリーを救世主として育てたいのじやよ。」

「普段なら占いは不確定要素が多くて胡散臭いので信用は出来ません

が、私の目の前で告げられたあの予言は恐らく本物なのだと思えます。ええ、流石に直感で分かりましたとも。それでは、ハリーに会って参ります。」

マクゴナガルも出ていき、ダンブルドア唯一人になった。彼は、憂いの篩いを取り出す。ある予言が記録されている記憶を注ぎ、内容を確認する。

『7の月が死ぬ時に生まれる闇の帝王を倒す選ばれし者と同じく、同じ両親の下に世界に変革を齎す切札も誕生する。魔を殺す異物を自らの糧とし、一度眼は闇へと誘われながらも、母なる眼を新たに得る事で永遠の光を手にするだろう。城を護りし者と魔法界を見限りし者の決断によつて、平和を齎す救世主にも滅びを齎す破壊神にもなるであろう。』

この記憶は、マクゴナガルの物だ。トレローニーとの最初の顔合わせの際に二人きりになったときに予言を下したという。すぐさま自分の所に持ってきてくれた。切札を導けるのは、ミネルバともう一人の人間しかいないと感じているダンブルドアであった。

「リリー。君の眼は、ハリーの助けになる筈じゃ。今、わしの下で管理しておる。勝手に回収している事に対して許してほしいとは思っておらん。じゃが、このままでは失明する可能性があるかも知れん。」

最初は、自分が導く存在だと思っていた。ならば、何故自分の下で行われなかったのか。必ずしも城を護りし者とは自分とは言えないのではという可能性も考えた。なので、直に聞いたマクゴナガルに任せただ。願わくば、救世主としての使命を全うしてほしいものだとダンブルドアは思った。そして、失明もして欲しくないと。

ハリ―視点

1991年7月14日。イギリス・イングランド南東部、イースト・サセックス州西端。ブライトン。イギリス有数の知名度と規模を持つシーサイド・リゾートで観光都市。

ホテルにレストラン、エンターテインメント施設が多数存在する。もう一つの側面として、教育施設も充実している。故に学生が多く、パブやナイトクラブも多くある。

話を戻そう。そのブライトンに一際大きなビルが建っている。一見大きいだけかと思われる。しかし、それはマグルの見識に過ぎない。そこは、ロイヤル・レインボー財団の本部。魔法使いと魔法の存在を知っているマグルの交流場所でもあるんだ。

俺は、3日前まで日本の新宿にいた。日本支部がそこにあったからね。ホグワーツへの留学が決まって、日本を離れる事になった。そこで出来た友達とも、別れる事に。ただ、定期的に連絡はしようと言ったし、長期休みで日本に来る事もあるからとも伝えておいた。お別れ会も4日前に終わらせ、翌日の早朝に成田からロンドンに直通で向かったのだ。

ふと手紙の中身を、もう一度目を通しておく。

『親愛なるポッター殿

この度ホグワーツ魔法魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。教科書、並びに必要な教材のリストを同封致します。

新学期は9月1日に始まります。7月31日必着でふくろう便にてのお返事をお待ちしております。

敬具

副校長ミネルバ・マクゴナガル』

物心ついた状態でここに来るのは、初めてだぜ。日本と同じ感覚を外を出回ると、スリにも遭うからなあ。気を付けなきゃ。

すると、義祖父ちゃんもといアラン・ローガーが入って来た。

「義祖父ちゃん。いつダイアゴン横丁へ行くの？」

早速聞いてみた。

「そうだな。ダイアゴン横丁の事だが、お前の誕生日辺りを予定している。ただ、返事を送る前にホグワーツの誰かが来るかもしれないな。」

「どんな人？」

「私の仕掛けたものでは、魔法使いがあまり来ないようにした。そして、少しでもマグルに偏見や差別意識を持った者が近づくとも重火器や対魔法絶対防壁、ありとあらゆる攻撃呪文が作動する仕組みになっている。私の知る限り、ダンブルドアを除けばミネルバ・マクゴナガル辺りが来るかもしれない。」

「成る程。信用出来る？」

「他の教員よりはだいたいブマシと言ったところだろうな。」

俺は、その言葉を聞いて、ビルのオフィスから外を見渡す。海が見渡せた。青く美しいそれを、実母のリリー・ポッターから受け継いだ明るい緑の瞳が写していた。

第3話 ファースト・コンタクト

1991年7月21日。ミネルバ・マクゴナガルは、ブライトンの一際大きいビルの入り口前に来ていた。ここが「生き残った女の子」の双子の兄がいるビルだ。どんな仕掛けが襲い掛かってくるのだろうか。マグルなら問題なく入ってこれる。しかし、魔法使いはすぐに追い出される。中には、半殺しにされた者もいるほどだ。だが、入らない事には何も始まらない。マクゴナガルは、勇気ある一步を踏み出した。

建物の中に入る。その瞬間、警報アナウンスが鳴った。

『WARNING!! WARNING!!魔法使いの侵入を確認しました。これにより、対魔法絶対防壁を起動します。総員出動、全兵器解禁。魔法使いの排除の開始をして下さい。』

そのアナウンスが終わった瞬間、壁や天井のありとあらゆる場所から重火器とミサイル、投げナイフに槍の発射台が現れた。そして、少し離れた場所に散弾銃を持った人間がマクゴナガルに銃を向けている。おそらく、こちらは魔法は一切使えない可能性が高い。後ろにある入り口も逃亡防止用にロックされているだろう。内心焦りを感じていたマクゴナガル。万事休すかと思われたが、攻撃はなかった。

「皆。この人には何もしくない。今までのクズな魔法使いよりは、大分話の分かる人だ。大方、ハリーに用のある人だ。」

アランが組織の人間に攻撃をするなど釘を刺す。

「しかし、会長!」

「君達の職務に対して真面目なのは大いに評価している。だが、この方はお客様なのだ。……ああ、すまないねミネルバ。先ほどまでの無礼を許してほしい。」

「アラン。セキュリティに力を入れるのは大いに結構ですが、いくら何でもやり過ぎです。死人が出たらどうするつもりだったのですか?」

「フン。マグルをいつまでも見下し続ける魔法使いなどいなくなつて当然だ。ここに悪意をもって来訪する奴が悪い。まあ、話を戻そう。」

今日はハリーと話しにでもしてきたのだろうか？最上階でハリーが待っている。」

マクゴナガルは思った。確かに、中世にて魔法使いはマグルに迫害された歴史がある。それが、純血主義の正当性を表に出た。魔法族とマグルの溝はそう簡単に埋まらないだろう。確かに、これから魔法界の発展にはマグルとの全面協力が必要になるのは分かっている。だが、一部の純血主義者はそれに反対してくるし、そうでない者もマグルに対して良い印象を持たない。

アランはそういった意味でもかなり特異な存在とも言える。寧ろマグルや、魔法界を見限った魔法使い達の味方なのだ。それにあんな事があっては、魔法族に見切りをつけるのは仕方ない。だが、今はそれを言わない。何故なら、ここに来た最大の目的はハリーにホグワーツ入学の最終確認をしに来たのであるのだから。その話題を蒸し返したら、今度は問答無用で追い出される可能性の方が高いのだから。

ロイヤル・レインボー財団本部の最上階。アランとマクゴナガルが到着する。謁見室には、既にハリーがいた。見た目は、かつての教え子のジエームズだ。違いは眼鏡を掛けていないのと、髪は清潔感溢れる様に整っている事。それに、ジエームズと違ってとても穏やかな表情をしている。目は、リリーだ。そんな印象だった。

「ミスター・ポッターですね？」

「はい。おばさんは、誰ですか？」

悪意はないにせよ、初対面の人間をおばさん呼ばわりするハリー。

「私は、ミネルバ・マクゴナガルと言う者です。ホグワーツ魔法魔術学校の教授です。変身術を担当しています。本題に入りますが、手紙は受け取りましたか？」

「はい、マクゴナガル教授。バッチリ届いています。日本で受け取りました。」

ホグワーツからの手紙を見せるハリー。

「今日私がここに来たのは、ホグワーツに留学するかの確認とあなたの素性を明かしに来ました。」

「なあんだ。そんな事ですか。」

「そんな事とは、どういう事ですか？」

「もう俺の決意は決まっている、という意味ですよ。勿論、留学はするつもりですよ。キッチンと話し合いましたので。それに、俺の素性も全て知っているからご心配なく。」

「そ、それは意外です。色々な意味で予想を上回っていますね。どこで、自分の素性を？」

「義祖父ちゃんが、俺が持っていた手紙を基に独自のルートで調査した結果ですよ。それを惜しみなく教えてくれた。モデラート卿が俺の両親を殺して妹を殺そうとして失踪。どこかに送られる途中に、俺が何かしらの邪魔者が現れた。赤ん坊の俺はめでたく空から叩き落とされて、ロイヤル・レインボー財団に保護されたって言いたいんですよね。」

「モデラートではなくて、ヴォルデモートです。それに、あまり名前は口に出さないようにしておきなさい。魔法界ではタブーです。」

「みんなモデラートのことを何と言っているのですか？」

『例のあの人』や『名前を言っではいけないあの人』と呼んでいます。そして、モデラートではなくて、ヴォルデモートです。ものには適切な名前をお使いなさい。」

「分かりました、先生。で、そいつ今何処にいますか。今すぐにでもあの世に送ってやりたいんですけど。」

「アラン。この子をどんな育て方をしたら、この年でこういう物騒な事を言える様になるのですか？」

「さあな。」アランは、シラを切っている。

「ポッター。あなたの質問に答える方に話を戻しましょう。それが良く分かっておりません。通説では、命からがら生き延びたが、何も出来ない位弱っているとも言われています。」

「成る程。ヴォルデモートは今、犬畜生以下の死に損ないというわけですね。」

「簡単に言えばそうなる訳ですが。」

マクゴナガルは、ハリーを未恐ろしい子供だと感じた。ふざけている様で、その実あまりにも大人びているのだ。それに、時折感じる

彼自身の魔力。普通の魔法使いよりも多い位だ。ダンブルドアやヴォルデモート、歴代のブラック家の魔法使いの様に量が突出しているわけではない。それでも、一般的な水準から見れば極めて上位に食らいつくが。だが、問題はその魔力の質だ。このクリアな魔力は。そう。白く、暖かく、神々しい感じだ。だが今の所は、敢えてそこは言わなくてもいいだろう。

「そういう事ですので、入学はしますよ。予習した範囲がどこまで通るのか試してみたいですし。」

「分かりました。それでは、私の方から返事を書いておきましょう。」
マクゴナガルは、学校行きの汽車のチケットを渡した。情報も詳細に伝えた。

「それではポッター。9月にまたお会いしましょう。」

「はい。本日はお忙しい中、俺の所に出向いていただき、ありがとうございました。ございました。」

「いいえ、こちらこそ。」

こうしてマクゴナガルは、ロイヤル・レインボー財団本部を後にした。残ったのは、ハリーとアランの二人だ。

「ハリー。私のマネーから学用品を揃えておこう。200ガリオンあれば十分だろう。受け取りなさい。残りは、好きに使うといい。まあ、ポッター家の金庫も併用していきなさい。」

ハリーは、金貨の入った袋を受け取った。

「いいの？今まで義祖父ちゃんから受け取ったお金から株や投資を始めて、国家予算レベルまで資産が膨れ上がった俺の資産からそこから出していると思うんだけど。」

「子供は、無理して自分の金を消費しなくてよろしい。それにな。その稼いだお金は、独り立ちの資金として残しておきなさい。私に遠慮しなくて良い。足りなくなったら、私に連絡しなさい。」

「ありがとう。義祖父ちゃん。」

「買い出しは、7月31日にしよう。もしかしたら、生き別れた妹のエリアに会えるかもしれない。それでいいかな？」

「うん。構わないさ。」

ダイアゴン横丁へは、7月31日に行くことが決まった。

一方、プリペッド通りでは。

「何だろうこれ？手紙？」

「どうしたエリナ？」

「ボクに手紙来たんだけど。」

「へえ。珍しいな。良かったじゃん。」

ぶくぶく太った少年が、背の低い赤毛の髪的美少女にそう言葉を返した。

「小娘！さっさと……………ま、まさかこれは!？」

豚の様な見た目の中年男性が怖気付く。首の長い馬の様な女性も狼狽える。しかし、反応は違った。

「……………いずれ、来るとは思ってたわ。ねえバーノン。どこかの寄宿学校に入れたと近所に言えば、少しはマシになるんじゃないかしら？」

首の長い馬の様な女性はすぐに冷静な表情に戻った。こうなる事は分かったと腹を括ったようだ。だが中年男性にとっては、相当危険視しているものらしい。故に彼は、3人にこう告げたのだ。

「ダメだ！今夜ここを出発する！」

その後、この一家は1週間と3日ほど遠くへ遠くへと逃避行を続けていった。ここで、逃げた先で大男に遭遇するのはまた別の話になるのだった。

第4話 エリナ・ポッターとの再会

1991年7月31日。予定していたダイアゴン横丁に行く日。そして、この俺ハリー・ポッターの誕生日だ。

「ハリー、お誕生日おめでとう。朝は軽いものを用意しておいたよ。昼はあちらでいただくとして、夜はハリーの為に豪華なものを作っておく。」

「ありがとう義祖父ちゃん。でも、そこまでオーバーじゃなくてもいいよ。まあ、朝食べたら早速行くとしますか。」

「分かった。そうしようか。」

こうして、朝食を食べた。担当の料理人スタッフの人が、サンドイッチを作ってくれた。朝はこれが一番なのが俺流の持論となる。そうして食べ終わり、着替える。

「どうやって行くの?」

「私の姿くらしと姿あらわしで漏れ鍋の前まで行く。そこが、ダイアゴン横丁への入り口になっている。」

「俺は、その代わりの手段を持つてるんだけどな。」

「今は見せびらかさない方が良く。ホグワーツで思う存分やるという。」

そんなわけで、俺は付き添い姿くらしで漏れ鍋まで移動した。店の中に入る。マグルはこの存在を知らない。もっとも、マグル生まれやそういう魔法使いを子に持つ親や知人は存在を知らされているので、存在さえ知っていれば入ることが出来る。裏庭に行き、特定の煉瓦を特定の順番で叩く。すると、煉瓦が動き始めてダイアゴン横町に入れる仕組みというわけだ。

存在は知っていたが、来るのは初めてだ。改めて魔法界の一員なんだという認識を持つ事になるとは。まあ、取り敢えずはホグワーツの次に安全と言われるグリーンゴッツに行くのが通例になる。だが俺は、今学期分の資金は既に持っているので行く必要はない。余談だが、ここは小鬼が経営している。製作者こそ真の所有者で、金を払うのは貸したという認識を持っている。そして、払った者が死ねば返すべきと

いう考えを持つ厄介な連中なわけだ。

まあ、そんな事はどうでもいい。旧家の金庫となると、強力な守りを施されているし、財産も豊富だ。贅沢をしても、一生過ごせる位の財産がある。本当に俺には関係の無い話だからな。

ダイアゴン横丁に入ってから、義祖父ちゃんからこんな提案があった。

「私は教科書や鍋のような授業で使う学用品を揃えておこう。ハリーは杖とローブを買ってきなさい。絶対に必要なものだから。」

「了解。……というか、杖はもう持っているんだけどね。」

その内の1本の杖を見せる。ナナカマドに猫又の尻尾の毛。25センチ。攻めよりも守りや補助系の魔法に優れている。

「オリバンダー製は質も良いし、値段も良心的だ。記念に購入するのもありだ。」

俺は、義祖父ちゃんと一旦別れた。そして、マダム・マルキンの店まで向かった。マダム・マルキンは、藤色一色の服を着ている愛想の良いずんぐりした魔女だ。

「坊ちゃんも、ホグワーツなの?」

俺はコクリとうなずく。

「全てここで揃えられますよ。……もう1人の方が丈を合わせています。」

店の奥まで案内された。黒髪の長い少女がサイズ測りをしていた。何……だと。そう思った。右目に紫、左目に灰のオッドアイだったのだ。だが俺は、そんな彼女には目もくれずに隣に座った。しかし、どういうつもりなのか、その少女が話しかけてきた。

「あなたもホグワーツですか?」

「まあ、そんなところだね。」

質問を素っ気無く返す。

「お先に杖から買いました、今はローブを買うところですよ。」

言葉遣いからして、かなり良い身分の出身らしいな。

「俺は、……ここが一番最初だよ。義祖父ちゃんが学用品の方を揃えてくれるからね。ローブと杖を買っておけと言われた。」

「そうでしたか。ところで、どここの寮に行きたいか決めていますか？」
「別に。退屈しなきゃどこだろうと構わない。それに、俺には目標がある。それを最速の手段で成し遂げられるのなら、どこでも良い。」

「そういうあなたには、スリザリンはお勧めしますよ。」

「スリザリン？」

「今のあなたと同じ考えを持つ人達が集まるのですわ。」

「スリザリンだろうが何だろうが、大事なのは、どこに入ったとかじゃなくて、どここの寮に行ったとしても己を捨てないことが重要だと思うがな。」

「おや、面白い事を言いますわね。大抵、寮で差別する方の方が多いのですよ。」

「あんたがどここの寮に行こうが俺は全然気にしないよ。俺の目的の邪魔さえしなければね。それに、以前日本にいたからそんな事にこだわりは……………」

「さあさ。終わりましたよ、坊ちゃん。」

マダム・マルキンがハリーに声をかけた。魔法でやれば一瞬のはずだが、この人は自分でやるのがポリシーだそうだ。

「あ、どうもありがとうございます。」

あの得体の知れない女と話さなくていい口実が出来て、内心ホツとした。急いで踏み台から降りる。

「それでは、機会があればホグワーツで会いましょう。」

「また会えればな。」

ローブ3着を持って急いで出ていく。同年代の女の子とまともに口を聞くのは初めてだが、本能で悟った。あいつは苦手だと。

気を取り直して、次はふくろうを買うことにした。だが、アイスクリームを持った大男が立っていた。無駄にデカかったので、正直邪魔だった。

「すみません。そこ通して貰ってもいいですか？」

俺は、大男にそう声をかけた。

「す、すまねえ。邪魔みたいだったな。…………!!？」

大男は、ハリーをじっと見つめていた。そっくりだ。イタズラばか

りして、さんざん手こずった。なのに、不思議と憎めなかった友にそっくりだ。大男もといハグリッドはその友の名を言おうとしたが。「ハグリッド、ボクもう終わったよ。」

自分の事をボクという少女が大男に声をかける。身長は130センチあるか無いかわからない。髪はたつぷりとしていて、深みがあった赤毛。そして、瞳の色がハシバミ色だ。額に稲妻型の傷がある。

「おお、エリナか。もう終わったんだな。よし、次は教科書、大鍋、薬問屋、杖の順番で買いに行こう。」

うん、と少女が返事をする。俺と同じ新生か。念の為に、名前を聞いておこうか。

「君、名前は？」

「ちよつと。名前を名乗れっていうんだったら、そつちから言つてよ！」

少女が反論する。

「ああそうだね。確かに君の言うとおりで。俺の名前は、ハリー。ハリー・ポッターさ。」

自分の名前を名乗る。大男は、それはもう大変驚いていた。それはそうだろう。死んだ筈の人間が目の前にいればそうなる。エリナは、同じ名字を持った人間である俺を、まじまじと見ていた。

「お、お前さんハリーか。いやあ、父さんにそっくりだなあ、目だけは母さんと同じだ。それに、すまんかった。あの時、お前さんを守り切れなくてな。でも、生きていてくれて本当に良かった。」

今にも泣きそうになったハグリッドという大男。

「別に、今の居場所も捨てたもんじゃないしね。気にしないで。いつか、ハグリッドを襲ってきた連中には報復すると決めてるからね。それに最初に思ってた事、前に来たマクゴナガルって先生もそんな事を心の中で呟いてたね。」

まあ、2人で話し合っていた。エリナだけが置き去りになった。

「ああ。すまん、エリナ。ここに居るのはな。前にボートでも言ったが、お前さんの生き別れた双子の兄貴のハリーだ。」

エリナは正直同気持を表現したらいいのか分からなかった。肉

親が生きているのは大いに嬉しい。でも、複雑だった。それでも、自己紹介はすると決めたエリナだった。

「ボクは、エリナ・ポッター。」

元気があるようで良かった。ボクっ娘なのは、完全に想定外だったが。

「ホグワーツで会えるといいね。」

「そうだね。じゃあ、ボク急いでるから。」

「じゃあね。」

こうして俺は、実の妹のエリナと別れた。杖の前にフクロウをかうと決めた。

動物を扱っているところはいくつか存在していたが、ふくろうならば『イーロップふくろう百貨店』が無難だろう。

早速足を運ぶ。暗くてバタバタと羽音がした。そう、宝石の様な輝く目をしたふくろうがあちこちでパチクリしていた。

「さて、どうしたものか。」

『旦那旦那。俺たちの声聞こえる?』

突然声が聞こえた。メンフクロウの方から声が聞こえる。こいつ喋っているのか。

『いやあ。ようやく俺たちの言葉が分かる人間が現れてくれて助かったよ。』

「お前は俺と会話したいのか?」

『もし迷っているなら、俺たちを選んでくれよ。』

「何か俺に良い事あるのか?」

『他の動物との通訳が出来るさ。それを旦那に伝えられる。』

「何を求める?」

『人間と同じ優雅な暮らし。』

「お前、本当にふくろうか?」

『酒、女、金、快楽を手に入れてゴージャスな暮らしを夢見るちよつと変わったふくろうさ。』

20分後、大きな鳥かごを持って俺はイーロップふくろう百貨店を後にする。鳥かごには、きれいなメンフクロウがいる。名前は、ナイ

ロツク。昔読んだマグルの小説のふくろうの名前から取った。

第5話 新たなる4本の杖

今度はオリバンダーの店に行くことにした。想像に反して狭く、みずぼらしかった。扉を見てみると、はがれかかった金色の文字でこう書かれていた。『オリバンダーの店——紀元前382年創業 高級杖メーカー』と。埃っぽいショーウィンドウには、色褪せた紫色のクッションに、杖が一本だけが置かれている。

店に入ると、どこか奥の方でチリンチリンとベルが鳴った。古ぼけた椅子が一脚と天井近くまで山に積まれた細長い杖の箱が俺を出迎えた。俺は、古ぼけた椅子に座って待機していた。

「いらつしやいませ。」

いきなりだった。柔らかな声を出す老人が目の前にはいたのだから。

「ようこそいらつしやいました。私がオリバンダーです。」

「こんにちは。私、ハリー・ポッターと申します。今日はよろしくお願ひします。」

俺は驚いた。だが、すぐに冷静さを取り戻し、老人に挨拶する。目の前のこの人がオリバンダー老人なんだなと思った。

「エリナ・ポッターさんの兄上でしたか。よくぞ御無事で。しかし、全体的にお父様によく似ておられるの。優しそうな表情ではあるが。目は、お母様に似ておる。」

またか、と心の中で愚痴る。どうも、生前の両親を知る人間は俺の中の両親だけを見ている。正直ウザい。

「それでは、杖腕はどちらですか。」

「左利きです。」

「腕を伸ばしてください。そうそう。」

俺自身の肩から指先、手首から肘、肩から床下、膝から脇の下、頭の周り寸法を取った。そして、オリバンダーは、俺に自分の店の杖の概要を話し始めた。

「ポッターさん。ここの杖は一本一本、強力な魔力を持った物を芯に使っています。一角獣の鬣、不死鳥の尾羽根、ドラゴンの心臓の琴線。一角獣も、ドラゴンも、不死鳥も皆それぞれ違ってきます。よって、才

リバンダーの杖に同じものはない。もちろん、他の魔法使いの杖を使っても、決して自分の杖ほどの力は出せません。」

それは、その杖が他の魔法使いに忠誠を誓っているからそうなる。だが、手段はどうあれ他の杖の忠誠心を勝ち取ることが出来たならば、話は別だ。元々持っていた杖と同じ力を発揮出来るのだ。それに、一説によれば、以前の持ち主への忠誠心を完全に失う冷酷な杖も存在すると聞いている。

「では、まずこちらを。楠の木にドラゴンの心臓の琴線。17センチ。癒しの魔法に最適。お試しください。」

振ってようとすると、引っ手繰られてしまった。

「いかんいかん。紫檀に一角獣の鬣。21センチ。やや振りにくいどうぞ。」

試してみると、またも引っ手繰られた。

「では、リンゴの木に不死鳥の羽根。22センチ。振りごたえがある。これを。」

俺は、次々に杖を試していく。しかし、どれも適合出来なかった。3桁は軽く行つたのにも関わらず、オリバンダーは寧ろ嬉しそうにしていた。

「難しい客じやの。心配なさせることはありません。必ずぴったりなものをお探ししますよ。……さて、次はどうするかな。」

俺は、ある一つの箱に目をつける。見る限り、嚴重に保管されていたのだ。自分の直感が、あの杖を使ってみたいと言っている。意を決して提案することにした。

「すみません。あの嚴重に保管されている杖を試してみたいのですが。」

「あ、あれですか。先代がこの店を引き継いだときには既にあったと言われる杖ですか。いつ、何の目的で作られたかわからない、製作者も不明。木の材質は、今までにこれ以外で使われた事が無いのです。アセビの木にセストラルの尻尾の毛。30センチ。極端に頑固だが、義理堅い。ですが、あれは誰の命令も受け付けなかったのです。それどころか、気に入らない魔法使いに災いを与えるのです。」

「構いませんよ。それで駄目だったら、俺は所詮、その程度って事ですから。」

半ば無理を言う形で、アセビの杖を振ってみる。なんと、今までにない輝きを放った。

「信じられない。今までどの魔法使いの言うことも聞かなかつたアセビの杖をこうもあつさりと手懐けてしまった。」

それだけではない。なんと、それぞれ別方向から杖入りの箱が俺の下に飛んできた。3本も、である。そう。まるで忠誠心を誓うかのよう。

「おお、ポッターさんに付いていきたい杖が更に3本も。不思議じゃ。」

「別に珍しい事でも無いのでは？」

「いいえ。確かに一度に複数の杖に認められる魔法使いは少ないですがそれなりにあります。ですが、せいぜいメインで使う物を含めて2, 3本が限度なのです。それを決めたものを含めて4本は前例が無いケースです。誰にも従わなかったのに、こんな事があるとは。実に不思議じゃ。」

「どんなのですか？」

「1本目が、セコイアに一角獣の鬣。18センチ。使い手に類稀なる幸運を与え、相手から幸運を奪う。2本目が、黒檀にドラゴンの心臓の琴線。24センチ。戦いや変身術に優れる。そして最後の3本目が、桜と不死鳥の尾羽。20センチ。金目の物や秘宝を使い手に齎す。この3つですな。」

「それで、値段は？ちゃんと払いますけど。」

「とんでもありませんポッターさん。無料でお譲りしましょう。何しろ、とても扱いづらい杖達なのです。貴方を認めてくれた。どれも手に取った魔法使いたちに対して、拒絶反応を起こしておりました。私でも手に余るほどでした。正直厄介払いが出来てホツとしています。それなのにあなたは彼らと心を通わせた。いずれの杖も、そう簡単に忠誠心は覆りません。そして何より、非売品です。アセビの杖の値段7ガリオンで十分でございます。」

「とんでもない！ちゃんと払わせてください。」

交渉の結果、アセビの杖7ガリオンと、他3つの杖1つにつき3ガリオンで話の決着がついた。合計20ガリオンを支払い、店を後にする。ちなみに、余分な4ガリオンは、チップのようなものだ。

少し出費が掛かったが、まだ170ガリオンは残っているかな？買うものは揃ったし、ふくろうも手にした。そろそろ、義祖父ちゃんと合流しようかね。

俺は、この後義祖父ちゃんと合流した。教科書を見てみたが、内容はあまり変わっていないようだ。普段の授業はさして問題無いだろう。ホグワーツへは、禁書棚の閲覧とヴォルデモート及び死喰い人の情報収集、新術開発をメインに行動すればいいかと心の中で呟くのであった。

オリバンダーは、ハリーを見えなくなるまで見送った。一度に複数、それも4本の杖の忠誠心を手にするなど、前代未聞であるのだ。しかも、日本で元々2本手に入れていて、合計6本だ。

ハリー・ポッターに売った杖はいずれも、癖の多い杖達ではあった。特に最初のアセビの杖は、吟遊詩人ビードルの物語の中の三人兄弟の物語に登場する死の秘宝の一つ、ニワトコの杖に使われているセストラルの尻尾の毛と同じなのだ。即ち、兄弟杖と言われている。何の目的で作られたか分かっていない代物なのだ。一説によれば、ニワトコの杖への抑止力とも言われているが、真相は定かではない。故に、最初は売る事に躊躇した。

ニワトコの杖と違い、魔力増幅という形で持ち主を強くする効果はない。その代わり、使い手を一度選んだら、その使い手が死ぬまで忠義を尽くす特性がある。死ぬと、また新たな使い手を選択する。

不変の忠誠心を持つ意味では、杖の中でもかなり特異ともいえる。光や闇を問わず、どんな呪文にも適性を持つ。それにあの杖の使い手

は、英雄にも支配者にもなってしまうと言われている。まさしく、『力そのものに善悪の概念はない、使用者の意思によって善にも悪にもなる』という言葉を地で行っている杖だ。

願わくば、英雄として明るい未来を作って欲しい。そう願わずには
いられないのだ。

オリバンダーは後に、エリナ・ポッターの杖選びを行う。先ほどの
ハリー程時間が掛かったわけではないのだが、彼女もまた難しく、同
じくらい不思議な杖を入手することになっている。だが、それはまた
別の話。

第6話 ホグワーツ特急からの大冒険（前編）

俺の誕生日にダイアゴン横丁に行ってから早くも1か月は経つ。あれから新術も作りつつ、一年生の教科書にも目を通して置く。簡単な事しか書いてないが、念には念を入れておく。予習というより実質的に復習とも言えるわけだ。

そして、運命の9月1日。ロイヤル・レインボー財団の用意した車でロンドンの駅に一直線で来た。義祖父ちゃんとは、キングズ・クロス駅の入り口で別れた。俺は、ホームを探す。9と3／4番線を探すが、9番線と10番線の辺りまで来た。9番線と10番線の間には、3本の柱がある。それが分数や小数点を表現しているかもしれない。9と書かれている柱を9・00、隣を9・25、真ん中を9・50、その隣が9・75、10と書かれている柱が10・00ということになるわけだ。

このことから、10の柱の隣を潜ればいい。尤も、マクゴナガル教授からちゃんと教わった俺はその推理をする必要は無いのだが。

潜ろうとする準備をしていると、声を掛けられた。150センチはあろうかという身長をしている。無駄に顔立ちは整っている。

「9と3／4番線って知ってるか？」

「ホグワーツなのか？」

「おう！」

「それなら、あの柱を通り抜けるといい。」

「ありがとうな。」

少年は柱に向かって進み、そして神隠しにでもあったかのように消えた。

「本当に当たってたとはね。じゃあ、俺も行きますか。」

そんなわけで、俺も真つ先に向かったのだ。9と3／4番線へ。

「ハグリッドってば、もう少しマシな説明をしてくれないと困るよお。でも、ハリーが通ったのは見たから苦勞せずに済みそうだけどね。」

生き残った女の子たるエリナ・ポッターも、さほど時間をかけずに9と3／4番線に突入出来た。

俺は大量の荷物が載ったカートを押していく。すると、そこには9と3/4とかかれたホームがあり、魔法使いでこつた返しになっていた。といつても、そこまで多くないが。

ホームには、紅の蒸気機関車が停まっているではないか。その上には、「ホグワーツ行特急11時発」と書いてある。幸い、まだ出発まで30分はあるのでゆっくり探す事にした。その前に荷物を浮遊呪文で中に入れる。

前はほぼ満席になっていきかけていたから、後ろ辺りを探すことに。しばらくして見つけた。他のコンパートメントの倍以上の大きさを持っていると場所を見つけた。これはラッキーだと思い、早速陣取った。

「うーん。中々上手くないなあ。」

エリナ・ポッターは、荷物を入れるのに手間取っていた。

「お嬢さん、手伝ってあげましょうか？」

振り向くと、眉目秀麗な容姿をした黒髪の青年と彼のミニチュアともいうべきエリナと同年代の少年が立っていた。青年は緑、少年の方は青のメツシユをしていた。

「はい！お願いします。」

「行くよ。浮遊せよ。」
ワイカー・デイラム・レヴィ・オーサ

青年が呪文を唱えると、エリナの荷物が浮上して汽車の中に無事に入った。

「ありがとうございます。」

ペコリとお辞儀をする。その際に額の傷が見えた。2人は、目の前の少女の正体を察したようだ。

「驚いたな。君、エリナ・ポッターだろ？」

少年の方がエリナに問いかける。

「そうだけど。」

「兄さん。どうたら俺、初日からツイテるらしい。有名人といきなり出会えるなんてさ。」

「そうだな、ゼロ。私もここで出会えるとは思わなかった。」

「あおう、あなた方は誰ですか？」

「俺？俺は、ゼロ・フィールド。今年からホグワーツなんだよ。ゼロって呼んでくれよ。」

「私はフォルテ・フィールド。今年からフリットウィック教授の後任として、呪文学の教鞭を取る事になったんだ。どんな呼び方でも構わないよ。宜しくね。」

フォルテと名乗る青年は、朗らかな笑みをエリナに向ける。

「宜しくお願ひします。ゼロ。フィールド先生。」

エリナとフィールド兄弟が握手した。

「さて、2人共。私は、教員専用のコンパートメントに行かなければならない。前はほぼ満席だから、最後尾の一際大きなコンパートメントに行くといい。多少の人数なら、大丈夫だからね。それじゃあ。」

というわけで、フォルテ・フィールドは前の方に行った。

「じゃあ、一緒に行こうか。」

「ああ、そうだね。」

エリナとゼロは、荷物を持ってフォルテから勧められたコンパートメントを目指す。10分ほどして、そこを見つけた。だが、そこには先客がいた。ハリーだった。

「もう確保されちゃったか。」

ゼロは残念そうに呟く。

「大丈夫。ちゃんと入れてくれるって。知ってる人だから。」

エリナは、コンパートメントの扉を4回ノックした。そして、入室する。

「お久しぶり、ハリー。もう空いてないから、ボク達も入って良いかな？」

「久しぶりだな、エリナ。構わないよ。どうぞ。」

「ありがとう。」

1人で使うには大き過ぎるし、2人なら良いかと思つて受け入れた。

「ハリー・ポッター……だと？生きていたのか！」

青いメッシュの少年は興奮が収まらないらしい。

「少し落ち着けば？」 水を差し出す。

「スマナイ。頂く。」水を一気飲みした。

「自己紹介がまだだったな。ゴメン。俺の名は、ゼロ・フィールド。」
「初めましてゼロ。改めて自己紹介をするよ。俺の名はハリー・ポッターだ。よろしく。」

初めての友となったゼロと握手をした。ゼロの話によると、12歳年上の兄がホグワーツ教師として今年から仕事をするそうだ。その前は、魔法省という場所で闇払いをしていたという。

その15分後、更に追加が来た。それも4人。1人目は、特に何の特徴も無さそうなノツポで赤毛の少年。2人目は、先程ハリーに9と3／4番線の事を尋ねた無駄に顔立ちが整っている少年。3人目は、マダム・マルキンの店で出会った黒髪の長いオッドアイの少女。4人目は、薄い金髪のポニーテールにスカイブルーの目を宿した少女だ。
「!?お前ら、あの時の!」

俺は、黒髪の長い少女と9と3／4番線の事を尋ねた少年に向かって言う。まさか、こんなにも早い再会だとは思わなかった。

「すみませんが、私達も良いですか?」黒髪の長い少女が尋ねる。
「ごめんなさいね。混ぜて貰えないかしら?」

薄い金髪にスカイブルーの目を宿した少女が申し訳なさそうに言う。

「悪い。そこいいか?」

無駄に顔の良い少年が言う。

「そこ、空いてる?他に席がなくて。」

赤毛もそうらしい。

「俺は別に良いけど。2人はどうだ?」

俺は、エリナとゼロに聞いてみる。

「いいよ!沢山だと楽しいからね♪」

「そもそもここ3人で使うには広いんだよな。7人いれば十分だろ。」

「!」
「!」
「!」

一際大きなコンパートメントに7人が一堂に座った。そこから早速自己紹介になるだろうなと俺は思った。

「じゃあ、まず僕から。僕はロン。ロン・ウィーズリー。」

「次は私かな。私はシエル。シエル・スラグホーン。」
「イドウン・ブラックですわ。」黒髪の少女が答える。

「次は俺だな。ゼロ・フィールドだ。よろしく。」

「ボク、エリナ・ポッターだよ！」

「俺は、ハリー・ポッター。さっき紹介したエリナの双子の兄さ。趣味はまあ、色々だ。」

「俺はよお、グラント・リドルってんだ。」

一通り、俺を含めた7人の新生の自己紹介が終わったのだ。

第7話 ホグワーツ特急からの大冒険（中編）

グラントの自己紹介を聞き終えた瞬間、俺は思わず立ち上がった。「何!?あの、リトル・ハングルトン周辺を活動拠点にしている英国最大のギャング組織『スマイル』のBチーム総隊長、グラント・リドルだど!?」

グラント以外のメンツは、首を傾げている。

「え、何々。どうしたの?」エリナが聞いてくる。

「ああ。マグルの村にリトル・ハングルトンという場所があるんだが、そこは大変治安が悪いんだ。殺人鬼や窃盗犯、ゴロツキがいるかなりヤバい場所なんだよ。数年前からそんな連中が、原因不明の変死体となって発見される事件が立て続けに起こったんだ。それと同時に、あの勢力が拡大して、リトル・ハングルトンを影から支配をしたんだよ。その勢力の名前が……」

『スマイル』ってわけか。」ゼロが続ける。

「そのうちの一人の総隊長がよりにもよって俺らと同じ年とは。警察が法で裁けなかったわけだが、今まではその理由が分からなかった。グラント、お前、今まで何回も魔法使っただろ。」

「ああ。使ったけど。」

「まあ、ここで何かをしたわけじゃないから、俺は何も言う事はないけどな。」

「そうなんだ。……ってそれよりも、ツツコミたい事が山ほどあるんだけど!」

ロンがハリーに向かって喚く様に言う。

「エリナ・ポッターの事は知ってるけど、ハリー・ポッターが実は生きてたなんて!僕、びっくりしたよ!マーリンの髭!!」

「そこは驚く所なのか?俺は、よく分からん。」

「おじいちゃんに報告しないと。生き残っていたポッター兄妹に戦闘一族の末裔、ブラック家の現当主にマグルのギャングの事を。」

シエルが今思い出したように呟く。ゼロはふと疑問に思った。イダウンについてだ。

「なあイドウン。差し支えない程度で良い。質問させてくれ。ブラツク家って星座やギリシャ神話から名前を取っているような気がするんだけど、何故に北欧神話の女神から名付けられたんだ？」

「その事ですか。母が北欧神話かぶれだったのです。そして、ブラツク家の家訓に北欧神話から名付けてもいいというルールが設けられたのですわ。」

「それでいいのかブラツク家。」

ゼロが溜息をついた。そんな下らない家訓を加えるなど思った。

話題は、世間話に移っていった。というか、エリナとグラントは本当に魔法界の事を知らなかったようだ。俺は、イギリスの事情は知らないけどね。だから、コミュニケーションで情報を収集するのだ。

また、エリナに至っては引き取られ先の家族からは冷遇されていたという。ただし、露骨にそうしていたのが伯父だけで、伯母と従兄は影でサポートをしていたようだ。俺だけ、何か苦痛を逃れたような感じがして、大変申し訳なく思った。まあ、5人がかりで知識を教え込んだわけだ。

「本当に何も知らなかったのね。」

シエルは、エリナとグラントが余りにも魔法界の事情に疎かった為に、かなり驚いた。

「うん。ハグリッドが教えてくれるまでは、ボク、自分が魔法使いだってこと全然知らなかったんだ。両親の事も、ヴォルデモートの事も……」

エリナがその名を言った瞬間、ハリーとグラント、イドウン以外が息を飲んだ。

「どうかしたの？具合悪いの？」

『ヴォルデモート』の名を呼ぶ奴は殆どいないに等しい。いるとしたら、かなりの勇者だろう。あの変態ヘビが消えて10年経った現在でも、魔法族はその名を呼ぶことを恐れている。基本的には『例のあの人』や『名前を言っではいけないあの人』と呼ぶのがベターだ。飽く迄イギリスの話だけど。日本では知名度は高くない。まあ、死の飛翔なんてプレティーンな名前を付けている時点で、頭が相当イカレてい

るキモい奴には変わりないけどな。

エリナがヴォルデモートの名を言っても平然としていた俺は、不思議そうにしているエリナにそれを説明した。

「エリナが闇の帝王の名を言ったからだよ。英国魔法界ではその名はNGワードなのさ。他の国では知らんけど。」

「あ、そうなんだ。ごめんね。さっきも言ったけど、本当に何も知らないんだよ。名前を言っちゃいけないことは、つい最近知ったばかりなんだ。ボク、学ばなくちゃならないことがいっぱいあるんだよ……」

「安心しなよ。俺なんて、1ヶ月前にイギリスに戻って来たんだ。この国の事情はあんまり知らないから。」

俺はエリナを慰めようとする。しかし、エリナはずっと気にかかっていた事を、初めて口にする。

「きつとボク、クラスでビリだよ。そうに決まってる。」

しょんぼりしているエリナを見て、ショックから立ち直ったロンが慰めるように言った。

「そんな事はないさ。マグル出身の子だって沢山いるし、そういう子でもちゃんとやってるから。」

ロンが言った。

「そうだ。今までの hogwarts の最優秀成績者の名簿リストを見ると、必ずしも純血が際立って優れているとも言えない。寧ろ比率としては、7割が半純血を占めているんだ。勿論、純血やマグル生まれの中にも凄い人は沢山いるけどな。」

ゼロが、続けてエリナを労る。

「それでハリー。何で日本にいたのですか？」イドウンが聞いて来た。「やっぱりそれ聞くの？」

「当然ですわ。日本というのは、侍や忍者がいると聞いております。彼らの実態を詳しく知りたいと思ひまして。」

まだいると信じられてるのかよ。仕方ない。日本の事情を話すか。マホウトコロに、俺が今まで何をやって来たか、マグル界との関係、文化、その他諸々話した。それを聞いた周囲の反応。

「そうですか。もう侍や忍者はいませんでしたか。」イドゥンは残念そうにしていた。

「凄いわね。日本の魔法も。陰陽術って奴ね。」シエルは感心している。

「日本の食べ物って美味しいんだね。きつと。」エリナは、食べ物に興味を示している。

「マホウトコロとホグワーツの教育課程は終了させているのか。しかも、魔法使いが怠ってしまう身体能力までご丁寧に鍛えていたとは。」

ゼロは、俺が今までやってきた事に大変驚いていた。

「そんなに凄いのか？」グラントが聞く。

「古くからの名家と言われる家系でも、そこまでのスパルタ訓練はしない。それをやり抜いてきたハリーは異常だ。組み分けされた寮は問答無用で寮対抗杯でトップになれるかもな。」

「日本でのマグルとの関係って、パパが聞いたら理想郷を夢見ているような感じになるだろうなあ。」

ロンの父親は、かなりのマグル鼻根らしい事が、彼の発言から分かる。

話をしている間に、汽車から見える風景が変わっていた。田園風景が去り、広大な野原や、そこを通る小道などの横に、所々牧場があるのが見える。

12時半が経った頃、通路でガチャガチャと音がして、車内販売の販売員のおばさんがやってきた。

「車内販売よ。何かありませんか？」

エリナとシエル、グラントにゼロは腹を相当空かせていたようで、勢い良く立ち上がると通路に出ていった。ロンは耳元を赤らめて、サンドイッチを持ってきたから、と口ごもった。

彼の家、つまりウィーズリー家はお世辞にも裕福であるとはいえない。よって、ロンはまだ小遣いを貰っていない。

ロンはデコボコの包みを取り出して、それを開いた。同じように席に座ったままの俺とイドゥンを見て、ふと尋ねることにしたようだ。

「2人はいいの？」

「俺は、弁当を持ってきている。自分で作ってきた。」

「私も、家の者が作ってくれましたので。」

弁当を広げる。イドゥンは、サンドイッチを持って来ていた。俺は、持参した2段式の弁当箱を開いた。おにぎりの段と、おかずの段に分かれている。割り箸で食べる。

エリナ、シエル、グラント、ゼロは両腕いっぱい買い物を空いている席にドサツと置いた。

「お腹空いてるのか？」と俺が問いかける。

「敢えて抜いてきた。車内販売が美味いと聞いて。」とゼロ。

「ボクは、朝用意して貰えなかったんだ。」とエリナ。俺は、一瞬眉を顰めた。

「少し分けようか？」

「良いの!?!ありがとう!」エリナに、俺が持ってきた弁当を食べさせる。

「寝坊したんだよな、俺。」とグラント。

「甘いものは別腹なのよ。」シエルは、大の甘党のようだ。

その後4人が買い込んだ菓子を7人で分け合ったり、(余談だけど、シエルの分は全て彼女の胃袋の中にダ○ソ○の如く瞬時に吸引された)、エリナとグラントが魔法界の菓子を大変驚いたり、食事(という名のおやつタイム)を満喫した。

車窓から見える風景。それは、荒涼とした風景がそこに広がっていた。整然とした畑は、一切ない。森や曲がりくねった川、うつそうとした暗緑色の丘が過ぎておく。

そこから視線を内側に戻したその時、扉をノックして丸顔の少年が半泣き状態で入ってきた。要約すると、ペットのヒキガエルが逃げ出したらしい。このコンパートメントにもいないからヒキガエルはいないよと伝えると、しよげかえって出ていった。

「僕のペットのスクヤバースなんて、逃げようともしないけどね。まあ、ヒキガエルなら、僕ならすぐに逃がしたいけどさ。」

「あいつにとっては、大事な存在なんだろう。本人がいないから聞かなかった事にするが、あまり言うなよ。」

ロンにそう注意しておく。少々不貞腐れた。だが、しばらく時間をかけて気を取り戻す。ロンは自分のペットのネズミを指差した。ネズミはロンの膝の上ですっとグーグー眠っている。

「へえ。ロン、そのネズミちよつと触っても良い？」
「どうぞ。」

エリナがネズミを手で抱っこした。胸の辺りにネズミが触れた。それはすぐに終わり、エリナはネズミを太ももで膝枕した。ネズミは起きて、エリナにスリスリしていた。

「スキヤバーズを手懐けるなんて、エリナつて凄いなあ。」
「そ、そうなのあな？良く分からないけどね。」

「そう言えばなんだけど。昨日、スキヤバーズの体の色を黄色に変えようとしたんだ。上手くいかなかったけどね。ちよつとやってみようつと。」

ロンはトランクから杖を取り出した。あちこちがボロボロと欠けていて端から何やら白いキラキラするものがのぞいている。

「それ、大丈夫なのか？芯がはみ出ているが。」

「大丈夫だよハリー。なるようにはなるって。」

「イヤ。直した方が良い。貸せ。」

ロンから杖を半ば無理矢理引つ手繰った。右手で、桜の杖を持つ。

「直れ。」杖が新品同然になった。

「ほらよ。」杖を手渡した。

「ありがとうー！」ロンがお礼をした。改めて魔法を使おうとする。

そこに、さっきの少年が栗色のボサボサした髪の毛の少女と共に入ってきた。正に、杖を振り上げようとした何とも言えないタイミングでだ。

「ねえ、ヒキガエル見なかった？」

なんとなく、威張った感じの話し方だった。ボツチだなこいつ、と俺は悟った。

「見なかったって。さっきもそう言った筈だけど？」

その態度が少し気に食わないのか、ロンは素っ気なく言い返した。もう少し丁寧によいのに。ま、相手も人の事が言えんからな。

だが、その少女は聞いてもいない。むしろ、ロンが出した杖を注視していた。

「魔法をかけるの？ それじゃ、見せてもらおうわ」

「お陽さま、雛菊、溶けたバター。デブで間抜けなネズミを黄色に変えよ！」

だが、何も起こらなかった。ネズミは、何にも変化なしだ。

「あまり上手くいかなかったようね。私も練習のつもりで色々試したんだけど、どれも上手くいったわ。私の家族は魔法族じゃないから、手紙が来たときは本当に驚いたわ。偏差値の高いパブリックスクールに行く予定だったんだけど、魔法学校からの入学の誘いなんて、断るわけないじゃない？それに、最高の魔法学校だって聞いていたら尚更ね。……教科書は全て暗記したわ。それで予習が足りるといいんだけど。私、ハーマイオニー・グレンジャー。貴方達は？」

清々しいまでのマシンガントークだ。一気にこれだけを言っただけだ。ある意味才能だな。一方のエリナは暗記、予習という言葉に顔色を悪くした。だが、同時にホッとした。周りの皆も同じく啞然としている。俺とイドゥンは、殆ど表情を変えていない。

「予習としては完璧だと思うな。兄さんに頼んで予習をつけてもらったけど、そこまで構えなくていいって言ってたからな。俺は、ゼロ・フィールド。」

「イドゥン・ブラックです。」

ゼロとイドゥンが自己紹介をしたのを見て、残る5人も自己紹介をした。何と、グレンジャーは俺とエリナの事を知っているようだった。俺に関しては、死んだと思われていた人間が生きていたような言い方をしたので、正直あまり好きになれなかった。

「どこの寮に入るか知ってる？私、グリフィンドールが良いわ。だって、著名な魔法使いの多くはそこ出身だし、何よりダンブルドアの出身だって聞くから。でも、レイブンクローも悪くないわ。他2つは、劣等生と闇の魔法使いばかりの寮だからありえないわね。」

この言葉を聞いたシエルが不快感を少しだけ露わにした。俺も、あまり良い感情を持ってない。ハッフルパフは性格が良いし、闇に通じ

る魔法使いも殆どいない。スリザリンは、合理性と機知に富む部分は高く評価している。今の純血主義は大いに気に食わないがな。

それを言い終わると、グレンジャーはまた出ていった。シエルがムスツとした顔でこう言った。

「さあて、着替えようかな。じゃあ、男子は外で待っててね。なるべく早く済ませるから。のぞき10ガリオンよ。」

シエルの言葉により、俺、ロン、ゼロ、グラントは出ていった。つか、シエルの顔が怖かったよ。数分後、ホグワーツの制服に着替えたイドウンとシエル、エリナと入れ替わるように俺達男子が入った。しばらくして、7人共着替え終わって、全員コンパートメントに再び入った。

第8話 ホグワーツ特急からの大冒険（後編）

再び、話をしようとした時、エリナがふとこんな質問をしてきた。「そういえばさ、年上の兄弟がいる人に聞きたいんだけど、その人達ってどこの寮なの？」

着替えが終わって再び席に腰を落ち着けたエリナが、皆に尋ねてみる。上の兄弟がいるのはロンとゼロだけなので、実質2人だけに質問しているわけだ。義理でも良いなら、俺を含めて3人になるわけだけどな。

「俺の兄さんは、レイブクローキ。兄さんは、どこに行っても唯一残った家族だから、無理にレイブクローじゃなくてもいいって言っただけどな。でも、同じレイブクローだったら、嬉しいんだってよ。」
ゼロがエリナの質問に答える。続けてロンが回答する。

「僕のところはグリフィンドールだよ。ママもパパもそうだったんだ。もし僕がそうじゃなかったら、何て言われるか。レイブクローやハツフルパフなら悪くないけど、スリザリンだったらそれこそ最悪だよ。」

ロンの言葉に、シエルが反応した。かなり怒っているようだ。グレインジャーの事もあるだろうしなあ。

「スリザリンだからって、みんながみんな悪いわけじゃないわ。そういった碌でもない人達の比率が多いのは否定しないけどね。現に、私のお祖父ちゃんもスリザリンだったけど、とつても優しいし、他の人達に対して偏見もあまり持ってないもの。」

ふくん。と言いながら俺は頷いた。そのスリザリンってところも決して一枚岩じゃないってことかと。まあ、イーニアス義兄さんもそうだからな。

「俺の所は、義理とはいえ兄と姉がいる。今は3人だけど、元々4人いたんだ。その人達、見事に4つの寮に別れているけどな。でも、兄弟仲は良好だよ。どこの寮に行っただかが重要じゃなくて、どこに行っても己を捨ててはいけない事が重要なんじゃないかな？そのスリザリンでもさ。」

皆に、特にスリザリンを嫌悪しているであろうロンに対して言ってみた。かなり面食らっているロン。ゼロとイドゥンは、俺に対して感心したような表情で見ている。

人間の作った組織で、一枚岩や完璧、絶対なんて言葉はこの世に存在しないのは今までの歴史が証明しているわけだ。また、俺に続いてイドゥンが言った。

「ちなみに私の一族は、唯一人を除きますと、全員スリザリンですね。まあ、その1人は一族の家系図から抹消されていますけどね。」

『……あの人の事か。まだ言うべき時じゃないな。』

そんな事を考えていると、エリナが俺を見ていた。急にリアクションを取らなくなった俺を心配しているようだ。我が妹ながら、心配してくれるのは大変有り難い。

「どうしたのハリー。急に黙っちゃって。元からあまり喋ってないけど。」

「悪い悪い。ちよつと考え事をね。」

エリナによれば、このイドゥンとシエルがスリザリン家系だった事に、ロンはショックを隠せないようだった。ホグワーツの寮はある程度、家系で決まる側面がある。必ずしもそうじゃないが。そして、スリザリン家系の家からは闇の魔法使いや犯罪者、極悪人が数多く出ている。何を隠そう、あの自称ヴォルデモートという名の変態ヘビもスリザリンの出身なのだ。

車内が気まずい沈黙に包まれる中、またしてもコンパートメントの扉が開き（今度はノックなしだ。そういった意味では前のグリーンジャーと丸々とした少年はかなり良心的とも言える）、3人の少年が入ってきた。プラチナブロンドのオールバックに、デブ2人だった。「このコンパートメントにエリナ・ポッターがいるって聞いたんだけどね。君かい?」

「そうだけど、君はだあれ?」

「僕は、ドラコ・マルフォイ。その2人は、クラブとゴイルさ。」

ドラコ 竜座ねえ。名前からして、スリザリンに入る為に生まれてきたような奴みたいだな。一応名前を名乗っておくか。こいつは、全くもって

気に食わないが。

「やあ、君がポッターだったんだな。ん？君達は。」

「シエル・スラグホーンよ。」

「イドウン・ブラックと申します。」

「ゼロ・フィールド。」

「俺は、ハリー・ポッター。」

ドラコが4人の名前を聞いた途端に態度が様変わりした。

「戦闘一族の末裔に前のスリザリンの寮監の孫娘、ブラック家の現当主、それに死んだと言われていたハリー・ポッターか？」

「今更嘘なんてつくかよ。」

俺は、少しイラついていた。純血主義が未だに残っているとは聞いていたが、まさか。最初にここまでの重度の奴と会う事になるとは思わなかったからなのだ。ドラコ以外の皆が、このコンパートメントの空気が変わったことに感づいたが、当のドラコは気にもしていないらしい。

「君らはウィーズリーや穢れた血の中でも底辺な奴なんかと一緒にいるのかい？魔法族にもいいのとそうでないのがいてね。友達を選び方を教えてあげよう。早速僕のコパートメントに……」

その時、グラントが狂気の笑みに満ち溢れた表情でドラコに突つかかってきた。

「ふーん？へー？ほーお？誰が穢れた血の中でも底辺な奴だつて？」

「悪いけど友達くらい自分で選べるよ。こんな高圧的に言ってこなければ、仲良くしようと思っただのに。」

エリナが珍しく怒りながらマルフォイに言い放った。

「誰と交友関係を持つとうがあなたに言われる筋合いはございません。そして何より、同じスリザリン家系でも、血だけで自分の優位性を正当化する様な低俗な考えを持つ者は仲間とも思っておりませんわ。」

イドウンは、まるで養豚場の豚でも見るような目で、マルフォイに反論する。

「これはないね。」とシエル。

「全くだ。」とゼロ。

「黙れマルフオイ！このドジ！マヌケ！バカ！ノロマ！クズ！根暗！
変態！う、後ろにオバケがいるぞ！！」

「ロン。それは流石に言い過ぎだ。やめろ……一步間違えば同類だぞ。」

ぴしやりとロンを黙らせる。そして、ドラコの方に向き直った。

「ドラコよ、今のロンの発言についてはこちらに落ち度があるから謝罪する。」

「何でそいつに謝るんだよ！」ロンが食って掛かる。

「……嫌な奴でも、明らかにこちらが悪ければ謝罪するよ、俺はな。そこは、自分なりに一線は構えているからな。」

理由を言っておいた。

「ウイーズリーより話が分かるようで安心したよ。それじゃあ……」

「だが、純血を謳い文句にあたかも自分が一番偉いんだというその姿勢は気に入らん。その性根を叩き直したら、交友関係に関しては前向きに検討することにしよう。」

俺は、それについては認めないと言う顔でドラコ、クラブ、ゴイルに言葉を返す。ドラコは、顔が真っ赤になった。

「ポッター君。いつか両親と同じ末路を辿る事になるぞ。」

「どうかな？誰かが俺を傷つけた後に、もうそいつは後戻りの出来ない地獄を未来永劫体験する事になるかな。」

ロイヤル・レインボー財団の事は示唆程度に言っておくか。

「僕の言葉を素直に聞かないとどうなるか。クラブ、ゴイル。やれ！！」

仕方ないな、と思いつつも俺は腕の骨を鳴らして臨戦態勢を整える。ここには、女子は3人もいる。特にエリナに危害を加えようとした事の愚かさに関して、身を持って刻み込んでやろうとした。

だが、それをする必要はなかった。何故なら、グラントが3人をボコボコにぶちのめしたからだ。ボコツ！！メコオツ！ という音がする。俺は、グラントには基本魔法に頼っているデブ2人と小物臭を匂わせるモヤシ野郎に負ける要素など、喧嘩や殺し合デスマッチいという修羅場を幾度となく潜り抜けてきた彼ならば全くないなと感じた。

「俺に逆らう奴はこうなるのさ。ハーツハツハツハツハツハ！」

「凄いな！グラントは！」ロンが感心する。

「本当に強いのですね。」とイドウン。

「今に見てろ。父上が黙ってないぞ！社会的に抹殺……」

言い終わらないうちにマルフォイの顔面が陥没する。

『ギャングkoe e』ゼロが、冷や汗をかく。

「大丈夫かしら？顔がめり込んだマルフォイじゃってるけど。」

シエルは、顔がめり込んだマルフォイを心配そうに見つめる。しばらくして、俺達のいるコンパートメントから姿を消した。イドウンは、グラントにマルフォイの事について質問する。

「彼と会った事があるのですか？」

「ダイアゴン横丁でな。あれは……」

グラントがみんなに話した。それによると、マダム・マルキンの店であったときに、グラントを穢れた血と侮辱して彼の怒りを買ったようだ。ついでに、グラントはマルフォイから、かえるチョコレートを借用という名の強奪を行ったという。

「それは、マルフォイが悪いな。」俺はきっぱりと言う。

「チョコを奪うのかはどうかと思うけど。」エリナが言葉を繋げる。

「あいつ、一体何だったんだ？」

「ああ、それはですな。」

イドウンはマルフォイという家がどんな連中かを知っている。なので、グラントの疑問に答える。マルフォイ家は魔法界の名家であり、そして純血主義を掲げる者達^{クズども}である。

余談ではあるが、マルフォイの母親はイドウンの母親の従姉だ。どういふ事かと言うと、マルフォイとイドウンは、いわゆるはこの関係にある。

「えつと……再従弟って、どういうことなの？」

エリナは頭がショートするくらい話についていけないが、ハリーはイドウンの正体を悟った。

「簡単な事ですよ。私の母の従姉が、彼の母親なのですよ。」

「ということは、お前も純血なのか？」ゼロがイドウンに聞く。

「そうですね。否定はしませんよ。不変の真理でありますので。それよりも、この話はやめにしましょう。あまり気分が良くなりませんからね。」

「うん、そうだね。やめにしよう。寮が分かれても、皆で仲良くやればいいだけだし。」

と、エリナが頷く。

そこからしばらくの時間が経つと車内にアナウンスが流れた。

『あと5分でホグワーツに到着します。荷物はこちらで別に学校に届けます。なので、車内に置いていってください』

ようやく外に出られるのが嬉しいのか、7人は車両のドア付近に向かうことにした。

「俺たちもそろそろ行くこうか。」

「うん。」

列車が止まり駅に降りると、ダイアゴン横丁でエリナの付き添いに来ていた大男のハグリッドが、新入生を集めていた。

「相変わらず大きい人だよな。ハグリッドつてさ。」

「恐らく彼は、半巨人の可能性が高いですね。」

新入生達は、険しく狭い道を、ハグリッドに続いて降りていった。木がうつそうと生い茂なと俺は思った。また、左右は真っ暗だった。俺に目の前を歩いているヒキガエルの少年、ネビル・ロングボトムが何回も鼻をすすっているではないか。

「みんな、ホグワーツがまもなく見えるぞ。」

ハグリッドが振り返りながら言った。

「この角を曲がったらだ。」

「「「「うおーっ！」「」」」」

あちこちから一斉に歓声が上がる。狭い道が開け、大きな湖のほとりになると、向こう岸に高い山がそびえ、その頂上にホグワーツ城を一望することができた。というか、城だったのか。意外だな。

「ここがホグワーツか。精々この俺を、退屈にさせないでくれよ。」

これからの7年間の彼らの学校での寮生活が、幕を開けようとしている。ここから、一体どんな出来事が俺たちを待ち受けているのだから。

うか？楽しみだ。

「面白そうなところだよな。こーい。」

「え？何々？そこまでなの。ゼロ？」

「気にするなよエリナ。それよりも、ボートに乗っちゃおうぜ。ハリ、エリナ、グラント。後がつつかえるぜ。」

俺を始めとする新入生達は4人1組フォーマンセルでボートに乗りこんだ。俺は、エリナとゼロ、グラントとだ。ロンは、グレンジャーとロングボトム、シエルと乗った。イドウンは、別に知り合った3人と乗り込んだようだ。そこから、ハグリッドの乗るボートを先頭にホグワーツ城へ向かった。

そのボート船団は蔦のカーテンをくぐる。その陰に隠れてぽっかりとあいている崖の入り口へ進んでいった。城の真下と思しきトンネルの先には地下の船着場があった。全員が岩戸小石の上に上陸した。

俺達新入生は石段をのぼり、巨大な檜の木の扉の前に集まった。

「みんな、いるな？」

ハグリッドは確認し、城の扉を大きな握り拳を振り上げて、3回叩いたのだった。

第9話 組み分けの儀式（前編）

扉がパツと開く。エメラルドグリーンのローブを着た背の高い女性が見えた。ああ、マクゴナガル教授か。一方でエリナは、直感でこの先生の前では下手に振る舞うのはやめようと心に誓っていた。

「マクゴナガル教授、イツチ年生の皆さんです。」

「ご苦勞様です、ハグリッド。ここからは、私が彼らを預かりましょう。」

マクゴナガル先生は、扉を大きく開けた。彼女に続いて、生徒達は石畳のホールを横切っていった。そこら辺の家なんて丸々入りそうな程にホールが広い。石壁は、行ったことはないがグリーンゴツツ同様に松明の炎に照らされている。そして、天井はどこまで続くのか分からない位に高い。壮大な大理石の階段が正面から上へと続いていた。

マクゴナガル先生は、ホール脇の小さな空き部屋に1年生（おれたち）を案内した。

「ホグワーツ入学おめでとう。」と、挨拶をする。

そこから話は続くわけだが、4つの寮と寮生が家族みたいなもの、学年末に最高得点を取った寮には寮杯を与えるとの事だった。肝心の組み分けのやり方は教えてくれなかったが。まあ、今まで魔法と縁のない奴だってそれなりにいるんだろうし、そこまで理不尽なものはないだろうな。

身だしなみを整えておくようにと言い残してマクゴナガルは部屋を出て行った。みんなは、不安そうな顔で組み分けの方法について話し合っている。グレンジャーは呪文を早口で繰り返していたし、ロンは試験のような物、とっても痛いらしいだろうとエリナとグラントに言っていた。そこに、ロンが俺に話を振ってきた。俺は予想したことを周囲に述べていく。

「正直知らんな。義祖父ちゃんも、恒例の伝統行事だから当日のお楽しみだと言ってネタバレしてくれなかったからな。ただ、魔法の事をつい最近知った奴だっているんだ。だから試験はありえないな。そういう意味では、あそこにいるグレンジャーの努力は水の泡だよ。」

そこで、ゼロが話に割り込んでくる。

「兄さんからヒントをもらったんだが、面接みたいなもんだって言うてたな。」

「面接……か。強ちゼロの言ってる事が一番正しいかも知れないな。」俺とゼロの意見によって、見るからに周囲からの安堵の表情が伝わってくる。おい、お前ら。そこまで不安だったのかよ。

その時、エリナの後ろにいた生徒達が悲鳴をあげた。当のエリナは、30センチも飛び上がってしまったらしい。皆が何事かと見てみると、後ろの壁から20人くらいのゴーストが現れたところだったのだ。

「もう許して忘れなされ。彼にもう一度だけチャンスを与えましょうぞ。」

そういったのは、太った小柄の修道士のゴーストだ。

「修道士さん。ピーブズには、あいつにとって充分すぎるくらいのチャンスをやったじゃないか。我々の面汚しですよ。しかもあいつは本物のゴーストじゃない……ポルターガイストです。おや、君達。ここで何をしているんだい？」

ひだのある襟が付いている服を着て、タイツをはいたゴーストが急に一年生に問いかけるものの、誰も答えられる筈がない。

「新入生じゃな。これから組み分けされるところかな。」

太った修道士が、一年生に優しく微笑みかけた。2, 3人は黙って頷く。

「ハツフルパフで会えると良いな。私はそのゴーストじゃからの。」と修道士が言った。

その直後、「さあ、行きますよ。組み分けが間もなく始まります。」とマクゴナガル先生に呼ばれた。俺達一年生は大広間に連れられて行った。

そこには、夢にも見たことのない、不思議で素晴らしい光景が広がっていた。何千ものろうそくが空中に浮かび、2年生以降の上級生達が座る4つの巨大な長テーブルと先生方の座る上座のテーブルを照らしていた。そのテーブルはというと、キラキラ輝く金色の皿とゴ

ブレットが置いてあった。マクゴナガル先生は、上座のテーブルの手前までに1年生を誘導した。そして、上級生の方に顔を向けて、先生方に背を向ける格好で一列に並ばせた。俺が天井を見上げるみると、ビロードの様な黒い空に星が点々と光っているではないか。

「本当の空に見えるように魔法がかけられているのよ。『ホグワーツの歴史』にかかれていたわ。」

誰も質問もしていないのにグレンジャーが解説している。つくづくお節介な女だと俺は心の中で毒を吐く。

マクゴナガル先生が一年生の前に4本足のスツールと古ぼけた帽子を置いた。パツと見はただのオンボロ帽子だなというのが俺の第一印象。すぐに表情を能面に戻すと、帽子はつばのへりの破れ目から、まるで口のように開いて、いきなり歌いだした。

『わたしはきれいじゃないけれど

人は見かけによらぬ物

私をしのご賢い帽子

あるなら私は身を引こう

山高帽子は真つ黒だ

シルクハットはすらりと高い

私はホグワーツ組み分け帽子

私は彼らの上をいく

君の頭に隠れた物を

組み分け帽子はお見通し

かぶれば君に教えよう

君が行くべき寮の名を

グリフィンドールに行くならば

勇気ある者が住まう寮

勇猛果敢な騎士道で

他とは違うグリフィンドール

ハツフルパフに行くならば

君は正しく忠実で

忍耐強く真実で

苦勞を苦勞と思わない

古き賢きレイブンクロー

君に意欲があるならば

機知と学びの友人を

ここで必ず得るだろう

スリザリンではもしかして

君はまことの友を得る

どんな手段を使っても

目標遂げる狡猾さ

かぶってごらん！恐れずに！

興奮せずに、お任せを！

君を私の手に委ね（私は手なんかないけれど）

だって私は考える帽子！』

歌い終わった瞬間、広間の全員が拍手喝采をした。おい、これスリザリンを軽くデイスってんじゃねえか。だが、誰もそこは何もツッコんではこないし、俺もノーコメントを貫いておくとしますか。

「ABC順に名前を呼ばれたら、帽子をかぶって椅子にすわり、組み分けを受けてください。」

「アボット・ハンナ！」

金髪のおさげの女の子が転がるように前に出てきた。帽子をかぶると目が隠れた。腰かけると……

『ハツフルパフ！』帽子が叫んだ。

「ブラック・イドウン！」

イドウンは、かなり早い順番のようだ。今度は打って変わって、分単位でかかっているようだ。

「まさか、組み分け困難者って奴か。早速見れるなんて今日はつくづくラツキーだぜ。」

「組み分け困難者って何？」エリナがゼロに質問する。

「組分けに5分以上の時間がかかる生徒は『組分け困難者』と呼ばれている。それだけ優秀だって事の証さ。50年に一度の確立なんだ。」

5分が経とうとした時、帽子が高らかに宣言した。

『スリザリン!』

スリザリンのテーブルから歓声が上がった。他の寮は、大変残念そうにしていた。

「当然っっちゃ当然だよな。」とロン。

「成る程。家系で組み分けたのか。」と俺は分析をする。

次のボーンズ・スーザンは、ハンナと同じハツフルパフになった。その次のブート・テリーは、レイブンクローになった。そして次々と寮が決まっていく。

「フィールド・ゼロ!」

今度は、ゼロの番になった。

『グリフィンドールかレイブンクローなら、どっちが良いかね?どちらか2つであれば、上手くやっていける。』

「レイブンクローで。」

『分かった。レイブンクロー!』

ゼロは、テリーの隣に座った。

そこからまた組み分けが決まっていく。

『グレンジャー・ハーマイオニー!』

グレンジャーは走るようにして椅子に座り、待ちきれないといった面持ちで帽子をかぶった。しばらく時間が経つと、組み分け帽子が叫ぶ。

『グリフィンドール!』

ロンがうめくのが聞こえた。そんなにあいつがイヤなのかよ。割り切ればいいのにさ。

ロングボトムは時間が掛かりながらもグリフィンドールに決まった。あいつに勇気があるとは思えんが、何かあるんだろうか。一方で、マルフォイは「マル」と呼ばれかけた所で組み分け帽子がスリザリンと叫んで、そこに決まった。上級生どころか、先生達も呆然となったのは言うまでもない。

そこから、ムーン……ノット……パーキンソン……パチル……パークス……と呼ばれていく。次は順当にいけばエリナの番だな。

「ポッター・エリナ!」

第10話 組み分けの儀式（後編）

エリナ視点

広間中が静まり返り、好奇や尊敬、畏怖、侮蔑等のありとあらゆる様々な視線がボクを包んでいる。そして、当のボクは緊張しまくっている。帽子を被る。

いろんな視線がボクを見つめる。こういうの苦手なんだよなく。早く終わって欲しいよお。

『フーム。難しい。どこの寮でも無難にやってはいけるようじゃな。しかし、君の場合はだ。元々勉強は嫌いな方だから、まずレイブンクローは除外されるな。』

「じゃあ、グリフィンドールかハッフルパフかスリザリンなら良いって事？」

『そうなるね。どれがいいかな。』

組み分け帽子は、調べる。頭、悪くない。非常時においては、大いに頭を使う。狡猾か？全くないとは言わないが、常人と比べてかなり低いようではある。規則も守るが、いざと言う時は破る性格。更に、あの力。自分の力を使ってみたいという欲もある。だけど、勇気も持つてる。本人は無いとは言いが張っていたが、芯は他の人間よりは何十倍もある。それに優しいし、努力家だ。本人が自分で誇っているのは、そこか。それが1番だと思っている。

なら、もう少し本音を言ってみて貰って、決めてみるとするか。

『君の気持ちを教えてくれないかな？』

「ボク、勇気なんて持ってないし優しさもあるかどうかわからない。それに、嘘をつくのも下手だし、狡猾かって言われてもそうとも言えないんだ。勉強も苦手で。今まで、何をやってもドジをしてたんだ。それでも、出来ないなりに努力は人一倍してきたんだよ。ねえ組み分け帽子さん。こんなボクでも、ホグワーツで上手くやっていけるかな？」

『その為の私だ。心配しなくてもいい。少し心の奥を見せて貰ってもいいかな？レデイの心をここまで深く見るのは、趣味ではないがね。』

君の様に複数の寮への適性持った子に関しては、私だけでは決められないからね。』

「うん。どうぞ、組み分け帽子さん。」

組み分けは、エリナの心を見た。何をやってもうまくいかない。それでも、少しでもそこから脱することが出来る様にみんなの見てないところで苦勞を重ねてきた。また、他人の悪いと思ったことは、自分の身を顧みずちゃんと意見する勇氣も持っている。そこが実つき始めた上に、人間関係にも良い方向に変化が現れたことを読み取った。

『ジエームズと同じく勇氣も持っている。だが、それ以上にリリーに良く似て優しい心を持っている。他人の幸せを共に喜び、不幸を共に悲しむ心を持っているようだな君は。君をよく知るものは、君を高く評価している。ならば勇氣よりも、従来持っている優しさと、目的の為に今を耐え忍ぶ覚悟の方に可能性をかけてみよう。その名も……』
『ハツフルパフ!』

ハリー視点

そうか、それがお前の答えか。随分な番狂わせだけど、エリナはとも嬉しそうだ。ハツフルパフの列も、生き残った女の子を取ったことに狂ったように喜んでいた。ハツフルパフのテーブルに向かうエリナは大歓声で迎えられた。ハンナやスーザンと握手していた。次は、俺だな。

「ポッター・ハリー!」

今度は、マジで広間は一瞬水を打ったように静かになった。やがて騒めきが広がっていくのが分かった。啞然としている奴も少なくない。ま、死んだと思われていた人間が生きていたなんて知ったら、誰だって驚くよな。だからって俺を見世物の様に見えるのは気に食わんが。そんなわけで、教職員テーブルを見渡すと、殆ど全員が苦笑している。また生徒のテーブルを見渡しても、生徒達の俺に対する反応はエリナ以上だな、これは。

教職員テーブルに視線を戻して育ち過ぎた蝙蝠みたいな男『セブルス・スネイプ』を見ると、怒りと憎悪に満ち溢れた目で見ている。が、

同時に母様の面影も見出ししているらしく、完全に俺を憎みきれないらしい。やはり、義祖父ちゃんの得た情報は正しかったようだ。あのセブルス・スネイプとかいう男、本当に俺の父様と確執があったらしい。別に俺にどんな感情を持つとうが勝手だが、仕事と私情を切り離しておけよと思いつつ、俺は帽子をかぶった。

『部分閉心術』を使用し、組み分け帽子だけに俺に真意が分かる様にしておく。

『ふうむ。エリナ・ポッター以上に君は難しい。』

低い声が俺の耳元に聞こえてきた。

「どこにも適性が無いのか？」

『いや、違う。寧ろその逆だ。君は、優しさや慈愛にも満ち溢れている。頭も悪くない、それどころか良過ぎる方だよ。また、常人では決して持ち得ない並々ならぬ勇氣も持っている。だが、敵対者への容赦のなさや、邪魔者を徹底的に叩きのめす為の力への渴望、自分の人生を歪ませたヴォルデモート卿と死喰い人への尋常ではない程の憎悪、大切なものを護る為なら自らの手を汚す事も躊躇わない一面を持ち合わせている。さて、どこに入れたものか……』

「組み分け帽子。俺はな、正直最初はスリザリンに入るつもりだった。同族殺しも辞さない程の覚悟を持って死喰い人やヴォルデモートへの復讐や完全抹殺をしようと思った。だが、ホグワーツに行く途中で出会った同級生達を見てそれ以上に、友や仲間、繋がりを欲しくなくなった。それは本当だ。現にアンタ以外には俺の心の中を見せないように閉心術をアレンジして発動させているんだ。」

『うむ、成る程。今、私以外には心を閉じているのか。まあ、話を戻そう。確かに今は、その友や仲間、繋がりが欲しいという気持ちの方が上回っている。それでも君の資質であれば、間違いなくスリザリンが一番適任だ。だが、君のその思いを私は汲み取ろう。君の行くべき寮はむしろ……』

『グリフィンドール！』

最初、広間はまだ静まり返っていた。しかし、グリフィンドールの席から狂ったよう歓声が上がった。

「ありがとう。後、今回の俺とのやり取りは、誰にも言わないでくれるとありがたい。」

『了解した。約束を守ろう。ダンブルドアにさえもね。』
「恩に着る。」

俺は、早速グリフィンドールの席に向かう。向かってみると、Pのバッジを付けた少年が俺との握手を求めてきた。別に悪い気はしないので、素直にそれに応じる。双子の赤毛は、「ポッターを取った。ポッターを取った。」と狂ったように叫んでいた。一方のエリナを取ったハツフルパフは、少し残念そうだった。

「あなたのお兄さんに関しては、残念だったわね。」

と言ったのは、ハンナだ。

「ううん。出来たら一緒に良かったけど、ハリーはハリー。ボクはボクだよ。だから、ハリーの決断は尊重する。」

「見かけによらず強いな君って。」

アーニー・マクラミンが、感心するように言う。

「あら、貴方もグリフィンドールに組み分けされたのね。7年間よろしく。」

グレンジャーは相変わらず言い方に棘がある。何か上から目線で威張ったような感じだ。無視しよう。しばらくは距離を置いておくか。

そう思っていた時、「リドル・グラント！」と聞こえた。ダンブルドアが目を光らせた。結構乱暴だが、気の良い奴なのに何神経を尖らせているんだ、あの爺さん。グラントの組み分けは、超感覚呪文を使って聞いてみる。早速ハツフルパフとレイブンクローは除外された。通常版と特別版を選べと聞こえた。グラントは、何となくだが通常版を選択。その瞬間に、『スリザリン！』と宣言された。マルフォイの顔から生気が消えていくのが見えた。

今度は、シエルの出番だ。どうやら、スリザリンかレイブンクローかで言い争っているらしい。祖父や友達のイドウンと同じスリザリンにしろと言っているらしいが、組み分け帽子はレイブンクローが相応しいと言ってどちら也讓らなかつた。10分後、結局シエルが折れ

たらしく、レイブンクローに決まった。

2人の組み分けを聞いた俺の感想。どちらも意外つちや意外だ
なっただ。

「ウィーズリー・ロナルド！」という声が聞こえた。だから俺は、顔を
前に戻した。思い更けているうちに、そこまで組み分けが進んでいた
のかよ。早いな。ハグリッドは俺に手を振っていたので、俺もそうす
る。続いてダンブルドアと視線が合った。ゴブレットを右手に持つ
て、乾杯の動作をしてきた。俺は、少し一礼をして組み分けに視線を
戻した。

『またウィーズリー家の子か。決まっておる。その名も、グリフィン
ドール！』

帽子が叫び、グリフィンドールのテーブルから歓声があがった。ロ
ンは安堵した様子で歩いてくる。彼の兄弟らしき3人がロンを褒め
ている。

「ロン、よくやったぞ。偉い!!!」

パーシーがもったいぶって声をかけた。

最後の一人である「ザビニ・ブレース」がスリザリンに組み分けら
れた。マクゴナガル先生が巻紙と帽子を片付け、教職員のテーブルに
戻る。アルバス・ダンブルドアが立ち上がった。皆に出会い、または
再会出来てこの上ない喜びだと言わんばかりの笑顔だ。

「おめでどう！新入生の諸君、おめでどう！歓迎会を始める前に一言、
三言言わせていただきたい。……と言いたいところじゃが、皆に説明
せねばならん事があるからのう。」

そう言うときダンブルドアは俺の方を見つめてきたではないか。

「ハリー・ポッター君についてじゃ。彼は、マホウトコロからの留学生
という形で入って来ておる。ヴォルデモート、いや正確には謎の魔法
使いに襲われて、殺されたと言われておった。実際そのように、わし
も皆に語った。しかし、運の良い事に彼はとある団体に秘密裏に引き
取られていたの。魔法界でも探すことは出来なかった。故に、わしも
彼の生存を知ったのはつい最近の事じゃ。情報伝達が遅れて申し訳
なく思う。ハリー・ポッター君の生存に関しては、明日の『日刊預言

者新聞』に詳しく載るので、見たい人は必ずチェックをするのじゃ。」
そう言つてダンブルドアは悪戯っぽく笑つた。あつさり俺の生存をバラしやがった。全くもつて食えない狸ジジイだぜ、俺はそう思つた。

「さて、こんな老いぼれの話も聞いてもお腹はふくれんじやろう。だから、そろそろ終わりにしようかの。……行きますぞ。そーれ！わっしよい！こらしよい！どっころフォーイ！以上！」

「!?」マルフォイが、分かりやすく狼狽えていた。

出席者全員が拍手喝采した。いや、茶目つ気があり過ぎだ。それでもいいのかホグワーツ校長。俺は全くそのノリについて来れなかつたぞ。マホウトコロの校長でも、そこまではしないのに。よく天才は大抵頭のネジが明後日の方向に向かつているみたいだし、天才と馬鹿は紙一重のようだから、ああなんだろうな。

テーブルに視線を戻すと、流石の俺でも呆氣にとられた。大皿が食べ物でいっぱいになっている。ローストビーフ、ローストチキン、ポークチョップ、ラムチョップ、ソーセージ、ベーコン、ステーキ、ゆでたポテト、グリルポテト、フレンチフライ、ヨークシャープティン、グ、豆、にんじん、グレービー、ケチャップ、そして何故あるのかは知らんが、ハツカ入りキャンディ。

料理はどれもこれも美味しかった。食べている最中に「ほとんど首なしニツク」が挨拶しに来て、サー・ニコラスと呼んで良いかと聞いてみた。快く了承してくれたよ。続いて、家族の話題になったりした。同時にデザートが現れた。俺に関しては、予めダンブルドアが説明してくれたので、質問攻めに遭わずに済んだ。そこは、ダンブルドアに感謝だな。皆が食べ終わった頃、再びダンブルドアが立ち上がった。

「エヘン——全員よく食べ、飲んだことじやろうからまた二言、三言。新学期をむかえるにあたって、いくつかお知らせがある。1年生に注意しておくが、構内にある森には入ってはならん。これは上級生にも、何人かの生徒に特に注意しておきますぞ。」

ダンブルドアは双子のウィーズリーを見た。

「管理人のフィールチさんから、授業の合間に廊下で魔法を使わないようにという注意があった。気を付ける様にするのじゃぞ。」

悪戯っぽく笑っている。恐らくは、バレない所で使って良いと言っているのだろう。

「今学期は2週目にクイディッチの予選がある。寮のチームに参加したい人はマダム・フーチに連絡するのじゃ。」

クイディッチか。話には聞いているが、見るのは初めてだな。

「3つ目じゃが、とても痛い死に方をしたくない人は、今年いっぱい4階の右側の廊下に入ってはならんぞ。断じてじゃ。」

行ってみようかな。別に死ぬ心配なんてないし。今の俺なら、楽勝だな。

「さて、最後は新しい先生を紹介で終わらせようかの。前年度までの呪文学及び、レイブンクローの寮監を担当して下さったフリットウィック先生に代わり、闇払いを5年近く続けてきたフォルテ・フィールド先生が引き継ぐことになった。ではフィールド先生。一言お願いしますぞ。」

「皆さん、始めまして。私が、フォルテ・フィールドと申します。教師としては、まだ新米ではありません。しかし、皆さんのこの学校生活をより良い物にしていく努力をします。それでは、皆さんはもう眠いかと思うので、この辺までにおきましよう。」

「ありがとう、フィールド先生。では、寝る前に校歌を歌いましょう！」

各自が好きなメロディーで歌った。飛び切り遅い葬送行進曲で歌っていたフレッドとジョージにあわせてダンブルドアが指揮を杖でしていた。

「ああ、音楽とは何にも勝る魔法じゃ。さあ諸君、就寝時間。駆け足！」

グリフィンドールの1年生はパーシーの後に続いてグリフィンドール塔へ向かった。途中、ピーブズが襲撃してきたが、パーシーが見事撃退（笑）した。そしてようやく「太ったレディ」の肖像画に到着した。カプート・ドラコニスが合言葉で、入り口が開いた。みんな

談話室では止まらず、直行で各自の部屋へと向かった。

俺はロンとロングボトムとの3人部屋に割り振られた。程々に自己紹介しつつ、俺を含めた3人はベッドに潜り込んだ。疲労がかなり溜まっていたのか、直ぐに眠りの世界に足を踏み込んだのだった。明日からは、授業が始まる。最初の1週間は様子見するかと決めておく。

ハツフルパフ寮。エリナは、直ぐにジャスティン、アーニーとも仲良くなった。ザカリアスは割り込んでこなかった。ハンナやスーザンと一緒に部屋になった。お休みと言って寝た。

「zzzzzzうう、ケーキが一つ、ケーキが二つ……」

レイブンクロー寮。合言葉はないが、問題に答えるシステムになっている。範囲は幅広い。フォルテ・フィールドの弟だけあって、ゼロはあって難なく入ることが出来た。疲れたので、さっさとゼロは寝た。

「おやすみ、ゼロ。」

「ああ。また明日。」

スリザリン。マルフォイの災難は続く。殆どはグラントによるものだが。

「スリザリンか。強い魔法使いが多いって言うから、まあいいか。」

「なんで、よりにもよってこんな穢れた血と部屋が一緒になるんだ！」

「俺に向かってその口の利き方は何だ!? ああ!!?」

「ヒイイ!!」

「まあ、楽しくやってこうぜ。正しいのはいつも俺。お前のものは俺のもの、俺のものは俺のもの。な。なんとかフォイ。」

言っている事が殆どジャイアンなのは、気のせいだろう。

「そんな理不尽があつてたまるか! いつか思い知らせてやるからな!!」

「ほーお。」獲物を仕留めるような目でグラントは、マルフォイを見つめる。

「ひ、ひい。」

深夜のスリザリン寮。殆どが寝静まっているが、マルフォイは起きていた。

「ぐかあゝすびく……」いびきがうるさいグラント。

「うるさいぞ……リドル」

『ピクピク。』

「うっ。……気のせいか。」

「……すびー、すびー……」

「うう……父上……母上……」

マルフォイは翌朝、速達でパパフォイにグラントの事をチクつたのだった。しかし、マルフォイ家から帰ってきた返事はマルフォイをどん底に陥れた。そいつには、下手に関わるなど書いてあったからだ。

第11話 最初の一週間の授業

翌朝から早速授業が始まった。142もある階段やルートがめんどくさい。マホウトコロは、シンプルな造りだったのに。ふざけんなよ、遅刻させる気満々じゃないか。許さんぞ、ロウエナ・レイブンクロー。まあ、毎晩ナイロツクに学校の探索とネズミの制圧と支配の任務を与えていたから、他の1年生よりはかなり優位ではある。

その前の朝食を食べている途中、新聞が来た。9月2日の日刊預言者新聞に俺の事が堂々と書いてやがった。

『実は生きていた男の子 ハリー・ポッター』

10年前のハロウィーンでの『例のあの人』の消滅は魔法界では周知の事実である。しかし、今回新たなる事実が明らかとなった。『生き残った女の子』であるエリナ・ポッターの双子の兄、ハリー・ポッターの生存が発表されたのである。9月1日にホグワーツ魔法魔術学校の校長アルバス・ダンブルドアによって公表された。

アルバス・ダンブルドアによると、彼は『例のあの人』から危害を受けたわけでもなく、エリナ・ポッターの様な傷跡もないという。また、詳細は不明ながらマグルの世界に移り住んだ魔法使いに保護されていたと言う。

彼は、7月上旬まで日本に住んでおり、マホウトコロ（ホグワーツに相当する日本の魔法学校）に通っていた。よって正確には、マホウトコロからの留学生という立場で編入したと言える。

ハリー・ポッターの保護された場所には、ありとあらゆる対策がされていて、魔法使いは決して近付けなかったとの報告も挙がっている。故にダンブルドアも最近ハリー・ポッターが生きている事を知ったという。』

しかも、どこで手に入れたのかは知らんが、俺の写真が載っている。「エリナに比べたら俺のネームバリューなんて下がるだろうに。この世界の住人は、余程思考がお花畑らしいな。」

「そんな事は無いよ。ハリーのネームバリューは、君が思っている以上に高いんだよ。例のあの人が残虐の代名詞と言われているように、

エリナと違って無傷で生き残ったなんて知ったら、大ニュースになるさ。」

ロンが、俺に説明する。

「嘘臭え。」

「本当よ。本に書いてあったもの。」

グレンジャーが話に割り込んできた。

「何か用？」素っ気無く聞く。

「いいえ。ただ、面白そうな話をしていただけだから。」

「そういや、ロンとグレンジャーと一緒にいるだけで険悪ムードが増幅するんだっけな。他所でやれよと思いつつながら、俺は大広間から出ていく。」

話を戻そう。幸い、授業内容は簡単だった。もう、ホグワーツのカリキュラムが終わっている俺からすれば、1年生の内容など多少復習する感じで十分なのだから。ただ、ちよつとした様子見をしたいので、本来の利き腕である左腕を使うのは控えておいて、基本的には右腕でセコイアの杖を授業で使うことにした。そして、無駄に目立ちたくないから、敢えて自分の力は抑えることにした。閉心術を使っているので、心を読むのに長けたダンブルドアやスネイプ辺りにも簡単に悟られずに済む。

ここで、授業の感想を述べていく。始めの授業は呪文学だ。正確には、2年生までは妖精の魔法という呼び名だ。日本の感覚で言えば、妖精の魔法が算数、呪文学が数学といえれば分かり易いだろうか？この授業、グリフィンドールはレイブンクローとの合同になっている。ゼロと合流して前付近に座った。新任のフィールド先生の事は、エリナから聞いている。出席を取っていた時に俺だけに少し時間をかけた。「同期のエイダから聞いているよ。これから7年間よろしくね。」

「こちらこそ宜しくお願いします。それと、昨日エリナの荷物運びを手伝っていただいたそうですね。ありがとうございました。」

ペコリとお辞儀をする。

「エイダ義姉さんと知り合いですか？」

「そうだよ。彼女とは同じ年に入学して、レイブンクローだった。エ

イダの話が聞きたければ、いつでも私の部屋に気軽に入ると良いよ。」
フォルテ・フィールド先生は、エイダ義姉さんを良く知っていたとは。暇な時に聞きに行こう。

授業内容はというと、フィールド先生は初めてとは思えないほど教え方が上手かったのだ。まず、魔法で物を動かすところから始まる。これは、普通に出来た。出来た人から自由にしていると言った。全員が終わってから、次週から数回にわたって浮遊呪文の理論を書き込んでいくと言ったところで終わった。

魔法史は、ゴーストの先生が担当している。喋り方が原因なのか、殆どの生徒が睡魔の世界に誘われた。俺は、重要そうな箇所だけをマーキングした後に、持ち込んだドラゴンボールの漫画を読むのに徹していたので睡眠を免れた。俺を除いて眠ってなかったのは、グレンジャー位だった。

水曜の夜に天文学がある。望遠鏡を使って惑星や星座を覚えるという内容だ。

薬草学は、城の裏の温室で行う授業だ。担当がスプラウト先生なのか、ハツフルパフと合同だ。不思議な植物やキノコの育て方、その用途を勉強する内容となっている。余談だが、俺達ポッター兄妹が一揃いになる唯一の授業なのか、スプラウト先生の顔が嬉しそうな顔をしていた。

授業が始まる前に、エリナの方から俺に近付いてきて、一緒にやらないかと誘ってきた。また、エリナと既に仲良くなっていたハンナやスーザン、ジャステイン、アーニーを紹介された。悪い気はしないので、妹がいつもお世話になっていること、迷惑を掛ける事があるかもしれないけどよろしく頼むと伝え、彼らと握手をした。

後から分かった事だが、エリナを含む5人はロングボトムとも独自に交友関係を持っているようだ。何故、ヘタレ具合一級品のアイツがハツフルパフに組み分けされなかったのか、未だに分からん。

そして我らが寮監、マクゴナガル先生の変身術は開始早々いきなり説教から始まった。

「変身術はホグワーツで学ぶ魔法の中でも、最も複雑で危険なもので

す。いい加減な気持ちで受けないようにして下さい。」

一瞬で机を豚に変え、また戻した。まず、手始めにノートを取る。隣のロンが、ウンウン唸っている。どうやら、とても難しいようだ。それからマツチ棒が一人一本ずつ配られた。これを針に変えろという課題だ。今週は様子見なので、わざと出来ないふりをする。精々銀に変色出来る位に留めておくことにした。

終了までに変える事が出来たのはグレンジャー唯一人。10点貰っていた。マクゴナガル先生曰く、初日で完璧に出来たのは2人目だとのこと。最初に出来たのが、何とエリナだったのだ。針だけでなく、サバイバルナイフ、包丁、銃剣、オリハルコン製の巨大ハサミの順にマツチ棒を変えていったらしい。我が妹の意外な才能に、流石の俺も驚愕した。ちなみにグレンジャーは、斜め上まで突き進んだ才能を見せたエリナに妙な対抗心を抱いたという。

授業の中で、一番の外れくじは何かと問われれば皆揃って闇の魔術に対する防衛術と答える。難易度は普通だが、担当のクイレルの授業は肩透かしだったわけだ。常にビクビクした態度をとっている。何か胡散臭いなあと思いつつも、授業そっこのけで借りてきた本を読んでいた。

上級生、主にフレッドとジョージによると以前はこんな風ではなく全うな教え方をしていたらしいが。あれは、負け犬根性丸出しだね。ターバンが本体じゃないのか？あの人。

週の最後の授業日。魔法薬学が2限続きであるだけで、この日は終了となる。

「スリザリンと一緒に魔法薬学かあ。スネイプって、スリザリンをひいきするらしいぜ。グリフィンドールから、息をするかのように減点しまくるってさ。」

「じゃあ。精々プラスマイナス0になるように励まないとな。丁度ハグリッドから、遊びに来ないかって誘われてるし、そこまでの我慢時間だと思えば、ね。ロン。」

「ああそうだね。午後の誘い、僕も行って良いかい？」

「いいんじゃないね？そういうえば昨日、ジャステインから聞いた話なんだ

が……」

一昨日の魔法薬学で起こった出来事だ。その日は、ハツフルパフとレイブンクローの1年生の合同だった。スネイプは、エリナに何個か質問をしたそうだ。だが、エリナが天然ボケをかました。ペースを乱されたスネイプは挙句の果てに「全部、顔はリリーなのに、目が……目が……ポッターああああ!!!うわああああああああ!!!」と叫びながら、地下牢の窓ガラスを割って、投身自殺を引き起こしたという話だ。未遂に終わったけど。

「おつたまげー。そんな事あったのか。」

「昨日は1日中、医務室にいたんだと。全身包帯状態でミイラのように過ごしてたんだって。んでもって今日、復帰するんだとき。」

「このまま一生入院してればいいのに。」

「サラツと時々酷い事言うよねえ。ロンって。」

魔法薬学は肌寒い地下牢で行われた。壁にはガラス瓶の中にアルコール漬けの得体の知れない動物がぶかぶかと浮いている物がずらりと並んでいる。俺は、グラントとペアを組むことにした。しばらくして、スネイプが入ってきた。

スネイプは出欠をとり、俺のところまでちよつと止まった。

「ああ、左様。」

柔らかな声で囁いてきた。

「ハリー・ポッター。我らが新しい——スターだね」

スリザリン生がくすくすと笑った。一部を除いて、1人では何も出来ないくせに全く以って陰険な連中だなこいつら。少し、おちよくつてみるか。

俺は、ほんの一部だけ、魔力を放出させる。その直後、教室にいる奴らの殆どが、喜びの感情が消え、何かに怯えるような表情をしていた。あのスネイプでさえ、冷や汗をかいている。ちよつとした意趣返しにはなったかな。グリフィンドール生もそうなのは予想外だが。怯えなかったのはイドウンとグラントだけだった。

スネイプは気を取り直して、早速授業に入っていく。

「このクラスでは、魔法薬調剤の微妙な科学と厳密な芸術を学ぶ。」

そういつて話し始めたスネイプの大演説を、皆固唾を呑んで聞いていた。30のおっさんの恥ずかしいポエムか。キツイな〜と思っていると演説が終わる。するとスネイプが突然、「ポッター！」と叫んだ。いきなり振りやがった。この童貞教師。今回は少し出来ないフリをしておこうかと思ったが、ここまで露骨に嫌っているのなら、徹底的に叩きのめしたくなるわけだ。

また、義祖父ちゃんが手に入れたスネイプの情報だと、俺の父様と確執があり、母様を穢れた血と呼んで蔑んでいたそう。挙句の果てに、俺に関する予言をヴォルデモートに言いふらして死に追いやった。何故、こんな清々しいまでのクス野郎をここに置いているのか、あのダンブルドアの意図が分からん。どっちにしろ、間接的とはいえ俺の両親の仇だ。絶対に許さん。いつか殺す。だが、力が足りないの、今は奴本人にだけ伝わるように思念術を掛けておく。勿論、挑発と宣戦布告の意味を込めてな。

「アスフォデルの球根の粉末を、ニガヨモギを煎じたものに加えると何になるかね？」

グレンジャーが手を挙げたが、俺は即座に返す。イーニアス義兄さんに散々魔法薬の訓練は受けたし、オリジナルの魔法薬だって作ったんだ。朝飯前だ、こんな質問。

「生ける屍の水薬です。」と、同時に奴の脳内に思念を送ってみる。『俺が何も知らないでも思っているのか？良くもぬけぬけと教師なんて続けやがって。』

スネイプは、悔しそうな表情をしていた。と、同時に、今度は顔が青ざめていた。だが、また表情を元に戻し、俺に再び質問してくる。「ポッター、もう一つ聞いておこう。ベゾール石を見つけてこいと言われたら、どこを探すかね？」

グレンジャーがより高く手を伸ばした。パリのエッフェル塔のように。マルフォイたちが大爆笑していやがる。複数のバカじゃないのかこいつら。この問題はNEWTモノだ。それを見越して俺に大恥をかかせるつもりのようなのだが、そうはさせない。この問題が分かっているグレンジャーは、もつと異常だがな。そして無視されながらも

手を挙げ続けるグレンジャーの律儀さには、俺は敬意すら感じるね。「ベゾアール石はヤギの胃から取り出す石で、殆どの毒に対する解毒薬になりますよ。」

『知っているんだよ！お前が予言をヴォルデモートに報告した事を！それが原因で俺の両親がヴォルデモートに殺された事も!!そして何より、俺たち兄妹の人生を歪ませた事も!!』

またスネイプが青ざめた。何が起きているのか分かっていないらしい。しかも、自分以外には全く聞こえていないようだ。それでも、根気強く俺に質問してくる。

「そ、それではポッター。モンクスフードとウルフスベーンの違いはなんだね？」

震えるように俺に聞いてきた。ざまあ。

「どちらも同じトリカブト。違いはありません。」

『さぞいい気分だったろうな!?お前は、俺の母様がどうやって死んだかも知らないだろうね?いいや、知りたくもないわけだよな。お前にとつて、俺の母リリー・ポッターは蔑むべき穢れた血なんだからな！母様は、俺とエリナの命懸けの命乞いをして、ヴォルデモートに嘲笑われながら虫ケラのように殺されたんだよ！全部お前が引き起こした事だ！お前のせいだ!!俺は未来永劫、お前を味方だとは思っちゃいない。何故なら、お前は俺の母様の仇だからだ!』

この俺を陥れようとしたのだから、それ相応の代償は払ってもらおうとしよう。

殆どのグリフィンドル生が笑い、殆どのスリザリン生から生気が消え失せていた。まるで、英雄の公開処刑でも見せ付けられているみたいだと。だがイドウンは、まるで高みの見物でもするかの様に俺に微笑みかけている。食えない女だ。だが、スネイプはそれよりも、俺が答えた直後に聞こえてきたその言葉に対して、深く絶望の表情を募らせている。決して消えぬ罪と過ちを突いてやったに違いない。それが、ナイフで心臓を刺されたようにスネイプの心を抉っていく。奴は、今にも倒れそうだ。

一方のグレンジャーは、無視をされ続け、俺に答えを先に言われて

しまい、顔が赤くなっていた。そして、泣きそうになっていた。

「……どうやら、教科書はちゃんと読んでできていて、予習も完璧なようだな。妹と違って……グリフィンドールに5点。ところで諸君、なぜポッターの言った答えをノートに書き取らんのだ？」

みんながあわてて書き始めるが、その音にかぶせるようにしてスネイプは言う。

「ハリー・ポッター。君の授業態度が悪質なので、グリフィンドール3点減点。」

完全に八つ当たりだが、奴のメンタルには充分ダメージを負わせる事が出来たので、これはこれで良しとしておこう。第一、寮対抗杯になんて興味ないし。

ここで、斜め上に行く展開が起こる。なんと、グラントが手を挙げていたのだ。

「せんせーい！俺、ハリーが答えた質問、全部分かりませんでした!!」
「？」

グラントが、馬鹿正直に申告をする。スネイプの脳が、一瞬フリーズした。

「減点しないんですか？」

「リドル！何やってんだ!!」 マルフォイが怒っている。

「うるせー！俺は、鼻肩が大っ嫌いなんだよ!!そもそも、何で全部答えたハリーが点を減らされる理不尽な目に遭って、誰も答えていないスリザリン生はペナルティ無いんだよ！不公平じゃねーか!!!」

退屈しないねグラントは。スリザリンにこういう奴がいると、少しでも心が救われるわ。

「ミスター・リドル。スリザリンから5点減点。」

始めて、スネイプがスリザリンを減点した。前代未聞だな。この後、雪でも降るんじゃないか。

その後、スネイプは生徒を2人一組にして、おできを治す簡単な薬を調査させた。俺は、グラントと一緒に組んだ。グラントが材料の調達、俺が調合と役割分担したのか、15分で早く終わった。後は完成するのを待つだけ。幸い、誰も終わっていないし、イドウンも90%

位ほど進んでいるような状態だった。

イドウンとペアを組んでいるのは、確かダフネ・何とかグラスという女だった筈。これからは、グラスって呼ぶか。スネイプは、俺に何か小言を言う気力も失せたらしく、スルーした。その代わり、マルフォイとイドウンの班以外に注意という名の嫌味を言いまくってた。

スネイプが、マルフォイが角ナメクジを完璧に茹でたので、皆見るようにと言った時、シューシューという大きな音がした。みると、ロングボトムがシエーマス・FINEGANの大鍋を小さな塊にしてしまい、薬をこぼしていた。彼は頭から失敗したものをモロにかぶってしまったらしく、全身から真っ赤なおできが吹き出てきているではないか。

「バカ者！」

スネイプが怒鳴り、杖を一振りして薬を処分した。マジ切れになっているではないか。

「大方、鍋を火にかけてそのままヤマアラシの針を入れたな？FINEGAN、早くロングボトムを医務室に連れて行け。」

苦々しげにFINEGANに言いつけたスネイプは、ロンとティーン・トーマスの班に矛先を向けた。注意をしなかったという理由でグリフィンドールから1点減点した。全く以って懲りてないな。今度はどういたぶってやろうかね、コイツ。

授業ベルが鳴ると、すぐさまスネイプは自分の部屋に引きこもっていた。当分は出てこないだろうな。

「凄いやハリー。何の苦も無く問題に答える上に、薬もすぐ作っちゃうなんて。」

ロンが、俺を褒めてきていた。俺、名声の類に興味はないんだよね。「それよりも、ハグリッドのところ行こうぜ。もう、今日の授業は忘れたい。」

楽しみにしていたハグリッドのお茶が待っていた。ロンと2人で校庭を横切り、ハグリッドの小屋に向かった。そこには、先客でエリナがいた。

「あ、ハリーにロンも来たんだ。」

「エリナか。ハツフルパフでの生活はどうだ？」

「それなりに楽しくやってるよ。」

「そっか。良かった。……ハグリッド。招待してくれてどうも。」

「まあ、くつろいでくれや。よく来てくれたな、ハリー。それに……」

ロンのほうを見た。

「ロンだよ。」と、俺が紹介する。

ハグリッドはロンの赤毛とそばかすを見て、こう言った。

「ウィーズリーの家の子かい。え？お前さんの双子の兄貴達を森から追っ払うのに、俺は人生の半分を費やしてるようなもんだ。」

それからは授業の、特に魔法薬学の愚痴を吐きまくった。

「俺の父様にいつも酷い目に遭わされてたのは同情するけどさあ、仕事と私情の区切りくらいしっかりやって欲しいんだよなあ。」

「まあそう言うなハリー。スネイプだって頭では分かっちゃよるが、お前さんの顔を見るとどうしてもジェームズの事を思い出して、トラウマが蘇ってどうしようもなくなるわけだ。」

「そんなもんかねえ。」

「ボクの時は、時々ママの名前を所々で言ってたけどね。」

「マジかよ、エリナ。スネイプって新手のストーカーじゃん。もしくは、ロリコンか？」

「酷い言われようだなスネイプも。」と、ロン。

ハグリッドが出してくれたロック・ケーキは硬くて歯が折れそうになったが、3人でおいしそうなふりをした。巨人の血が半分入っているだけで、常人と嗜好がかなり違うのは大発見だな。

食べ終わるとハグリッドに礼を言っつて、俺たちは城に戻った。エリナと別れて、グリフィンドール寮に戻ろうとする。その時、後ろから俺を呼ぶ声が聞こえた。

「ポッター、話があります。今すぐです。」

え？俺？振り向くと、何か言いたそうなマクゴナガル先生がいたのだ

第12話 呼び出し

俺は、マクゴナガル先生に連れられて城の中を歩く。扉を守護するガーゴイル像の目の前まで来たわけだ。

「雷鳥！」

雷鳥？日本固有種の鳥の名前か？それともお菓子の名前か？ダンブルドアは動物、或いは鳥好き、はたまたお菓子好きなのか。分からん。

すると、ガーゴイル像が扉の前から立ち退いた。すると、その背後にある壁が左右に割れて螺旋階段が現れる。階段は自動で動く。まるでエスカレーターだ。檜の扉には、怪獣グリフィンをかたどったノック用の金具がついている。部屋は美しい円形。紡錘形の華奢な脚がついたテーブルの上には、奇妙な銀の道具が並び、クルクル回りながら煙を吐いている。壁には歴代の校長の写真が掛かっていて、大きな鉤爪脚の机の後ろの棚には、組み分け帽子が乗っている。扉の裏側には、金色の止まり木がある。鳥フェチなんだろうか？

すでに先客がいた。そこには、アルバス・ダンブルドア唯一人がいた。

「ハリー。こうして会話するのは初めてじゃろうから、自己紹介をしておこう。わしは、アルバス・ダンブルドアじゃ。よろしくのお。」

目を合わせようとしている。開心術か。生徒にやるか普通。佐緒里先生だってそんな事しないのに。だけど、無駄だね。普段から感情のコントロールを教え込まれた俺にはそんなチャチな開心術は効かない。デフォルトで閉心術を発動している俺には。

「では、私の方からも自己紹介をします。まあ、既に知っているでしょうが。私の名は、ハリー・ポッターと申します。以後、お見知りおきを。」

「それではハリー。夕飯が始まる前に少しばかり今週の学校の感想を聞いておきたいが、よろしいかな。」

スネイプの話ではなさそうだと、俺は感じる。だが、油断は出来ない。相手は、並外れた開心術師だ。生じた隙を突いて、心の中を見ら

れかねない。

「ええ、分かりました。今週の報告ですか。まあ、それなりには上手くやっていたかなと思っっています。本当に、他の同級生と同じレベルですよ。」

抑揚の無い感じで報告する。

「ほほう、ありがとう。ミネルバ、何か言いたい事があるんじゃないのかね?」

ここにきて、今まで無言を貫いていたマクゴナガル先生に話のバトンを渡してきたではないか。

「それでは、ポッター。なぜ、ここに連れてきたのか分かりますか?」
「全く以って見当が付きません。」きっぱりと答える。

「私から言いましょう。ポッター、実力をごまかすのはおやめなさい。」

「どういう事ですか?」何故様子見のことが分かったんだ。

「あくまでシラを切るつもりの方ですね。私は長年、様々な生徒を見てきました。最初の授業で、ミス・グレンジャーやあなたの妹のミス・ポッターのようにすぐに出来る子は少数ながらそれなりにはいました。しかし、意図的に中途半端な変化をさせた子は、殆どいません。あれは、かなり高度なコントロール能力がないと出来ません。あなたならば、その気になれば最優秀の成績を取れるのに、なぜ力を隠すのですか?マホウトコロからも、アランからお墨付きの能力を持っているのに。」

成る程。様子見がてら手加減していた事に対しての質問か。

「マクゴナガル先生。私は、名誉の類に興味は一切ありません。そんなものは、欲しい奴に勝手にあげればいいと思っっています。もう、生き残っていた男の子と勝手に持ち上げられる生活には、正直うんざりしています。少しでも普通の学校生活を送りたいから、出来ないフリをしていました。」

「そうですね。ですが、授業には本気で臨みなさい。アランのよこした手紙によれば、もう1年生レベルは問題無いそうですからね。」
「連絡のやり取りをやっているのですか?」

「そうです。これでも、仲は良かったですからね。」

「では、そうしましょう。失礼しました。」

俺は、校長室を出ていこうとする。しかし、また呼び止められた。アルバス・ダンブルドアによって。

「ハリー。あと一つだけ、いいかろう?」

「……無駄に長くならなければ。」

「ありがとう。さて、ハリー。スネイプ先生の事じゃ。」

「スネイプ教授がどうかされたので?」

「エリナと違って君は全てを知っているようじゃから、誤解の無い様にしておきたいのじゃよ。」

「こんな変哲もない私が、何を知っているというのです?」

「殆ど全てじゃよハリー。よく聞きなさい。スネイプ先生は確かに、君の父君との確執があった。君は、どうやら父君の非は認めている。しかし、母君に対する認識は誤解を持つておる。スネイプ先生は、リリーを愛しておった。彼女に危険が迫って来た時、彼は取り返しのつかない後悔と、それを平気でやってしまった自分に対する絶望を味わった。」

「それは、何かの言い訳ですか?」

「そうではない。スネイプ先生は、君達兄妹を護ろうとしている。それは、リリーの遺志を引き継ぐ為じゃ。彼女と、彼女の家族を引き裂いてしまったと言う酷い事をしてしまった。それに対する贖罪じゃよ。彼も、苦しんで悔いておる。それだけは、分かって欲しい。」

「ストーカーの如く思い続けた拳句に、マグル出身の私の母への救いようなない差別発言をした人間に、そんな感情があるとは思えません。それを差し引いても、仕事と私情を混合させる人間を理解する気などありません。確かに父が彼にやった行為は決して許されるべきではないし、私もその部分についてはスネイプ教授の肩は持ちます。」

一旦、呼吸をする為に喋るのをやめる。

「ですが彼は、私達兄妹の両親を死に追いやり、拳句に俺とエリナの人を歪ませた。それとこれとは話は別です。そういうあなたこそ、

光と闇を中途半端に行き来している彼に対してもう少し警戒心を持ったほうがよろしいのでは？」

「わしは、スネイプ先生を信じておる。何があってもじゃ。」

「……まあ、それがあなたの考えであるなら何も言いませんよ。尤も、私としては自分の考えを押し付けるのはイヤですし、逆に頭ごなしに考えを押し付けられるのも承服しかねますが。」

つまり、何も言わないが、自分の考えを俺に押し付けるのはやめろと伝えているわけだ。

「ダンブルドア校長。あなたが、私の持っている情報の修正に関しては感謝しています。ですが結局のところ、それをどう受け止めるかは俺次第ということですよ。そこをお忘れなく。そろそろ、夕食が始まりますので、これで失礼してもよろしいですか？」

「うむ。少々時間をかけすぎてすまぬのお、ハリー。行ってよろしい。」

「ありがとうございます。失礼しました。」

俺は、校長室を退出した。

ダンブルドア視点

セブルスから今日あった事を聞いた。憎悪の感情が見えたと言っておった。しかも、わしの開心術が全く通用しなかった。アランは、心や精神に関する魔法の分野においてはわしどころか全ての魔法使いにおいて右に出る者はいないと言われている。じゃから、彼の下で育ったハリーもその類の魔法には精通していてもおかしくはないのは分かってはおった。じゃが、あれ程とはのお。

「アルバス。どうでしたか。」

「いや、全くハリーの心が読めなかった。わしとしては、ハリーの心のわだかまりを解いて、闇に傾く要素をすべて取り除きたかったのじやが。それに加えて、アランも含めて自分の陣営に引き込めたら何も言う事はないのじや。」

「アルバス、それは欲張り過ぎです。アルフレッドの一件があれば尚更ですよ。話を戻しましょう。ハリーについては、他の先生からの報告ですと、仲間と認められた人には大変親切に振る舞っているそうです。」

献身的なサポートもしています。しかし、それ以外の人には未だに心の壁を作ってはいません。」

「やはり、わしは無力なのか。教え子の痛みと、心にある憎しみを取り除くどころかその真実にすら辿り着けていない。」

そうなのだ。最終的にヴォルデモートを完全に倒すには、エリナ・ポッターが必要不可欠なのだ。その為にセブルスに動いて貰っている。だが自分はどうだ。

アリアナ 妹も、ゲラット 親友も、トーム 教え子も救えなかった。そういった過ちを二度と繰り返さない様に逃げ続け、全てを他人に押し付けた結果、今度はジームズやリリーを始めとした自分を信じてくれた者の命までも見捨ててしまっている。目の前にいた、憎悪に取り憑かれた年端もいかなない少年の心の縛りを解けていない。教育者として正しき方向へ導くことすら出来ないのだ。それでもなお、自分は賢者、偉大な魔法使いと呼ばれる権利があるのか。

それ以前に、ハリーの魔力の質にも気付いていない。いや、正確には気付いてはいた。あのヴォルデモートなど比ではない黒く、冷たく、禍々しい魔力の質。普段は白く、暖かく、神々しいものだが、負の感情が表面化すると吹き出て来るあの魔力の質。

そして、その力を向けているのが自分達か、闇の勢力に対してなのか。あの反応を見る限りは、闇の勢力に対して向けておる。今の所は敵ではない。しかし、邪魔をするのであればむしろにもその力を向けてくるじやろう。無理を言って編入させたが、彼はマハウトコロからの留学生。保護者のアランや、マハウトコロの方を信じているだろう。いずれにしても、早急に対処しなければならぬ。

もし、神がいるとしたら今はこう願っている事だろう。どうか、ハリー・ポッターという少年が闇に走らないことを。そして、破壊神としてではなく、救世主として世界に変革を齎さんことを。

*

「待てやー！」グラントの声が聞こえた。

「うわあああああ!!フォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

マルフォイは追っかけられていたのだ。何故かというところ……その

理由は無い。強いて言えば、グラントの虫の居所が悪いから。故に彼はマルフォイにこう言ったのだ。

「むしゃくしゃするから殴らせる！」

そんな事、当然出来る筈も無い。クラブとゴイルは既にやられている。前にも上級生が立ち向かった事もあるが、全員無事に帰って来られた者はいない。魔法を使おうにも、グラントの身体は殆ど全ての術に強力な耐性を持っているのだ。まるで巨人族やドラゴン並みである。そして碌に反撃も出来ないまま、杖という名の鈍器で殴られる。しかも、リアルファイトの経験があるので、その威力は良くて半殺しで済むのだ。

「理不尽にも程があるぞーそれに、周りの動物もリドルに付き従って僕に襲い掛かるし。」

今にも泣きそうになるマルフォイ。実家の権力は何故か効かない。上級生の半数以上はグラントを恐れて何も手出し出来ない。スネイプに言えばスリザリンが減点。反撃しても、殆どの魔法は全く効かない。魔法使い、特にスリザリン生からしてみれば悪夢そのものである。

行き止まりまで追い詰められた。動物達は今にも襲い掛かってきそうだ。だが、グラントが静止。彼の手には、バットがあったのだ。「新しく買ったよお。このプラスチックバットの殴り具合を試したかったんだあ。」

マルフォイの悲痛な叫びが城中を駆け巡った。グラントは罰則を貰う羽目になった。フィルチと一緒に校内掃除である。が、フィルチも感心する程の清掃テクニクを見せつけ、彼に気に入られたのだった。

第13話 飛行訓練

次の週。最初から授業の課題は、積極的にこなし続けた。お陰で、点数を荒稼ぎした。30点程か。興味ないけど。ちなみに、左手のアセビの杖は少し反則だと思ったので、使っていない。

右手で、他の杖を使つたうえでの点数稼ぎだ。肝心の魔法薬学についてだが、あれからスネイプは俺には突つかかって来なくなった。その代わり、ロンやFINEガン、トーマス、ロングボトムに事あるごとに減点しまくってたがな。

知る事と割り切る事、乗り越える事の3つは全く違う。ダンブルドアは、スネイプへの認識を改めろと言っていた。知るか。奴から改めない限り、俺は態度なんか崩さない。スネイプを許したら、俺の中で負けを認めたようなものと刻み込まれるんだ。

そして、人間っていうのは認めたくないものに関してはそう簡単に認めたくない筈だ。俺に対するスネイプの態度がまさにそれだ。だから俺も、奴を許す気も、哀れだとも思わない。

そう思っていたある日、掲示板にこう載っていた。

『飛行訓練は木曜日に始まりませう。スリザリんとこの合同授業です。』

グリフィンドールの殆どが落胆したのは言うまでもない。そもそも何で、あんな嫌な奴らと一緒にやんなきゃいけないんだというのが殆どの人の意見らしい。だが、空を飛ぶ授業自体は皆とても楽しみにしているようだ。

そこからひっきりなしにクイディッチの話をするようになった。グレンジャーは「クイディッチ今昔」を図書館で借り、飛行のコツを木曜日の朝食の席で話しまくっていた。俺は、無視。グレンジャーの説明と言う名のお節介発言に対して、ロンがうんざりしている。そういえば、腐つても経験者だったよな、ロンって。一方のロングボトムは、必死に聞いている。あいつ、足が地上にあっても、何かしら事故るからね。

俺？ 箒に乗るのには興味ないな。もう一つ、スリザリんとこの合同授業に対して。これに関しては、あまり抵抗感はない。何しろ、毎朝6

時に起床して城の外でジョギングをしていると、グラントも良く鉢合わせている。初めは、どちらが早く終わるか競争をしていた。そうしている内に、互いに高貴なる魂を認め合う仲になった。それに、時々イドウンとも遭遇している。彼女と一緒にいるグラスや親が癒者（ヒーラー）をやっている女とも話した事がある。

何というか、スリザリンも決して一枚岩ではないことは改めて認識させられた。純血主義の解釈も家ごとに違っているようだ。グラスの実家では、別にマグルを淘汰する考えはないそうだ。簡単に言えば、ノブレス・オブリージユを推奨しているとのこと。癒者（ヒーラー）の家は、そもそもそんなルールすら設けていない。自分のやりたいようにやれという自由な感じであった。俺は、マホウトコロの事を聞かれまくったけどね。そう言えば癒者（ヒーラー）の名前、聞き忘れたな。

話はそれだけじゃない。ナイロックが定期的に戻って来る。今、朝食を食べている最中にだ。今までの成果として、ネズミの制圧は70%完了しているし、大まかな部屋の場所も判明している。いずれ、地図の類にしたいものだ。後、何かロンのネズミが人間臭いとも言ったな。

戻って来るのは別に良い。問題はその後。いつも4階の立ち入り禁止の部屋の前で殆どの確率でクイレルがいるとの報告が来たのだ。しかも、何か小言を呟いているらしい。僅かに聞こえたのは、「守っている」、「ダンブルドア」、「ニコラス・フラメル」とのこと。何かあるのか、と思いつつ引き続きホグワーツの内部調査と同時に制圧したネズミを使って、クイレルの行動を見張れと指令を出しておく。定期的な休みも入れてなど付け加えて。ナイロックは、「任せな、旦那。」と言って、飛び立った。

しばらくすると、ロングボトムにお届け物が届いた。父方の祖母から、思い出し玉なるものを貰ったらしい。何かを忘れていると、赤く変色するのだが、何を忘れているかまでは分からない。俺からすれば、欠陥品だね。ロングボトムよ、何かメモをする習慣でも身に着けるべきだな。その後、マルフォイと一悶着起きかけていたが、グラン

トがいたので未遂に終わった。

その日の午後3時半、俺は他のグリフィンドール生に先駆けて、飛行訓練を行う場所である校庭へ出た。スリザリン生は既に集まっていた。足元には箒が20本、整然と並んでいるな。しばらくして、俺以外のグリフィンドール生がやってきた。

「何をボヤボヤしているお前ら！ さっさと並べ!!」

男言葉を使うおばさんがいた。鷹のような目を持ったマダム・フリーチだ。

「私が、飛行訓練の教官マダム・フリーチ。箒を使って飛ぶわけだが、その前に早速このグラウンドをマラソンで5周してもらおう。」

みんな予想外の言葉に困惑する。パグ犬みたいな顔のパンジー・パーキンソンが金切り声を挙げる。

「どうして、グラウンドを5周しなきゃいけないんですか!？」

何故、マラソンをしなきゃいけないのか。分からないようだ。だが、その質問はマダム・フリーチの火に油を注いだらしかった。

「パーキンソン。質問する前に、ある程度貴様の脳味噌で考えるという発想はなかったのか。このゴミムシが!!」

ゴミムシ扱いされて、パーキンソンが今にも泣きそうになる。スリザリンの奴らって、金持ちの家の出身者が多いんだよな。大切な子供だから、甘やかされる。それゆえにメンタルは豆腐並みといった印象があるのだ。

「では、ポッター。どうしてなのかを、自分で考えようとしてもしない能無し共に教えてやれ。」

俺かよ、と思いつつ考えられることをみんなに話す。

「考えられるとしたら、もし箒から落下した時の怪我を軽減する為とかですね。マグルのスポーツでも、体を動かす前に準備運動は必ずと言っててもいいほどやります。」

それらしい事を言っておく。

「見事だ。グリフィンドールに25点。」

本当に当たったよ。しかも、点くれた。

「しかもだ。どんなに箒の性能が良くても、乗る奴がウスノ口なら確

実に負けるだろう。ポッター。さつき私が言ったことも答えていれば、更に25点与えていた。」

成る程。口調と態度はメチャクチャだが、言っている事自体は理に適っている。

「それでは、グラウンドを5周して来い。はじめ!!」

マダム・フーチが、デザートイーグルを空に向けて、発砲した。それと同時にみんな走り出す。

俺は、ペース配分を考えながら、確実にグラウンドを回る。お、毎朝ジョギングしていた成果がこんなところで役に立つとは。グラントも同様だった。

ちよつと余裕が出てきたので周りを見渡す。殆どがグロッキー状態になっていた。魔法使いつて、ここまで身体能力低いのかよ。しかも、マルフォイなんて、青白い顔がさらに真っ青になっている。

「ゼエ……ゼエ……マダム・フーチ。もう無理です!」

死にそうな顔で言う。しかし、ここはマダム・フーチ。その言葉を一蹴する。

「マルフォイ!!お前はまだ半周すらしてないだろ!!」

のやり取りが聞こえる。30分後。みんな終わったが、既に疲れ切っていた。

「さつきと箒の傍に立ちやがれ!!!」

休み暇も与えず、箒のそばに並ぶ。ロングボトムは、こんなスパルタ式なんて聞いてないと言わんばかりの表情をしていた。

「右手を箒の上に突き出し、『上がれ!』と言え!」

皆が「上がれ!」と叫んだ。しかし、実際に上がったのは俺と、マルフォイ、その他数名のみ。グレンジャーのは、少し上がる程度だ。ロンのは、勢いよく来たが、顔面に直撃。ロングボトムに至っては全く反応なしだ。そこらへんは、馬と一緒にだな。

マダム・フーチは箒のまたがり方、握り方を教えた。マルフォイは、何度もやり直しをさせられた。ロンが笑っていた。それをやっている時点でロンよ、お前もマルフォイと同類だぞ。

「よし!私が笛を吹いたら、地面を強く蹴り、2メートル程浮上して、

降りてこい。では、始めるぞ。1・2の——ロングボトム！何処へ行く！逝くな！戻ってこい!!」

ロングボトムがあわてて飛び出してしまった。ロングボトムはほとんど上昇していく。真っ青な顔で地面を見下ろしている。もう高度は軽く10メートルを越えてそうだねこりや。まあ、死にはしないだろう。

程無くして、とうとうロングボトムが箒から落ちてしまった。鈍い音を立ててロングボトムが地面に着陸する。もはや顔面蒼白のマダム・フーチとグリフィンドール生が走ってくる。爆笑しながらスリザリン生たちが後に続いてくる。

「私が、ロングボトムを野戦病院医務室に連れていく。お前らはここで待機だ。勝手に飛んだものは、千本ノックの刑だ。分かったな。」

ロングボトムは、野戦病院医務室に連れて行かれた。

「あいつの顔をみたか？あの大マヌケの。」

2人が充分に遠ざかってからマルフォイとスリザリン生がはやし立てる。グリフィンドールの点数獲得の仕返しとでも言わんばかりの。

「ごらんよーロングボトムのばあさんが送ってきたバカ玉だ。ロングボトムが後で取りに来られる場所においてやろう。木の上なんてどうだい？」

「さっさとそれを渡せ。殺されたくなければな。」

だが、マルフォイは挑発をやめない。

「取りに来てみるよポッター。怖いのか？」

「テメエ、フォイ!!何やってんだよ!!」なんと、グラントも加勢した。「文句があるのかリドル。君がいつも、僕に対してやっている事じゃないか。」

これに対しては、普段いがみ合っているグリフィンドールとスリザリンの意見が合致する。

『いや、本気でそうだよな。』

『お前の物は、俺の物だったよな。』

「正直マルフォイはウザいが、こればかりはそうだよな。」

「多分、ロングボトムのものもグラントの物、と言いたいのか。」

「それが嫌なんだろうなあ。」

「んだとお teme エ!!」

グラントは手近な小石をいくつか拾い、箒で飛び立った。

「俺も行くか。」

「だめよ！フーチ先生がおっしやっていたでしょう！動いちやいけな
いって！私達皆が迷惑するし、あなたも退学になるのよ!!」

グレンジャーが、叫んでいる。

「俺の退学、ねえ。その事に関しては寧ろ、お前は俺にそうなって欲し
いんじゃないのか？」

グレンジャーの言葉など無視して、俺も箒で飛び上がる。

「勝手にすればいいのよ!!」

3人は、空中で睨み合いをする。先に、グラントが動く。

「あらよつと。」

小石を投げ上げ、杖で叩いてマルフォイ目掛けて打つ。杖と言うよ
りは、もはや野球で使うバットだが。目にも止まらないスピードで石
がマルフォイの顔面に迫っている。マルフォイの顔面に命中する
……と、誰もが思った。

「うわあああ!!」

マルフォイはそれを上回るスピードで間一髪、石を避けたのだ。

そうか、マルフォイはこの数日、異常に多い回数（俺の見立てでは少
なくとも3桁）顔面中心に打撃の被害を受けた事で、警戒心と反射神
経が鍛えられているのか。

だが、詰めが甘い。俺は、箒を上向きに引っ張る。より高い所まで
行く。次に前屈みとなって、箒を両手でしっかりとつかむ。そして、
弾丸のようにマルフォイに突撃する。

「……ふう……ふう……あ、危なかつた……！って、しまったああ！ポッター
の存在を忘れてたああ!!」

チツ！かわされたか。だが、初心者とは思えない動きを見せている
ので心理的ダメージを与えている。現に、せせら笑おうとしているも
の、顔は恐怖で歪んでいた。

最終的にグラントの取った行動で事態は収束される。グラントは、密かにマルフォイの後ろに回った。そしてバットもとい杖をマルフォイの後頭部に激しく叩き付けて、落下させた。鈍い音が校庭に響き渡った。その衝撃で、マルフォイの手からこぼした思い出し玉。それを俺は、ダイビングキャッチで回収することに成功した。

グリフィンドールから割れんばかりの歓声が起こる。一方のスリザリンは、落下したマルフォイを心配そうに見ている。

「ドラコ、ドラコ起きろ……ダメだ。ピクリもしないぞ。」

これを言ったのは、セオドール・ノットだ。しかし、マルフォイの意識は回復するが、何かおかしい。

「ば、バララララ。バラが見える。それに川もある。あ、母上によく似た女の人が、僕をこつちにおいでと誘っている。綺麗な人だな〜」

「逝くなドラコ！それは、三途の川だ！！それ以上行くと死ぬぞ！」

「ドラコ！目を覚まして！！イヤアアアアア！！」

オーバーキルし過ぎたなと思いつつ、今のやり取りを目の当たりにしている。流石のグリフィンドール生も笑えなかった。思いの外重症だったのだ。すると、俺を呼ぶ声がした。

「ハリー・ポッター！」

マクゴナガル先生が走ってきた。俺は、流石にやっちゃったという顔をする。

「まさか——こんな事は一度も……」

マクゴナガル先生は、ショックで言葉も出てこない。

「……良くもまあ、そんな大それた事を……首の骨を折っていたかもしれないのに——」

「先生、ハリーは何も悪くありません。」

「お黙りなさい。ミス・パチル——」

「でも、マルフォイが……」

「くだいですよ。ミスター・ウィーズリー。さあポッター、一緒に来なさい。」

そう言ってマクゴナガル先生は歩いていく。ヤバい、足の感覚がなくなってきた。余談だがスリザリンは、かなりのデッドゾーンに突入

しているマルフォイの介抱をしていたので俺をバカにするどころの状態ではなかった。そしてある教室の前に立ち止まると、中に首を突っ込んでこう言った。

「フォルテ。ちよつとウツドをお借り出来ませんか。」

遅い5年生の男子が出てきた。何事だろうと言う顔をしていた。マクゴナガル先生は廊下を歩き、空き教室に案内した。

「お入りなさい、2人共。」

その後ろからマクゴナガル先生が入り、扉を後ろ手に閉めた。その後、俺たち二人の方に向き直ったわけだ。

「ポッター。こちら、オリバー・ウツドです。ウツド、シーカーを見つけてきましたよ。」

狐に包まれたようだったウツドの顔がほころぶ。

「本当ですか？先生。」

「間違いありません。」きつぱりと言った。

「彼は、生まれつきそうなんです。あの光景を見たのは初めてでした。ポッター、初めてなのでしょう？箒の乗ったのは。」

俺は、無言で頷いた。どうやら退学の話ではないようだ。それに、足の感覚も戻ってきた。

「ええ、この子は今手にもっている玉を16メートルもダイビングして捕まえました。あのチャリー・ウィーズリーだって、そんな事出来ませんでしたよ。」

ウツドは夢が一挙にかなったという顔をした。

「ポッター、クイディッチを見た事はあるかい？」

「いいえ。申し訳ありませんが、見た事はありません。ただ、ルール自体は知っています。」

「そうか。君は、確かに体格はシーカー向きだな。先生、ニンバス2000かクリーンスイープ7号辺りが彼にはピッタリだと思います。」

そんなわけで、着々と話が進んでいく。ダンブルドアに規則を曲げられないか頼んでみるとマクゴナガルは言い、俺に向けてにっこりと笑った。

「あなたのお父様が生きていたら、どんなにお喜びになったことか。

お父様も素晴らしい選手でした。」

それから数時間後……

「まさか。」

夕食の時間、俺はロンに今日あったことを聞かせた。

「シーカーだつて？なら君は最年少の寮代表選手だよ。ここ何年来かな……」

「百年ぶりだつてさ。ウッド先輩がそう言つてた。」

俺が即座に答えた。

「初試合までは誰にも言わないでくれよ？ウッド先輩が秘密にしておきたいんだつて。」

ロンが感動してこちらを見つめている。その後の校庭での話に代わる。どうやら、マルフォイは全身骨折をしたらしく、入院。骨折自体はすぐ直せたが、3日間の絶対安静を言い渡されたという。あそこまでやるつもりなかったんだけどなと思いつつながら、ビーフステーキを口に入れる。その時、双子のウィーズリーが広間に入ってきて、俺を見つけると足早にやってきた。

「凄いな。」ジョージが低い声で言った。

「オリバーから聞いたよ。俺達も選手なんだぜ——ビーターさ。」

「今年のクイディッチは優勝確実だな。」とフレッドが言った。

「チャーリーがいなくなつてからポロ負けだよ。でも今年是最強のチームになりそうだ。オリバーが小躍りしている位だから、よっぽど凄いなだな、ハリー。」

「じゃ、俺らそろそろ行くわ。リーが、学校を出る秘密の抜け道を見つけたつていうからさ。」

『『おべんちやらグレゴリー』の銅像にあるだよきつと。という事で、またな。』

フレッドとジョージが消える。と、その時上から目線での物言いしか出来ない様な癩な声が聞こえた。ハーマイオニー・グレンジャーだ。

「それじゃ、規則を破つてご褒美を貰つたつてわけね。」

「言いたい事はそれだけか？俺は、規則よりも仲間を優先する主義で

ね。」

「そうだよ。事あるごとに、僕達に突つかかかってきちゃって。何様のつもりなの?」

「盗み聞きとは良い趣味を持っているじゃないか、グレンジャー。」
「盗み聞きしたつもりはないの。ただ、あなたたちの話が聞こえたから……」

「思いつきり聞くつもりだったんだな。大きなお世話なんだよ。言っておくがな、好きでこんな状況になったわけじゃない。ロン、行こうぜ。」

「そうだね。じゃあね、悪質なストーカー。」ロンが、とどめを刺す。

こうして、俺達は談話室に戻った。寝る直前に、ナイロックが戻ってくる。報告を受ける。

『それで、どうだった。』

『犬の臭いがしたんよ。しかも、そいつの真下には仕掛け扉があった。あと、旦那の妹が犬に懐かれているんよ。』

『エリナが!?やるなアイツ。人や動物を惹きつける才能あるんじゃない?』

『否定はしないんよ。クイレルは詰んでいる。あの犬の攻略法が分かっているじゃないよ。』

『そうか。ちよつと蛙チヨコレート食うわ。』

蛙チヨコレートに口に入れる俺。カードは、アルバス・ダンブルドアだった。

「よりによつて、狸ジジイかよ。まあ、まだ持っていないから取っておいて……ん?……!!!これは!!!」

何となく裏面を見たら、ダンブルドアの説明文の中にニコラス・フラメルの名が記載してあった。錬金術の共同研究をやったらしい。

『ナイロック。礼を言うぜ。』

『何が?』

『あの部屋に隠されている代物についてだが、一つだけ心当たりがある。守られているのは多分それだ。』

思いもよらぬ収穫が出来た。それに満足した俺は、早く寝た。

エリナ視点

同時刻。エリナは、立ち入り禁止部屋で犬と戯れていた。

「良い子だね〜ワンちゃん。」エリナは、犬をモフモフしていた。

「くうくん。」犬は、嬉しそうだった。

第14話 ハロウィーン（日常編）

翌日、グレンジャーは俺に近付かなかった。まあ、口煩いハエがいなくなったような気分だから、大歓迎だがな。

そこから、1週間の月日が流れる。その朝、俺には大コノハズク6羽が運ぶ、大きな包みが送られてきた。その直後、もう1羽が飛んできて、包みの上に1通の手紙を落とした。俺は手紙を急いで開けた。こう書いてあった。

《包みをここで開けないように。

中身は新品の「ニンバス2000」です。

あなたが箒を持ったと知れると、皆が欲しがるので、気づかれないように。

今日の夜7時ウッドがクイディッチ競技場であなたを待っています。

最初の練習です。

M・マクゴナガル教授》

「何が来たんだい？」

送られた手紙を渡す。

「ニンバス2000だつて！僕、触ったことすらないよ。」

ロンの声が聞こえた。

1時間目が始まる前に2人で箒を見ようとロンと共に出て行くと、エリナと出会った。それ何と聞かれたので、1週間前の事を話す。その後に、エリナが凄いな、頑張つてと応援してくれて別れた。純粋に嬉しかった。

さつさとその日の授業をやり過ごす。

夕食後、ロンに手を引かれ、寮で箒の包みを開けた。ロンと一緒にニンバス2000をひとしきり見た。7時近く、1人で競技場へ向かった。まだウッド先輩は来ておらず、少しの間飛び始めた。

「おーい！ハリー、降りてこーい！」

ウッド先輩の声がした。見てみると、箱を持っている。

「ルールは知っているみたいだから、早速練習に移っていきましょうと思う。」

ただ、もう暗いからスニツチを使った練習はまた後日だ。今回はコイツを使う。」

取り出したのは、ゴルフボールが沢山入った袋だ。数分後、ウッド先輩と共に飛び上がる。ウッド先輩は、ありとあらゆる方向にゴルフボールを思い切り強く投げ、俺にキャッチさせた。

元々、体を動かすことは好きだし、スポーツの経験もあるから1つも逃さなかった。ウッド先輩は、大変喜んでいた。

「君、チャーリーより上手くなるよ。ああ、そうそう。これからは先輩っていう堅苦しい呼び方と口調で言わなくてもいいよ。くだけた感じで、オリバーってこれから呼んでほしい。チームの皆そうしてるからね。」

「分かりました……いえ、了解。オリバー。こんな感じでよろしくて？」

「ああ、そういう感じでいいさ。」

クイディツチに熱が入らなきや、案外気さくなんだなこの人。

毎日のように宿題があるのに加えて、週3回の練習もあつたので忙しくなった。まあ、元から1年の内容など復習のようなものなので、2日かけて終わらせている俺からすれば微々たるものだ。むしろ、今までが歯ごたえがなさ過ぎていたとも言える。クイディツチの方も、実戦向きの練習に徐々にシフトしていった。そんなこんなで2か月の月日が早くも経っていく。

10月31日 ハロウィーン

朝、6時に起床し、洗顔をする。モーニングヘアオーターで髪を整えて、外へジョギングしに行こうとする。そういえば、カボチャの臭いがするな。ハロウィーンだっけ。でも、その行事は本気で楽しむことが出来ない。

何故なら、両親がヴォルデモートに殺された日であり、俺とエリナの全ての始まりを決定づけた因縁の日でもあるからだ。

ハロウィーンの日は、みんなお菓子の焼けるにおいて朝から浮っていた。それもあって、『妖精の魔法』担当のフィールド先生がそろそろ物を飛ばす魔法の練習を始めていきましようと言った時、皆は歓声

をあげた。

俺はゼロと、ロンはグレンジャーと組む事になった。ロンが俺を恨めしげに見ていたが、それ以上に一番気に入らないあの女と組まされたことにカンカンだった。それは、グレンジャーも同じだった。俺、ゼロ以外の人と組んだこともあるけど、別に俺に反感的に接する人でなければ良好な関係を築けている。すぐに自分の課題を終わらせた後に組んだ人のサポートに回って、すぐ出来る様にしたからね。教え方が上手いから10点あげようと、フィールド先生も言ってくれた事もあったわけだ。俺に頼めば、すぐに出来るという風潮が立ち始めていた。

逆にグレンジャーは人気が無かった。いや、理論や実技は確かに良く出来てるよ、あいつは。ただ、それだけ。注意の時に、どうしてもきつい口調になってしまっている。それで相手を反発させ、すぐに自分も激昂する。悪循環だ。誰かに教えたり、解説したりという訓練を嫌と言うほど積んだ俺と、それをやった事も無いグレンジャーとは当然、天と地の差になる。

「いいかい皆。ビューン、ヒョイだよ。やってみよう。」

実技が始まった。

「ウインガーディアム・レヴィオーサー！」ゼロが呪文を唱えるも、効果はない。

「惜しいなゼロ。ウインの部分少し違ってるぜ。こんな感じだ。
ウインガーディアム・レヴィオーサー
浮遊せよ。」

呪文を唱えると、羽は机を離れ、頭上5メートルに浮いた。

「おや、ハリー。やるね。1年生だと1.2メートル前後が限度なんだが、約4倍の高さまで浮上させるとは。大したものだ。私も、思わず脱帽したよ。よし、ボーナスだ。グリフィンドールに10点！」

フィールド先生が拍手をして叫んだ。これに感化されて、皆も俺に続いて、自分も成功させるべくやり始めた。

「ウインガーディアム・レヴィオーサー！」ロンの呪文が聞こえてくる。

「言い方が間違ってるわ。ウイン・ガー・ディアム・レヴィ・オー・サ。『ガー』と長く綺麗に言わなくちゃ。それと、『ヴィ』じゃなくて『ビ』

よ。」

グレンジャーだ。間違った事は言っていないが、そこまで頭ごなしに言われればロンもむかつくぞ。

「ウインガーディアム・レビオサー。」

しかし動かない。ロンはヤケクソで杖を振るが、何も起こらない。すると、グレンジャーは業を煮やす。

「ちよつと待って、ストップよストップ！ あなた呪文間違えてるわ。いい？ 『レビオサー』よ？ あなたのは『レビオサー』」

「そんなに良くご存知なら、君がやってみろよ!!」ロンが怒鳴っている。

「よく見てなさい。ウインガーディアム・レヴィオサー浮遊せよ。」

当然だが、グレンジャーも成功する。1. 2メートルまで浮上した。

「おー！ハーマイオニー、良く出来たね。皆注目して！ハーマイオニーがやったよ！」

グレンジャーは、フィールド先生から5点貰った。

クラスが終わった時、ロンの機嫌は最悪だった。ちなみに、ゼロと一緒に3人で歩いている。そう言えば気のせいかも知れないけど、ゼロと一緒にいる時だ。彼の周りにはいつも風が吹くのだ。城の中はそよ風レベルだけど、城の外は最大で暴風が吹き荒れる時もあるんだ。まあ、風は好きだし、俺も大して気にしてないけどな。

「あくあ。俺、終了間際でようやく1. 5メートルまでしか浮かせられなかったぜ。理論は大丈夫だけど、実技が芳しくない。」

「ま、ゼロの場合は振り方と呪文のスペルは問題ないな。理論は出来るよ。それこそ、俺やグレンジャー以上に。あとはイメージの問題だよ。兄のフィールド先生は、確かにあの歳で闇払いや教師をやっているから凄いいけどさ。お前はお前だろ、ゼロ。すぐ出来なくても良いと思うけど？お前のペースで習得していけば良いと思うぜ。俺は5歳から予習してるけど、その時なんて100回は軽く失敗してるからさ。それに比べたら全然早いよ。」

「マジかよハリー。すぐに出来そうなイメージがあったわ。」

「天才でもなきや完璧じゃねえよ俺は。寧ろ、出来損ないだよ。あそこまで1回で出来たのは、今までの血の滲む様な努力があつてこそさ。」

「エリナと正反対のように見えるけど、結局誰かの見えないところで努力しているって意味では兄妹つてわけか。根つこの部分は同じなんだな。」

「そういう事だ。ゼロよ。」

「君らは良いよなく。呪文を出せただけまだマシさ。僕なんて魔法が出なかつたよ。」

「それもあるが、グレンジャーもいたからだろ？」

「ああそうさハリー。ハーマイオニーの奴、あんな言い方しなくてもいいのに。」

「あんなきつい言い方じゃあな。」と、ゼロ。

「うんうん、分からなくもない。」俺も同意する。

『いい、レビオサーよ。あなたのはレビオサー。』だから、誰だつてあいつには我慢出来ないつて言うんだ。全く、悪夢みたいな奴だよ。ハリーやゼロよりも実技の成績が劣っている癖に調子に乗っちゃつてさ。」

ロンが廊下を歩きながらこぼした。俺は何だか雲行きが怪しくなつたのを感じ取つた。そろそろ次の話に移ろうぜと提案しようとしたその時、グレンジャーが隣を歩いてきたゼロにぶつかった。急いで追い越していくグレンジャー。その顔を見ると、泣いているのが見えた。あ、流石に言い過ぎたなこりゃ。

「今の言葉、丸聞こえだったようだな。もう少し時と場所と状況を考えとくべきだったな。この俺を含めて。」

と、俺が2人に伝える。

「それがどうした。」とロンだ。

「まあ、友達いなきさそうだよな、グレンジャーつて。もう少し、丸くなれば近付いいてくる奴も出てくるだろうに。……まあ、ここらでいいか。じゃあ、2人共、俺はここで。」

「ああ。」

「じゃあね、ゼロ！」

ゼロは、次の教室に向かった。そして、入れ替わるようにエリナと会った。

「ハロー！2人共！次って同じ薬草学の授業だから、一緒に行かない？」

エリナが元気な声で挨拶する。次の授業に行こうと言って来た。

「悪くないな。ロン、お前はどうか？」

「うん。いいね。行こう。」

「そういえば、ハーミーを見たんだ。泣いてたけど、何かあったの？」
「グレンジャーの事か。」

俺は、エリナに前の授業の事を言った。

「ハーミーの言い方も直さなくちゃいけないけど、これはロンが悪いね。」

「ええ!!? ハリーだけじゃなくて、エリナも言うのかい?」

「正直やり過ぎだな。俺ら。まあ、今日は薬草学で終わるし、後で考えようぜ。」

グレンジャーは結局、薬草学の授業に来なかった。授業が終わって大広間に行く。途中、パーバティ・パチルがラベンダー・ブラウンに話しているのが聞こえた。地下のトイレで泣いていて、1人にしてくれと言っていたらしい。流石のロンも、バツが悪くなっていた。

大広間に向かうと、豪華な飾りつけを見て、素直にハロウィーンを祝えない俺でも凄く感動した。ちよつと夕食まで時間があるので、外に出た。湖の畔までニンバス2000を使って飛んだ。

俺は水面を見つめる。別に今置かれている状況を悪いとは思っていない。良い人達にも巡り合えたし、その人達が俺を引き取って育ててくれた。だが、あの時少しでも早く助けがあったら、何か状況が好転していればと思うと、あなた方は死ななかつたかもしれない。そうでしょう、父様、母様。

そう思いに更けていると、俺の左肩に誰かの腕が触れていた。かなりデカイ。後ろを見ていると、ハグリッドがいた。

「ハリー。こんなところにいたのか。どうした、少し涙が出ているぞ

「まさか、マルフォイの奴らに何かやられたんか？」

「いいや。そもそもマルフォイに負ける要素なんて持つてないよ。世間では楽しいハロウィーンだろうけど、俺にとっては素直に楽しめないんだ。だって今日は……」

「そうか、すまん。なんたつて今日は、お前さんとエリナの両親、ジエームズとリリーの命日だからな。」

「そういう事。それに、謝らなくていいよ。悪いのは、あの変態野郎と、奴に俺の両親を売ったクズ野郎だからね。」

「そうだな、うん。ジエームズとリリーか。あの2人は、俺の知つとる中で一番優れた魔法使いと魔女だったよ。学生の頃は、2人共ホグワーツの主席だった。『あの人』が、なんでもっと前に2人を味方に引き入れようとしなかったのか謎じやった。どうしてなのかは分からん。ただ、10年前の今日にお前さんを含む4人が住んでいた村に奴が現れたつてことだけだ。お前さんとエリナが1歳になったばかりだよ。あいつがやってきた。そして……そして……」

突然水玉模様のハンカチ（汚い）を取り出して、ボアーツと霧笛の様な音を響かせながら鼻をかむハグリッド。

「すまん。だが、本当に悲しかった……お前さんらの父さん母さんの様な良い人はどこを探してもいやしない……そういうこつた。」

それで、俺達が残つたわけか。

しばらくの間、黙祷を両親に捧げる俺とハグリッド。時間が経っていた。もう夕食は始まつたか、残念。その後、ハグリッドに連れられて城に戻る俺。しかし、何やら騒がしい。生徒が我先にとそれぞれの談話室に戻つていく光景が見えた。

「何だこれは!?!何がどうなつているんだ?」

「俺にも分からん。」

その時、マクゴナガル先生が俺とハグリッドに気づく。

「ポッター!!何処へ行つてたのですか!?!みんな心配してたのですよ。」

少し怒っているが、これは本当に心配している態度の裏返しだろうな。

「すみません。今日は、私の両親の命日だったので感傷に浸り過ぎて

ました。謝って済む事ではありませんが、申し訳ございません。」

マクゴナガル先生は、急に申し訳なさそうな表情になった。

「いいえ、そういう事情でしたら、仕方ありません。さあさ、ポッター。早く寮にお戻りなさい。」

「寮に戻って、何が起こっているんです?」

「トロールが地下室に侵入したのです。」

トロール? 何でそんなのが。ん? 地下室? ……あ!

「先生、地下室のトイレにグレンジャーがいます。あいつ、トロールの事を知らない筈です。それに、俺のフクロウから最近4階をウロチョロしている奴がいるという報告を受けています。」

「何ですって!?!」取り乱したように言う。

「落ち着いてください。恐らくトロールは陽動かも知れません。先生は、4階に行っていたいで良いですか? 俺はグレンジャーを救出しに行きます。あいつは嫌いですが、殺されるのはそれ以上に目覚めが悪いので。俺、これでもロイヤル・レインボー財団で鍛えられていますので。」

「いけません! トロールに1年生のあなたが相手に——」

と言いかけたところで俺は遮る。

「確かに、今先生の言うことを聞いて寮に帰るのが一番賢明な判断でしょうね。俺もそうは思っています。だけど、1人も救えずに安全な所へ向かうっていうのが賢い判断だって言うなら、俺は一生バカで良いです。」

マクゴナガル先生は、俺を見る。俺は、何が何でも行くぞ、と言う決意を前面に出した態度を取る。

「分かりました。但し、無茶だけはしない様に。危険だと感じたら、すぐにお逃げなさい。逃げる事も人生です。良いですね?」

「はい!!」

「では、お行きなさい。私は、4階へ行きます。グレンジャーを頼みましたよ。」

俺はマクゴナガル先生と別れ、地下のトイレに向かう。待ってろよ、グレンジャー。死んだら許さんからな。

マクゴナガル視点

その時の私には、後ろへ走り去っていくハリーの両隣に、かつての教え子であるジエームズとリリーの姿が見えたのです。

『ジエームズ、リリー……ハリーはアランに似ているかと思いましたが、確かにあの2人の実の子供だというのが良く分かりますね。恐らくハリーは、一度こうだと決めたら簡単には曲げないタイプでしょう。それに、アランの話だとホグワーツのカリキュラムはあらかじめ終わらせている。他の生徒よりは、勝機があるかもしれませんね。』

第15話 ハロウィーン（激闘編）

それは、ハリーが湖の畔でボク達兄妹の両親に対する感傷と黙禱を捧げていた数時間の間の話。ボクは、授業が終わった後に荷物を自分の談話室の部屋に預けて大広間に行った。

ハーミーは、どこ行っただらう？ハリーも箒を持ってどこかに行っちゃったみたいだし。でも、豪華な飾りつけに思わず感動してハロウィーンのこと以外は考えられなくなった。かぼちやの中の炎がちらつき、幾千のコウモリの大群等幻想的な空間が広がっていた。

そして、夕食のときが始まる。入学式と同じように突然金色のお皿が乗ったご馳走が現れた。それから、色々食べた。グラタンにシチュー、ジュース、ケーキ、タルト等々。主にカボチャ尽くしだったけど、美味しかった。カボチャの料理以外だと、オバケの形をしたピザ、ハムやチーズ等をハロウィーンのモチーフをくり抜いて載せた、可愛らしいクラッカー、皮付きポテトに何故か焼き肉、その他もろもろ。

これからデザートにカボチャのプリンタルトをのせて食べようとする、クイレル先生が全速力で大広間に駆け込んできた。チャームポイントのターバンは少し歪んでいて、顔は恐怖で引き攣っている。まあ、いいか。いただきます。

「トロールが……地下室に……お知らせしなくてはと思って。」

クイレル先生は倒れた。周りが大混乱になる。ダンブルドア先生が杖の先から紫色の爆竹を何度も爆発させて、静かにさせた。その間、ボクは食事中は一種のトランス状態になるのか、全く混乱しなかった。

「監督生よ。すぐさま自分の寮の生徒を引率して寮へ帰るのじゃ。」

と言うわけで、寮に帰ることになった。スーザンとアーニーが食べ物よりも命を優先してくれ、という説得で、渋々帰ることにしたんだ。

あれ？そういえば、ハーミー知ってたっけ。このこと。……まさか。行かないと!!!

ボクは、ハツフルパフの列を離れて地下室へ向かった。でも、ハー

ミーを心配してたのは、ボクだけじゃなかった。何と、ロンとゼロ、グラントも同じだった。

「あれ、みんなどうしたの？」

「あ、エリナも来たんだ。ハーマイオニーがトロールの事は知らないだろうから、知らせに行こうかと思って。」

ロンが答える。

「グレンジャーは知らないはずだ。何時間もトイレに籠りつ放しだからな。」とゼロ。

「だから、ハーミーちゃんを助けに行こうってわけだったのさ。」グラントが続ける。

「僕達3人で行こうと決めてた矢先に、君が来たってわけ。」

「じゃあ、ボクも行く。ハーミーはお友達だもん。行って良いかな？」

ロン、ゼロ、グラント？」

「3人よりも4人の方が良いに決まってるぜ、エリナちゃん。」グラントは了承した。

「じゃあ、行こう！って、そういえばハリーは？」

「見てないな。箒を持って、外に出て行ったとこまでしかな。」ゼロが答える。

「夕食の時いなかったよ。いつも一緒だったのになあ。どこで何をしていたらろう？」

「まあ、ハリーに限って死ぬって事は無いだろうから、さっさと行っちゃおうよ。」

ボク達4人は、地下室の女子トイレの入り口前まで来た。悲鳴が聞こえる。ボク達は、最悪の事態を思い浮かべる。まさか、と思いながら扉を開けると……

そこには大きなトロールがいた。今まさに、棍棒をハーマイオニーに振り下ろそうとしている所だった。

「こいつをお見舞いしてやる！攻撃せよ！！」^{フリベンド}

ゼロは、自分の杖から白い光をトロールに発射する。トロールに直撃したが、大したダメージは与えられていない。

「やっば、この杖だけの専用呪文。その中の最弱レベルじゃダメだっ

たか。」

「でもこちらに引き寄せる事は出来たんだし、今はこれで良しにしようよ!!」

ボクは、ゼロを思いつく限りの言葉で励ます。

「そうだぜ、ゼロ。ハーミーちゃんから遠ざけられたんだ。ここは、俺に任せろ!」

グラントは、何やら大きな重火器を取り出した。

「グラント。それ、何?」

ボクが聞いてみる。知っている銃よりも大きいと言う印象しかない。

「リトル・ハングルトンの警察署からくすねてきたM79 グレネードランチャーだ。」

「何ちゆう物騒なもん持ってんだよお前は。」とゼロ。銃の存在は知っているらしい。

「で、それでどう戦うの?」

ロンが尋ねる。マグルの武器、ましてや重火器なんて見たことはある筈もない。

「へへ、榴弾を装填して、トロールをぶっ飛ばす。」と言いながら、セツトした。

「FUCK YOU!ヒヤッハー!!」

狂気の笑みを浮かべながら、汚い言葉を吐き、トロール目掛けて榴弾を発射した。腹のあたりに直撃。さつきよりは効いているが、決定打にはなっていない。

「さつきの弾はもう一個あるか?」

「ゼロ、実はあれ一発だけ。後は無し。」

「「ふざけんなー!!」」

ボクは、ロンとゼロと一緒にグラントを軽くリンチした。グラントは、「^すず^みば^まべ^んで^ひは^た。」と謝罪した。

「ハーミー、早く、走って!」ボクは力いっぱい叫んだ。

でも、ハーミーは恐怖のあまり動けないらしい。恐怖で口を開けたまま、壁にピッタリと張り付いた。しかも、ハーミーを再びターゲッ

トにしたようだ。

こうなったら一か八か。後ろからトロールに飛びのく。

「エリナ、何をしてるんだ!？」

ゼロが叫んでいたが、今は気にしない。ボクは、自分の腕をトロールに巻き付けた。気にしていないので、自分の柵の杖をトロールの鼻の穴に突き刺す。

流石に痛みでうなりを上げ、トロールは棍棒をメチャクチャに振り回す。ボクは、何とかしがみ付く。だけど、時間の問題だ。少し力が緩んだ時、トロールはボクを振り払った。そして、棍棒で強烈な一撃を食らわせようとする。ロンが、ゼロが、グラントが、ボクの名を呼んで叫んでいる。

ああ、結局ダメだった。もう死ぬのかなと、思ってしまった。

「諦めるな！」

静かだが、はつきりと強い力のある声が聞こえた。それに、棍棒による一撃は永久に来なかった。トロールの手から棍棒が紅の閃光によつて弾き飛ばされたからね。また、ボクは硬い地面に叩き付けられることはなかった。支えているのは、温かい手だ。グリーンの瞳が、優しくボクを見つめている。

「ようやく間に合ったよ。危機一髪って奴かな？」

そこには、夕食には姿を見せなかったハリーがボクをお姫様抱っこで支えている。

「ハリー。今までどこにいたの? どうしてここに?」

「別の場所で随分時間を食ってたんだよ。帰って来てみれば、トロールの侵入で大騒ぎ。グレンジャーを助けに行く許可は、マクゴナガル先生に貰っているわけだ。詳しい話はまた後にしようか。こいつ、片付けるぞ。エリナ、立てるか?」

「う、うん。助けてくれてありがとう、ハリー。」

「礼には及ばないさ。ロン、ゼロ、グラント。お前らは大丈夫か?」

「最高のタイミングだぜ、ハリー!」とグラント。

「ある程度ダメージは与えたが、決定打にはなっていないけどな。」

ゼロが、簡単に状況説明する。

「うん。大丈夫さ。」ロンが、元氣よく答える。

「よし、ここは俺に任せろ。ストウービファイ麻痺せよ。」

今度は、赤い閃光を右手に持った杖で放つ。トロールの杖に当たる。氣絶するが、間を持たずまた意識を取り戻す。

「成る程。腐つても頑丈と言うわけか。ならばこれだ！インペイメンタ妨害せよ！
デイフィン裂けよ!!」

二つ連続で呪文を詠唱するハリー。トロールの動きが止まり、体の至る所が切り傷でいっぱいになる。トロールは、苦しんでいる。

「ロン、最後にやれ！いいか、ビューン、ヒョイだ!!」

「ウインガーディウム・レビオース!!」

さつきハリーが弾き飛ばした棍棒を、ロンが浮遊呪文で持ち上げる。空中の限界点まで高く舞い上がる。そして、ゆっくり回転してトロールの頭にぶつめた。トロールは、うつぶせに伸びてしまった。

一連の出来事を見ていたハーマーは、やっと口を聞いた。

「これ、死んだの?」

「まさか。ノックアウトされただけだろ。」と返すハリー。

ハリーは、トロールの鼻に刺さっていたボクの杖を引つ張り出す。

自分の杖を使って「スコージファイ清めよ!」と唱えて、ボクの杖を綺麗にしてくれた。

その後、「アクアメンディ・フェルベンテイス熱を持った水よ!」と唱える。すると、ハリーの杖から熱い水が出てくる。それを、ボクの杖に念入りに掛けた後にボクに返してくれた。

「綺麗にしとくだけだと、菌が残っているからね。熱湯消毒しておいたよ。」

「あ、ありがとう。」

双子の兄が潔癖症なのを初めて知った。

そう思った直後、足音が聞こえた。マクゴナガル先生にスネイプ先生、クイレル先生がやってきた。クイレル先生は、ヒーヒーと弱々しい声を上げた。スネイプ先生は、トロールを覗き込んでいる。マクゴナガル先生は、ハリーとハーマー以外をじっくり見つめている。どうやら、これまでになく怒っているようだ。

「ミスター・ポッターとミス・グレンジャー以外のあなた方は、どうい

うつもりですか？それに、ミスター・リドル。その手に持っているのは何ですか？」

静かだが、怒りに満ち溢れている。

「誰も死ななかつただけ運が良かった。何故寮に帰らなかつたのです。ミスター・ポッターに関しては、私が許可を出しましたが。」

「私としても、グレンジャーの他にも人がいたのは予想外です。」

事務的にマクゴナガル先生に伝えるハリー。

ヤバい雰囲気だなと感じた。ハリーが何か言おうとしたが、言う事はなかった。ハーミーが理由を伝えたからだ。

「私が悪いんです！4人は私を探しに来てくれました。私が、トロールを探しに来たんです。優秀な私なら一人で出来ると思いましたが、トロールに関しては、本で読みましたので。」

皆驚いた。ハーミーは、掟やルールを重視するタイプだからだ。いざという時は、そっちよりも身内や友達、仲間を優先するハリーとは真逆なんだ。それなのにハーミーは、ボク達を庇ったんだ。

「4人がいなくなったら、今頃死んでいました。駆け付けてくれた時には、殺される寸前で……その後にハリーもやってきて、武装解除呪文に失神呪文、妨害呪文に切り裂く呪文でトロールを牽制してくれて口んが浮遊呪文で倒してくれました。」

「そういう事でしたか。ミス・グレンジャー、グリフィンドールから5点減点します。」

「しかし、他の5人は見事です。それぞれに10点。ミスター・ポッターは20点差し上げましょう。そして、リドル。それは何ですか。」

重火器の事をグラントに尋ねる先生。

「こ、これは……」

「グラント。お前の持っている武器、グレネードランチャーか？」

「え？ハリー知っているのか。」

「ああ、名称までは知らんが、種類は分かる。」

「ポッター。それは、どんなものですか。」

「マグルの戦争で使われているものですよ。そこに装填する手榴弾があります。こいつは、主に手で投げて使う爆弾で、人員の様な非装甲

目標に対してはかなり有効的な武器ですね。また、発射装置は必要ありません。故に、歩兵の標準装備となっています。グレネードランチャーとは、手榴弾をより遠くに飛ばす装置と言ってもいいでしょう。」

ハリーとグラント以外の全員が青ざめた。そんな危険なものをして使っているのだ。それだけでも問題だが、よりによって使っているのだ。

「ハリー、一つだけ質問。」

「何だエリナ。」

「手榴弾で、人は死ぬの?」

「戦争で使われる位だ。命だつて奪う。死を免れたとしても、体の一部分が使い物にならなくなる事もある。それに、これは2回の世界大戦でも使われていたんだ。」

世界大戦の事はマグルの世界の知識を少しでも持っている人ならば、その凄惨さは嫌と言うほど知っている。

「ともかく、リドルの持っている武器は没収すべきですぞ、マクゴナガル教授。ポッターの言っている事が本当なら、子供が持って良いような物ではありませんからな。」

しまった。すっかりスネイプ先生の事を忘れてた。

そういうわけで、グラントはグレネードランチャーを没収された。そして、帰る事になった。

「皆、ありがとう。」ハーマーが感謝の言葉を告げる。

「別にお前を助けたくて助けたわけじゃない。死人が出ると、俺の中で後味が悪くなるからそうしただけだ、覚えておけよグレンジャー。」

ハリーがそう言う。実は、妖精の魔法の後でのロンの暴言を止められなかった責任感を少なからず感じているんだよね。ハーマーをうつとうしいと思つてたのは本当だけど、死ねばいいのと言うほど嫌っているわけじゃないんだ。言い方さえマイルドにすれば、という事を除けば、ハリーはハーマーを高く評価している。何でそう感じるかって。まあ、兄妹だから、かなあ?」

「あなたには感謝しきれないわ、ハリー。それから、私の事なんだけど

ね。これからは、ハーマイオニーって呼んで。ハーミーでもいいわ。何か愛称があったらそれでもいいし。」

ハリーはキョトンとする。しばらく考え事をしてから、ハーミーにこう告げた。

「分かった。ハーマイオニーは長つたらしいから、これからはこう呼ばせてもらうわ。……………ハー子。」

一瞬皆の頭がフリーズした。その直後、大爆笑した。

「い、意外過ぎるあだ名だなwww」ゼロは、キャラ崩壊レベルで笑っている。

「ちよ、ネーミングセンスが酷い。」と、ロン。

「ハー子って、お前www」グラントは、四つん這いになって大爆笑している。

「プツ、アツハツハツハツハツハツハ!!」ボクも、思わず吹き出してしまう。

「何なのよ、そのあだ名!？」ハーミーは、唯一怒っている。

「別にいいじゃん?」と、ハリーはあつさりと言う。

こうして、それぞれの談話室に戻る6人。この日ハーミーが、本当の意味でボク達のお友達になった。

第16話 クリスマス

11月辺りから寒くなってきた。それに反比例してクイディッチの練習はますますデッドヒートしていく。そのお陰で、新たなフォーマーションが完成した。それを最初のクイディッチの初試合で実践した。最初は、スリザリン戦だ。100年ぶりの1年生選手と言うこともあって、ハッフルパフやレイブンクローも観戦している。結果は、奴らに点を一切与えることなく230対0で、グリフィンドールチームの完全勝利となった。

後日、マルフォイの顔が酷く打ちひしがれていた。イドウン曰く、スリザリンチームの完全敗北と言う最悪の結果によるショックに加えて、グラントから鬪魂注入と言う名の八つ当たりの対象にされてしまったようだ。ご愁傷様。しかも、クラブ、ゴイル、ノット、ザビニを始めとしたスリザリンの1年生の男子全員も八つ当たりの巻き添えを食らっていた。

最初アイツは気に食わなかったが、ここまで理不尽な目に遭うと流石に可哀想になってくる。だからと言って、アイツはともかく父親は俺の中では抹殺リストに入っているがな。その認識は変わらん。話を戻そう。親の権力は効かない、スネイプに言ったらスリザリンが減点される。マルフォイからしれみれば、どう足掻いても絶望だ。

この前、用を足し終えて出て行こうとした時に遭遇した。

「その、何だ。……スマン。」

憐れみを込めた表情で謝罪する。これが、マルフォイに追い打ちをかけてしまった。そんなつもりなんて一切無いのに。

「そんな目で僕を見るなあああああああ!!!」

と、叫びながら突進してきた。体を碌に鍛えた事も無い奴の突進など、俺からすればスローモーションに過ぎない。だが、油断せずに華麗に回避する。だが、マルフォイからしてみれば避けられたのは予想外だったようだ。止まろうとするが、勢いが止まらなかったんだ。そのまま勢い余って、顔面から便器に突っ込んでしまった。すぐに救出して、医務室に連れて行った。

学業やクイデイチに打ち込む一方で、錬金術師の文献も読んでいた。ダンブルドアのジジイのカードの情報からヒントを得ている。ニコラス・フラメルの名は、あっさり見つかった。巨大な古い本によると、『ニコラス・フラメルは、我々の知る限り、賢者の石の創造に成功した唯一の者』という記述が見つかった。

ふーん。賢者の石ねえ。どんな金属も黄金に変え、飲めば不老不死になる「命の水」を作り出す効果を持つんだっけか。黄金の元素記号は『Au』だった筈。金属の元素を『Au』にするという事なのか？ マグルの技術でも、人工的に金を生み出す事について、一応は可能だ。水銀にガンマ線を照射すれば、原子核崩壊によって水銀が金に変わる手段だが。ただ、時間とコストがかかるので現実的ではない。

それに、賢者の石のもう一つの効果である命の水にも興味がない。そんなものを使って無駄に長生きしようとしている奴の気持ちなんて分かるうとも思わんし、その神経も理解出来んな、俺には。

「何でそんなお花畑な思考を持つ連中は、与えられた命で満足出来ないんだ？ 全く以って理解不能だ。」

俺の人生観とは、どれだけ人生が長いかが重要ではない。生きている間に、どれだけ輝ける事が出来るかが重要かと考えている。なので、不老不死に嫌悪感を持っている。

1991年12月24日。今日から1月の最初の1週間までクリスマス休暇となる。いや、クリスマス休暇というより年末年始休暇の方がしっくりくる気がするのだが、まあ気にしないフリをしよう。ハリー子だけ実家に帰る事が決定している。いつもならロイヤル・レインボー財団のクリスマスパーティーも行われる筈だったが、義祖父ちゃんは急な仕事が入った事で年末年始返上しななければならなくなった、と手紙の中で愚痴を漏らしていた。また、義兄さん達も多忙なので、俺もホグワーツに残る事になった。

俺は、エリナから厨房の行き方を教えて貰った。屋敷しもべ妖精がそこで働いており、俺を見るや否や菓子とか色々差し出してくれた。

話が変わるのだが、先日、最後の魔法薬学の教室で奇妙な教科書らしきものを見つけた。『上級魔法薬』と言う教科書で、『半純血のプリ

ンス 蔵書』と書かれている。見た目はただの薄汚い50年前の教科書と言ったところ。だが、それはあくまで見た目の話であって、中身は大変濃い物となっている。非効率的な記述の殆どを修正しているのだが、これが結構理に適っているのだ。それに、魔法の呪文も作っている様で、どれも実用的だ。ここから俺は、『身体浮上』と反対呪文の『身体自由』、リベラコーパスその他の『舌縛り』、ラングロック『耳塞ぎ』、マフリアート『切り裂け』を習得した。『切り裂け』だけは、使いどころを間違えなければ問題ない。それ以外は、いつでも使える。このまま上級魔法薬は、ありがたく頂戴するとしよう。

1991年12月25日。待ちに待ったクリスマス。朝、すぐに目がパチリと覚めていく。俺のベッドの枕元には、たくさんのプレゼントが積んであった。おいおい、こんなに知り合いはいないぞ俺。差出人を見てみると、本当に寮や学年、性別問わず来ている。愛の妙薬入りの食べ物、呪いのかかった代物、ガラクタ等本当に何でもあった。役立ちそうな物、純粹に欲しかったり、貰って嬉しい物以外は、欲しい人に譲ったり、それでも引き取り手がないときは碧炎で焼却処分した。別に特別親密でない送り主には、お礼の手紙を量産するという形で対処する。もちろん、親しい人にはより丁寧な文章で感謝の手紙を書く。

親しい人からのプレゼントの着手に取り掛かる。ハグリッドからは、お手製の木の横笛。吹くと、フクロウの鳴き声によく似た音が出て、ナイロックが上機嫌になった。

ウィーズリー家から、暖かそうなセーターが送られてきた。色はエメラルドグリーン。胸元にはHというイニシャルが入っていた。ありがたいので、着用した。

ハー子からは蛙チョコレートの詰め合わせで、グラントからはバニラ味のプロテイン、ゼロ(フィールド先生と一緒に用意したらしい)からは簡単に作れるお菓子のレシピ本をいただいた。エイダ義姉さんからは大きなチョコケーキを、イーニアス義兄さんからは『ホグワーツの歴史 大幅改訂版』と言う本、アドレー義兄さんからは何かのマークが刻まれたペンダント、義祖父ちゃんからは『呪いのかけ方、解

き方（友人をうつつとりさせ、最新の復讐方法で敵を困らせよう——ハゲ、クラゲ脚、舌もつれ、その他あの手この手——）をそれぞれ貰った。

更に嬉しいのは、日本のマホウトコロの友人からもプレゼントが来た事だ。俺自身、厨房を借りて手作りのクッキーを作って届けたのではあるが。

下に降りると、もうロンが起きていたが、予想外の客人もいた。どういうわけかエリナにゼロ、グラント、イドウンがいたのだ。

「ロンはともかく、どうしてお前らここに？それに、エリナ。それは？」

「寮のみんな帰っちゃったからね。どうせなら、グリフィンドール寮にいるお兄ちゃんの所に行っても大丈夫かなって。ああ、これ？これね、透明マントっていうんだ。パパの事を良く知ってる人から来たんだ。差出人は知らないけど。」

「まさかの校長だったりしてな。」

「どうなんだろう。それなら校長先生は、何でこれをボクに返すっていう手紙を同封したんだろう？」

「さあな。あの爺さんの真意なんか俺は知らんがな。で、お前らは？」
「帰ったら、兄さんと掃除しなきゃいけないからな。残る事にしたよ。」

「クリスマス位、休んでもバチは当たらないからな。オヤジにも、仕事はこつちでこなすから、お前は学校で友達と一緒に過ごさせて言われたしよお。」

「ホグワーツのクリスマスのスケールが凄いと聞きましたので。それよりもハリー。あなたがウィーズリーに送ったオセロ、と言うボードゲーム。私も結構ハマりましたわ。」

「ロンは、ゲームの才能はあると思っただけだからな。まさか、みんなを招くとは。大広間でも良かったんじゃないか？」

「こまけえこたあいなんだよ！どうせ誰もいないんだ。大丈夫だろう！」

グラントが、俺にそう言った。

その後、オセロだけじゃなくチェスもやったり、フレッドとジョージ、パーシーと一緒に雪合戦をしたり、豪華な夕食を食べたりした。俺は、この際なので年代物のワインも一杯飲んだ。苦かったけどね。

そして、皆寝静まった夜。俺は、『目くらまし術』を使って、8階にあるただの石壁の前まで向かうことにする。そして、壁の前を三回歩き回りながら、自分の目的を心に強く思い浮かべる。すると、壁が開いた。イーニアス義兄さんの追記修正されていた『ホグワーツの歴史』に書いてあった必要の部屋だ。そこに突入した。

第17話 みぞの鏡

俺は、必要の部屋に突入する。目的は、半純血のプリンスが持ち主の上級魔法薬を隠す場所を求めるからだ。願ったのは、あらゆる物を隠す場所だ。これなら誰も思いつかないし、巧妙に隠せる筈だ。そもそも、この必要の部屋の事を知っているのは俺以外いない。というのは言い過ぎかも知れないが、少なくとも片指で数える位しかないだろう。多く見積もっても、2桁で数えられる程しかない筈だ。

軽くスキップしながら、本棚の分かりやすい場所に隠す。区別がつきやすいように、マグルの世界で売ってあった付箋を貼った上でだ。「結構あっさりと終ったな。ここで泊まるのもアリかな？ いや、ここを物色するのもいいかもしれない。」

ここにあるのは、持ち主の栄誉の証や盗んだもの等だ。もう死んでいる奴もいる。戴くのもアリかもしれない。現に、ここは様々な魔法具や禁書がそろっている。それも、かなりの貴重品も少なからずある。

そう思った時だ。奥の像が見えた。上に、汚くて古ぼけているが何だか賢くしてくれそうな小さな髪飾りが被らせてあった。

俺は、興味本位でその像に近付いていく。像の正体は、『老魔法戦士の像』と言う物だ。そこは、どうだっていい。そこに被せてあった小さな髪飾りを手に取る。何か価値のありそうな物だが、何か禍々しい気配を持った髪飾りだ。しかも、手に持った者の精神に働きかけようとしてくる作用もある。実際、開心術をこちらに掛けてこようとして来ているし。

「興味本位で手にしたと思ったらこれか、全く以って目障りなブツだ。普通の奴なら、直ぐに操られるだろうな。」

あくまで普通の奴、ならな。だが、この俺は違う。義祖父ちゃんを始めたとしたローガー家の人々に、心や精神に関する魔法をイヤと言うほど叩き込まれたんだ。

この程度の開心術など、この俺の前では無力。これならば、義祖父ちゃんやローガー家の人々の開心術の方がまだマシだ。

よろしい。心や精神に関する魔法の分野における格の違いを見せてやろう。

「幻覚を見せ付けろ！」

「ここは……ホグワーツではないようだ。森、なのか？それに、今の時間帯は夜だ。決して、昼の筈が無い。にもかかわらず、昼なんだ。」

誰かいる。いるのは、気に縛り付けられた農民の男性とかつては美しかったであろう容姿が少し崩れ始めている男だ。男の方は、農民の男性に棒のようなものを向ける。マズい！止めないと！

「やめろ!!」

男を力づくで止めようとしたが、すり抜けてしまった。そうか、これはあくまで記憶。何やっても無理なのか。記憶とはいえ、男は農民を殺そうとしている。知りながらも何も出来ない自分にこれまでにない憤りの感情が生じた。

男は、杖から緑の閃光を放つ。農民は、糸が切れたように事切れた。男は、何やらブツブツと言いつつ始める。すると、何か青白いものが男の中から出てきた。それが、男の持っていた小さな髪飾りの中に入った。いった。

気が付くと、俺は必要の部屋にいた。戻ってきたのか。そして、小さな髪飾りを見つめる。こんな危険な代物、さっさと処分してしまおう。

「邪神の碧炎！炎よ我に従え!!」

悪霊の火を焼き尽くせる紺碧の炎を出す。そして、鎮火を兼ねた形態変化で小さな髪飾りだけを焼き尽くすようにする。小さな髪飾りはブルブルと震え、真つ黒な物が出て消え去る。また、小さな髪飾り本体は少し焼けた跡が残り、真つ二つに割れた。髪飾りにはこう書いている。『計り知れぬ英知こそ、我らが最大の宝なり』と。

「何だこれ？義祖父ちゃんに早速報告・連絡・相談してみよう。ダンブルドアの爺さんに聞くのもいいが、捨て駒にされそうだからやめておこう。」

俺は、目くらまし呪文を使って、必要の部屋を後にした。真つ二つに割れた小さな髪飾りを持って行って。

1991年12月26日。少し徹夜したのか、9時に起床。俺は、手紙と小さな髪飾りを同封して、学校管理のフクロウにロイヤル・レインボー財団本部宛に送らせた。

少し、遅めの朝食を食べに行く。すると、グラントからエリナがおかしいと言ってきた。

「何があつた？お前の話は端折り過ぎて、分からんかつたぞ。」

「いやあ、だからよお。エリナちゃんが、これでパパとママに会えるって言って周りが見えなくなってるんだって。」

「錯乱の呪文にかかつたんじゃないかねえのか？」

「まあ、俺口下手だからよお。エリナちゃんから直接聞いた方が良さんだよな。」

「直接本人に聞くしかないか。……ありがとな、グラント。」

俺は、大広間の暖炉を見つめているエリナを見つける。

「おはよう、エリナ。昨日は眠れたか？」

「うん、まあね。」

「グラントがお前の事を心配してたぞ。昨日何があつた？」

「うん、透明マントを使つてね……」

エリナによると、透明マントで夜の学校を彷徨っていたらしい。何でも、ニコラス・フラメル的事を調べるためだそうだ。その途中で不思議な鏡を見つけたとのこと。見つめると、父様と母様が見えたらしい。

「成る程な。分かつた、今夜一緒に行こうか。エリナは透明マントで。俺は、目くらまし呪文を使つてその鏡のとこまで行く。」

翌日になると、透明マントで夜の学校の場所に向かう。俺とエリナは、図書館の入り口前で合流。早速、その鏡の場所に向かう。一時間弱ほどかけて寒い廊下を彷徨う。そして、ようやく例の鏡の部屋を見つけた。エリナがマントをかなぐり捨てて鏡へ向かった。俺も、呪文を解いてその鏡に直行した。

ふと鏡の上を見てみる。そこには、『すつう をみぞの のろこの たなあ くなはで おか の たなあ はしたわ』と書いてあつた。どういう意味だこれは？

「鏡……か。左右反転、文字反転。……!!?これ、逆から読むのか？」
急いで、書かれた文字を逆から読む。

「私はあなたの顔ではなくあなたの心の望みを映す………ねえ。だから、エリナには父様と母様が見えたのか。」

「ハリー!!見てみて!!」エリナが、急かす様に俺に言う。

「そんな急かさなくても、横取りする奴なんざいないよ。」

「だって、本当にパパとママがいるんだもの!!しかも、手を振ってる！」

「エリナ、俺の話……」

「いつまでもここにいたいなあ。」

「頭冷やせ、このおバカ。水アクアメンデーよ。」

冷水をエリナにかける。少し落ち着いたようだ。

「な、何を……」

「鏡の上、逆から読んでみ。」

『わたしは あなたの かお ではなく あなたの こころの ぞみを うつす?』

「あくまで見せるのは、心の中の望みさ。あつた事がない家族に会いたいという思いが、父様と母様を見せたんだな。」

「へえ〜」

「せっかくだから、俺も見てみますか。」

俺も鏡の前に立つ。見立て通りなら、ヴォルデモートの一味を全員魂すら残さずに完全抹殺をする。その後にポッター家の再興を成就しているものかと思うな。きっとそうだ。そうに決まっている。

「だけど、映していたのはそのどちらでもなかった。思い出した。あの時の、あれだ。」

「ハハッ、何だこれ。忘れて無かったのか。そういや、あの言葉を言っていたからなあ。キットと一緒に立てた夢の宣言。唯の言葉だと思っていたのに。まだ、俺は捨てきれなかったのか。」

俺が見たもの。望みでも夢でも、ましてや野望でもなかった。あの時宣言した、俺の本当の願い。俺の『夢の果て』。

「ハリー。大丈夫?」

「あ、ああ大丈夫だ。」

「ハリーは、何が見えたの？」

「いや、言えねえな。そもそも、望みかどうかも疑わしいし。それに、丁度、俺達を付け回しているストーカーもいるみたいだし。そうでしょう？ 校長。」

入り口付近の机に座っている人物が、姿を現す。

「ええ!? ダンブルドア先生が何で!!?」

「良く見破ったのう。ハリー。でもストーカーは言い過ぎじゃよ。わし、涙目。」

「茶化さないでいただきたいですね。」 さつさと要件を言えと促す。

「いつから気づいたのかな？」

「俺を見くびり過ぎですよ。一度出会った魔法使いの魔力の感知なら、すぐに特定が出来る術を持っていますので。」

「アランから教わったのかの。して君は、何を見たのじゃ？」

「ノーコメントで。」

「それは残念じゃ。」

そう言いつつ開心術を俺にかけようとするが、少しどころか一切入り込めないらしい。俺は、笑顔でそんな程度の物は効かないという意思を伝える。

「見事じゃ、全く以って見事じゃよハリー。この鏡の考察も含めて、グリフィンボールに20点与えよう。確かにハリーの言うとおり、この鏡は望みを映してくれる。ただ、それだけじゃ。知識や真実を示してくれるわけではないのじゃよ。だがのう、過去にはそれを受け入れる事が出来ずに、発狂してしまった者も多い。2人共、この鏡は明日よそに移す。探してはいけないよ。例え再び出会ったとしても、もう大丈夫じゃろう。夢に耽ったり、生きる事を忘れてしまうのは良くない。それをよく覚えておきなさい。さて、ベッドに戻ってはいかがかな？」

そろそろ戻ろうか、とエリナを促す。しかし、エリナがダンブルドアに質問する。

「あのう……先生。一つだけ質問してもいいですか？」

「何でも答えよう、エリナ。」ダンブルドアが微笑んだ。

「先生はこの鏡で一体何が見えるんですか？」

「わしかね？厚手のウールの靴下を一足持っているのが見える。靴下はいくつあってもいいものじゃ。なのに今年のクリスマスには靴下は一足も貰えなかった。わしに来るプレゼントは、本ばかりじゃよ。」

こうして、俺達の冒険は終わった。それぞれの寮に戻った。ジジイ、絶対何か隠してるな。少しだけだが、魔力も乱れていたし。そんな事を言う俺も隠しているから、人の事言えないけどな。実の妹にさえにもだ。それより、これからどう過ごそうかな？宿題終わっちゃったし。そう思いながらベッドで眠りの世界に入ってしまった。

第18話 ドラゴンの卵

クリスマス休暇も終わり、再び学校が始まる。早速、ハツフルパフとの試合があった。エリナには悪いが、ささつと終わらせてしまおう。よりによって、審判スネイプだからな。

試合当日、自分で言うのもなんだが、前代未聞の短さでスニッチを掴み、ゲームセット。開始から5分くらいだった。今年のグリフィンドールの優勝は確定した。

だが、思いもよらぬ知らせがハー子から来た。エリナが試合観戦後に、スネイプがクイレル脅しているのを見たと言ってきた。ロンとハー子は、それを聞いてクイレルが脅されていると信じ込んでいた。しかし、エリナは訳ありじゃないかなと言ってたし、ゼロとグラントは半信半疑と言う感じだった。

「ハーリーはどう思う？」ハー子が、俺に意見を求めてきた。

「確かにスネイプが怪しいという可能性も否定出来ない。だがな、教師を始めた時からあんな感じだったそうさ。それは、先輩方やフィード先生から聞いている。だが、クイレルはな。昔はちゃんと堂々としてたらしい。それが、1年間の休暇で今の感じだそうさ。短い期間で、あそこまで人が変わるか？余程の事が無い限りは、絶対にありえないね。だから、俺は強いて言うなら寧ろクイレルの方が怪しいな。個人的には、スネイプであって欲しいがね。」

「ほお、スネイプをいつも憎悪を込めた目で見てるかと思ったら、ちゃんと論理的且つ理性的な意見も持つてるんだな。」

「聞こえてるぞ、ゼロ。」

「ごめんごめん。」

「で、だ。俺はフクロウにホグワーツの探索をいつもさせているんだが、4階に行く度に本体がターバンの、負け犬根性丸出し男がいつもいると言ってるな。だから、クイレルの方が怪しいって思ってるわけ。」

「おつたまげー。ホグワーツの都市伝説の一つ、徘徊するフクロウの真相がこんな所で解けるなんて。」

ロンが面食らったように言った。

「ハリー。ニコラス・フラメルって知ってる？」と、エリナが聞いてきた。

「ああ、665歳の錬金術師のジジイか。そいつがどうしたんだ？死ぬのか？だったら、西に関する物と桜と酒でも用意するか。」

「そういう事じゃなくて!!」エリナが怒る。

「何故そいつの名が出てくるんだ？」

「そ、それはね……」

エリナが告白する。どうやら、禁じられた廊下の犬と仲良くなったらしい。そのことをハグリッドとお茶をしたときに言ったそうだと。ところが、どうやってフラツフィーと仲良くなったと聞いてきた。どうやら、ギリシヤ人から貰ったという、守るために。何を？と聞くが、首を突っ込むと言われた。そのはずみで、ニコラス・フラメルの名前を聞いたのだという。

「そんな事が。」

「調べようにも、どこを探せば良いのやら分からなくて。ハーミーにも手伝って貰ったんだけど、中々見つからなくて。」

「それで、俺に聞いてきたのか。」

「どうやって知ったの？」

「ナイロックがクイレルから盗み聞きしてな。その後、思わぬところで名前を見つけたわけだ。」

蛙チヨコレートのおまけカードと、大きな古い本を渡す。

「え、ダンブルドア先生の!？」

「裏面の説明文に書いてある。」

5人は、裏面を読んでいく。そして、見つけたようだ。「凄い！でも、何で教えてくれなかったのさ？」

ロンが質問する。

「お前ら、俺に聞いて来なかったじゃん。」

冷静な口調で質問を返す。

「……あ。」

「もう1つ手渡した本にも書いてあるぞ。」

今度は本の方に意識を集中させた。

「あったわ。これよ！『ニコラス・フラメルは、我々の知る限り、賢者の石の創造に成功した唯一の者』。」

「じゃあ、賢者の石を護ってるってことなのかい、ハーミーちゃん？」
「そうよ、グラント。」

こうして、何で4階に行っちゃいけないのかの理由が分かった5人。だが、石ばかりに意識を集中させるわけにもいかなかった。期末テストが迫っているのだ。ハー子は、10週間前から、周りに準備しろと言ってきた。皆うんざりした顔をしている。イースター休暇に宿題がどっさり出されたが、俺は必要の部屋で宿題をこなす事にした。

セラレーン・デイバリット
「細胞分身。」

自らの細胞から、6体の自分を生み出す。それぞれが、オリジナルである俺と同じ能力を持っている。何で6体かって？履修科目が7科目で、残る6科目を分身にやらせることにしたのだ。しかも、『終われ』を使えば自然と消える。それと同時に、分身の経験したことも俺に還元する能力がある。これで、宿題を終わらせる時間を短縮させることが出来るってわけだ。

少しオーバーヒートしかけながらも、無事に全ての科目を1日で終わらせた。疲れも入ってくるんだよな、これ。もう休むか。

翌日、悠悠自適に過ごしていると、エリナから宿題で分からない所を手伝ってと頼まれた。

「何の教科が分からないんだ？」

「ボクね、変身術と妖精の魔法、薬草学、闇の魔術に対する防衛術、天文学はもう大丈夫なんだ。魔法史と魔法薬学が分からなくて。」

おバカや出来損ない扱いされているエリナだが、実を言うところ最近の成績が伸び始めている。というか、得意な事と興味のある事に対する集中力に関しては、ホグワーツの中ではかなり上位だ。いや、異常とも言える。それが相まって成績が良くなってきたのだろう。

「分かった。じゃあ、やっていこうか。」

「ありがとう！」

残りのイースター休暇は、主にエリナの勉強に費やすことになるだろう。この2つだけは、本当に壊滅的だからだ。

そんな日々が続いたある日、図書館で勉強を見ていた。既に宿題を終わらせているのが俺に、ハー子、ゼロだ。それぞれ、エリナ、ロン、グラントを見ている。その時、ハグリッドが来た。エリナは、「賢者の石」について聞こうとした。だが、ハグリッドは後で小屋に来说いと言っただけだった。

外に出る。さっきまでは風も無かった。でも、強風が吹き始めた。風に関するものが、ゼロの能力なのだろうか？

6人で小屋に入る。前来たときは、冬が来る前だったとはいえ、寒かった。でも、今回は逆に蒸し暑い。暖炉では火がぼうぼう燃え、その真ん中には大きな黒い卵があった。何だ、あれは？

俺以外の5人は入って早々、ハグリッドに石の護りについて尋ねた。ハグリッドは何人かの先生の名前を挙げた。主に寮監の先生だったわけだ。それぞれに罫をしかけた事、犬のあやし方は自分とダンプルドアしか知らない事を語った。

「それで、ハグリッドさん。犬のあやし方ってどうするんですか？」
「意味あるのか？エリナにすっかり懐いているみたいだし。」

俺は、グラントにもう質問いらなくないかの意味で聞いた。グラントって、目上の人間や見るからに強そうな奴には、敬語を使うのか。やけにハグリッドに対して低姿勢だし。

「何かあったときに備えてだよ。」

「うんにゃ。音楽を聞かせればいいんだ。……………っていつけね！これ、言っちゃいけないんだった。すまんが、秘密にしてくれよ。」

おい、口軽過ぎだろ。それに、何かドラゴンに関する本を持ってたな。まさか、あの卵って。

「そんなことよりもハグリッド。あの卵、どこで手に入れた？俺の予想だとそれ、ドラゴンの卵だと思うぞ。それも、途轍もなく凶暴なノルウェー・リツジバック種のものだ。あれがばれたら、即座にアズガバン行きだぞ。」

俺が言おうとしたことを、ゼロが先に言った。しかも、卵だけで種

類を特定しやがった。

「賭けに勝ったんだ。昨日の晩、ホグズミード村のホッグズ・ヘッドつてどこに行つて、ちよつと酒を飲んで、知らない奴とポーカーをしてな。はつきり言えば、そいつは厄介払いできて嬉しそうだったがな。」
おいおいおいおい、見るからに怪しいじゃねえかよそいつ。

「どんな奴だったんだ？」

俺が問い詰める。

「分からん。マントを着とつたからな。」

「ホグワーツの事に関して、何かゲロつただろ？」

ゼロが、続け様に質問する。

「うーん、話したかも知れんし……うんにや話してないかも知れん……分からん、思い出せん。」

俺は、ゼロと視線を合わせる。もしかして、ゲロつたかもしれないと。最悪の状況も想定しないとダメだなと送った。ゼロも俺の言いたいことを察したようで、コクリと頷いた。ちなみに、残りの4人は質問の意図ややり取りに関してチンプンカンプンだった。

「仕方ない。悪いがハグリッド。その時のやり取りを見せてもらどうぞ。開心！レジリメンズ!!」

ハグリッドの心を見る。警戒心が全くないので、すんなりと入れた。

第19話 情報漏洩にご注意せよ

汚いパブで酒を飲んでいいるハグリッドがいた。マントを着た男は、ハグリッドに接触した。

「さて、お酒をどうぞ。全部私のおごりです。」

マントの男が気前よくハグリッドに酒を勧めていた。

「おお、すまんな。」

ハグリッドは、この時既にベロンベロンに酔っていた。

「あなたは、何をされているのですか?」

「おう、俺は森番をやっちよる。」

「森番ですか。では、色々な動物を飼っていそうですが、どんな種類を飼っていらつしやるのですか?」

「本当に色々だ。数え切れんくれえにな!」

「これからどんな動物を飼っていきたいのですか。差し支えなければお答えください。」

「俺は、ほんとはずーっとドラゴンが欲しかった。出来るなら、そいつを飼ってみたい。」

マントの男が、朗らかな笑みから邪悪に満ち溢れたものに変わったのを、俺は見逃さなかった。顔は見えてないが、雰囲気分かる。

「実はですね。とあるルートで、ドラゴンの卵を手に入れましたね。あなたに譲ってもいいかなと思っっています。正直、こんなもの私には無用の長物ですのぞ。」

「ほ、ほんとか!?!くれるのか!!!」

「ええ。ただ、私とのトランプで勝ったらの話ですがね。」

男は、トランプを手際よくシャッフルした。慣れた手つきでやっているな。そして、ダイヤの3をハグリッドに見せた。

「どうすればくれるんだ?」

「まあそう慌てずに。ポーカーで、賭けをしましょう。ジョーカー入りの、3回勝負でどうですか?」

「その話、乗った。」

男が再びシャッフルをする。超感覚呪文で視力を強化して流れを

見てみる。この男、カードの並び順を自分の思い通りに操る技「ストック・シヤフル」を使っている。自分が勝つつもりなのか。

いや、違う。わざとハグリッドを勝たせる気だ。それで、気を緩ませるのか。かなりのやり手だな。そう思ってる内に互いの手札が5枚になった。

「配りましたよ。好きに変えてください。私は2枚。」

「お、俺はこのままでいい。」

「では見せ合いますようか。」

見せ合いをする。男はバラバラのブタ、ハグリッドは9とKが2枚ずつのツーペアだ。ここでは、ハグリッドが勝った。

「お見事です。では2回戦。」

今度の結果は、男の手札は10が3枚、Qが2枚のフルハウス。対してハグリッドは、クラブのフラッシュ。男の勝ちだ。

「おやおや、私の勝ちのようですね。このままでは負けるかもしれませんよ。仮に勝ったとしても、ちゃんと飼えなきゃダメですがね。どこにでもくれてやるわけにはいきません。」

「でえじようぶだ。フラッフィーに比べたら、ドラゴンなど楽なものだ。」

「ほう？それはどういう？」

「フラッフィーなんか、なだめ方さえ知ってりゃ、お茶の子さいさいよ。」

「どんな方法を？」

「なーに、簡単な事さ。ちよいと音楽を聞かせてやれば、すぐにおねんねしちゃうがな。」

男が狂気に満ちた笑みに一瞬変わったのが分かった。俺は思った。ハグリッドのクソ野郎。すっかりとネタバレしてんじゃねえか、と。

お互いにカード交換が済んだようだ。互いに手札を差し出す。「嘘だろ!?ここにきて、ロイヤルストレートフラッシュだと!」

思わず声をあげてしまった俺。しかも、スペードだ。最強じゃねえか。

「フフフフ。どうやら私の勝ちのようですね。」

「俺は、これだ。」

俺は目を疑った。そして忘れていた。このゲーム中、ジョーカーを手札の中に入っていたことを。ハグリッドの手札は、9のカード4枚に加えて、ジョーカーが入っている。つまり、ファイブカード。ポーカーの役では、ジョーカーが存在するときに限って成立するロイヤルストレートフラッシュの上を行く役だ。

「バカな!?ここに来て、ファイブカード!?ありえない!!」

「よっしゃ。俺の勝ちだ!卵をくれ。」

「ですが、勝負は勝負。いいでしょう。この卵は、あなたに差し上げます。あなたは、相当運に恵まれているようだ。マスター、ここに代金を置いていきます。余分にあるのは、彼の分です。残りは、チップとしてあなたに渡します。では、私はこれで。」

マントの男は出て行った。それと同時に、意識を現実の世界に戻す。

「やっぱり漏らしてやがったか!」

「お、俺は漏らしてねえ!」

「嘘つくな!何が、『ちよいと音楽を聞かせてやれば、すぐにおねんねしちまうがな』だ!」

俺がハグリッドにそう言うが、驚きはした。だが、別に気にもしてない。どれだけ鈍感なんだこの半巨人は。それに、ハー子は事の重大さに気づいたようだ。

「ハーリー、いまいち状況が読み込めないんだが。」

グラント、ロン、エリナの3バカはまだ気づいてない。

「よく考えなさいよ!元々ドラゴンが死ぬ程欲しくて堪らなかったハグリッドの所に、そんなに都合良くアズカバン収監レベルの法律違反モノのドラゴンの卵を持った人間がホイホイ現れる訳ないでしょう!」

ハー子が、バカ4人衆に怒鳴るように言った。

「ハー子、そこはフォイフォイと言って欲しかったんだが。」

俺がツッコむ。

「黙りなさい!」

「フオイ……」

そのとき、状況を呑み込めていない皆顔が赤くなったり、青くなったり、黄色くなったり、白くなったりした。あ、赤青黄白だ。

「『『そういう事か！』』」

グラント、ロン、エリナ、ハグリッドの4人は、ようやく事の重大さに気づいた。

「恐らくそいつ、賢者の石目当てでハグリッドに接触しただろうな。」とゼロ。

「スネイプだ！いつも僕達に対して、ボロクソ雑巾を見るような目で見ていびってくる！アイツに違いない。」

ロンが、叫ぶように言う。気持ちは分からくもないが、私情が入っているぞ。

「せ、先生方の筈がねえ！あれを護ってるのは先生……」

「先生だろうが、誰だろうが関係ない。それよりもハグリッド。テメエ、ダンブルドアからの仕事を全うしたいのなら、もう少し自覚して仕事しやがれ!!」

俺が、気迫を込めて言い放つ。ハグリッドは、しゅんとなった。

「ナイロック！」

飼っているフクロウの名を呼ぶ。

『どうしたんよ旦那。』

『ダンブルドアとマクゴナガルにそれぞれこの手紙を渡して来い。緊急事態だと伝えるんだ。』

俺は、手紙を2通ナイロックに手渡す。

『急いでくれよ。』

『分かったんよ。』

ナイロックは飛び去った。

「ハリー。お前、フクロウと会話出来んのか？」とゼロが聞いてきた。「あのナイロックだけとしか会話できない。だが、奴の通訳を通じて動物の言いたい事は分かってくる。」

「すげえ。」と、グラントが感心したように言う。

その後、俺達7人は校長室前に集まった。マクゴナガル先生はもう

やってきていた。全員来たのを見計らって、糖蜜パイと叫んだ。校長が菓子好きだったのによく気付いた俺。ガーゴイル像が動き出し、螺旋階段が現れる。ここは、最初の頃と同じだな。奥には、ダンブルドアが待ち構えていた。

それから、俺達は一連の出来事を伝えた。ハグリッドは、何も言えないようだ。

「先生、本当にすみませんでした。」

「全くです、ハグリッド。ミスター・ポッターの言うとおり、もう少し自覚と言うものを持ちなさい！あなたは50年前にもアクロマンチュラを……いえ、この話は置いておきましょう。」

ホツホツホとダンブルドアが突然笑う。

「校長。アルツハイマーを発症したのですか？」とゼロ。

「お前、サラツと失礼な事言わなかったか？」俺が聞く。

「気のせいだ。」

「話は分かった、ハグリッド。犬の対処法に関しては仕方がない。それより問題はその卵をどうするかじゃが。」

「私でよければ、ドラゴンの卵を今すぐ叩き割る事も出来ますが。」

「ちよ、ストップストップ！ハリー、これから生まれるドラゴンちゃんに罪はないよ！このまま殺すなんて、あんまりだよ！」

エリナが、反論する。

「それじゃ、一生お前がこのドラゴンの面倒でも見るのか？」

「うぐつ。そ、それは……」

そういえば、とグラントが呟く。

「ロンの2番目の兄貴って、ドラゴンキーパーだったよな。その人に頼めば良くね？」

みんながそれだ、という表情を見せる。

「俺としたことが、早とちりし過ぎた。」

「全くよ。」とハー子。

「チャーリー・ウィーズリーの事ですね。確かに、彼ならば快くそのドラゴンを引き取ってくれるでしょう。アルバス、それでどうでしょうか？」

「ふむ、それでいこう。わしが、チャーリーに手紙を書く。それで良いな、ハグリッド。」

「はい。よろしくお願いしますだ、先生。」

そんなんで話をついた。この後、対処の正確さを評価されてそれぞれに10点ずつ加算された。その後、卵が孵り、しばらくはハグリッドが育成していた。途中、マルフォイに見つかった事もあったが、俺とグラントで対処した。グラントがボコボコに痛めつけた後に、俺がドラゴンに関する記憶だけを忘却呪文で消去。それに加えて、幻覚を見せる呪文で裸一貫となった沢山のスネイプに襲われる所を見せた。マルフォイはしばらくの間、スネイプに近寄る事が出来なくなったらしい。

そんなこんなで、土曜日の真夜中になる。俺達6人は、誰にも見つかる事無くチャーリーにノーバートを託す事が出来た。そして、それぞれの寮に戻っていった。

第20話 石を守る罫

試験の日。7科目ある。実技と筆記が存在する。だが、そんなに大きな失敗はしなかった。ゼロから過去問を調達したのもあるけど、歯ごたえがなさ過ぎた。答え合わせをして、進級は出来るなど感じた。最終日、試験が終わって自由時間を満喫しようとする。が、ハー子とロンが血相を変えて俺の下に来た。

「何だ。また勉強しろと生意気な口を叩く気か？」

「違うんだよ！マクゴナガルから、今日ダンブルドアが魔法省に呼ばれて、いないんだって。」

「そうよ！スネイプは、これがチャンスと言わんばかりに石を狙うつもりよ!!」

「で、どうする？それなら行くか？4階に。それに、個人的な意見としてはスネイプを推したい所だが、状況からしてクイレルの方が怪しいだろ。」

「あの人か!?!ありえないわ。」

「もう行こうよハリー。石を守りに。ゼロにグラント、エリナもそうするって言ってるし。」

「行くなら、夜に行くぞ。今はリスクが高過ぎる。」

「いいわ。皆にそう伝えておく。」

そして、夜の11時。俺は、普段着の上にブローチ付きのマントを羽織る。もう準備が終わって、俺を待っていたロンとハー子を連れて談話室を出ようとする。しかし、それを阻む者がいた。

「君達。どこ行く気なの?」

そこにいたのはロングボトムだった。

「どうしてお前がここにいる?」俺は、ロングボトムに聞いた。

「外に出るつもりなんだろ。せつかくグリフィンドールが500点越えで、ぶつちぎりのトップなのに、見つかったりしたら大変な事になるよ。」

「お前は、事情を知らないからそんな事が言えるんだよ。お前、この俺に魔法においてもリアルファイトにおいても、勝てるでも思ってる

のか？」

俺は、実力差を理由に退く様に促すが、どうも譲らないらしい。「負けるかもしれない。でも関係ない！行かせるもんか。僕、君達と全力で戦う！」

俺はロングボトム、いいや、ネビルに初めて敬意の感情を覚えた。どうやら、過小評価してたらしい。やると決めたら、簡単に曲げない。表向きは違うかもしれないが、こいつは俺と同じタイプの人間だ。開心術なんて使わなくとも、自然と分かった。

「そういう事ならば、この俺もお前に対して全力で応えよう。幻覚を見せ付けろ！」

ネビルは、その場に倒れた。

「何したの？」ハア子聞いてきた。

「幻覚を見せている。俺と永遠にリアルファイトで戦っているという幻覚をな。30分で自然に解除するようにした。じゃ、行くか。」

俺は、自分を含めて全員に目くらまし呪文を唱える。何にも出くわすことはなく、4階に辿り着いた。ここには、既にエリナたちがいた。「あ、ハリー！来たんだ。ちよつと遅かったけど、どうしたの？」

「ちよつと足止めを食らってな。」

「おおい。それは良いからさっさと行こうぜ。」グラントが全員に言う。

「そんじゃ、行きますか。」と、ゼロ

「」「了解！」「」

早速入っていく。3頭犬がお出迎えした。

「はくい、ワンちゃん。」エリナが挨拶する。

「クーン。」

犬は大人しくなった。仲良くなったのは、本当だったのか。我が妹ながら恐ろしい。

「行こうよ。」

犬が下のドアを通してくれたので、早速飛び込む。何やら柔らかい物の上に着陸した。

「この植物のおかげで助かった。ラッキーだったよ。」

ロンが、自分以外の5人にそう言った。

「まさか、この巻き付く植物の蔓って。……………や、ヤメ……………そこは。」

エリナが何かに気づいたようだが、何か触手攻めに遭ってるぞ。

「ふう。続けて。」

グラントが、賢者になってエリナを見ている。こいつは……………後で殴ってやろうかね。

「おい。どうでも良いが、何かこう、キツくなってきたぞ。」

ゼロが苦しそうにみんなに伝えた。

「私、知ってる……………これ、悪魔の罠だわ。」

「何て名前なのか知ってるだけ、まだマシだろうな。」

「黙っててロン！今、やっつけ方を思い出してるんだから!!」

「誰か炎を出せる呪文を使える奴はいるか？」ゼロが、叫ぶ。

「炎か。ならば、この俺の出番だな。皆、任せてくれよ。行くぞ！
フェアマル・フレイディオ^ブ邪神の碧炎！炎よ我に従え！」

最初の呪文で碧炎の威力と射程距離、規模の大きさを確保する。その次の呪文で、炎を自在に操るのを可能にする。5人を紺碧の炎の餌食にしない為にだ。そしてすぐに、悪魔の罠は完全に焼き尽くされた。

「す、すげえ。」と、ロン。

「ハリー。それって。」ハリーは何が何でも問い詰めたらしい。

「企業秘密だ。それよりも行くぞ。」

次は、羽根付きのカギの試練だ。これに関しては、俺とエリナの2人の連携で難無く捻じ伏せた。

その次は、巨大なチェスがあった。ハッとロンが気付く。そして、皆に考えている事を話そうとした。

「ねえ皆。……………」

聞いていたのは俺とハリー子だけ。他3人は、何かを協力して持ち運んでいた。

「ほ、本当に使う事になるなんて。ボク、やってみたいとは思ったけど良いのかなって思うんだ。」

エリナが複雑そうな顔で言う。

「もうここにいる時点で十分な規則破りだろ。」と、ゼロ。

「昼間くすねておいたクイディツチ道具のスペア一式をここで使うなんてな。」

グラントは、使いたくて堪らないらしい。

「お、お前らそれってクイディツチの……」

「うん！グラントに棍棒でブラッジャーを打って貰って、ゼロがアクシオって呪文で戻してまた打つてを繰り返していくんだ！」

エリナが、キラキラした瞳をして、俺の方を見ながら嬉しそうに言ったのだった。もう罪悪感よりも、やってみたいという好奇心の方が勝ってるんだな、と俺は思った。

「お前らも負けず劣らずのクレイジーな考えを持つてるな。」

「行くぜー！」

グラントは、手に持ったブラッジャーを空高くまで上げた。

「どりゃー!!」

テニスのツイストサーブの如く打った。一撃でナイトが粉碎される。

「ゼロー！」グラントが叫ぶ。

「来い、ブラッジャー。」

ブラッジャーが戻ってきた。

「こなくそー！」

またぶつ叩く。今度はビショップが破壊された。

「ゼロー！」

「来い、ブラッジャー。」

これが15分間も続いた。1回で破壊出来なかった駒は、何度もブラッジャーで当てて確実に破壊していく。俺は、持参したチョコ味のカロリーメイトを食っていた。

「終わったぜー！どんなもんだい!!」

全て破壊し終えた。等身大チェス盤上には、もはや石像の破片しか残されていなかった。手段はメチャクチャだ。だが、何はともあれ、これで先に進めるな。俺は、呆然と見ているしかないロンを見る。

「……マー髭。」

「大丈夫か？ロン。行こうぜ。な？」

「う、うん。モチのロンさー！」

次の部屋は、トロールがいた。だが、全身がバラバラにされて死んでいた。何故か、槍も数え切れない位落ちていた。

「ラッキー♪……って言いたいけど、グロ過ぎるよ。」とエリナ。

「全くだぜ。」俺が、エリナに言葉を返す。

次は、論理パズルだった。だが、ハー子のおかげで正解の薬を見つけた。そして、薬の自身の再生のインターバルを待って、6人全員で最後の間に辿り着いた。

しかし、誰もいなかった。だが、部屋の真ん中に見覚えのある物があつた。

「ハリー！あれって、ボク達が見つけたみぞの鏡じゃない？」

「確かに。」

エリナが鏡の前に立つ。すると、鏡の中のエリナが笑いかけた。その後、ポケットの中に石をつっこんだ。エリナは、石を手に入れた。「そ、それって。」ロンが驚く。

「やったわエリナ。石を手に入れたのね！」

エリナ、ロン、ハー子、ゼロ、グラントが手を取り合つて喜んでいゑる。ゼロは、普段見せないであろう喜びの感情を、表に出している。

『何か釈然としないな。超感覚呪文を掛けておくか。』

五感を常人の数千倍までに研ぎ澄ます。カッーン、カッーンと、足音が聞こえてくる。その音は、どんどん大きくなっていく。近づいてる来る……か。そして、誰かがこの部屋に来た。

第21話 2つの顔を持つ男

姿を表したのは、クイレルだった。

「まさか、私より先に辿り着くとは、予想外であり、想定外だ。いや、そんな事はどうでも良い。お前達、賢者の石を渡すのだ。我が君の為に。」

やはりナイロツクの情報通り、クイレルの方がヴォルデモートの下僕だったか。

主にロンとハー子だけが、皆スネイプがそれだと思っていたらしい。まあ、予想が外れた2人が特に驚いていた。元配下と言う意味ではスネイプも強ち間違っちゃいないわけだがな。

「スネイプ先生がイイ人で良かったぜ！ワルモンだったら、イヤだからな。」

グラントは、なんだかんだいってスネイプが結構好きなようだった。

「さあ、早くしろ。」

クイレルは、ヴォルデモートの魂を宿しているのか、有り得ない程の凄まじいプレッシャーと殺意を放つ。俺も、少し足が震えた。

「ど、どうしよう……」 ロンが、ガタガタと震えている。

「イヤだ！パパとママを殺した奴なんか賢者の石は渡さない!!!」

怖がりながらも、勇気を振り絞って反抗の意思を見せるエリナ。

「エリナ・ポッターか。フフフ。俺様の、この有り様を見るが良い。」

ターバンを外し、ハゲを見せたクイレル。後ろを振り向くと、もう一つのおぞましい顔があった。一体何をすればこんなに醜悪な顔になるんだと俺は思った。

「ただの影と霞に過ぎない。誰かの体に入ること初めて形になれる。ここに来てから、ユニコーンの血で命を繋いできた。」

「ユニコーンの血だと!?ハグリッドの言ってたユニコーンの虐殺はお前の仕業だったのか!」

「ハリー。どういう事なんだよ?」

ある程度恐怖心を払い去ったゼロが、質問してきた。

「ユニコーンの血には、死の淵にいる者でも生き永らえさせてくれる効果をもっているんだ。それ相応の代償は必要になるけどな。」

クイレル（とヴォルデモート）以外が驚くが、俺は話を続ける。

「これ以上失う物がなく、しかも殺して自分の命の利益になるゲス野郎だけが、そんな罪を犯すわけだ。自らの命を永らえる為に純粹で無防備な生き物を殺害するのさ。だから、得られる命は完全な物じゃない。その血が唇にふれた瞬間から、飲んだ奴は呪われた命を生きることになる。生きながらの死の命だ、そんなものは。」

「ご名答だ、エリナ・ポッターの双子の兄、ハリー・ポッター。」

「お前みたいなくたばり損ないのクズに褒められても何も出る訳が無いだろう!!」

『なんて奴だ。あのヴォルデモート卿に暴言を吐くなんて。』

クイレルは、俺の暴言に対して思わずたじろいた。

「減らず口はジェームズ・ポッターそっくりだ。奴は3度も俺と遭遇する度に俺様を侮辱した。だが、それ以上に奴の兄を見ている様な感覚だ。まあ良い。ここで殺してやりたいところだが、俺様の下につけば全員の命だけは助けてやろう。全員俺様に忠誠を誓うのだ。手始めに、お辞儀をするのだ。」

「あくまで命だけだろうが！安全や尊厳までは保障しないようだしな!!」

「今なら、お辞儀1回だけで許してやろう。俺様は慈悲深い。」

「お前ら逃げろ！こいつは慈悲深いどころか、逆らう奴は皆殺しにする、そういう奴だ。」

俺は、5人に逃げる様に促す。しかし、クイレルの方が早かった。

「誰も逃がさんぞ！麻痺せよ！」
ストゥーピファイ

クイレルが失神呪文を放つ。ハリー子を狙っていた。

「ハーマイオニー危ない！うわあ！」

ハリー子を押しつけて、ロンが身代わりとなって閃光を食らってしまった。ロンは、その場に倒れてしまった。

「ロンー！」

ハリー子が泣き叫ぶように呼び掛ける。しかし、返事がない。

「グレンジャー。お前にはこれだ！服従せよ！」インペリオ

何の躊躇いもなくハー子はクイレルに洗脳されてしまった。

「ハーミーちゃん！」グラントが叫ぶが、ハー子には全く通じない。

「グレンジャー、やれ！」

「息絶えよ。」アバダ・ケダブラ

ハー子の杖から緑の閃光が発射された。残っていた俺を含めた4人は、すぐさま回避する。

「あんなの。俺の恵まれた体で受け止められたのに。よける必要あるのか？」

「大アリだ。あれは許されざる呪文の一つで、最強最悪と言われる死の呪文。アバダ・ケダブラだ。」

ゼロが、何も知らないグラントに解説する。グラントは、青ざめた。

「よし。3人とも聞いてくれ。これじゃ埒が明かない。下手をすれば全滅だ。ゼロとグラントは、ハー子を元に戻してくれ。俺とエリナで、クイレルをやる。」

「了解だ。」

「ハーミーちゃんは任せろ！」

「行こう、ハリー！」

「ああ。」

二手に分かれた。ゼロとグラントはハー子を食い止め、俺とエリナはクイレル（とヴォルデモート）を相手することになった。

「このおー！」

俺はクイレルに近付き、腹部に蹴りを入れる。少しのけぞるクイレル。

「さらにもう1発！」

腹パンをする。次は、マントによる体術を繰り出し、魔法を出す隙を与えさせない。しかし、クイレルはすぐに体勢を立て直した。

「甘いな。錯乱せよ。」コンフアンダ

錯乱の呪文が直撃した。フラフラになる。しまった。一瞬の隙を突かれた。

「お前の相手は後だ。武器よ去れ！」エクスペリアームス

俺は、武装解除呪文で吹っ飛ばされた。石にぶつかり、気を失ってしまった。

*

「念には念を入れよう。息絶えよ！」
アバダ・ケダブラ

クイレルは、気を失ったハリーにあらうことか死の呪文を使い、完全に止めを刺した。

「そんなー！青ざめた表情になるエリナ。

「クイリナス。次は小娘だ！やれ!!石を奪ってから、小僧と同じ末路を負わせるのだ！」

「御意！」

ヴォルデモートが叫び、クイレルがエリナの手を掴んだ。だが、すぐに手は離された。エリナは尻餅をついてしまう。

「ご主人様!!小娘を……小娘を捕まえられません。手が!!私の手がああ!!」

クイレルの手は焼け爛れていた。エリナには、直接触れないらしい。エリナは、とつさに手を伸ばし、クイレルの顔を掴んだ。

「ああああああアアア!!」

今度は顔も焼けただれてた。

「何をやっている!?!殺せ!殺してしまえ!!」

*

「んっ。……………ハッ!ここは、どこだ。」

ここはどこだ。何やら真っ白な広い空間にいた。さっきまで、禁じられた廊下の最深部にいたのに。妙に眩しい。

「気づいたかい？」

何かが俺に囁いてきた。すると、目の前には俺と同じ姿をした奴がそこにいた。違うのは、髪がクシヤクシヤしてるのと、瞳が全てを見通す赤い物になってる事くらいだ。

「誰だ!?!それに、ここはどこだ!?!」

敵かも知れない。俺は、強めの口調でそいつに聞いた。だした。

「まあまあ。そうカッコカしないぞ。僕か。そうだな。君が8歳の時の出来事に密接に関係するんだけどね。この場所は、いわば君自身の精

神世界だ。」

「俺の精神!？」

「そう。今、少し気を失っているんだよね。」

「場所は分かった。でも、俺が8歳の時の出来事に密接に関係するってどういう事なんだ?」

「君は、8歳になってしばらくしてから、原因不明の高熱になったのは知っているよね。」

「でも、それはただの夏風邪だって義祖父ちゃんから聞いた。」

「君にはそう伝えているんだよ。でも、魔法界の成人になったら、君のお義祖父さんは本当の事を話すつもりだったんだよ。あの時、君に何が起きたのかをね。」

「え?」

「君のかかった病気は唯の夏風邪じゃない。ロイヤル・レインボー財団が嚴重に管理していたウイルスによる感染症だ。君達のような人間だけに感染し、死に至らしめるね。」

「ウイルス? 死なせる?」俺は、こいつが何を言ってるのかが分からなかった。

「ロイヤル・レインボー財団は、W―ウイルスと呼んでたけどね。」

「W―ウイルス?」初めて出た単語に戸惑いを隠せない。

「正式名称 Wizard-virus だ。その名の通り、魔法使いだけに感染して、長時間苦しませて殺す。正確には、魔力を持った生物に死を与える。魔力を持った生命体からしてみれば、究極の天敵となるんだよ。」

「ちよつと待てよ。そいつに感染したんだったら、何でおれは生きてるんだ?」

「それなんだけどね。本当に極稀に、ウイルスを克服しちゃう奴が現れるんだ。その1人が、ハリー。君だよ。」

「お、俺が?」

「そう。殺すつもりで僕は魔法使いに感染したのに、君は生き残っちゃった。こうなってしまうと、君に僕は従う事になるわけだ。まあ、僕は君が今までの魔法使いと何かが違うというのが感じて分かつ

たからね。それはそれでいいかなって思ったけど。」

「お前は、俺の姿をコピーしたW―ウイルスって事なのか？」

「うん。」

「W―ウイルス。いや、ダブルって呼んでもいいか。」

「呼び方は何でも構わないさ。僕に、生命の概念は無いからね。」

「俺、今までヴォルデモートって奴を抹殺する為に学校に入るまでの6年間、訓練してたんだ。その時は復讐しか考えられなかった。でも、唯一生き残っていた妹の存在を知って、そして彼女と実際再会して、こうやって友達も作れて復讐よりも手に入れた物を守っていきたいと思ったんだ。」

「うん、そうだね。来る前に、友達を作ったね。だから蛇じゃなくて、獅子を選び取ったんだからね。君の心の中を通して、それは知ったよ。依然、敵対者には結構容赦無いけど。」

「それは言い過ぎだ。」

「ごめんごめん。」

「ダブル。今のままじゃ、クイレルやヴォルデモートに勝てない。俺は一度、父様と母様を失っている。ここに来て、妹まで失うなんて嫌だ。友も失うのも同じ位にな。だから、俺の願いを聞いてほしい。」

「何だい？」

「俺に、力を貸してくれ！もう何も失いたくない！」

俺は、力いっぱい頼んだ。それに、プライドも捨てて俺の姿をしたダブルに頭を下げた。

「僕の力は、本来破壊の力。気を抜けば、君を乗っ取るかもしれないよ。君の闇や絶望の象徴とも言えるからね。そんないつ敵になるかも知れない奴に、頭を下げるとはバカなんじゃないの？」

「お前は、俺の絶望でも、闇でも、敵じゃない。それは、お前は俺の希望で、光で、完全な味方だからだ。どっちが上かじゃない。対等な立場で一緒に戦いたい!!」

意外過ぎるその言葉に、ダブルも驚きの表情を隠せない。いつも自分分は、忌み嫌われていた。その扱いには慣れたが、適合した魔法使いの体を隙を突いて乗っ取ってきた。でも、口は悪いがはじめて自分を

嫌わなかった目の前の人間が、目の前にいる。

面白い。退屈しのぎも兼ねて、この人間の行く末を見てみようじゃないか。ダブルはそう思った。

「この僕が希望で、光で、完全な味方……か。アハハハハ！初めてそんな事を言われたよ！面白い事言うね、君。なら、どこまで僕の力に耐えられるか試してあげよう。思う存分、W―ウイルスの力を使うといい。でも一応、忠告しておくよ。力を使いこなしたつもりで、僕に支配されないようにね。」

口ではそう言いつつも、ダブルのその顔は、まるで演技ではない穏やかなものとなっている。

「すまん。恩に着る。」

「別に礼は要らないよ。君の大切な人のもとに早く行ってあげなよ。」

そして、俺は現実を意識が舞い戻っていく。クイレル、待ってろよ。本当の戦いは、ここからだ。

第22話 解き放たれし力

クイレルが苦しんでいた。ヴォルデモートが、しきりに殺せと言っていた。何で、どうしてヴォルデモートは、味方も敵と同じ様に情け容赦無く振る舞えるんだろう。

額の傷の痛みもあるけど、今はクイレルに対する憐みの感情が勝っていた。

「何の為の魔法だクイリナス！さっさと殺せ！」

「は、はい！我が君！あ、アバダ……」

ハーミーに使わせた魔法を放とうとした。だけど、ボクには来なかった。クイレルが蹴り飛ばされたからだ。

「ぐわあ！だ、誰だ!!」

そこにいたのは、さつき呪文であっさり倒されて、緑色の閃光で死んだ筈のハリーだった。良かった無事で。でも、ちよつと違うのは眼だった。今までならエメラルドグリーンだったけど、今はボクが知ってるよりも明るい赤になっている。ルビーレッドと言った所かな？でも、それは今、どうだって良いんだ。生きてたからね。

「地獄から舞い戻ってきたぜ、クイレル、ヴォルデモート。」

「ハリー！良かった。生きてた。」

「心配をかけたな。」

「何故だ！なぜ力を込めた魔法をお前にかけたのに、こんな短時間で起き上がることが出来るのだ!?!それに、先程クイリナスが死の呪文を使ったのに！護りなどどつくのとうに消え失せているにも関わらず、何故生きているのだ!?!」

今のハリーの状態は、流石のヴォルデモートも想定外だった。

「アツハハハハハハハハハハハハ!!貴様のお得意の開心術で探ってみたらどうだ？貴様なら造作もないだろ？並外れた開心術師様よお。一々人に聞いてんじゃねえよ。そんなタコみたいな顔になって、頭脳も畜生に成り下がったんじゃないのか？まあ、10年間もごく潰しや害虫以下の、くたばり損ないのクズとして生きていたんなら無理も無いけどな。」

ヴォルデモートは激昂しながらも、ハリーと目を合わせる。彼の身に起こった出来事を知る為に、開心術を使って。しかし、すぐに目をそらしてしまった。

『バカな!!俺様の開心術が全く効かないだど!?しかも、小僧の雰囲気も大分変わってきている!!俺様の本能が言っている……小僧の方が脅威だと。一刻も早く石を手に入れなければ!』

「クイリナス。2人共始末してしまえ!」

「そ、そんな!死の呪文も効かない相手をどうやって……」

「俺様に口答えする気か?クイリナス。貴様、いつからそんな身分になった?」

「ヒ、ヒイツ!わ、分かりました!」

ハリーは、ボクを見て優しそうな表情を見せた。

「先走ってゴメンな。」

「ううん。生きていれば何も言わないよ。でも今度は、一緒に。ね?」
「ああ。勿論だ。ここからはな。コンティニューしてでも、奴らを攻略してやる。」

こうして、即席の兄妹タッグが結成された。クイレルがこちらに向かって走り出した。

「エリナ。武装解除呪文は使えるか?」

「見よう見真似だけど、やってみる。」

「よし、陽動をかけてくれ。」

「うん、分かった。」

ハリー視点

俺は、横から走り出した。軽い、体が軽い。動きやすくなってる。ダブルに感謝だな。エリナによれば、俺はクイレルのクソ野郎から死の呪文をモロに受けたらしい。

にも関わらず、俺はピンピンしている。これもウィルスの力なのか?まあ、ロイヤル・レインボー財団で詳しく聞いてみようか。文献はあるだろうし。

それよりもだ。急いで、クイレルの真後ろに向かう。幸い、気づいてないようだ。石を奪おうと、エリナだけをターゲットにしたいよう

だ。相変わらずの変態どもだ。

「武器よ去れ！」エクスベリアームス エリナがぶっつけ本番で武装解除呪文を唱える。

「バカな小娘よ。使った事のない呪文が出るわけが………何だと!?!」

確かにエリナは、見た事はあるが使った事は一度も無い。でも、1回で成功させた。

「クイリナス。」

プロテゴ
「護れ！」

バリアを発生させて武装解除呪文を防ぐ。だが、クイレルは見落としていた。この俺の、ハリー・ポッターの存在に。

「こつちだ。」クイレルの頭部に回し蹴りを叩き込む。蹴り飛ばした方向に吹っ飛んでいった。ついでに、クイレルの歯も何本か抜けた。

「ぎゃああああ！」

「何故だ？何故、魔法も碌に使えない子供に何も手を出せないのだ？ならば、更にやる気を出させるまでよ。苦しめ！」クルーシオ

マズい。と、思ったが俺達には来なかった。ヴォルデモートは、あろうことか宿主のクイレルに呪いをかけていた。クイレルの、この世の物とは言えない苦痛に満ちた声が部屋全体に響き渡る。

「な、何故ですか？主人様？何故私に、磔の呪文を？」

「黙れ。俺様に口答えするんじゃない。さつさと石を手に入れないクイリナス。貴様が悪いのだ。」

部下にも敵と同じ残酷な扱いをするとは義祖父ちゃんから聞いていたが、まさかここまでとは。俺は、ヴォルデモートに嫌悪の感情を募らせた。

「本当にヴォルデモート。お前って救いようがないな。」

「何だと小僧。」

「お前をクイレル諸共潰す事は出来る。だがな、エリナたつての希望でそれはやめだ。」

「ではどうする気だ。」

「エリナ。お前のやりたい事を精一杯やってみな。」

エリナを前に出す。

「どうした小娘。石を渡す気になったのか？」

「ボクは、絶対に渡さない。渡したら、もつと取り返しのつかない事になるー！」

「俺様の側につけ。お前の両親と同じ目に遭う事になるぞ。お前の両親も、最後は命乞いをして死んでいった。犬死にだ。」

ヴォルデモートの邪悪な顔が、ニヤリとした。俺は、無表情に奴を見つめる。

「黙って下さい。パパとママは、そんな事をしない。」

「仮に本当なら、何故父様はお前をボロクソに言い続けたんだ？矛盾しているじゃねえか。」

俺は、さつき自分に向けて言った言葉と今の言葉の矛盾点を突いた。だが、あまり気にしていない様子。

「なんと、胸を打たれるねえ。勇敢な事だ、そうだ、俺様は勇敢な者は常に称える。お前達の両親は確かに勇敢だった。まずは父親を殺した。勇敢に戦ったが、俺様には遠く及ばなかった。……しかしお前達の母親は死ぬ必要はなかった。だが、お前達を守ろうとして死んだ。母親の死を無駄にしたくなかったら、石を俺様に寄越せ。」

「絶対に渡さないー！」

「貴様に1つ聞く。」どうせ分かり切ってる事だが、確認しておこうか。

「何だ。答えてやろう、ハリー・ポッター。」

「お前は、石を手に入れて何をやる気だ。」

「無論、元の体を取り戻す。俺様の力を使って、全てを支配する。」

「マグルの世界も、他の国もか？」絶対に無理だろうがな。

「当たり前だ。何故魔法使いと言う優れた者達が表舞台から姿を現してはいけないのだ？だからこそ、俺様はこの世のマグル共に身を以って教えてやるのだ。愚か者共は、常に魔法族に支配されるべきなのだ。ブタ共の居場所は、この俺様のもとにしかない事を思い知らせてやるまでよ。」

とことん下らない野望だなど吐き捨てる。

「お前には到底無理な話だな。」

「何!？」ヴォルデモートの顔が怒った様になる。

「お前は一度エリナに敗北している。そして、エリナを超える奴はこの世にごまんといえるし、これからも現れ続ける。そんな奴等にお前が勝てる要素なんて、1ミリもありやしない。それに、死ぬのが怖いから不死になった上に、他人には犠牲を強要して自分だけは安全な場所にいる様な覚悟の概念も持ち合わせていない奴が、永遠に世界征服どころか、この国を完全に支配する事なんて出来やしないな。」

奴の冷静さを欠いてやろう。挑発するのが手っ取り早い。

「いい気になりおつて。」

「それに、散々他者を見下して利用し続けて、その命を弄び続けたお前が、何故自分だけがそうはならないと言い切れる？それこそおごまかしいとは思わないか？所詮貴様など、井の中の蛙に過ぎない。世界どころか、この国すら掌握できねえだろうな！いや、仮に出来たとしても3日天下で潰されるのが目に見えているがな。」

俺は、大笑いした。ヴォルデモートのクズ野郎を苛立たせたのは、言うまでもない。エリナは、真面目な表情でこう言い出した。

「パパとママが、命をかけて守ってくれたボク達の命、あなたみたいな人の為には絶対に使わない！」

「ほう……威勢の良い。それに、勇敢でもあるな。エリナ・ポッター。勇敢なだけで何を持っているかな？いや、そもそもハッフルパフに入られた時点で勇氣を持っているのか曖昧なわけだが。」

「確かにボクは、勇氣なんて持ってないかもしれない。ハリーみたいにいぎという時は自分の命を投げ出す覚悟もないし、ロンみたいにチエスも上手くない。ハーミーみたいに頭もよくない。ゼロみたいに特別な呪文を持ってないし嘘もつけない。グラントみたいに体が丈夫じゃない。ボク程、欠点だらけの人間なんてそうそういない。誰かに頼らないと、何も出来ない！」

「……………」俺は、じつくりと聞く。

「でも、でも!!ボクの大事なものが、あなたなんかのせいで壊されるのは、もつとイヤだ!絶対に屈しない。絶対に、死んでも頭なんて下げない!だってボクは、ヴォルデモート。あなたを打ち負かした、エリナ・ポッターだから!!戦う！」

「ここまでバカだと同情したくもなるねえ。俺様に絶対に勝てないのに。何と愚かな。」

「ああ、確かに普通のバカならな。」

「ほう、ハリー・ポッター。賢い俺に付いてくる気になったか。」

「バカはバカでも、ここまでの大バカ野郎ならお前をぶっ潰せる事が出来るって言いたいんだよ!!」

エリナみたいなタイプのバカには、不思議と手を貸したくなるんだ。

「お前達は間違った選択をした。クイリナス、昔のお前みたいではないか。」

「我が君、私は愚かで若かったのです。」

ようやく、磔の呪文の苦痛から解放された。ゼエゼエ言っている。「どういう意味だ。」俺は、ヴォルデモートに質問した。

「クイリナスが1年間の世界旅行をしている時の事だ。アルバニアの森の奥地で、俺様と出会ったのだ。クイリナスは、何も持たない弱者に過ぎなかった。善悪に対してバカげた考えしか持ってなかった。そうだな、クイリナスよ。」

「は、はい我が君。親からは碌に愛されず、友もいません。誰もが私から離れていったのです。それどころか、私が近づく事すら許されなかつた。その一方で、私も自分こそが善であり、正義であると信じてやまなかつた。だから、私を拒絶するものは全て悪として私の方からも拒絶していきました。」

今までの邪悪な顔から、哀愁の入り混じった顔になっているのは俺とエリナには分かつた。

「何と私は愚かな考えだったのでしょうか。我が君。あなたは私にこうおっしゃられました。この世には、善と悪が存在するのではなく……力を持つ者と、力を求めるには弱すぎる愚か者の2種類の人間が存在するだけだと……それ以来です。あなた様の忠実な下僕となり、私が変われたのは。」

「そうだクイリナス。お前は、そこから力を持つ者となった。この俺様のおかげ……」

ヴォルデモートが言おうとした時、何かを感知した。何だ。この黒く、冷たく、禍々しい魔力は。常人なら感知出来ない。しかし、今は魂だけだから分かる。何なのだ、これは。

「下らん。全く以って下らん。」
魔力を発したのは俺だ。但し、ヴォルデモートだけに伝わる様にする。

「11歳の少女をつけ狙う悪質なロリコンストーカー野郎だと思ったが、この年でまだ厨二病をこじらせてるのか。65にもなって恥ずかしいとは思わないのか!? 貴様!」

「な、厨二!? 小僧、それはどういう意味だ!」

ヴォルデモートが、慌てふためいている。

「クイレル先生。そんな力を手に入れて、変わったんですか?」

エリナが、クイレルに質問する。

「ああ。そうとも。だからこうして……」

「それが、この有り様なんです。見てくださいよ、今のあなたの現状を! ボクに触れると肌が焼け爛れて、ハリーには骨と内臓の一部を損傷させられて、挙句の果てにご主人様から拷問を受ける事の一体どこが変われたっていうんですか?」

「そ、それは……」

「何で、すぐに諦めちゃったんですか。何も出来ないボクでさえ、諦めなかったのに。」

「ミス・ポッター?」

「ま、マズい。クイリナス。小娘の言うことは戯言だ。耳を貸すな!」
「シレンシオ黙れ!」

俺は、ヴォルデモートを黙らせる。

「部外者は引っ込んでろ。この変態ヘビ野郎。口からゲロゲロとキモい、ヘビの様にしつこい奴め。」

ヴォルデモートに暴言を吐いて黙らせた。

「もしかしたら、ボクはあなたみたいになってたかもしれない。」
「!?」

「それでも、出来ないなりに努力した。だから、周りの人達もボクを応

援してくれる様になってくれたんです。」

「あ……ああ。」

「でもあなたは変わっていない！それだけは言える！ヴォルデモートは、自分の都合の良い人にしてるだけです！それで役に立たなくなったりしたら、すぐに切り捨てる。それだけは分かる！」

震えながら、泣きそうにながらも、はつきりとクイレルに自分の意思を必死に伝えようとするエリナ。

「ヴォルデモートは、あなたを否定してる！あなたを貶めている！都合の良い道具として利用したいだけ！そんな人との関係なんて絶対間違ってる！自分の夢を持たずに、愛されなくて捨て駒の様に情け容赦なく殺されるなんて。こんなの悲しすぎる。あんまりだよ！」

「……ミス・ポッター……私の為に……どうして……あ、ああ、うわああああああ!!」

エリナの説得とヴォルデモートへの少なからぬ不信感がクイレルの中で生まれたようだ。現に、ヴォルデモートがクイレルの体から引きずり出されようとしている。というより、出て行けと言わんばかりの拒絶反応を起こされてしまった。

「どう言う事だ!?!クイリナスと俺様を結び付ける魔法が、一方的に解除されていくのだ。」

「心を許した相手にしか、取り憑けなくなってるのか?その魔法は。人の心を軽視するお前は、永遠に理解なんて出来やしないって事だな。」

「クイリナス！貴様、俺様を裏切るとどうなるかを……」

ヴォルデモートはそれ以上何も言えなかった。エリナが差し出した手をクイレルが握った。もう、母様の護りはクイレルを傷つける事は無い。ヴォルデモートだけを徹底的に攻撃する。表現する事の出来ない痛みを味あわされて、ヴォルデモートは脅しの言葉を言えるどころではないからだ。

そうして、ヴォルデモートが外に弾き出された。

「貴様ら、許さんぞ。」

怒りの感情を剥き出しに俺達に言った。だが、俺はウィルスの力を

最大限開放する。

「それはごっちのセリフだよ！良くも俺らの人生を歪ませやがって!!
痛みを知りやがれ！邪神の碧炎フアーマル・フレイデイオ！炎よ我に従え！プロメテウス！」

俺の十八番の呪文の1つをヴォルデモートにかけた。もつと使つてしまいたい所だが、もう奴は逃げるだろうし、更なる手札を今この場で見せたくないしな。

「ギャアアアアアアアアアア！あ、熱い！ク、クソオ！おのれえ！おのれええええええええええ!!」

ヴォルデモートは逃走した。

「や、やった。」エリナは、気が抜けたように言う。

「少なくとも俺だけだったら、クイレルも殺してたのにな。エリナ、お前にはいつも驚かされるよ。」

「えへへへへ！」

2人で笑った。それを見ているクイレル。そして、倒れ込んだ。

「ありがとう2人共。そして、本当に済まなかった。君たちのおかげで私は……正気に戻れたよ。」

「クイレル教授。」俺は、初めて自主的にそう呼んだ。

「全ては、私の弱い心のせいなんだ。自らの過ちや欠点を認めるのは物凄く勇氣がいる。これは、かなり難しい事だ。」

「俺は、少しあなたを見直しましたよ。それが出来たってことは、少しは強くなれたじゃないですか？俺はそう思いたい。」

「ガハッ！ゴハッ!!わ、私もそう長くはないようだ。ユニコーンの血の代償に、今の戦闘で負った傷。私はすぐに死ぬ。だが、悔いはない。」
「そんな事言わないでください！まだ何かしらあるかもしれない。それを見つける方法を探しましょう。相打ちになったハーミーとゼロ、グラントも連れて帰らないと。」

俺はある方法を思いついた。それを、エリナに提案してみた。

「エリナ。賢者の石で、再生って出来るかな？」

「え？」

「そもそも、ヴォルデモートがユニコーンの血を飲んでたのは、これの命の水を飲むまでの繋ぎだったんだろう？ならば呪いも消せて、傷も

完治とまでいなくても、医務室に連れて行く分までは持ちこたえると思うんだが。」

「やってみる価値はあるよ。よし、早速やろう。」

俺は、持つて来ていたペットボトルに賢者の石で作った命の水を入れた。それを、クイレルに飲ませた。すると、どうだろう。呪いが消え、焼け爛れた肌も、骨や内臓も完治したではないか。

「どうして……私を？」

「今までヴォルデモートと一緒に悪事をやってきただろう？このまま死なせるより、生きてその罪を償って貰う。本当なら始末したいところだが、エリナに免じてな。」

「ありがとう。ミスター・ポッター。」

「お礼ならあいつに言ってくれ。」

クイレルはそう聞いて、眠りについて。おそらく、憑き物が落ちて気絶したようだ。それに、少し離れたところで疲れがドツと来たのか、こつちが作業してる間にエリナはすっかり眠っていた。

「俺以外全員眠っちゃったな。さてと……」

俺は、元から入ってきた道を見ながら隠れている人物を呼んだ。

「生徒が服従の呪文にかかったうえに、こつちは死にかけた。それでも高みの見物を決め込むわけですか。良い身分をお持ちですね。ダンブルドア校長。」

「ほう。また見つかってしまったのう。やはり、君には隠し切れんようじゃ。」

「褒めたって何も出てきませんよ。」

俺は、ダンブルドアに微笑む。だが、これで全て繋がった。だから、目だけは怒りに満ちたものを見せる。

「ハリー。君の働きは見事だった。寧ろ予想以上じゃよ。それは――」

俺は、ダンブルドアの言葉を手前に出して制する。ダンブルドアは、黙った。

「校長。あなたは賢者の石の手前まで、クイレルを来させかけた。それは成功した。次に、エリナとその友達に勇気を振り絞って、クイレ

ルに挑む。これも問題なし。そして、危なくなった所をあなたの登場で盛り上げる。最後に、ヴォルデモートを圧倒的な力の差を見せつけてやっつけましたとき。めでたしめでたし。」

俺は、力いっぱいパチパチパチと手を叩く。ニッコリと笑顔を見せながら。

「だが、予想外にもクイレルの改心、ヴォルデモートの止めは俺が刺した事までは想定出来なかったようだ。少し狂ったようですね。」

「ふむ。そのようじゃ。わしでは、決して出来ぬよ。だから予想以上だと……………」

「あなたには失望しましたよ。」

演技ではない。本当の気持ちをおぶつける。その部分は、開心術で分かる様にした。

「はて。何の事やら。」

このクソジジイ。この期に及んで、まだシラを切るつもりか。人が死にかけたんだぞ。

「エリナには、ヴォルデモートと戦う権利がある——あなたはそう思っているんじゃないか。確かにその通りだよ。アンタの御膳立てなんて無くてもね！だが、事もあるうにアンタは教師という立場を忘れていたんだ!!自分の策略や考えを優先する余りにな!!生徒と学校を危険に晒した!仮にも教師であるなら、早く危険を対処すべきだったんだ!!それなのに、危険をおびき寄せた!!!」

俺は、一回深呼吸を入れてまた話す。

「何が才能ある若い魔法使いを導くだ!!自分がやるべき使命を他人に擦り付けて、高みの見物をしてるだけじゃないか!ふざけるな!!それで、何人犠牲になったと思ってる!?そして何よりも許せないのは、俺の唯一生き残っている家族^{エリナ}を危険に晒した事だ!!!アンタも今回の事件の共犯だ!ヴォルデモートよりもタチが悪い!!!」

俺は、吐き捨てる様に言った。そして、左手に持っていた賢者の石を握り潰した。賢者の石は、粉々に砕け散った。その破片は、全て地面に捨てた。ダンブルドアは、酷く動揺していた。おそらく、石を破壊された事によるものだろうと、俺は分析した。

「俺は、アンタを決して信じない。言いなりにもならない。永遠にね。俺は俺のやり方で、エリナや仲間、俺を信じてくれる人達を守っていく。誰一人死なせてたまるか。それと同時に、ヴォルデモートとその一味を完全にこの世から消してやる。死んだほうがマシだと思っ位の苦痛を、奴らに刻み込んでやる！邪魔させてたまるか!!!」

一旦深呼吸をして、自らの感情を抑える。感情的になり過ぎた。ここで開心術を使われるだろうね。だから、落ち着かせる。だが今度は、敵意に満ちた表情だけを向ける。

「……それでは、失礼。この俺に罰を与えたきや、幾らでも与えれば良い。俺は逃げないし、隠れもしない。臆病者であるあなたと違って。」
来た道に戻ろうとすると、ダンブルドアが懇願するように俺に言ってきた。背を向けたまま、老いぼれの戯言って奴を聞いてやろうじやないか。

「ハリー。君の妹のエリナの事に関しては、本当に申し訳ないとおっておる。だからこそわしは、その償いとして君の信頼を得るに値する人間になりたいのじゃ。だから頼む。わしに協力しておくれ。この世界の為に。破壊神としてではなく、救世主として。」

「……………」

俺は、無言で立ち去った。どうせ嘘だ。まやかした。俺を捨て駒にする為の。何が賢者だ。何が偉大な魔法使いだ。家族や仲間、自分を信じる者を誰一人救えない奴なんか、そう呼ばれて良い筈が無い。
救世主？破壊神？生憎どちらにもなる気は全く無いね。俺は、俺のやりたい様にやる。欲しい物は手に入れる。守りたい者は何があっても守る。ただそれだけの事。大人のレールには、絶対に乗らない。そう誓ったのだから。

第23話 マクゴナガルとの面談

あの後、少しの仮眠を取って、起床した。エリナたちは、揃って医務室に運ばれたそうだ。そういえば、クイディッチのレイブンクロー戦だったな。この後。いざという時は、ダブルから借り受けた力を使って、さっさとスニッチを取るまでだ。

「よし、皆。言っておきたいことがある。」

「オリバー。手短に。」と、アンジェリーナ。

「必ず、勝つぞ！」

「「「「おー！」「」」」」

俺以外のメンバーが気合を入れる。このノリにはついていけないな。

結果。力を使う事も無く、余裕で終わった。270―50でグリフィンドールチームが勝った。

祝賀会に参加することになった。あのマクゴナガル先生も、久しぶりのグリフィンドール優勝を手に入れて、嬉しそうだった。小躍りまですてる。

「良くやりました、ポッター。やはり、あなたの才能を見込んでチームに入れたのは正解でした。私も鼻が高いですよ。」

「……………」

そこからの意識はなくなった。

目が覚めた。起き上がろうとしても、力が入らない。感覚が戻るまでじっとした。

10分程して、少し力が入れることが出来たので、起き上がる。校医のマダム・ポンフリーが、起きた俺に気付いたようだ。

「ポッター。気分はどうですか。」

「ま、グッスリ眠れたので良好だと思います。」

「そうですか。」

「すみませんマダム・ポンフリー。俺は、いったいどれ位寝てましたか。」

「一日中です。あなたのお友達は、もう退院しました。少し離れた所で、妹さんが寝ています。」

「エリナ、良かった。無事で。」

「特に何かの病気になっっているわけでもないから、歩けるのであれば退院して結構です。皆、あなたの事を心配していましたよ。クイデイツチ優勝直後に、いきなりあなたが倒れたんですからね。ミネルバは特に、取り乱したんですから。クイデイツチに熱を入れるのは結構ですが、過労させないようにと言っておきました。」

マクゴナガル先生の所為ではないけどね。2日間ぶつ通しでハードに動き回ってたら、ああなるからね。

「そうそう。マクゴナガル先生が、起きたら来るようにと私に伝えていました。」

「了解です。すぐに行つて参ります。伝言ありがとうございます。」
辛うじて歩ける様にはなったが、それでもぎこちない物になってしまふ。なので、壁に寄つ掛かりながら歩くしかなかった。だがタイミングが良いのか悪いのか、スネイプと遭遇した。俺は、知らんぷりする。下らない挑発を買つて罰則を食らう位なら、いないものとして扱つた方が何億倍もマシだからだ。

「……………」

「全て知つてなお、我輩を許せないのなら、それでも構わん。」

「…………だから何だというのです？あなたに対する認識がこれっぽっちも変わるわけはありませんのに。」

俺は嘲る様に言った。

「我輩は、リリーと彼女の家族を引き裂いた罪を永遠に引きずつていく。我輩が彼女の下へ行くことになる、その時まで。」

「……………」

スネイプと別れて、再び歩き出す。10分後、マクゴナガル先生の部屋に辿り着いて、4回ノックする。

「お入りなさい。」

「失礼します。」

俺は、部屋に入って一礼した。

「ポッター。もう大丈夫なのですか？」

「少し疲れていますが、無理な運動をしない分には問題ありませんよ。ご心配をお掛けして申し訳ございませんでした。」

「そうですね。あなたがいきなり倒れて、どうなる事かと思いました。そういう事でしたら、お掛けなさい。」

「はい。分かりました。」

俺は、椅子に腰掛ける。立っているより、かなり楽チンだな。

「ポッター。あなたはこの1年間、よく頑張りました。」

「規則を数多く破った事はあれど、賞賛される覚えは全く無いのですが。」

「いいえ。特に、賢者の石を粉々に砕いた事です。校長先生が、石を壊す手間が省けたとおっしゃってました。」

あれ、壊すつもりだったのか。チクショウ、ジジイに対するこれまでの意趣返しのもりだったのに。

「私はハロウィーンであなたが言った事を通して、本当にどうしようもない時は校則など二の次でいいと考えてようになりました。正確には、再びその考えを支持する様になったと言った方が正しいでしょうが。」

「それは一体どういう事ですか？」

「私がホグワーツに在籍する前の話です。1938年、2人の天才が入学してきたのです。一人は、アラン・オルトン・ローガー。もう一人は、トム・マールヴォロ・リドル。」

「何故、そこに義祖父ちゃんの名前が？それに、トム・リドルって誰ですか？そいつとグラントは、一体何の関係が!？」

「彼は、あなたが仕留めたいと思っている、良く知っている人物です。グラント・リドルとの関連性は未だ掴めておりませんが。」

「そうですね。それよりも、俺の仕留めたい奴……!?まさか、ヴォルデモート！あの変態へビ野郎が!」

「なんて言うあだ名を付けているのですかあなたは。」

「11歳の少女を執拗につけ狙う奴なんて、変態のレッテルを張るべきですよ。」

「まあ、そこは良いでしょう。2人共、それ以外の同級生に大きな差をつけて2トップを独占していました。いつも1番がアランで、2番がリドルでした。」

「リドルさまあ。」

「煽らない様にしなさい。何をやっても1番になれないリドルは、次第に闇の魔術にのめり込む様になったのです。アランを屈服させる為に、そして他者とは違って自分だけが全てを支配出来るという事を証明する為に。」

あいつ、厨二病まで患ってたのは本当だったのかよ。

「その一環で、雄鶏を殺し、秘密の部屋を開きました。一人の女生徒が犠牲になったのです。名前は、マートル・エリザベス・ウォーレン。」
「それって、シエルが散々愚痴ってた『嘆きのマートル』ではないでしょうか?」

「正解です。マートルは犠牲になりました。古くから続く純血主義の思想……その犠牲に。」

『犠牲になったのだ』みたいな言い方、よしてもらえますか。マクゴナガル先生。」

「話が逸れました。アランは、リドルが何かをやらかす度にスペシャルなお仕置きを行ってきたそうです。」

「何ですか。その未来の世界のクマ型ロボットがやりそうな事は。」

「それでも懲りなかったので、ダンブルドアに直訴していたそうですよ。自分が対処すると言われて却下されましたが。」

「愚かにもリドルにチャンスを与えようとしたわけですか。それで、どれだけの人間が死んだのか、校長は理解して居るのですか?」

「ハリー。あなたの言いたい事は私も良く分かります。ご両親であるジェームズとリリーを殺されているのであれば尚更です。この私も、学生の頃はダンブルドア先生の徹底した秘密主義には大変怒りを覚ええました。」

「……………」

「ですが、もしリドルを追放していたとしましょう。あの愚か者は、マグルの世界でも同じ事をやってた筈です。ダンブルドアがリドルを最後までホグワーツにおいたのは、その残酷な本性を矯正するのが教師の務めだとお考えだったからです。」

「結局見事に失敗しましたけどね。それで先生。今は、校長の考えが理解出来ると言いたいので?」

「ええ。でも、あなたにまでその考えを押し付ける気はありません。例え、あなたがダンブルドアを信用してなかったとしても、何も言いません。」

「もう大人の勝手な都合に振り回されるのは、俺は御免ですからね。そう言っていただけだと助かります。」

「よろしい。リドルは、自分の魔法使いとしての才能に極端な自信を持っていました。それは本当だったのですが、アランの前では成す術が無かったのです。それは、アランはリドルが理解することは決してない魔法を既に持ってたからです。アランに対しては、ダンブルドア同様に力が効かないと分かってからは、優秀なスリザリン生として振る舞ってました。ですが、アランはこう言ったのですよ。奴は、リドルは絶対改心なんてしないと。するとしたら、生まれる前から掌で踊らされていたと認識させられる時だけだ、と。」

「俺の保護者、実は凄かったりします?」

「全てにおいてヴォルデモートが勝てなかった男と言われていましたからね。あなたがアランに保護されたのは、実はかなり幸運だったかも知れません。」

「分かりませんよ? 運かどうかなんて。散々魔法界とマグル界のどちらでも生きていける様に訓練されましたので。」

「アランなりのあなたへの親心です。ハリー。良くお聞きなさい。エリナ・ポッターを、ヴォルデモートを破滅に追い込んだあなたの妹を、何が何でも守ってあげなさい。」

「先生に言われなくとも、元からそのつもりですよ。ホグワーツからスネイプ教授が、俺はロイヤル・レインボー財団の視点からエリナを

守ればいいのでしょうか？尤も俺は、ダンブルドア校長の意図に従う気はさらさらありませんがね。ですが、最初からそのつもりです。」

「何故セブルスの事を？」

「クイレル教授が見事にネタバレしてくれましたので。」

「そうですね。では最後に言っておきます。あのヴォルデモートと言う男。本質的には臆病者です。自分は偉大な存在だと錯覚させる為に、弱き者の命を平気で踏みにじります。それが、自分自身を傷つける事になるとは理解も出来ずに。闇の魔術を身に着けただけで、魔法の全てを極めた気になっている愚か者です。」

「酷い言われ様ですね。あの変態へビも。」

「ただ年齢と経験だけでの表面的な物では魔法使いの力は測れません。軽率、過信。それがリドルの、ヴォルデモートの最大の弱点です。」

「何かを守り抜きたいと思ったとき、魔法使いは真の力を発揮する、と先生は言いたいのですか？」

「そうですね。ですからポッター。あなたに命じます。」

呼び方が変わったな。

「寮監としてですか？」

「いいえ、1人の魔法使い。そして、1人の人間としてです。ポッター、規則をいくら破っても構いません。自分を慕い、信じる者と愛する者をお守りなさい。」

意外だった。規則を徹底的に重視するマクゴナガル先生から、そんな言葉が出るとは。だが、何か引つかかるな。

「ただ破ればいいって訳ではないのでしょうか。罰則をしないなんて、先生一言もおっしゃられてはおりませんし。」

俺は、ニヤリと先生を見る。

「魔法使いなら魔法使いらしくです。これからも、無様な見つかり方をしない様になさい。私からの話は以上です。帰って大丈夫ですよ。」

「あ、そうだ。もう1つだけ質問をしたいのですが。」

「何でしょう？」

「義祖父ちゃんは、校長を酷く恨んでいました。何があったのでしょうか？」

「いいえ。私も詳しくは良く分かりません。しかし、アランがダンブルドアを信じなくなったのは、彼の初孫であるアルフレッドの死からと、そう言っておきましょう。」

俺は、失礼の無い様にマクゴナガル先生の部屋を出て行った。もう、壁に寄り付かなくても歩けそうだ。俺は、その足で談話室に戻った。

「ただいま……」

入って早々、そこにいたグリフィンドール生が一斉に俺に駆け寄ってきた。

「もがもが……おい、やめろ。苦しいんだよ……」

「良かったよ！倒れた時はどうなるかと思っただけ。」ネビルが泣きながら言った。

「心配するのは有り難いが、鼻水が付くから離れてくれ。」無理やり引き離れた。

「昨日はハリーがぶっ倒れたから出来なかったけど、今日はやるぞ！クイディッチ及び寮対抗杯優勝の祝勝会を。」

オリバーが高らかに叫んだ。

「その立役者であるハリー。君がこのパーティーの主役だ。」

パーシーが誇らしげに言った。いや、大いに結構なんだけど。こういう時だけオリバーに同調しなでくれ。部屋が同じだから、仲が良いのは分かるけどさ。

「グリフィンドールの切札に！乾杯!!」

「「「「乾杯!!」」」」」

俺を差し置いて盛り上がっている。しかも、いつの間にか切札という二つ名を付けられていた。

この後、フレッドとジョージがどこから持ってきたのか、大量の菓子や料理を用意したり、とにかくグリフィンドール生はこの日はバカ騒ぎをしていた。隙を見計らって出ていくと、賢者の石の件で共に戦ったロンとハーピーがいた。

「お前ら、もう退院出来たようだな。」

「ハリー。やっぱ君はすげえぜ。」

「クイレルを救うなんて、普通そんな事出来ないわ。」

「それに関しては、エリナの手柄んだけどな。エリナがいなかったら、クイレルを逆に殺してたぜ、俺は。それにしてもハリー子。お前、服従の呪文にかかってたけど大丈夫か？」

「ええ。もう大丈夫よ。操られていたとはいえ、友達を傷つけた。校長先生とマダム・ポンフリーが記憶を消そうかって提案したけど、残しておくことにしたわ。今回みたいな事が起こらない様に、もっと強くなるんだって誓ったんですもの。ゼロもグラントには感謝してるわ。あの2人、私達が起きる少し前に全快して、退院したんですって。」

「そうか。」

「そうだ、ハリー、ハーマイオニー。エリナが起きたらお見舞いに行こうよ。」

「ああ。」

「ええ。そうしましょう。」

俺達は、再びパーティーの方に戻っていった。群れるのはそんな好きじゃないけど、今日くらい羽目を外しても大丈夫か。

第24話 1年生修了

俺は翌日、学校を散歩していた。その時にゼロ、グラントと再会した。互いの戦いのやり取りを教え合った。すると、ゼロは体が風そのものになった事、グラントはあらゆる動物に変身する能力を発現させたと言った。

俺も、自分の中に存在するW―ウイルスの力の事を話した。こんな人知を超えた能力を持った者同士なら、話しても問題無いだろうと判断したから。実際、2人も俺を今まで通りに接してくれた。俺もだ。自分達の力を見せ合った。俺は目の色が赤くなったし、いつもより運動能力も上がった事を見せた。風となったゼロに触ってみたけど、本当に風に触っているようだった。グラントは、狼、クロコダイル、サイ、ライオンの順番で変身したのだ。圧巻だったな。グラントは、この能力で芸を磨けば食っていけるんじゃないのかな？

その後は雑談をした。ニンバス2000にも交代しながら乗った。2人の感想は、乗り心地が良かったとの事。

エリナは、更にその次の日に目覚めた。ダンブルドアの爺さんとの会話を今さつきまでしてたらしい。それが終わって、ロンとハー子の3人で入っていく。俺は、ジジイを完全無視した。それに目を使つて、アンタは信用出来ないし、協力もしないという気持ちも伝えておく。ジジイは、どこか苦い顔をしていた。俺は、マダム・ポンフリーに「幻覚呪文」をかけて15分確保した。

「エリナ！」

ハー子が抱き着こうとするが、仮にも怪我人なので思い留まった。「僕が気絶した後はどうなったんだい？」ロンが聞いてきた。

俺とエリナで何が起こったのか、一部始終を話した。

「あなた達兄妹には、驚かされるわね。でも、石を壊しちゃったのね。フラメル夫妻は死んじゃうのね？」

「でもね、ハーミー。校長先生が、『心の整理整頓が出来た人には、死は未知の冒険に過ぎない』って言ったんだ。」

「だから言ってるだろう。ダンブルドアは狂ってるって。」

ロンは、自分の尊敬するヒーローの変人っぷりに酷く感心していた。

「ま、ロンの言ってる事も強ち間違っちゃいないな。」

俺は、遠回しにダンブルドアをディスった。

「それに、別の視点から言ってしまうと、エリナが賢者の石の所に行くように仕向けたかも知れんな。現に、父様のマントをクリスマスに送ったのだし。」

俺が、考察をみんなに伝える。ま、ある程度は本当なんだけどな。ダンブルドアは、時々エリナを対ヴォルデモート用の最終兵器として見ていることがあるからな。だから、エリナの完全な味方ではあれど、ダンブルドアの下で活動はしないし信用もしないと本人に言ったのだ。

俺の言った事に対して、ハー子はカツとなった。当たり前だ。同性の中で一番の親友をそんな風に扱った事に対してだ。

「もしハリーの言ってる事が本当だったら、ダンブルドアはエリナに対して死ねばいいって言ってるようなものじゃない！場合によつては殺されてたかもしれないのに。」

「うくん。どうなんだろうね。でも、校長先生は何でも知っているような感じで言ってくるからね。それよりも、さっきゼロとグラントも来てくれたんだ。2人とも、ハーミーに手こずったんだって。結局傷つけちゃいけないのもあって、3人共ノックアウトだったんだ。でも、あの2人も凄かったね。」

「だな。……そうだエリナ。クイレルの事は聞いたか？あいつ、変態へビに加担した事、ハー子に許されざる呪文を使ったから、アスカバンに送られるってさ。しかも終身刑だそうだから、歩けるんだったら行こうぜ、アイツの所へ。」

「クイレル先生が!?早くいかないと!でもマダムが……」

「心配無用。その為の俺だからな。」

再び幻覚呪文で、退院していいという暗示をかけた。

「便利過ぎない?」

「あまり使わないけどな。結構魔力使うし。じゃあ、ロンにハー子。

俺ら行ってくるわ。」

外に出ると、魔法省に連れて行かれる寸前のクイレルがいた。

「ポッター君、ポッターさん。」クイレルが穏やかな笑みを俺達に向けてる。

「クイレル先生。」

「加担だけなら懲役で済んだかもしれないが、あなたは……」

「私は、君達の説得で正道に戻れた。そして、私が今まで犯してきた罪を生涯償っていく覚悟が出来たよ。感謝している。」

「もう会えないんですか？ せっかく、理解し合えたのに……」

エリナがクイレルにそう聞く。

「いや、離れていたとしても繋がりがあある事が分かったんだ。例えば一生アズカバンで過ごすことになっても、もう私は逃げないし、生きる事を諦めないよ。」

「エリナ。クイレル教授がここまで言ってるんだ。覚悟の上なんだろう。」

「そういう事だよ。ポッター君、いや、ハリーの言うとおりで。少しの間、君達と言う理解者や光が出来ただけでも、私は幸せだ。エリナ。さあ、もう行きなさい。お別れの時間だよ。」

「ハリー、行こう。クイレル先生。1年間、ありがとうございました。」エリナが、ペコリとお辞儀をした。俺も後ろを振り向いたが、止まったままだ。最後に言いたいことを言った。

「必ず、生きて帰ってきてくださいよ。それに、少しの間ではないです。心の中に、俺達の存在を留めておいていただきたいですね。」

「約束しよう、ハリー・ポッター君。」

こうして、今学期の闇の魔術に対する防衛術の教師と、別れた。だが、生きている限り、必ずどこかで会えるはずだ。きつと。そうであると信じたい、そう思った俺だった。

翌朝。大広間に向かう。来た時には、殆ど満員だった。そして、直ぐにダンブルドアが出て来て、話を始めた。

「また1年が過ぎた！ 1回、ご馳走にかぶりつく前に、老いぼれの戯言をお聞き願おう。まずは、寮対抗杯の表彰じゃ。4位 ハツフルパフ

452点。3位 レイブンクロー 462点。2位 スリザリン
472点。そして……1位 グリフィンドール 592点。」

グリフィンドールのテーブルから割れんばかりの歓声が上がった。
早く終わってくれ。

「おめでとう！グリフィンドールの諸君！よくやった！そして、つい
最近の出来事も勘定に入れようかと思っておる。」

大広間全体がシーンとなった。

「駆け込みの点数をいくつか与えよう。まずは、ハーマイオニー・グレ
ンジャー嬢。火の中と言う危機的な状況で冷静な論理を用いてパズ
ルを解いたことで、グリフィンドールに50点！」

ハー子は腕に顔を埋めた。嬉し泣きだろうな。

「次にハリー・ポッター君。ホグワーツ始まって以来の洗練された箒
の腕前と、魔法使いとして大切な物に気付いた事で、グリフィンドー
ルに50点！」

俺はカウントされなれないと思ったがな。恩でも売るつもりか。

「グリフィンドールはこれで以上じゃ。続いては、スリザリン！」

「え？」と、ロン。

あれ？ロンは何したっけ。本人は、ショックを受けている。

「燃えるハートと素晴らしい体力を以って、このホグワーツを守り抜
いたグラント・リドル君に100点！」

スリザリンから歓声が上がった。

「お、俺よお。100点貰うなんて初めてだ。」

「良かったですわね。グラント。」イドウンが労いの言葉を贈る。

「次に、レイブンクロー！その気高き魂と並外れた努力で得た魔法で、
友を一切傷つけずに救出したゼロ・フィールド君に110点を与える
！」

今度は、レイブンクローから歓声上がる。ゼロは、呆然としてい
た。近くの上級生が、ゼロの頭を撫でる。

「そ、そんな大した事は……」

「すげーよゼロ。フォルテ先生だって、1度にそこまで貰った事ない
んだってよ！」

7年生が高らかに叫んでいた。

「最後にハツフルパフのエリナ・ポッター嬢。」

ダンブルドアの言葉で、部屋中が水を打ったようにシーンとなった。

「並外れた勇気と勇敢さ、そして内に秘めた優しさで絶望の淵に堕ちていた敵を救い、そして許した。いくら善良な者でも、そこまで出来る者はそういない。その完璧なる精神力を称え、ハツフルパフに140点を与えたい。」

最下位から、一気に2位に繰り上がった。ジャステインとアーニー、ハンナとスーザンがエリナを揺らす。他のハツフルパフ生も、生き残った女の子がそれだけの事をやった、やはり彼女は大物だと思っている。

何をしたは知らないが、余程良い事をしたのだ、と言うのがハツフルパフのみならず殆どの生徒の認識だ。

「え、いつも失敗ばかりしてたのに、ボクに……140。」

「エリナ。今は喜んでいいと思うわ。」ハンナが言った。

「そうですよ。1位は取れなかったけど、2位になれたんです。あなたを誇りに思います。」

と、ジャステイン。

こうして、4つの寮に得点が入った事で、全員が幸せそうな表情になった。あのスリザリンでさえもだ。その夜は素晴らしい物となった。今夜の事は、永遠に思い出に残るだろう。そして、あの呪文の発動もしやすくなるだろう。

試験結果が張り出された。1位はイドウンだ。100点満点のテストで1教科150点と言う有り得ない数字を得ている。つまり7教科で1050点を叩き出したって事だ。2位はゼロ。大きく落ちるが、7教科で956点は充分規格外過ぎる。3位はハー子。847点。俺は4位だ。845点。シエルは6位、マルフォイは7位、ロンが10位である。エリナが13位、グラントは25位だった。見知った奴は、結構良い成績になっていた。「ハリー。見てくれてありがとう。」

エリナがこれでもかと言わんばかりのお礼を俺にしてきた。まあ、本人のやる気や興味を引き出しの後押しをやったただけだがね。

「別にそこまでしてない。俺としちゃ、成績に興味ないけどな。最低進級出来る位に加減しておくべきだったかな？」

洋服ダンスはあつという間に空になっていた。それからホグワーツ特急に乗った。キングズ・クロス駅に数時間後に到着。

プラットホームを出るのに少々時間が掛かったが、何とか俺達の番になって出て行った。先を見ると、ローガー家の面々が出迎えてくれた。相変わらず、イーニアス義兄さんは多忙なのか、来てないけど。

「ただいま。皆さん、帰りました。」

「お帰りハリー。どうだったの？ホグワーツは？」

黒目で茶髪のパーマをしているアドレー義兄さんが聞いてきた。

「まあ、それなりに楽しめたよ。アドレー義兄さん。」

「それは良かった。」

「そうだ、義祖父ちゃん。」

「どうしたハリー。」

「エリナを引き取っているダーズリー家の方々たちとちよいと挨拶に行こうと思って、義祖父ちゃんにも一緒に来て欲しいんだ。」

「分かった。行ってみようか。」

俺は、エリナと一緒にいる3人の所へ義祖父ちゃんと共に向かった。首長の女性の顔が、少し青くなった。父様でも思い出したのかな？1回対面した事はあるだろうしね。

「ミスター・ダーズリー。初めまして。私、ハリー・ポッターと申します。あなた方の事は、エリナから聞いております。」

「フン、小娘の実の兄か。メガネよりは随分とマシだが、変な奴と一緒に来おつて。小娘、さっさと行くぞ。お前の為に1日の時間を……」

「私がその、変な奴もといロイヤル・レインボー財団の会長をやっているアラン・ローガーと申します。以後、お見知りおきを、ミスター・ダーズリー。」

義祖父ちゃんは、バーノン・ダーズリーに名刺を差し出した。その瞬間、バーノン・ダーズリーの顔が真っ青になった。英国魔法界以外

の魔法界にも大きな影響を持つ、全世界におけるロイヤル・レインボウ財団のネームバリューは並大抵の物ではないからだ。そんな組織のトップを変な奴呼ばわりして、さっそう後悔したのだろう。

「そ、その世界有数の財団のトップが私に何か用ですか？」

さつきとは打って変わって平身低頭になった。調子の良い豚野郎だな。

「幾つか言っておきます。エリナを追い出したりしない様に。それが後々、あなた方の為にもなります。それに、私の実の孫も同然の存在であるハリーの家族は、私の家族でもあります。エリナに関しては、7月中にお迎えに上がります。後日、その旨の連絡は詳しく送ります。要件は以上です。」

義祖父ちゃんが言った。ダーズリー達は、というかバーノン・ダーズリーは悟ったようだ。エリナのバックにロイヤル・レインボウ財団がいる事。少しでも残酷な扱いをしたと分かった時は、持ち得る力を使ってそれ相応の報いを受ける事になると。

ダーズリーを破滅させる気なんてさらさらないんだけどね。一つは、エリナにかかった母様の愛による護りの魔法の継続。17歳までだ。変態ヘビからエリナだけじゃなく、ダーズリー達も守ってくれる。もう一つは、エリナ本人がプリペッド通りでかなり良好な関係を築けている。問答無用で報復をやったら、1番悲しむのはエリナなのだ。守るつもりが、傷つけたらそれこそ本末転倒。なので、家と呼べる場所だけは少しでも環境の改善は出来る様にしておくと促したのだ。

彼らは、エリナを連れてさつきと帰っていった。

「今まで色んな奴を見たけど、あそこまでヤな奴を見るのはマルフォイ以来だ。」

俺は、ダーズリー達の後姿を見ながら吐き捨てるように呟いた。

その後、ウィーズリー家の人に挨拶をした。セーターをありがとうごさいましたと伝えた。続いて、グレンジャー夫妻にも挨拶をして、ブライトンに帰っていった。義祖父ちゃんが、宿題を終わらせたなら1年ぶりの日本へ行こうかと提案したのだ。よし、さつきと宿題を終わ

らせて懐かしき日本へ行くこうと決意した俺であった。

ここは絶海の孤島。魔法使いの監獄、アズカバン。軽犯罪から殺人、許されざる呪文使用者で溢れ返っている。

今日、ここに新たな受刑者が入ってきた。クイリナス・クイレル。闇の帝王の野望への加担及び生徒への許されざる呪文使用の罪で、終身刑を食らった。だが、クイレル本人はそれを潔く受け入れたのだ。そして、独房に入っていく。

「君が新入りかい。ここの看守のせいで殆どの受刑者はおかしくなるんだ。まあ私は、ある方法で正気を保っているから意味はないんだけどね。それでも、話し相手に飢えているのさ。一方的なつて済まないが、何をしてここへ？」

クイレルの隣の男が気さくに話しかけてきた。その男は、使い回された包帯で左目を覆い隠している。

「私は、ホグワーツにいました。取り返しのつかない事をしてしまいました。しかし、私はそれでも生きると決めたのです。ハリーとエリナという、私の2つの光と希望が存在している限り。」

「え？」

男が、静かになった。

「今誰の事を!？」

「ハリーとエリナですが。」

「まさか、その2人の姓はポッターじゃないのか？」

「そうですが、どうされたのです？」

男が狂ったように叫び出す。

「ハリー・ポッターに……エリナ・ポッター。もうそこまでの時間が経ってたなんて。……おい吸魂鬼!ここから……ここから私を出せ!!私は……いや俺は、エリナの後見人だ!ハリーは別の人間が担当しているが、それでも私の息子も同然だ!!ここから出せ!ここから出しやがれええええええええ!!」

この日以来である。1人のアズカバンの囚人の叫びが絶え間なく響き渡る様になったというのは。

秘密の部屋

第1話 ホークラックス

俺の名は、ハリー・ポッターだ。1992年7月1日。今、ブライトンにあるロイヤル・レインボー財団本部のビルでしばしの一時を過ごしている。海に遊びに行くのも良いが、これから義祖父のアラン・ローガーと義姉のエイダ・ローガー、2人の義兄のイーニマス・ローガーとアドレー・ローガーと話がある。

その話と言うのが、クリスマス休暇の時に俺が独断で処理した髪飾りの調査結果についてだ。一連の出来事を詳細に書いた手紙を同封してだ。科学者のような服装をしたイーニマス義兄さんが、これしか考えられないと、断言したのだから。それを、俺達は聞きためだ。

早速、会長室に入る。ノックをして、入室した。もうみんないるようだ。俺は、会長室に飾ってある不死鳥の騎士団の集合写真がある場所の近くに腰掛けた。

何故、ダンブルドアに対して良い感情を持ってない義祖父ちゃんの部屋にこんなものがあるかというと、最初のお孫さんが不死鳥の騎士団に所属していたそう。所属してすぐに消息不明になったそうだけどね。その話をした時は、とても悲しそうな目をしてたから、それ以上は聞かなかった。

「皆さん。遅れてすみませんでした。」

「良いですよハリー。私達も、さっき来ましたから。」

黒髪黒目の腰まで伸びている髪と日本の着物を着ることで気品さを出している女性が、エイダ義姉さんだ。

「やして。」

義祖父ちゃんが全員集まったところで口を開く。

「今回皆を呼んだのは他でもない。ハリーが私に送ってきた闇の魔術がかかっていた髪飾りについてだ。イーニマス、調査結果を。」

「はい、お爺様。それでは、発表をしよう。ハリーが、ロイヤル・レインボー財団に送ってきた物だが、髪飾りに起ったことと出来事を照ら

した結果、ある闇の魔術にかかっていた可能性が極めて高い。いや、と言うより99.99%確実だ。」

「ある闇の魔術ですか。イーニース、勿体ぶらずに話してください。」
エイダ義姉さんが、報告を促す。

「姉上。これは、殆どの人間が知ることのないのです。闇の魔術の中でも最も邪悪と言われている。それは、『ホークラックス』です。」

「ホークラックス？ 兄上、それは一体どういう物でしょうか？」

アドレー義兄さんが、まるで聞いたのは初めてという風に聞いてきた。

「別名分霊箱。魔法界の中でも、最も邪悪な発明と言われている。自らの魂を半分に引裂き、片方を己に戻して、もう片方を別の場所に宿しておく事で己の消滅を防ぐ闇の魔術だよ、アドレー。」

「魂を分ける!? そんな事が!？」

俺は動揺した。アドレー義兄さんとエイダ義姉さんは、ヴォルデモートが自身に施した闇の魔術のあまりのおぞましさに息を飲んでた。特にアドレー義兄さんは、嫌悪の感情を露わにしている。

「普通、魂を分けようとする者なんていませんよハリー。ちゃんとした一生を全うする方が望ましいに決まっています。」

「その通りです。姉上。そんな事をやりそうなのは、我々の知る限り一人しかいない。お爺様はもう、お分かりですよね。」

「ヴォルデモート………いいや。トム・マールヴォロ・リドルと言いたいのかな、イーニースよ。確かに奴ならやりかねないだろう。私を屈服させる為に、あらゆる闇の魔術を学んでいったのだから。使っているならともかく、概要位は知っていてもおかしくはないな。」

「1年前に、ヴォルデモートはハリーの妹、エリナ・ポッターに対して死の呪文を唱えた。しかし、それは2人の実の母、リリー・ポッターが死に際に残した愛による護りの魔法によって、ヴォルデモート自身に跳ね返った。ハリーによれば、そこら辺の劣等生物にも劣る魂、或いは霞とも言えるくたばり損ないと化してたようだが。」

「ちよつと待ってください兄上！ 死の呪文が跳ね返ってきたとして、何故ヴォルデモートはハリー達の前に現れたのですか？ 死の呪文が

来たなら、問答無用で死にます!!」

「普通なら、確かにその通りだよ。アドレー。だが、奴がホークラックスを使っていたのなら、この約10年間生きていたのも領ける。引き裂かれた魂は何の損傷も受けていない。それに、ハリーから開心術で見せて貰った賢者の石の戦いの状態からして、ホークラックスか残っている上で肉体を失った状態と全く同じだった。」

アドレー義兄さんが言葉を失った。

「その、分霊箱を壊す方法ってあるのですか? イーニース義兄さん。」
俺は、率直な疑問を投げかける。

「手段は少ないが、ちゃんと存在する。まずは闇の魔術の1つ、悪霊の火。これが一般的な対策だ。訓練と適性次第では、誰でも使える。」

悪霊の火は分かるな。と言うかあれ、分霊箱壊せるのか。知らなかった。と、いう事はまさか………確かに悪霊の火を研究して作った呪文だけだ。

「もう1つは、バジリスクの牙。派生の手段として、それを取り込んだゴブリン製の武器も可能。」

「バジリスクの牙? あのバジリスクの事ですか?」

エイダ義姉さんが、イーニース義兄さんに聞いている。

「正確にはバジリスクの牙から分泌される腐食性の猛毒で、不死鳥の涙でしか中和出来ません。」

「そうですか。」

「そして、ハリーが使った手段。」イーニース義兄さんが、俺をじつくりと見る。

「え? 俺?」まさか。

「そう、ハリーが悪霊の火を元に更に発展改良させた。元の悪霊の火を焼き尽くす目的で作られた闇の魔術、邪神の碧炎。」

「あ、あの呪文にそんな効果が!?!」

「その様子だと、本当に知らなかったようだね。」

「そんな! 闇の魔術対策に作ったのに、実際はそれを上回る闇の魔術だったなんて!!」

悪霊の火から守りたい人を守る為に作った。それがよりによって、

闇の魔術という最悪の呪文を作ってしまった。俺は、邪神の碧炎なんて作るべきじゃなかったと思つたわけだ。

「後悔しても、何も始まらない。それに、闇だからって別に忌むべきじゃないよ。そもそも、あれは大切な人達を守る為に作つたんだろ？」

「確かに、大切な人を守りたいために作りましたけど。」

予想はしてたが、かなりショックだよ。

「そう、ハリー。闇の魔術というのは、いずれも強力な攻撃魔法が多数存在している。それを悪事に使うフォイカスの様なクソ共の事を闇の魔法使いと呼んでいるんだ。悪意を以って使わなければいいんだよ。ハリーが入れ込んでいる日本にはね、こういうことわざがある。『毒を以て毒を制す』と言う言葉が。まだ、ヴォルデモートの一味は全滅してない。これから復活して、大ぴらに振るうだろう。その時に、その力は必要になる。要は、使おうだよ。」

「そうです。人は、光や善だけを持っていても成り立ちません。闇や悪も持っています。ですが、心の持ちようでどちらかに傾けられます。自分を信じなさい。」

「はい。取り乱しちゃって申し訳ないです。」

「むしろ、12歳になりかける段階でここまで考えるあたり、流石だけどね。」

アドレー義兄さんは、俺の事を褒める様に言う。

「話が半分逸れてしまったようだ。分霊箱だね。幾つ作つたのは分からないが、ある仮説を立てられる。」

「ある仮説？」俺が聞く。

「そう。分霊箱になったのは、レイブクロウの髪飾りだ。まさか、ホグワーツの必要の部屋にあったとは。」

「それから何が？」アドレー義兄さんは、分かつてない。実を言うと、俺もだ。

「ヴォルデモートは恐らく、ホグワーツ創設者の持ち物を分霊箱にしたという仮説を立てられるんだよ。」

「という事はイーニアス。つまりあなたが言いたいの、グリフィン

ドール、スリザリン、ハッフルパフ由縁の品も分霊箱化されている可能性があると?」

「そういう事です姉上。あくまで可能性ですが。」

「由縁の品って一体どんなものが?」

「アドレー、それはな。ハッフルパフは金のカップ、スリザリンはSの付いた金のロケット、グリフィンドールは剣だ。」

イーニアス義兄さんが解説してくれた。

「これからは、それも探さなくてはいけないという事ですか。」俺が呟く。

「それに、ヴォルデモートの素性と軌跡も調査しなければな。由縁の品以外でも、分霊箱になったものはあるだろうし。」

「一体幾つ作ったと思いますか。皆さん。」俺がみんなに聞いてみる。

「考えられるとしたら、おそらく6ではないかと思えますよ。本体を含めて魂の数は7かと。」

エイダ義姉さんが、即答した。

「7の根拠は?」

「7は、魔法数字で一番強力なものと言われているからです、ハリー。」
「成る程。」と、アドレー義兄さん。

「願掛けみたいなものと言うわけですね。」と、イーニアス義兄さん。
「6つ作ったのか。それじゃ、あんな残念マスクになってもおかしくはないな。」

義祖父ちゃんが、独り言のように言った。

「取り敢えずは、今後の方針が決まった。4人に分霊箱を探してほしい。ただハリーは、学業を優先すること。暇な時でよろしい。他3人も、仕事やプライベートを優先しなさい。時間が空いてるときで構わない。私は、ヴォルデモートの情報収集を行う。財団の諜報部にも任務で向かわせてみよう。そして、過去を知っていそうな人にも私が直接説得しに行く。それでいいかな?」

「了解です。」

「それでは、解散しよう。」

こうして、会議は終了した。

第2話 ウイルスモードの力

夏休み3日目で宿題を完全終了させ、7月6日から日本へ旅立った。マホウトコロでの特別講師として招かれたのだ。約3週間を日本で過ごし、7月28日に帰国した。

1992年7月30日。エリナを迎えに行く前日。俺は、義祖父ちゃんに呼び出された。俺の体の事と、8歳の時の真相を教えるとのことだ。

「ハリー、掛けなさい。」

義祖父ちゃんが、穏やかな表情で俺に座るように促す。

「はい。」

俺は、椅子に座った。

「さてと。本当なら17歳、魔法界の成人になったら話すつもりだったが、Wーウイルスの力を発現させた以上は、弊害が無い様にしくは。という事でハリー。覚悟は出来てるかな？」

「元よりそのつもりだよ、義祖父ちゃん。」決意が固い事を伝える。

「よし。その覚悟を認め、話すでしょう。まず、Wーウイルスの事はもう分かっているね？」

「うん。正式名称 Wizard-virus。魔法使いだけに感染して、長時間苦しませて殺す。正確には、魔力を持った生物に死を与えらる。魔力を持った生命体からしてみれば、究極の天敵になるウイルス。でも俺は死ぬどころか、極稀に起こる適合者だった。俺の姿で接触してきたウイルス、ダブルって呼んでるんだけど。そいつから、少し認めて貰った。リターンマッチの時は、クイレルに大ダメージを与えるほどにまで戦闘能力が上がった。俺が知ってるのはそこまで。」

「ウイルスに認められるとは、お前にはいつも驚かされるね。」

「支配に興味なんてないからさ。」

「そういう所も、私は好きだ。話を戻そう。感染したあの日、唯の事故と表向きには言われている。しかし、あのウイルスによるバイオハザードは、意図的に起こされたものだ。我がロイヤル・レインボー財団に邪悪な野望を持った者がいた。」

「誰なの？」

「リチャード・シモンズ。奴は非常に優秀だったが、ロイヤル・レインボー財団にいた動機は不老不死の魔法を作る為に入ってきていた。」

「前に言っていた変態ヘビと同じものを？」

「いや、また違うタイプの不老不死を奴は求めてたのだ。ヴォルデモートと違って、死が怖いからと言う理由じゃないそうだが。」

「で、俺の感染と一体何の関係が？」

「奴は、W―ウイルスを奪おうとした。その時に、お前がそこにいた。ロイヤル・レインボー財団の私軍とシモンズとの戦闘の結果、サンプルは殆ど奪取出来たが、一つは奪われ、一つは割れた。割れたウイルスは、すぐに近くにいた魔力を持った者に感染した。」

「……それが俺だったと？」

「そうだな。だが、殆どの魔力を持った者を死に至らしめたはずなのに、生き残った。それ以来、ウイルスの恩恵なのか、お前の怪我は他の人間よりも早く治癒してたのだよ。」

「そういえば、適当に休息を取っていれば疲れも大怪我も一晩で治っていたような。今思うと、ダブルの恩恵だったのね。でも、何で適合出来たんだ？個人で体に合う奴がいるという事なのか？まだ謎だから、性急に答えは出さなくてもいいだろう。」

「適合者になった場合の効果ってどうなるの？」

「自分に関係する過去の出来事の予見、身体能力が少なくとも通常時の1.6倍以上になる。五感も上がる。特に、視力の上昇が著しい。そして、目を合わせる事で相手を幻覚に陥らせる事が出来る。杖など無くてもね。そして魔法を使った場合、魔力の消費量が通常時よりも半減される。ウイルスの力を使っている間は、スタミナを消費し続けるわけだが、ハリーなら長時間の運用が出来る筈だよ。」

「これだけ聞くと、何か凄い能力を手に入れたんだなって思った俺だった。だけど、義祖父ちゃんのW―ウイルスに関する説明は、まだ続くわけだ。今度から、W―ウイルスの力を使っている俺の状態を、ウイルスモードって呼ぶかな。」

「あらゆる毒物、自分に都合の悪い薬品、細菌、ウイルスが無効となる。」

それどころか、それを自分の力に出来、使いこなせる様になるのだよ。極めつけは、寿命以外で死なない身体となっている事だ。」

「まさか。死の呪文も効かなくなったの?」

「正確には、永遠の死から仮死状態に緩和されると言った方が正しいか。12時間後に完全復活出来る。」

何か複雑だな。これじゃ、まるで人間の姿をした何かだよ。

「ウイルスは、魔力を殺す性質がある。大抵の魔法は効果が抑制、弱い呪いなら完全に無力化出来るから、なの?」

「そうだね。その認識で正解だ。流石に、許されざる呪文レベルは完全に抑えられないが。それでも、死にはしない。尤も、死ぬほど痛い思いはするけどね。」

「どうして効果を知ってるの?」

「文献があるのだよ。データベースでは、トップシークレット事項となっている。」

適合するのは、余程運の強い奴だけか。

「普通の人間に戻れるかなあ?」無理そうだけど、聞いてみようか。

「ひとたび適合すれば、肉体の一部となり、死ぬまでその状態だ。」

「そっか。やっぱり。」

予想はしていたし、覚悟も決めて、その上腹も括っていたけど、ちよつとシヨックだな。義祖父ちゃんも、何か申し訳なさそうな表情になっている。

「そうだ。話は変わるけど、そのリチャード・シモンズって奴はどこへ?」

「今、我々は捜索中だ。雲隠れのように姿をくらましたから、見つけるのは至難の業だよ。」

「そっか。じゃあ、次の話に移るけどさ。明日、エリナを迎えに行くじゃん。その準備は問題ない?」

「いつでも出発できる。1週間前に、ダーズリー家にその手紙は送った。返事も貰ってる。」

「そりゃいいね。だけど、エリナ宛の手紙は送っても返事は来ないんだよな。ロンにハー子、ゼロとグラントも愚痴ってたし、何か訳アリ

だよ。これでダーズリーの仕業だったら、思う存分消せるんだけど。」

「それはないな、ハリー。こちらが迎えに行く許可をしないと、エリナに手紙を送るなど言うのはいくら何でもおかしすぎる。」

「という事で、その確認も兼ねてだね。で、その後にウィーズリー家へ、か。ま、退屈しなさそうだしね。義祖父ちゃん。」

「そうだな。それよりも、アレは習得したかな？あの課題を。」

「アレね。『臭いアンブロッサ・ウドラントゥーを消せ』、いわゆる臭い消し呪文を習得したよ。まさか。この国の魔法省の連中、こんなものがロイヤル・レインボー財団で発明されているなんて思いもしないだろうね。」

「確かに。それにしても大した奴だ。もう習得してしまうとは。うん。やはり見込んだとおりだ。素質は、アルフレッドやエイダ、イーニアス、アドレー、キットをも上回っている。彼等でさえ、半年はかかったのに。細胞分身込みとはいえ、2カ月半でモノにするとは。素晴らしい………それならば、褒美としてこれを渡そう。」

義祖父ちゃんが差し出したのは、見かけは何の変哲もない手錠と、黒い指なしタイプと赤い全身覆うタイプのグローブの2つだ。

「これは？」俺が、手錠に触ろうとした。

「ハリー！不用意に触らない様に！」義祖父ちゃんが、大きな声で叫んだ。

少し遅かった。手錠に触った瞬間、急激に力が抜ける感覚がした。急いで手を放す。すると、いつもの調子に戻った。何だ、今のは？

「ちよつとばかり遅かったか。一見普通の手錠に見えるのも無理はない。だが、これはある鉱石で出来ている。誰も欲しがらなかつたら、ロイヤル・レインボー財団がその権利を持っている。」

「何で作られてるの？」

「身に着けている者の魔力を封じ込めて、魔法を一切使用不可能にする石、『魔封石』と呼ばれるものだ。」

「これ、魔法使いにとっては結構致命的な弱点の物質じゃない？」

「そう。これは、つい最近発見された。限られた場所でのみ採掘出来ない。成分の話になるが、鉄と変わらない。だから、加工は難しくな

い。しかも、希少性は低いから誰も欲しがらない。」

「それで、この手袋は？」

「そんな魔封石の効果を身に着けている間一切受け付けない布で作った。尤も、覆うのは手だけでそれ以外の部分に魔封石が触れるといった通りの効果になるが。」

「つまり、グローブを身に着けることで、魔封石の効果を遮断して、この手錠を使えというわけだね、義祖父ちゃん。」

「そうだよ。そして、ハリーよ。1日早いが、誕生日プレゼントだ。」

「ありがとう。でも、普通手錠をプレゼントにするのって無いんじゃないかな？」

「ハハハ。確かにね。4年前に渡した、ブローチ付きの銀色のマントの方は、どうなったかな？」

「特殊な訓練が必要になる瞬間移動は既に去年身に付けたよ。本当に最低でも4年もかかるなんて、驚いたね。これからは、他の技も編み出していく予定だよ。」

「そうか。精進するのは大いに結構な事だ。だが、たまには息抜きも入れなさい。週に1回でも2回でもいいからな。それじゃ、もう寝なさい。明日は早い。」

「はい、お休みなさい。」

「お休み。」

部屋を出た。ウィルスの力とエリナ、誕生日プレゼントの件を話した事で、就寝についた。明日が楽しみだな。

第3話 隠れ穴へ

1991年7月31日。義祖父ちゃんとドライバーの3人で8時に車を飛ばして、13時ごろにプリベット通り4番地に着く。そして、13時半に家に行った。チャイムを鳴らす。

その後は、あっけなく通してくれた。バーノン・ダーズリーは、媚び諂う様に接してきた。高級なお菓子を大量に土産として渡して、エリナの部屋に向かう。何か言い争いをしている。ダドリーではなさそう。もつと甲高いキーキー声とエリナが言い合っている。俺は、エリナの部屋をノックする。

「失礼するよ。」

俺と義祖父ちゃんが入っていくと、そこにはエリナと屋敷しもべ妖精がいたではないか。

「エリナ。いつの間に屋敷しもべ妖精をペットを飼い始めた？」一応聞いてみる。

「飼ってない。このドビーって子、ホグワーツに行くなって。」

「あ、あなた様はハリー・ポッターでございますね。」

屋敷しもべ妖精が何かを言おうとしている。

「まさか、俺にもホグワーツに行くかと抜かすんじゃないだろうな。返答次第では容赦しないよ?」

笑顔で言っただけは怒ってるけどな。

「ヒイ！エリナ・ポッター様と違って、怖すぎる。でもドビーはこのお二方を守らなくてははいけません。ああ、ハリー・ポッター様。どうか、どうかホグワーツに行かないでください。今年のホグワーツでは、大変恐ろしい事が起きます。約束してください。」

「俺はそんなに弱くないから。将来に備えて、今まで修行してきたんだ。今更引けないね。俺は俺だけに従う。誰の指図も受けないよ。仮に誰かに従うとしたら、それは俺が敬意を払ったり、尊敬している人だけさ。」

心配してくれるのは大いに結構な事だが、やるべき事をしないで逃げるなんて俺には到底出来ない。俺の命に代えてでも、ヴォルデモー

トと戦う宿命を背負ったエリナに、俺を信じてくれる者や大切な人を守ると決めたから尚更だ。

「ドビーと言ったかな？」

義祖父ちゃんが、優しくドビーと呼ばれる妖精に声を掛けた。

「あ、あなた様は？」

「私は、アラン・ローガー。ハリーの保護者だ。」

「アラン・ローガー様。ハリー・ポッターを説得してください。今回は、ホグワーツに危機が……」

「行くかどうかについては、ハリー自身が決めることだ。私は干渉しない。少なくともハリーは、大抵の異変にも対処出来るように育て上げたから問題はない。それに、ハリーは縛られて生きるのが大嫌いなんだ。仮に反対したって、意地でも行くだろう。残りの時間は私の下に行くのだから、心配しなくてよろしい。さあ、元いた場所に戻りなさい。」

ドビーは、やり切れない表情になりながらもこちらに従って、去っていった。

「そんじや行きますか。」

「うん！」

早速車で帰った。着いたのは7時半くらいだろう。

「ようこそエリナ。ここが、俺の家でもあるロイヤル・レインボー財団だ。」

「家と言うより、居住エリアに関してはもう高級ホテルみたい！」

居住エリアの高級さに感激しているエリナ。俺は、早速用意した部屋に案内する。

「この部屋を使ってくれ。好きにしていよいよ。と言っても、明後日にウィーズリー家に行くけどね。ロンは勿論、ハリー子、ゼロ、グラントにもそこに連れてきている事はとつくに伝えた。エリナ、宿題は終わってるか？」

「ちよつと残ってる。」

「どうせ魔法薬と魔法史で手こずってるんだろ？」

「難しいんだもん。」

「そこは個人差や得意不得意があるから何とも言えないけどさ。まあ、明日付きつきりで見てやるよ。ああ、これを渡しておく。」

ダイヤモンドとパールのそれぞれが詰め込まれた指輪を1つずつ渡した。無論、ただの2つの指輪じゃない。パールは臭い消し呪文が掛けられている。パールが無事な限り、この効果は永久に持続する。

対してダイヤモンドの方は、盾の呪文全般が掛かっている。また、その魔法の習得のサポートを全力でしてくれる力がある。これもダイヤモンドが無事なら、永久に持続するわけだ。

「サイズが合わなくなってきたけども、大きさは成長に合わせて無理のない位に変化する仕様だから、買い替える必要はないよ。」

「ありがとう！ハリー!!」

夕食を食べに行った。俺らの誕生日だからなのか、豪華なケーキ、チキン、サラダ、その他もろもろが出た。エリナは、ここまで質の高い食べ物をホグワーツ以外で食べるのは初めてだという感じで、思いつきかつこんでいた。

翌日の8月1日、残っているエリナの宿題を終わらせるべく9時から面倒を見る。周りから教えるのが上手いと言われる俺でも、エリナの珍解答や天然ぶりに苦戦した。17時半で宿題は完全に終わったが、エリナよりも、俺の方が疲れた。

8月2日の午後17時。アドレー義兄さんに纏まって、エリナと二人で付き添い姿くらしでウィーズリー家の隠れ穴に向かった。隠れ穴と言うのは、南部海岸沿いのオツタリー・セント・キャッチポール村から少し外れた所にある。よって、村の外れに姿現しをした。

「ここみたいだね、アドレー義兄さん。」

「そうだね。2人共、気分はどうかな？大丈夫かい？」

「あまり気分の良い物じゃないな。」俺は、顔が青白くなっていた。あんま慣れないな。

「ぼ、ボクは……!!?!? 2人共、ゴメンなさい!!!」

少し距離を置いて、エリナが持参した袋に出来る限り食べた物を出しまくった。対して俺は、酔い止めの薬だけを飲むだけで済んだ。そ

して10分後、少し元気になったエリナ。

「お待たせ。最後に水でうがいして、すっきりさせたよ。」

「だ、そうだけど。アドレー義兄さん？」

「それじゃ、行こうか。」

初めての魔法使いに訪問した。出迎えてくださったウィーズリー夫人は、丸っこい、人の良さそうな女性だった。

「あらよく来たわねハリーにエリナ。ええと、そこの方は。」

「モリー・ウィーズリーさんでしたね。私、ロイヤル・レインボー財団のアラン・ローガーの三男、アドレー・ローガーと申します。今日は、ハリーとエリナを隠れ穴までお連れしました。」

「よろしく。アランに少し似てるわね。」

「そうですか？ありがとうございます。」

「こんにちは！ボク、じゃなかった。私、エリナ・ポッターって言います。よろしくお願いします。」

「ミセス・ウィークリー。お会いするのは初めてになるかと思っています。私、ハリー・ポッターと申します。クリスマス前のセーター、ありがとうございます。それと今月いっぱい、お世話になります。ご迷惑をお掛けになるかも知れませんが、何卒妹共々宜しくお願い致します。」

「あら。2人共、礼儀正しいわね。うちのフレッドとジョージ、ロンにも見習ってほしいものね。それにしても、ハリーはジェームズに、エリナはリリーに似てるわね。」

「ありがとうございますミセス・ウィーズリー。ですがフレッドとジョージはあの性格の方が好きですよ、私は。あの2人、いずれ大物になるに違いありません。それも、この世界に笑いを生み出す意味で。そういう才能は、彼らにはありますからね。無理に私達を見習わせなくてもいいです。あの2人は、あのままの状態が一番相応しいですから。」

「そうですよ。ウィーズリーおばさま。あのままの方が絶対いいです！」とエリナ。

「フレッドとジョージを褒めてくれてありがとうねハリー。でも、私の呼び方はそこまで堅苦しくなくていいのよ。おばさんでいいわ。」

「……了解しました、ウィーズリーおばさん。」

「さあさ、上がってちょうだい。お腹空いているでしょう。アドレー、だったかしら？アランに宜しく伝えて頂戴ね。」

「はい。チャーリーは、ドラゴンキーパーをしていると聞きましたが？」

「ええ。そうよ！去年のクリスマス休暇に、ルーマニアに行ったのよ！随分と立派だったわ！前に届いた手紙だと、最近ノルウエー・リツジバック種のメスを飼育し始めたって書いてあったわ！なんでも、ハグリッドが孵したものとみただけだよ。」

「そうですか。分かりました……それじゃあ2人共。良い夏休みを過ごしてね。ダイアゴン横丁には姉上が来る筈だから、行く予定が決まったら連絡してくれよ。」

「分かったよ義兄さん。じゃあ、気を付けてね。」

アドレー義兄さんは、俺達に手を振ってから姿くらましをした。それで、家の中へ。狭かったが、ひとりでに食器を洗っていたり、時計の針が1本しかない代わりに『お茶を入れる』『鶏に餌をやる』『遅刻よ』等の恐らくスケジュールが刻まれた時計があったりと見るもの全てが新鮮だった。

「さてと。そろそろ夕食の時間ね。皆を呼びましょうか。」

「ウィーズリーおばさん、呼ぶ事に関しては俺にやらせていただきますいんです。」

「ボクは、食器を出しますー！」

エリナよ。1人称が戻っているぞ。まあいいけどさ。

「それじゃ、お願いしようかしら。ハリーは皆を呼ぶ係で、エリナは食器を出して頂戴。」

「はい！分かりました。」

俺は、居場所を教えて貰ってから行動を始めた。まずは、パーシーか。あの人、無駄に堅物だからな。俺苦手だけど、仕方ない。

「失礼しますよ。」

ノックしてパーシーの部屋に入る。何か本を読んでいた。

「今本を読んでいて……って、ハリー!?!いつの間にもー！」

「ついさっきです。そろそろ夕食なので、1階に来るようと言う伝言をワイズリーおばさんから預かりました。」

「そうか、母さんから。分かったよ。ありがとう、すぐ行くよ。」

続いては、双子だな。やけに煩い音が聞こえる。ノックして入室する。

「お袋だフレッド！」

「分かってるって……ハリー！」

「何か取り込み中だったようだね2人共。俺は何も見なかったよ。断じて何も。ただ夕食が出来るので来るようにという伝言を預かっただけ。」

「そ、そうか。助かるよ。」フレッドが、いつもの調子を取り戻して俺に言った。

残るは、ロンと妹のジニーだっけか。まずは、ロンからだな。「入るよ。」

俺はロンの部屋に入った。あらゆるものがオレンジ色一色だった。ポスターもあるが、その全てがオレンジ色のユニフォームを着た7人の男女が手を振っている。

「ハリーじゃないか！」びっくりしたようにロンが叫ぶ。

「お久しぶり。エリナも来てるぜ。それにしてもそのポスター、クイデイツチのか？」

「そうさ。チャドリー・キャノンズのね。」

「お前のママからそろそろ夕食が出来上がるから来てくれってさ。伝言役を買って出たんだよ。」

「そうなんだ。一緒に行く？」

「まだ1人残ってるから、後で会おうじゃないか。」

「オーケー。」

残るはジニーか。女の子の部屋に入るのは流石に気が引けるな。どうしたものかと部屋を目指していると、誰かにぶつかった。

「キャア！」

「つつ！あ、ごめんね。よそ見してたよ。」

俺は、ぶつかった人物に詫びを入れる。見ると、髪は赤く、たつぷ

りとしていて長い少女がいた。エリナも赤いが、あちらは深みがかかっている。瞳は鳶色で、顔にはそばかすがある。

「君がジニーかな？」

「ええ。あなたは？」

「俺の名は、ハリー・ポッターさ。生き残った女の子と呼ばれるエリナ・ポッターの双子の兄だよ。」

「つつこりとジニーに俺は微笑みかける。ジニーは、思わず目を逸らした。あれ？嫌われたかな、俺。」

「君のママから、そろそろ夕食だつてさ。俺は先に行くね。」

俺は、さつさと立ち去ったのであった。これからは、少し距離を置いた方が良くかもしれないしね。

そんなわけで、ウィーズリー家の食卓にいたいただくことになった。味は、上手い。ロイヤル・レインボー財団のメシもあった。だけど、今の食事はおふくろの味というか、食べる人に愛情を注いでいる感じだ。これが、家庭の味か。良いものだな。

「こんな美味しい物は初めてです！これが、本当の家庭の味。おばさま……いいえ、お母様。」

エリナも俺と同じ感想だった。つか、ウィーズリーおばさんをお母様と呼び始めた。

「!?」ウィーズリーおばさんが強く反応した。

「今はかなりマシだけど、ダーズリー家ではずっと一人で、碌に食べる物も無くて、ここにきて嬉しかったです。それで……それで……」

目から水が零れ落ち始める。嬉し泣きか。ウィーズリーおばさんは、エリナをギュツと抱きしめた。

「娘よ！エリナ、あなたは我が家の二人目の娘よ！」

「お母様！」

実の親子みたいに抱き合っている二人。別に悪くはないけど、あのノリは俺には合わんな。そう思っていると、ドアが開いた。禿げ上がった赤毛と眼鏡、長身が特徴の男性が帰ってきたのだ。会うのはこれが初めてだが、この人が今のウィーズリー家の家長のアーサー・ウィーズリーか。

「ただいま、皆。いやあ、何だか賑やかだね。……!? ジェームズにリーだ!! 何で君達がここに!？」

大変驚いてるな。父様と母様の名前を言ってくれた。

「お父様、こんばんは。良く言われるけど、ボクはエリナ・ポッターです。」

「ウィーズリーさん。俺も父様に間違われますが、ハリー・ポッターと申します。今月いっぱい、宜しく願います。」

「ああ、君達が。ロンがよく話をしてくれてね。こちらこそよろしく。」

俺らは、握手した。その後、エリナ共々マグル界の事を散々聞かれた。何か車を魔改造した話は聞いた。ヤバい気がするが、敢えて指摘しない様にしよう。寝る場所だが、俺はロンの部屋に、エリナはジニーの部屋で一緒にいる事が決まった。

「なあ、ロン。」

「何だいハリー。」

「今の俺の家も悪くないし、寧ろ良い方だと思ってるんだよ。だがな、親がいて、一緒に住む兄弟も毎日のようにいるっていう当たり前だけどかけがえないものって、決して味わえないんだよな。そういう意味では、お前が羨ましいぜ。恵まれてる。」

「そうかい? そういって貰えるとありがたいよ。」

そんな会話をして、俺達は就寝したのだった。

第4話 乱闘騒ぎ

隠れ穴に来て1週間が経つ。あれから、口寄せ呪文の実験を行って成功させた。ニンバス2000、魔封石製の手錠とそれぞれ口寄せ専用の魔法契約を結んだ。動物の口寄せは、少々危険なのでやめておいた。

また、フレッドとジョージ、ロン、エリナと一緒にクイディッチの練習をした。順番にニンバス2000の乗り心地を体感した。やはり最高だ。パーシーもジニーも一緒に来ればいいのに、何で来なかったんだろうか？

ある朝、起きるとウィーズリーおじさんから封筒を受け取った。ダンブルドアの爺さんは、もう俺とエリナがここにいるのは分かっているそうだ。ダンブルドアのジジイ。下らない事に関しては、本当に抜け目が無いな。非常時にもこうすれば良いものを。能力の無駄使いなんだよ。

手紙を読むと、去年同様9月1日からキングズ・クロス駅の9と3／4番線からホグワーツ特急で来るように書いてあった。別紙には、新学期の新しい教科書のリストもある。基本呪文集が2年生仕様になった以外は、全てギルデロイ・ロックハートと言う人物が書いた本ばかりだ。

「マジかよ。今年はロックハートの本のオンパレードじゃないか!!担当はロックハートのファンの魔女だな。」

フレッドは、自分のを見終わってから俺の物をこっそり覗き込んだうえで、こう言ったのだ。4年生もなのか。

「この一式は安くないぞ。何しろ、ロックハートの本は高いのさ。」

ジョージが両親を大丈夫なのかと言う心配そうな目で見ると。

「まあ、何とかなるわ。」

そう言いながら、少し心配そうな顔をするおばさん。

「多分、ジニーはお古の物で済ませられると思うし。」

「あれ、ジニーちゃん、今年からホグワーツなの?」

エリナがジニーに聞く。ジニーは、コクコクと頷く。で、丁度パー

シーが台所に降りてきた。爽やかに朝の挨拶をして。彼が座ろうとすると、すぐに何かいた。灰色のフクロウだ。

「エロールー！」

ロンが、パーシーからフクロウを受け取り、翼の下から手紙を取り出した。内容は、ハー子水曜日ダイアゴン横丁に行くから、その日一緒にどうかと言う内容だった。予定が決まったのなら、すぐにロイヤル・レインボー財団に報告しなくては。早速手紙を書いて、ナイロックに手渡す。『分かったんよ。』と言って、飛び去った。帰ってきたのは、それから2日後だったのだ。

そして水曜日になった。朝早くに全員ウィーズリーおばさんに起こされた。ベーコン・サンドイツチを一人につき6個ずつ食べた。その後、煙突飛行ネットワークを使うことが決定した。エリナは、使ったことがないそう。そう言えば、去年はハグリッドに連れられて地下鉄で来たんだっけか。知らないのも無理はないね。ロイヤル・レインボー財団本部には置いてないが、俺は別の場所使ったことがあるのだ。

エリナが、煙突飛行ネットワークでダイアゴン横丁まで飛んだ。ダイアゴン横丁と呼んだ気もするが気のせいだろう。続いては俺だ。

「ダイアゴン横丁！」

俺は、エリナに続いて漏れ鍋に飛んだ。

「……………何故エリナがいないんだ？まさか、正確な発音が出来なかったから別の場所に飛ばされたのか？」

そう考えていると、「よおハリー。」と言う声が聞こえた。この年で、もう160越えしている少年と出会った。スリザリン生だが、俺と仲良くやっている上に、心の友というレベルの親交があるグラント・リドルだ。また身長伸びたのか。成長期早過ぎだろ。俺でさえ140前半しかないのに。

余談だがエリナは、130センチ前半のロリ体型だ。よって、隠れ穴どころかホグワーツでも下手をすれば下級生よりも小さい。既にジニーに追い抜かれているし。本人は、身長が欲しいと俺に愚痴っていた。その割に2つの脂肪分は大きくなっているがな。興味無いけ

ど。

「いつここに来たんだ？」

「いやあ、ダブルドラゴンとの抗争に勝ったはいいんだけどよお。仲間と逸れてちまって。それで、ナイトバスでここまで送って貰ったんだ。」

あの半数以上が刑務所経験のある極悪組織か。警察でも中々手が出せなかったのに、壊滅させるなんて。こいつスゲエな。

「ナイトバス？」

「何でもよお、迷子の魔法使いを助ける為に存在してるらしいぜ。んで、車掌の兄ちゃんと運転手のおっちゃん和仲良く過ごしたぜ。」

「お前らしいな。それで、もう教科書は買い揃えたのか？」

「ああ。1週間前にな。今、宿題に悪戦苦闘してるわけよ。」

と、グラントと会話してる間にウィーズリー家の人々が揃った。その後、エイダ義姉さんも来た。200ガリオン支給された。手元にあるのは、去年残った164ガリオンと合わせて364ガリオンであった。義姉さんが軽く全員と自己紹介を終わらせてから、早速エリナの捜索に向かった。俺は、またホグワーツでな、としばしの別れを告げた。グラントは、手を振っていた。

エリナは、程無くして見つかった。夜の闇横丁のボージン・アンド・バークス店に飛ばされていたそうさ。しかも、我らがフォイと出会ったとのこと。父親のルシウス・マルフォイ改めパパフォイが、フォイフォイツとヤバめの商品の売却をした。エリナ曰く、所々フォイツ言ってるのでうつつうしかつたらしい。

グリンゴッツは、始めて来たが気まずかった。と言うのも、ポッター家の金庫にはたくさんのお金があるし、金庫も3つあるのだから、ウィーズリー家の金庫には、金貨が1枚に銀貨が一掴みしかなかった。生まれた罪悪感が非常に凄まじい。その後、ハー子を始めとするグレンジャー家の面々と、同級生のゼロと、彼の実兄であるフィールド先生の兄弟とも出会った。ゼロ曰く、最近フィールド先生が経済学や株に目覚めたらしく、フィールド家の財政が20倍に潤っているそうさ。前にも増して、経済的に裕福になったとの事。

「ミスター・ウィーズリー。お久しぶりです。」

「フォルテかい?! いやあ、今はホグワーツで呪文学の教師をやってるって聞いたよ。」

「フィールド先生とウィーズリーおじさんが、握手をして再会を喜んでいた。」

それで、1時間後にフローリシユ・アンド・ブロッツ書店に集合という事になった。俺にロン、ハリー、ゼロ、エリナでアイスクリームを食べてからウインドウ・ショッピングを満喫した。

「ハリー。後で、俺達フィールド家がひいきにしてる店に行こうぜ。お前なら、別に大丈夫かと思ってるな。」

「ロンとハリーもエリナも一緒じゃダメなのか?」ゼロに聞く。

「そこは本来、フィールド家を始めとするほんの一握りの者しか知ってはいけないんだ。ダンブルドアの爺さんは、存在自体は知ってるかもしれないが、正確な場所は知らないだろう。死の飛翔やダンブルドアを全く寄せ付けない閉心術が使えるハリーなら、問題ないと俺と兄さんで結論付けた。機密保持が出来る奴なら、他の人間を招いてもいいんだよ。そういう事もあって、閉心術の体得が出来て初めてフィールド家の魔法使いとしては1人前と認めて貰えるんだ。」

「ゼロも閉心術出来るのか?」

「じゃなきゃ、兄さんに連れて来られないよ。」

フィールド家の好意に甘える事になった。その店に連れて行って貰えるからだ。

1時間後。人だかりの凄いフローリシユ・アンド・ブロッツ書店の前にいた。丁度、ロックハートのサイン会が始まったようだ。12時半から4時間やるつもりで、『私はマジックだ』の宣伝も兼ねているらしい。よって、人ごみの殆どはおぼさんだらけだった。中に入ると、すぐにロックハートがエリナを捕まえる。俺は、目くらまし呪文で難を逃れた。

エリナが、ロックハートから貰った本をジニーに譲った。自分で買うという。直後、聞き覚えのある気取った声が聞こえた。

「いい気持ちだったろうねえ、エリナ・ポッター。有名人のエリナ・

ポッター。ちよつと書店に行くだけで、大見出し記事かい？」

ドラコ・マルフォイのご登場である。人を苛立たせる腐った性根は見事に健在だ。相変わらず清々しいまでのクス野郎である。

「ほつといてよ。エリナお姉さまが望んだことじゃないわ！」

ジニーが口を開いたのは、初めて聞いた。

「ポッター、いつ妹が出来たんだい？君のママは、君が生まれてすぐにくたばった筈だけど？ああそうか。君のママは、生まれ損ないだから死んだのか。ハハハ。ゴメンね。」

こいつ、よりによつて母様を貶めやがった。どう料理してやろうかと思つたが、その必要はなかつた。フィールド先生が、マルフォイの前に現れてニコニコしていたのだ。いや、あれはマジ切れしてるんだ。

「ドラコ、あまり調子に乗らない様に。女の子を嘲るのみならず、エリナのお母様を侮辱するのが趣味とは、君のお父上とお母上の教育方針に疑問が浮かぶのだが？」

マルフォイ。ドラコの方が、分かりやすく青ざめた。普通、そこに先生がいたなんて思いもしなかつただろうね。それにだ。それを笑顔で言われてるから、尚更恐怖心が駆り立てられたのだろう。そう言えば、アレでも恐怖による支配が得意なんだよな、先生つて。特に、闇の陣営の関係者相手に。

「いやあ。凄い人だからだよ！早く外に……君は？まさか……」

「おやおや。これはこれは、アーサー・ウィーズリー。職場でも家庭でも、這いずり回るのがご趣味のようですね？それに……!? フォルテ……フィールド……」

ドラコの父、ルシウス・マルフォイが嫌味を言い来たが、フィールド先生を見て、まるで悪夢でも見るような表情になつたよ。何かあつたのだろうか？

「どうも。ルシウス。元死喰い人の分際で、分不相応な地位に就いている賢しい方だとは、闇払いでも大変話題になっていきますよ。また以前の様に、弄つてあげましょうか？」

笑顔でそう告げるフィールド先生。完全に圧倒されているルシウ

ス。

「君のお父上は、目上の人間に対する口の効き方も教えてくれなかったのかな?」

「残念ながら、礼儀の払い方を教えてくれる親もいなかったですからね……他ならぬ、あなたの所属していた組織に、罫り殺しにされましたから。」

それは初めて聞いたな。全員、意味深な表情となっている。

「話はそれだけかい? 君が大人しく闇の物品を引き渡せば、あまり苦労もしないんだけどね。」

「証拠はおありですか? アーサー。残業代も出ていないようで。その子の持っているローブも、本も、中古のように見受けませんが?」

さり気無く、ジニーの学用品を引手繰ったルシウス。一瞬、何かを紛れ込ませた様な気がした。が、すぐにジニーに返した。

「妻は儉約家だ。」

「儉約家? 子供達に満足な物を買ってあげない事をか? 金はなくとも、家族の思い出が財産、とでも? だから落ちるのだよ、どいつもこいつも似たような間の抜けた顔だ、血を裏切る者の末路に……真に相応しい。」

そして、今にも殴り合いになりそうになった。だがその時、ルシウス・マルフォイが吹っ飛ばされた。彼は、最初何が起こったかは知らなかった様だが、吹っ飛ばした張本人をみて、恐怖で顔を歪ませた。そして、その人物の名前を言った。

「エイダ!? どうして君が………ギヤアアア!!!」

言い終わらない内に、悲鳴を上げた。吹っ飛ばしたのは、エイダ義姉さんだった。しかも、普段の温厚な顔から一変して、とてつもなく怒っている。温厚な人ほど怒らせると怖いとはよく聞く。だが、今のエイダ義姉さんの状態はそんな次元の話ではない。憎悪を込めた目で、ルシウス・マルフォイのオメガを踏みつけながら見下ろしていた。

「私の視界に入れるなど、以前あれ程言った筈ですけど?」

丁寧ではあるが、非常に冷たい口調で言い放った。

「イーニアスにあんな仕打ちをしておいて、良くも抜け抜けと公衆の

面に大きな顔でいられますわね。しかも馴れ馴れしく私の名前まで呼ぶとは。失礼だとは思わないのですか？恥を知らない!!」

「エイダ……誤解だ。イーニアスの件。あれは、私ではない!本当だ!信じてくれ!!あの時、寧ろ止めようとしたんだ!頼む!!話を聞いて……く……グアア!」

「名前を言うなとさっきおっしやいましたか?あなたの耳は節穴ですか?損得勘定は出来る癖に、昔の事を忘れるとは。あなたは本当に、つくづく私の嫌いなタイプですね。顔を見るだけで虫唾が走りますよ。」

エイダ義姉さんが、ルシウス・マルフォイな腹部を蹴り飛ばそうとした時、彼女の体が縛り付けられた。フィールド先生が、呪文を掛けたのだ。

「エイダ。ここには、ハリーもいる。彼の目の前で、この男を攻撃するのは流石にマズいよ。確かに、ロイヤル・レインボー財団の力を使えば不問にはなるかも知れない。だけど、ハリーは君が犯罪者になるのを望んではいない。君を慕っているんだから。それにアランさんや、イーニアス、アドレーも然りだよ。」

フィールド先生は、静かだが気持ちに力の込めた口でエイダ義姉さんを止めた。義姉さんは、何とか説得を聞き入れた。

「分かりましたフォルテ。……命拾いましたね、ルシウス。私の手で死なずに済んで。それでも、ロイヤル・レインボー財団のブラックリストから外れる事は未来永劫ございませんが。今回だけは、我が義弟ハリーと、私の同期であるフォルテに免じてここまでにしておきます。あの2人に感謝する事ですね。」

ルシウスは、恐怖で全身ガタガタと震えている。ドラコに至っては、エイダ義姉さんのあまりの気迫ぶりに失神していた。

皆、何とも言えない気分になって書店を後にしたのだった。確かに、マルフォイに一泡吹かせられたのは良いが、あそこまで根の深い物を見せつけられてナーバスになるのは当たり前だ。

第5話 魔法道具専門店

しばらくの自由時間になった。5時間ほどだ。エイダ義姉さんとはここで別れた。教科書を受け取ると同時に、さつきは大人げない態度を見せてしまつてゴメンなさいと謝つてきた。が、義姉さんに落ち度はない事、たまにはガス抜きをした方が良くよと伝えておいた。

ウィーズリーおじさんは、フィールド先生にハー子の両親と4人で飲むことにした。おばさんは買い物、パーシーは本を見ている。フレッドとジョージは悪戯道具専門店、ハー子とエリナとジニーはペットを見に、ロンは高級クイデイツチ用品店のウインドウを見ていた。「先生とルシウス・マルフォイには、何か関係がありそうな感じだったぜ。どうしたんだらう?」

「俺も詳しい事は知らないけどな。だが、フィールドがマルフォイに礼儀を払う事は、決して有り得ないだらうな。」

「闇払いだからか?先生の前の職業が。」

「それもある。だけど兄さんは闇払いとして、一時期アズカバン逃れした死喰い人に犯罪歴を付けてやろうっていうのを、遊びも兼ねて行っていたんだよ。」

「マジかよ。パねえな。」

「実際、クラブとゴイル、ノットを始めとする殆どに対して、それは成功したんだがな。あと一歩つて所で、マルフォイは無理だったって愚痴つてたよ。ホグワーツ教師になつた今でも、兄さんはルシウス・マルフォイをアズカバン送りにする事を諦めていない。」

マルフォイ家からしてみれば、ある意味ウィーズリー家よりもタチが悪いという事か。

「あの能力の成果は?」

「ああ。自由にオンとオフの切り替えが出来る様になつた。」

「フィールド家の力つて、風だけなのか?」

「違うな。火、水、風、土の四大元素だ。兄さんは水の自然物化能力だけだ。」

「へえ。俺もウィルスの力、ここからはウィルスモードって呼ばせて

もらうんだけどき。使っている間はスタミナを消費するから、スタミナを底上げする修業も行ってる。その一環で今年から、太極拳をやり始める。」

「ハリー。当たり前だが魔法の修行も、俺はもちろんやってる。殆どの魔法を無言で使える様にする為にな。40%は完了した。」

「マジか。俺、1年の時は武装解除呪文だけしか無言呪文使えなかったぜ。戦闘用だけでも、無言で使える様にしておこうかな？」

「何か、お前ならすぐに出来そうな気がしてきたよ。」

俺はゼロと、会話しながらフィールド家御用達の店に向かった。店の名前は、『ハイタカの掘り出し魔法道具専門店』という。表向きは、廃業となった店がそのまま残っているところをそのまま使っているそうさ。

「ここに店を構えているのか？」

「ああ。一見さんお断りって奴さ。だから、存在を知らない奴にはたとえ魔法使いでも見つける事は絶対に出来ないんだよ。それに、上辺なんてどうでも良いのさ。重要なのは、下だ。」

色が変わった床の前まで来る。そこから、「合言葉は？」と言う声がした。

「会員登録した者には、合言葉が何なのか教えてくれる。時期はランダム。この店主が気まぐれだからな。今回は、牛の舌。」

床が動き、下へと続く魔法で動く自動階段が現れた。

「行くぞ。」

10分かけて自動階段で下へと下った。終わると、地下とは思えない位の広い空間が広がっていた。空間魔法を使ってるのか？

「ここは、店主のハイタカが高度な穴掘り呪文で作ったのさ。市場に出回らない物や、危険物、希少価値の高い物とかが出揃っている。客を厳格に選ぶ分、値段はかなり安い。」

「へえ〜。」

ゼロの開設を聞きながら歩くと、奥まで来た。そこには、人がいた。歳は義祖父ちゃんよりも高いだろうが、かなり若々しい外見をしている。この人が、ハイタカって人か。

「来たよ。ハイタカ。」ハイタカさんに語り掛けるゼロ。

「ゼロ、あなたでしたか。珍しいですね。あなたがここに人を連れてきたという事は、余程入れ込んでいらっしゃるらしいと見受けれます。」

「ハリー。彼はこの店の店主、ハイタカだ。俺の4代前のご先祖様と親交があつてな。その時から、フィールド家はここの常連客になつている。」

「私は、ハリー・ポッターと申します。」

ペコリとお辞儀をした。ハイタカさんは、何か感傷に浸っていた。「成る程。ポッター家の子ですか。あそこは基本的にグリフィンドールですけど、他の寮に行つたとしても成功する一族ですからね。それにしても、メイナードを思い出ます。ハリー君、あなたはメイナードの子供ですか？彼には、確かジェームズという弟がいましたね。そのジェームズもここに来ていたんですよ。今思い出すと、随分と懐かしいですね。」

父様の兄弟の話をしてるのか？そんな話、聞いた事が無いぞ。でも、俺はそのメイナードつて人の子供じゃない事を教えないと。

「そのジェームズ・ポッターが、俺の父なんです。」

「そうでしたか。メイナードとジェームズは……2人は今も元気にしてますか？」

「……………」俺は、首を横に振つた。ハイタカさんは、すぐに謝罪してきた。

「も、申し訳ございません。辛い事を思い出させてしまいましたね。そうですか。メイナードも、ジェームズも。彼ら程優秀で、ユーモアがあつて、良い人はいなかった。そう言う人間の方程、先に逝つてしまふなんて。全く、辛い世の中だ。」

ハイタカは何だか悲しそうだ。

「ハイタカ、昔話はそこまですてくれ。今日は用があつてここに来た。俺と兄さんからの推薦だ。ハリーを会員登録して、客として扱つてくれ。」

「それはいいですけど、私の開心術を防げないと話になりません。この存在は、選ばれし者だけしか知ってはならないのだから。」

「それは問題ない。ヴォルデモートとかいう痛い名前を自分につけるキモイ野郎とダンブルドアの開心術は余裕で撥ね退けるからな。」

「ゼロ。あなたがそこまで言うのなら、そのポッターの子を試みましょう。レジメンス 開心！」

俺の心の中に何かが入り込んでくるが、この程度ならば防げる。心の壁を作って、防いだ。

「大した子ですね。ほんの数秒で開心術を破られるのは初めてです。えーと、ハリー・ポッター君でしたね？君をこの店認定の会員にしましょう。」

会員名簿に俺の名前を記入し、『ハイタカの掘り出し魔法道具専門店』で買い物出来るようになった。早速、白金色の柄に漆黒の文字で銘が書かれている箒に、ワインレッドの柄に銀色の文字で銘が書かれているそれぞれの箒を見付けた。ハイタカさんに尋ねてみる。

「あの2本の箒は？」

「とあるルートで手に入れた、プラチナイーグルとレッドスパークと呼ばれる箒です。いずれも特注品でしてね。どちらも扱いが難しいのです。あまりに乗り手を振り落とすものですから、厄介払いしたいのが本音なんですよ。誰も欲しがらないから、安い値段を付けています。」

「どれくらいですか？」

「1本20ガリオンですが、2本で30ガリオン。つまり、担架に買うよりは25%お徳になりますよ。安心してください。客はシビアに厳選しますが、その代わり品物はちゃんと商品は本物を揃えているし、値段も出来る限り考慮しますのです。」

「ハリー。それは、古くからの客であるフィールド家の人間としても保障しよう。」

「分かったよゼロ。それじゃあ、買います。」即答し、金貨を30枚出した。

こんなレアな箒が2つもあるとは。箒の乗り手として、こんなに上手い話はない。仮に偽物だったとしても、話に乗ろうと決めた。箒と言うのは、登録されたものしか乗るのを許されない。強化改造も禁止

だ。強いて言えば、メンテナンスくらいだろう。

だが、1本1本職人の手で作られている箒が存在し、それならばその限りではない。その代表例がシルバーアローだ。追い風に乗れば最高112km/hまで出るその箒は、ひとりの職人の手作業による製造だった為、需要が供給を遥かに上回り、現在は製造中止になった。そのシルバーアローの理論を更に強化させたのが、プラチナイーグルとレッドスパークの2つだ。いずれも、存在を知っているが実物を見た事がある者は絶無と言われる。クイディッチの大会ルールで、使っても良い箒としてはカウントされている。

市場に出回っている箒どころか、最新式のニンバスシリーズを遥かに上回るスペックを持っている2つの箒。分かっているだけでも最高300km/h以上は確実だ。その半面、扱いは非常に困難でプロのクイディッチ選手をも簡単に振り落とす暴れ馬ならぬ暴れ箒なのだ。

それでもプラチナイーグルは、かなり良心的とも言える。何故かと言うと、バランスに優れている上に箒自体も大人しい。レッドスパークよりはだが。乗せたい人間以外には、とことん冷酷だ。しかし、一度でも乗り手を認めれば、今までの冷酷さが嘘の様に非常に忠実となる。

問題はレッドスパークだ。性能はプラチナイーグル以上だが、一番の問題児でもある。身軽だろうが、ガタイが良からうが乗り手ごとに理想的な動きをしてくれる。だが、乗りこなせればの話。従わせるのは容易ではない。従わせても反逆の意思は残っていて、隙あらば乗り手を振り落とすのだ。時には殺す事だってある。というか、死者が出ている例も存在する曰くつきの箒だ。

今年の目標は、この2つの箒を乗りこなす事が課題となるだろうな。勿論、授業も怠らないけどね。そう考えていると、ゼロも両面鏡なるものを購入して買い物は終わった。縮小呪文で箒を小さくして、自作した魔法のバッグ（2階建てサイズの家に相当）にしまう。そして、ダイアゴン横丁に戻る。

まだ2時間あるな。何しようか。と、思っているとハー子とエリナ

とジニーと再会した。

しばらくして、ロンも来た。相変わらずチャドリー・キャノンズ目当てに商品を見てたそうだ。小腹が空いたので、6人でパンを買って食べた。費用は、全部俺が出した。

帰る時間になった。漏れ鍋の暖炉に向かって、煙突飛行ネットワークで帰る。グレンジャー一家とフィールド兄弟、グラントとはここで別れた。こんな旅行の行き方はもうたくさんだと愚痴ったエリナであった。

第6話 乗り遅れ

「どうしてこうなった？」

ギリギリでキングズ・クロス駅に来たはいいが、9と3／4番線へのゲートを閉じられてしまった。駅員は、心配そうにこちらを見ている。

呆然としたのはこの俺、ハリー・ポッターだけではない。我が双子の妹のエリナ・ポッター。それとロナルド・ウィーズリー、ゼロ・フィールドにグラント・リドルの4人もだ。

何故こんなことになってしまったのか？少し遡ってみよう。

*

楽しい時間程過ぎるのはあつという間だ。隠れ穴での生活があまりにも充実していたのだ。まだ宿題の終わってなかったロンに、学校へ戻る1週間前に泣きつかれて、やむなく宿題を見ることになったりした。後は、フレッドとジョージから悪戯道具の収納スペース確保をしないと依頼されて、口寄せ呪文の契約書を渡したりもした。

1991年8月31日。俺は、エリナと2人で箒の訓練をしていた。何でも、スプラウト先生から去年の飛行訓練を見たが、素人の自分から見ても凄いと太鼓判を貰ったらしい。その上で、クイディッチの選手にならないかと言われて、もしそうだったときに備えておきたいという。熱心な事だな。ニンバス2000で練習しようとした時、プラチナイーグルが突如エリナの前に現れた。

俺はレッドスパークには振り落とされかけながらも、多少は食らい付く位に慣れてはいた。本物だな、今度ハイタカさんにまた会ったら詫びよう。対して、プラチナイーグルは俺を拒絶した。まるで、自分を完全に乗りこなすのは貴様ではないと言わんばかりの反発を食らったのだ。

それがどうだ。エリナには、かなり従順な態度をとっている。いくらアイツがあらゆる人や動物、物に好かれやすい性質だからって、ここまで露骨な区別をつけられると、俺も思わず泣きそうになる。だが、エリナに付いて行きたいって事はプラチナイーグルなりの幸せな

んだろうな。ハツフルパフにおける最強選手を生み出す事になる結果になるかも知れない。グリフィンドールが負ける要因を生み出すかもしれない。だが、その一方でクイディッチ選手としてエリナと対等な条件で戦ってみたいと思うのも、また事実なのだ。だがここは意を決してエリナに提案した。

「エリナ。良かったらそいつを使ってみないか？俺が使おうとしても、言う事を聞くどころか乗せようともしてくれなくてね。でも、お前に乗って欲しいってプラチナイーグルが言ってるような気がする。使いたいなら、プラチナイーグルを譲るよ。」

「え、いいの？でも、高かったんでしよう？」

「良いよ。せっかく買ってても、箒から反発されたうえに乗りこなすことも出来ない。俺が持つてても、宝の持ち腐れになるからね。それよりは、プラチナイーグルが乗って欲しい人間に託した方が良いかなって。結構気に入られてるようだしね。それに……」

「それに？」

「俺は、エリナ。お前とも正々堂々と戦いたい。」

「!?」俺から出た言葉を聞いて、エリナは非常に驚いていた。

「ぼ、ボクが？……そんな、ハリーみたいに箒の技術が凄いわけども、勉強もそんなに出来ないのに。それでも、ボクを対等に見てくれるの？」

「能力なんて幾らでも身に付くし、才能だけで人は測れないよ。そんな上辺だけではね。でもな。お前は失敗ばかりしてるかもしれないけど、一途で、努力家だ。俺は、そういったところを所々見せてくれるお前を見てるとき、ついつい手助けしたくなるんだ。俺みたいにならなくていいし、目指さなくていい。ただ、自分の信じる道を進めばいいのさ。まあ、これは俺を育ててくれた人の言葉をそのまま使っているけどね。その言葉を言われたときは、嬉しかったんだよね。」

「へえ。ハリーって結構唯我独尊を地で行ってそうだったけど、そんな事も無かった。」

「何てイメージしてんだよ。俺は魔法やマグルの知識を身に付けるときは、いつも見えない所で失敗してるぞ。」

「意外だね。」

「おい、俺をからかってんのか。」

ちよつと雑談も交えて、飛行訓練をする。やはりと言うか、プラチナイーグルはエリナを乗せたかったのは本当だったようだ。エリナの行きたい方向に思う様に進んだのだ。俺も、レッドスパークに跨つて、こいつを乗りこなす練習に入った。気が緩むと、今にも俺を振り落とそうとするのだ。全く。とんでもない奴だな。

練習を終わらせて、隠れ穴に戻った。その夜、ウィーズリーおばさんの素晴らしい御馳走を楽しんだ。翌朝の準備をした。そして、朝早いので寝た。

1991年9月1日。早く起きたはいいが、皆慌しかった。ウィーズリーおじさんのフォード・アングリアで俺達は駅へと向かった。そういうば、ウィーズリーおじさんって車の免許持ってたっけ？あの様子だと、持ってなさそうだな。無免許運転で逮捕されかねない。せめて、道中では事故を起こさないでくれと願うばかりだ。

だが、ジョージがファイリバスター花火を忘れたと言つて戻り、フレッドが箒を取りに行つて、次はやつと高速に入ろうかという時、今度はジニーが悲鳴を上げた。日記を忘れたという。また戻ることになった。彼女が日記を取りに戻ってきて再び車で行くときには、遅れに遅れて、皆のイライラが限界まで高まっていた。だがそこは、車が透明になって空を飛ぶことで時間短縮出来たのだが。

そんなんでキングズ・クロス駅に着いたのは、10時50分だった。ヤバイ、もう時間がない。予め俺の荷物にかけておいた縮小呪文をバッグに入れて、ゲートに入る準備をする。途中、グラントとゼロにも会う。寝坊したらしい。フィールド先生は、1週間前にホグワーツへ行つたらしく、今回はゼロ1人だった。

最初にパーシー、ウィーズリー夫妻にジニー、双子の順番で行った。そこまでは問題なかったんだが。

「ハリー、ロン、ゼロ、グラント。もうあと1分しかないよ。ボク達もさっさと行こう。」

エリナの言葉で俺達男4人は頷いて、9と3／4番線に通じる柵に

向かって歩き出した。

ガッツーン!!

先に向かったエリナのカートが、柵にぶつかってしまった。しかも時計を見ると、既に11時1分になっていて、もう出発してしまっていた。新学期早々、遅刻してしまった俺達5人。

「おい、もう出発したぞ。」とゼロが言った。

「完全に遅れたなあ。」グラントが人ごとの様に呟く。

「何で通れなかったんだろう?」エリナがヒソヒソ声で、ロンに聞いた。

「知らない。」

辺りを見渡すと、物見高い見物客が10数人いた。

「皆。聞いてくれ。このままじゃ埒が明かない。まず、柵を通れなかった事を学校に報告しないと。後、ウィーズリーさん達にこうなった経緯を話さないよ。」

「そうだな。で、どうする? 手段はあるか? 一応、両面鏡の片割れはフィールド先生が持つてるんだろう? ゼロ。」

「そうだな。俺が両面鏡で兄さんに報告するぜ。ハリー。お前はナイロックにこの事を、手紙を持たせて連絡しろ。早速やってくれ。エリナ、ロン、グラント。お前ら3人は、ウィーズリーさんのフォード・アングリアで待機してくれ。集合場所はそこにしよう。」

「了解だ。」俺は了承した。

「うん!」

「オーケー。」

「任しとけ!」

エリナ、ロン、グラントの順で俺に返事して、車に向かっていった。俺は、早速ホグワーツ宛に手紙を書く。15分で完成させて、ナイロックに手渡して、向かわせた。

更に5分が経った。ゼロは、フィールド先生に報告し終えたようだ。詳しい話は、手紙と俺達の話で補うと伝えたいうえでだ。

3分後、生徒の保護者が出てき始めた。俺とゼロは、ウィーズリーさんを見つめる。何故こうなったのか、夏休みの屋敷しもべ妖精がエ

リナのどこに来ていて、そいつの差し金の可能性が高い事、他の3人は車の前で待たせている事を話した。

ウィーズリーおじさんは、すぐに隠れ穴からホグワーツに向かおうと言ひ、車の場所まで向かう。だが、事態は斜め上にまで発展していた。

「ウィーズリーおじさん。ここに、車ありましたよね。」俺が聞く。

「そうだよね、ハリー。母さんや、私の目は狂ってないよね？ここに車が無いのは。」

「ええ、私もそうですからね。」とウィーズリーおばさん。

「まさかあいつら……」ゼロが、歯をギリギリとさせながら思った事を言おうとした。

「ゼロ、間違いない。俺も同じ事を思っている。」

2人で口を揃えて、こう叫んだ。

「あの3人、車でホグワーツに行きやがったー!!!」

最悪だ。班分けを間違えた自分を恨んでやりたいよ。

第7話 12の夜

その後、隠れ穴へ付き添い姿くらましで戻った。皮肉にも、ここに1日3回戻ってきたわけだ。

「ウィーズリーおじさん、ウィーズリーおばさん。本当に申し訳ありませんでした。私の責任です。」

俺は必死に頭を下げた。

「まあ、そんな謝らなくていいよ。そういった事情なら、不可抗力だからね。」

「あなた達2人は偉いわ。それに引き替え、ロナルド。あの子は何をしてるのかしら！」

ウィーズリーおばさんが、阿修羅の如く怒ってた。改めて思った。女性は、怒らせると怖いと。

すぐさま、煙突飛行ネットワーク^ダで、ホグワーツへと向かった。着いた先は、マクゴナガル先生の部屋だった。一足早いのが、戻ってきたんだな。

「こんにちは。ポッターにフィールド。詳しいお話を聞きましょう。私と一緒に校長室に来て下さい。」

今更逃げるかよ、と言う視線を送った。校長室の合言葉は、カントリーマームだった。相変わらずの菓子好きだな。校長よ。

校長室に入ると、校長は勿論、マクゴナガル先生以外の寮監全員が集結していた。

「2人とも、今日は災難じゃったのう。そこにお座り。それに、紅茶とカントリーマームはどうかね。わしの今のブームじゃ。」

飲み物と菓子を勧められた。ゼロは手を付けたが、俺はしもべ妖精への怒りの方が強かったので、あまり食べる気分にはなれなかった。

で、今日何が起こったのかを話した。妖精とのやり取りや、ホグワーツに危機が訪れることも。しかし、スネイプが横槍を入れてきた。

「失礼だがポッター。それは、遅刻した言い訳ではないのかね？え？」
「そんなに俺の話を否定したいのなら、開心術や真実薬を使えば良い

だけはないでしょうか？そこまで考えが思いつかないとは、余程私を貶めたいらしいですね。去年言った筈ですよ。俺にどんな感情を持って構わないが、仕事と私情を切り離せ、とね。」

「き、貴っ様あ……」スネイプが怒り狂って、今にも杖を抜こうとした。「ポッター、よしなさい。セブルス、あなたもです。少し抑えなさい！」

マクゴナガル先生が、強めな口調で俺とスネイプを止めた。

「しかし、ドビーと言う屋敷しもべ妖精か。彼ら屋敷しもべ妖精はそれなりの魔力を持っていますが、人間に損失や危害を与えるような事はしないのですが。何か訳アリって感じですね。」

フィールド先生は、ここにいる全員にこう言った。

「そうじやお、フォルテ。カントリーマームはどうかね。」

「今は会議中です。それに、甘いものは苦手です、すみません。」

「先生って、甘いものダメなのか？」

「まあな。食おうと思えば食えるんだが、自分から食べてるところは見たことないな。」

ゼロが俺に教えてくれた。そういう一面があったとはね。

「だったら、厨房の屋敷しもべ妖精にそのドビーの事を私が聞いてみます。」

こうおっしゃったのは、スプラウト先生だった。

「ポモーナ。よろしく頼む。さて、次は空飛ぶ車についてじゃが。わしとしては、事が事なので、退学は無しにしようかと思っておる。保護者には、手紙を送るがの。罰則に関しては、ポモーナにセブルス、ミネルバに委ねることにするが良いかの？」

校長が3人のそれぞれの寮監にそう伝えた。3人とも、了承したらしい。どうやらあいつら、退学にならなくて済みそうだな。

「では、ハリーにゼロ。君達は、ローブに着替えてマクゴナガル先生の部屋で待機するようにしなさい。分かったかね？」

「了解です。」俺が答える。

「分かりました。」ゼロも返事をした。

着替えてから、待機する俺達。皆が来るまで、5時間もあつた。

エリナ視点

それは、ハリーとゼロがホグワーツに連絡していた頃にまで遡る。ボクは、ハリーの指示に従って、ロンとグラントと一緒に待っていた。いつまで待てばいいのかな？でも、あの2人なら何とかしてくれる。根気よく待とう。ハッフルパフの生徒として。

「はあ。待つのは退屈だよな。」グラントが、ボク達に同意を求めてきた。

「空って青いよなあ、スキヤバーズ。」ロンは、ネズミに語り掛ける。「ハリーとゼロならよくやってくれるって。」

「そうは言ってもなあ。車の運転ならやった事あるのによお。」

あれ。グラント、今運転した事があるって言わなかったっけ。空耳だよな。免許も無いのに、出来る筈が無いよね。

「2人とも！」ロンが目を輝かせた。「車だよ！」

「ロン、車がどうしたっていうんだ？」

「グラント、この車でホグワーツに飛んでいけるよ!!」

「マジか!?面白えじゃん、やろうぜ。」

「え?でも、それって——」

「エリナ。僕達、困ってるんだよ。それに、学校に行かなくちゃ。そうだろ?半人前の魔法使いでも、本当に緊急事態なら魔法を使っているんだ……なんとかの制限に関する第19条だとか何とかっていう……」

「ええ!?だ、ダメだよ!ちゃんと待とうよ!」

「車の運転なら任せな!日本から入手したS30型フェアレディZで、リトル・ハングルトンを駆け抜けたのさ!!しかも、麻薬中毒者を轢いた事もあるぜ!!」

「サラッとして危険な事してるよこの人!!しかも犯罪までやってるし!!」

ボクは、グラントのあまりの破天荒さにリアクションを取った。

「相棒、逝こう。」ロンは、もう行く気満々だ。逝くと言ったのは気のせいだと思う。

「出発するぜ!!」

半ば無理やり後部座席に乗せられた。ゴメン、ハリー。ロンとグラ

ントの2人を止められなかったよ。グラントは運転席へ。ロンは助手席。ちなみに、トランクは全部詰め終わっている。グラントは杖でエンジンをかけながら、ワクワクしているではないか。ロンは、計器盤の小さな銀色のボタンを押す。車が消えた。レバーを倒して、車が浮かび上がった。

「線路を見つけたよ。ロン、グラント。」

「エリナちゃん。ありがとうよ。」

「進路方向は北だよ。」ロンが、コンパスで確認した。

「30分おきに見ればいいよな。俺のテクニックを見せてやるぜ！」

グラントがアクセルを踏み込む。カラスの群れに衝突する。その勢いで、カラスの群れを壊滅させてしまった。まるで、グ○セ○じゃん。窓が、カラスの返り血でべっとりとしてしまった。

「前が見えねえや。水を出してから、ワイパーで掃除しよう。」

その頃、ホグワーツ特急では、何人かの生徒が血で染まった空飛ぶフォード・アングリアを目撃した。下級生は悲鳴を上げ、上級生は何があつたんだという疑問、或いはこんな非常識はありやしないという現実逃避をしていた。

イドウン・ブラックのコンパトメント。彼女と一緒にいる少年は、弟のエックス・ブラックだ。見た目は父にそっくりだ。だけど、目と肌と髪の色は母親だ。そんなエックスは、空飛ぶ車を興味津々で見ている。

「姉ちゃん。あれ見てよ。」

「どうしたのです、エックス。」

「あの人の部屋にあつた写真にさ。マグルが使ってる車って乗り物あつたじゃん。あれが空を飛んでる。」

「何をバカな事を言つて……」

イドウンは、返り血に染まったフォード・アングリアを見た。あまりの非常識過ぎる現象に、流石のイドウンも頭が少しの間フリーズしてしまった。

『そう言えば、ハーマイオニーが先程ハリーとロン、エリナ、ゼロ、グラントを探しに私に聞きに来ましたが、まさか5人であれに乗ってる

のですか？フフツ。全くあの人たちは、本当に学校生活を盛り上げてくれますね。』

余興を提供する6人をイドウンは結構気に入っている。今年も面白くなりそうだと、心の中で大笑いした。

そんな調子を続けて、前面の窓ガラス以外は、鳥の黒っぽい赤い血で染まってしまったんだ。思わず吐きそうになったよ。慣れちゃったけどね。そんなことが何回も続いて、ようやくホグワーツが見えた。3人で喜んだ。

「着いたぜー！俺のテクニクのおかげだな。」

「免許持ってるのって言いたい所だけど、ボクはもうツツコまない様にしようっと。」

「ようし、後もうちよつとだ!!」

エンジンが甲高い音を出し始めた。あれ？嫌な予感しかしない。

「マズい！墜落する!!」 ロンが叫んだ。

「コイツ！言う事聞きやがれ！」 グラントが、必死に操作する。

「落ちちやうよおおお!!」

墜落先は木だった。フロントガラスにぶつかりそうになったけど、指輪が光ってバリアが発生した。バリアはボクを守ってくれたので、無傷だった。グラントは、右のおでこから出血していた。でも、元氣そうだった。曰く、他の敵対勢力の拳の方が何十倍も痛いのだとか。そしてロンは、絶望したような低い呻き声をあげた。

「僕の杖……真つ二つになっちゃった。」

綺麗なまでに半分に分かれた。これは、素人のボクでも簡単に分かる。この杖、直せそうにないなあ。

車が何かの音を出す。ゴスツ、ボカツ、バキヤツ、メギヤツ！っていう音が。

「もしかして……」 ボクは、恐怖で顔を埋め尽くされちゃった。

木がこちらに攻撃してきたのだ。車の屋根をハンマーの様な大枝で殴りつけている。今度は、左ドアにアッパーカットをしてきた。

「その大きな木さん！ごめんなさい！わざとじゃないんだよ!!すぐ退くから、攻撃をやめて貰えないかな？」

突然大人しくなった木であった。

「助かったぜエリナちゃん。あの木を手懐けるなんて。」

「それよりも早く行こう。」

荷物を持って、城の中に入る。車は、禁じられた森に入っただけだ。ロンが、パパに殺されちゃうよ！と叫んでたけどね。

城の中へ入って、たぐさんのトランクがある場所に自分たちの物もポーンと置いておいた。だけど、そこでスネイプ先生が待ち伏せしてた。ついてきなさいと言われた。

「これを見たまえ。」新聞に見出しを見せた。

『返り血の空飛ぶフォード・アングリア、いかぶるマグル。ロンドン塔一部損傷。』

『カラス、謎の大量変死体。』

「それだけではなく、暴れ柳まで相当な被害を被ったという情報を掴んだ。」

「あんな殺人木よりも、僕達の方がもっと被害を受けました！」

「黙れ!!」スネイプ先生が、ロンにばしつと言った。

「お前達は退学、と言いたい所だがミスター・ポッターとミスター・フィールドの証言により、既に処分は決まっている。然るべき人物を連れてくるので、そこにいるように。」

10分後、スネイプ先生が戻ってきた。ダンブルドア先生にマクゴナガル先生を。

「ミス・ポッター。事情はあなたのお兄様から聞いていますが、あなたからもしつかりとご説明なさい。」

マクゴナガル先生が、ボクに説明を促してきた。出来る限り、その時の出来事を説明した。

ロンとグラントも、補足する形で説明していた。

「なので、早くいかなきゃと思って、車に乗って来ました。何故か、汽車に乗れなかったんです。」

「ロンの言ってる事と一緒にです。」

「ミスター・ポッターやミスター・フィールドが必死に対策をしていたのに、何故あなた方は彼らの苦労を無駄にしたのですか？それに、ミ

ス・ポッターを無理やり乗せました。彼女自身には何も無かったから良かったものの、彼女の顔に一生消えない怪我を負わせてたら一体全体どうするつもりだったのですか。」

マクゴナガル先生は、静かだが怒りを込めて2人を叱った。

「……ぐうの音も出ません」ロンが言った。

校長先生が口を開いた。深刻な表情をしている。いつそのこと、怒鳴ってくれたら良かったのに。

「3人共。君達は、もうちつと思慮深い行動が出来る、とわしは思っておったのじゃが。」

「すみませんでした。2人を止められなかったボクの責任です。」

叱られて、呆然としていた2人に代わって、ボクが頭を下げた。

その後、ボクは荷物をまとめると言った。しかし、ハリーとゼロから事情は殆ど把握していたようで、退学及び減点は無しになった。その代わりに後日、罰則を言い渡すという事、保護者に手紙を書くという事で終わった。ボクからしてみれば、無罪同然だった。グラントも、保護者が手紙を碌に見ない人ばかりだから問題なしと言っていた。けどロンは、この世の終わりと言う顔をした。

夕飯は、スネイプ先生の部屋で食べる事になった。サンドイッチの皿とかぼちやジュースのボトル、ゴブレット3つが出てきた。空になると、半永久的に皿とボトルがいつぱいになった。

「俺達とことんツイテねえな。」

「全くだよ。」

『もしかしてドビーが!? あつたら聞いておかないと。』

ボク達は、食いたいだけ食べてから(グラントが、大きな袋に出来る限りありったけのサンドイッチを入れてた。そして、皿はサンドイッチで再び満タンになった)部屋を出て行く。ボク達3人は、それぞれの寮に向かおうした。

第8話 説教

俺は、ゼロとトランプで革命やポーカー、UNOで時間をつぶしてから、ホグワーツ特急組と合流した。ハリー子が俺達に駆け寄り寄ってきた。

「2人とも何処にいたの!? 散々探して、車で学校に来たっていう噂があったんだから、心配したのよ!」

「不可抗力だ、ハーマイオニー。俺達、柵を通れなかった。それに、車に関してはロンとグラント、エリナの3人だ。」

「ハリー子、詳しい話するわ。行こうぜ。」

で、夏に起った事と今日の事を話した。ハリー子、ビックリしてた。

「そんな事が……」

「いつかあの妖精、シバイてやる。」

「とにかく大広間行こうぜ。」

例の如く、後でマルフォイが突っかかってきた。だが、ドビーの名前を言った瞬間、奴から笑顔が消えた。

「おい、そいつの事を知ってそうな顔してるが、どんな関係だ?」

「い、イヤ。僕は知らない。何も聞いてない。」

さっさと逃げ出しやがった。あいつ、逃げ足だけは無駄に早いな。

そういうやり取りがある内に、大広間に着いた。ゼロとはここで別れる。もう先生方は到着している。スネイプだけいないが、3人の待ち伏せをしているのだろう。

「新学期早々、俺ってツイテねえな。」

「あなた達2人はそういうトラブルを正確に対処出来たからまだ良い方よ。」

「だと良いけどね。」

その後、新生が入ってくる。ジニーもいた。マクゴナガル先生が、組み分けで呼んでいく。ああ眠みいと思っていると、周りがザワつき始めた。どうやら、組み分け困難者が発生したようだ。

「誰?」今組み分けしている少年を指差しながら、ハリー子に聞く。

「エックス・ブラックっていう名前よ。ホグワーツ特急で1度会った

けど、イドウンの弟だわ。」

「あいつ、弟いたんだ。というか、弟どころか家族の話は聞いた事無かったな。」

組み分け帽子は、どこに入れるか迷っているようだ。だが、それももう決めたらしい。こう叫んだのだ。

「グリフィンドール！」

見事な番狂わせだった。今までのブラック家って、あの人以上は皆スリザリンドだからだ。容姿の美しい彼は、すぐさまグリフィンドールの席に向かう。女子からの黄色い声が聞こえてくる。他の寮は残念そうだった。特にスリザリンは。まあ、去年イドウンを掴み取ったのだから、エックス・ブラックもつきりスリザリンかと思われていたのだろう。

「ありえない！今のブラック家は、純血の誇りを忘れている!!」

マルフォイが、狂ったように叫んでいる。しかし、そこまでだった。「あいつは血を……」と言いかけたところで、イドウンが一睨みで黙らせたのだ。

「ドラコ、黙りなさい。今、唯一生き残っている私の家族を侮辱しようとしてしまったわね。私は、エックスがグリフィンドールに行こうが、その決断を一切咎める気はありません。立場は違っても、私の唯一生き残っている大事な家族ですのよ。」

「でも残念だなあ。イドウンの弟って、本当に男の子とは思えないほど美しいんだもん。」

イドウンの友人が割り込んでいて、残念そうにしていた。

「結局顔ですか。相変わらずですね、あなたも。」

「でもどうして兄弟で、組み分けが違うんだらう?」

「そうですね。家系で大抵は決まりますが、必ずしもそうではありませんね。我がブラック家は代々スリザリンを輩出しましたが、エックスも含めて2人グリフィンドールがいます。それと、パチル姉妹がいましたよね。パーバティがグリフィンドール、パドマがレイブンクローだった筈です。」

「じゃあ、双子で違う例って、ハリーにエリナもじゃないの?」

「まあ特殊な例ですわね。二卵性双生児なら、別の寮になる確率もある程度は高くなると思いますわ。ポッター家は基本的にグリフィンドールです。しかし、他の寮になってもおかしくはありません。何かしらの分野が非常に優れていたり、全ての力が突出していたりします。それに、最低でも2つの寮に適性があります。ポッター家は聖28一族ではありませんが、そういった意味では聖28一族に勝るとも劣らない人材がいるのではないのでしょうか？」

「ポッター家って凄いなだね。でも翌々考えれば、エリナが変身術に關してはイドウンを上回っていたり、ハリーが闇の魔術に対する防衛術に魔法薬学の知識、それに箒の腕が専門家やプロレベルだったりするんだね。」

「そんなやり取りを超感覚呪文で聞いていた俺。マジで弟いたのかよ。組み分けは続く。俺の知る限り、ルーナ・ラブグッドはレイブンクロー、ハーバート・スキヤマンダーはハッフルパフ、レナルド・ホワイトはスリザリンに組み分けされた。そしてジニーは、例の如くグリフィンドールに組み分けされ、残る1人も無事組み分けされた。「エヘン。新入生の諸君、ホグワーツ入学おめでとう。色々話したいのじゃが、今は思いつ切りかっこむのじゃ。」

校長のその言葉と共に、テールには沢山の豪華な食事が出た。早速戴いた。去年もこんな感じだったな、ステーキの筋肉と戦闘しながらこう思ったのだ。食べ終わると、今度はデザートが出てきた。俺は、アイスとカスタード・タルトを皿に盛った。

すると、どこからともなくスネイプが校長とマクゴナガル先生に何やらヒソヒソ話して2人を連れて行った。エリナ達、見つかったのか。

「今入ってきた先生って、誰なんですか？」

俺に誰かが質問してきた。振り向くと、イドウンの弟エックス・ブラックが俺に聞いてきた。

「あの人は、セブルス・スネイプって先生だよ。魔法薬学担当さ。だが、闇の魔術にも結構詳しくてね。闇の魔術に対する防衛術の職を担ってららしい。あと、一説によれば、変態ヘビの部下だったって噂

だ。」

「変態へびって誰の事を言ってるんですか？」

「ごめん。例のあの何とか、闇の帝王と言えば分かるかな？」

「コーヒーを飲みながら、エックスに解説する

「成る程。プリンアラモード卿の事を言ってたんですね!!!」

俺は、コーヒーを吹き出してしまった。ヴォルデモートの名前を恐れてないらしいが、名前を間違えている。

「故意に間違えてるよね？君。いいや、エックス。」

「いいえ。僕なりの呼び方です。姉ちゃんが、闇の帝王の名前はあまり公衆の面前で言わない様になって言ったんです。」

「へえ。イドウンがねえ。」

「確かあなたは、ハリー・ポッターさんですよ？姉ちゃんが、色々話してましたよ。写真も見せてくれたし。何でも、グリフィンドールの切札だって。あと、救世主や英雄とも呼ばれています。」

「別にそんな二つ名が欲しくて、行動してたわけじゃないんだけどね。あと、さん付けは良いよ。普通にハリーって呼んでくれ。」

「ではハリー先輩。これから宜しく願います。」

「こちらこそ。」

俺は、エックスと握手した。意図したわけではないのだが、早速下級生と仲良くなったわけだ。グリフィンドールの女子から獲物を見る様な目で見られているのは、多分気のせいだろう。後ジニーからも。うん。

「それで、ロナルド・ウィーズリーとグラント・リドル、エリナ・ポッターが車で学校に来て、退学になったって聞きましたか？」

「車で学校に来たって言うのは知ってるけど、多分退学にはならないね。」

「え？それってどういう事ですか？」

「俺の妹、エリナ・ポッターがいるからそうはならないね。仮にエリナを退学してみなよ。学校にたくさんのおえメールが来るだろうし、魔法省もそこまで厳しくしなくて良いんじゃないかっていう連絡が来るよ、きつと。それに、校長も出来る限り処罰は軽減する筈だから

ね。」

「そうですね。車が、暴れ柳に突っ込んだ所、見てみたかったなあ。」
「あまり気分の良いもんじゃないから、やめておいた方が良いでしょう。」

そんな話をしていると、食べ物が消えた。例年通りの注意があった程度で済んだ。ただ、ロックハートの自己紹介が長つたらしくて、ウザかったけど。これなら、同じ寮の出身者でもフィールド先生の方が何倍もマシだね。

グリフィンドールの寮に行く途中でエリナ、グラント、ロンと再会した。3人とも、俺の顔を見るなり、気まづくなった。怒る気にもなれない。呆れたね。

「お前ら。俺達がちゃんと対策しとくから待つてろって言ったのに、どうやら事件を起こさないと気が済まないらしいな。」

冷たく言い放った。

「で、でもハリー。聞いてよ。僕ら遅刻しないようにしたんだよ。」

「ロン！それがこの結果だと言いたいのか。ここまで車で来れたのは、さぞ幸運だったろうな。でもな、一歩間違えれば3人とも死ぬところだったんだぞ!!分かってんのか!!」

ヤベ、つい感情的になり過ぎたな。でも、俺の配置ミスもあるとはいえ、こいつらのバカさ加減には本当に呆れたよ。

「エリナ。何故もう少し強気な態度で2人を止めなかった？優しいのは大いに結構だが、もう少し身近な奴にも嫌われる覚悟で、全力で止めようっていう勇氣を持つべきだったな。」

「ごめんなさい。」

「グラント。お前、悪ノリし過ぎ。それもいいが、もう少し自制つてものを持つべきだな。」

「す、スマねえ。やり過ぎた。」

「罰則なだけ、まだ良い方だよ。俺から言いたいのは以上だ。行くぞ、ロン。」

「2人とも、じゃあね。」

「おやすみ。」

「またな。」

俺は、ロンを引き連れてグリフィンホール寮に改めて向かった。太った婦人の肖像画まできた。監督生から教わった「ワトルバード」と言つて、談話室に入つていった。突然ワツと拍手の嵐だった。皆、ロンを英雄でも見るようにしていた。でもパーシーだけは不機嫌に見ていた。それでも、数の力には勝てなかつたけど。ロンも有頂天になつていやがる。はあ、こいつら。そう思いながら、怒る気力も失せた俺であつたのだつた。

後から聞いた話では、ハツフルパフとスリザリンでも同じような事が起こつたらしい。

第9話 ギルデロイ・ロツクハート

翌日。朝食と言う優雅な時間を満喫していた時に、それは壊れてしまった。その原因は、フクロウ郵便にある。ロンに届いたあるものが原因だ。ウィーズリー家のフクロウ、エロールがポテトチップスの山に墜落した。

「エロール！」

ロンは、気絶しているエロールから赤い封筒を取り出した。その瞬間、ロンの顔が恐怖と絶望に満ち溢れた物になった。フレッドとジョージは、逃走している。

「皆見ろよ！ロンのママから、吠えメールが届いたぞ!!」

シエーマス・フィネガンが、大広間にいる全員にそう叫んで知らせた。途端に、至る所から笑い声が上がった。

「吠えメールってなんだ？」グラントが、マルフォイに聞く。

「今に分かる。僕が説明するより、見た方が早い。」

マルフォイは、グラントに出来る限り関わりたくないようだ。

「僕も昔、ばあちゃんから貰った事があるけど、酷いんだ。ろ、ロン、早く開けた方が良いよ。もっと酷い事になるから。」

ロンは、開封した。と、同時にウィーズリーおばさんの声が100倍に拡声された状態で大広間に響き渡った。

『ロナルド・ウィーズリー!』

「お、お母様の怒鳴り声が拡声されてる。グリフィンドールの席に行こうつと。」

エリナが駆けつけた。責任感じてるんだな、あいつ。

『車を盗み出すなんてどんな神経をしてるの！退校処分になっても当たり前です！お前には、本当に呆れました!!私とお父さんがどんな思いをしたのか、お前はちよつとでも考えたんですか!?!昨夜ダンブルドアからのお手紙を貰って、私たちがどんなに恥ずかしい思いをしたのか、分かっているの!?!こんなことをする子に育てた覚えはありません!ビルにチャリー、パーシーを見習いなさい!それに、今回の事態を冷静に対処したハリーもです!』

「お、お母さん。僕の名前は、出さないでください。」

ガクブルしながら、パーシーが小声で言った。俺の名前まで出てきたのは、完全に想定外だったな。

『どこまでもふざけて！お前は、よりによってエリナも！私達の大事なエリナも無理矢理巻き込んだ挙句に、危うく死なせてしまうところだったのよ!』

「ぼ、ボクの事も……」

相当落ち込んでるな、エリナの奴。まあ、これで俺以外にも純粹に心配してる人もいたって事にはなるな。

『全く愛想がつかしました！お父さんは役所で尋問を受けたんですよ!!』

「そ、そんな。1ヶ月間お世話になったお父様まで……」

『あら、エリナ。あなたが気に病む必要はないのよ。それよりも問題なのは……ロナルド!!お前です!!』

「は、はいーママ!!」

『今度ちよつとでも規則を破つてごらん！退学になる前に、私がお前の耳を引つ張つて家に連れ帰りますからね!!』

そして、吠えメールは最後にジニーの方を向いた。

『ジニーちゃん。グリフィンドールに決まっておめでとう。パパもママも鼻が高いわ。記念に山Pと温水のポスター、送っておくわ。』

吠えメールは、炎となって燃え上がり、チリチリと灰になった。一連のやり取りが終わった直後、大広間は大笑に包まれた。一気に食欲が無くなったのだ。それ以上に、ロンとエリナのダメージが大きすぎた。反省してるようなので、態度は柔らかくしておくか。

新学期最初の授業は、薬草学だ。正直去年は1号温室でしか授業をしなかった。3号室は、もつと危険な魔法植物が置いてある場所なので、怖いよりは興味津々の気持ちの方が強い。ロックハートに絡まれたエリナが温室に入ってくると、スプラウト先生が授業を始めた。「今日はマンドレイクの植え替えをやりませう。誰かマンドレイクの特徴が分かる人はいますか？」

例の如く、ハー子の手を挙げた。マンドレイクか。居酒屋にいる煩

い客みたいな声を出す連中だった筈だ。

「マンドレイク、別名マンドラゴラは強力な回復薬です。」

相変わらずだな。教科書の内容そのままじゃん。それだけ、記憶力が凄いと言われればそれまでだけど。

「姿形を変えられたり、呪いを掛けられた人を元の姿に戻すのに使われます。」

「大変よろしい。グリフィンドールに10点。」スプラウト先生が言った。

「マンドレイクは、大抵の解毒剤の主成分になります。ですが、危険な面もあります。その理由が言える人は？」

またハー子の手が挙がった。これははつきりと覚えているから、ゆっくりと手を挙げてみる。スプラウト先生、俺が挙手をした事は予想出来なかったらしく、一瞬驚いていた。

「それでは、ミスター・ポッター。」

「マンドレイクの泣き声は、それを聞いた者にとって命取りになります。しかし、それは成熟した個体に言えること。ここにある若い個体の鳴き声であれば、数時間だけの気絶で済みます。」

もっと詳しい本が、ロイヤル・レインボー財団にあったから、若い苗の事まで言えたんだよね。でも、先生はそこまでの答えが返ってくるとは思わなかったようだ。

「大変素晴らしい！グリフィンドールに20点！さて、ミスター・ポッターが言ってくれたように、この苗はまだ若い。ですが、それでも気絶します。耳宛を付けておくように。」

一緒にの班になったのは、ロン、ハー子、エリナ、ジャステインだった。

「ハリー、お久しぶりです。」

「ジャステインか。夏休みはどうだった？」

「まあ、充実してましたよ。話変わりますが、昨日のハツフルパフ寮は、あの一件でお祭り騒ぎ。エリナはかなり落ち込んでましたけど。本当に飽きませんね、魔法界って。」

「レイブンクロー以外で、やっぱりそうだったか。グラントもそう

言ってたな。」

「スリザリンもなんですか。」

「うん。」

あと、ロンとハー子を紹介した。雑談を交えながら、授業に取り掛かる。これが意外と難しかった。あれを簡単そうに手際良くやってたスプラウト先生はすげえな。授業が終わる頃には誰もかれも汗まみれの泥だらけで、体があちこち痛んだ。

「清めよ。スコージファイ 拭え。テルジオ 癒えよ。エビスキー ……ふむ。こんなものか。」

汚れを落として、体も回復させた。次のマクゴナガル先生の授業は、コガネムシをボタンに変えると言うものだった。黒檀の杖は、戦いや変身術に優れている。変身術の授業では、いつもこれを使っているのだ。あっさりと、課題を終わらせた。俺を除いて出来たのは、ハー子だけだった。みんな出来てなかった。夏休みにやったこと、忘れたんだろうな。

一番酷かったのはロンだった。杖が真つ二つになってしまい、スペロテープでつぎはぎをしたは良い。だが、あれは素人から見ても直せないなと思った。とんでもない時にパチパチ鳴ったり、火花を散らす。変身させようとする度に、濃い灰色の煙でモクモクとロンを包み込んだ。

授業ベルが鳴って、昼休みに。俺は、ロンに付き添った。

「新しいの買って貰え。」

「ああ、そうすりゃ、また吠えメールが来るさ。『杖が折れたのは、お前が悪いからでしょう——』ってね。」

杖を貸し出しても良かったが、生憎どれも俺以外には従いたくもない杖しか持ってない。6本共、それだけ我が強いんだ。使わせたら、ロンが入院と言う事態になりかねない。だからやめた。

ハー子と3人で昼を食ってから、中庭に出る。すると、何やら言い争いが聞こえた。

「何だ?。」

俺達が向かうと、エリナとアーニー、マルフォイ、クラブとゴイル、見知らぬ小柄なグリフィンドール生とエックスがいた。

「またお前か、マルフォイよ。とことん懲りん奴だな。」

「ぼ、ポッター。何で？」

「あんだだけデカイ声で騒ぎを起こしてりや、誰だつて駆け付ける。それに、お前には丁度聞きたい事もあるしな。」

「クラッブ、ゴイル。行くぞ！」

即座に退散した。

「助かったよハリー。」アーニーが礼を言ってきた。

「お前ら、何があった？」

「うん、それはね……」

エリナが説明する。ロックハートの授業後、小柄なグリフィンドル生コリン・クリービーが、エックスを連れ回して写真を撮らせろとせがんできたのだ。そこにマルフォイが来たようで、アーニーにエリナの写真を持つておけばマクラミン家もつと金を持てるのにと、そしてエックスには今のブラック家は落ちる所まで落ちたとほざいたようだ。で、一触即発になりかけた時に、俺達が来たってわけだ。

「あいつ、ナメクジを食らわしてやる。」ロンが、報復を宣言する。

「やめておけ。少しでも規則を破ったら、今度こそ退学になるぞ。」

「そうよ、ロン。今は耐えて。」

そんなやり取りがあつてから、闇の魔術に対する防衛術の教室に向かった。ロックハートかあ。まだ、フィルチと学校全体の掃除してる方がマシだな。

やがてクラス全員が着席し、ロックハート大きな咳払いをした。ネビルの『トロールとのとろい旅』という本を取り上げ、表紙の写真と一緒にウインクしてこう言った。

「H A H A H A H A！私だ。」

「ハ―子。俺、この授業さぼっていいか？自分で言うのもアレだが、自習の方が身に付く気がする。」

「駄目よハリー。ちゃんと聞かないと。ね？」

ああ。ハ―子がミーハ―だったなんて全く知らなかったわ。

「ギルデロイ・ロックハート。勲3等マーリン勲章、闇の力に対する防衛術連盟名誉会員、『週刊魔女』5回連続『チャーミング・スマイル賞』

受賞——もつとも、私はそんな話をするつもりはありませんよ。バンドンの泣き妖怪バンシーをスマイルで追い払ったわけではありませんせんからね。」

「笑えん冗談だな。」小言で呟く俺。

下らない演説の後、小テストが行われた。こう書かれていた。

1 ギルデロイ・ロックハートの好きな色は何？

2 ギルデロイ・ロックハートの密かな大望は何？

3 現時点までのギルデロイ・ロックハートの業績の中で、あなたは何が1番偉大だと思うか？

3 ページもこんな質問だった。ビリビリに引き裂きたい気持ちを抑えながら、読んでいく。

5 4 ギルデロイ・ロックハートの誕生日はいつで、理想的な贈り物は何？

もう答える気も失せた。30分後、ロックハートは答案を回収した。クラス全員の前でパラパラとそれをめくった。

「チツチツチ……私の好きな色がライラック色だということをおとんど誰も覚えていないらしい……誕生日が1964年1月26日。贈り物は、魔法界と非魔法界のハーモニーですね——オグデンのオールド・ファイア・ウィスキーの大瓶でも大歓迎です。……ところが、ミス・ハーマイオニー・グレンジャーは全ての質問に正確に答えました。パーフェクトです!!ミス・グレンジャーはどこにいますか？」

ハー子の挙げた手が震えていた。

「素晴らしい!全く素晴らしい!!満点です!グリフィンドールに10点あげましょう!」

皆引いていた。いらねえ。しかも誕生日じゃなくて、もはや生年月日になってやがる。

「では、授業に入っていきます。さあ——気を付けて!魔法界でもっとも穢れた生き物と戦う術を授けるのが、私の使命なのです!なのでどうか、叫ばない様をお願いしたい。こいつらを刺激してしまうといけないのでね。」

ロックハートが低い声で言った。そして、パツと覆いを取り払っ

た。

「捕らえたばかりのコーンフォール地方のピクシー小妖精。君達がこいつらをどう対処するのを見てみましょう。それ!!」

ロックハートが檻を開けた次の瞬間、ロケットのようにピクシー妖精が四方八方に教室中へ飛び立つ。2匹が、ネビルの両耳を引っ張り上げて空中に釣り上げた。ガラスの破片の雨を浴びせている奴もいる。暴走するサイよりも厄介だった。インクを振り撒く、本やノートを引き裂く、壁から写真を引っぺはがす、ゴミ箱をひっくり返す、本やカバンを割れた窓から投げ捨てるなどと大惨事だった。

「さあ、さあ、捕まえてごらんささい。たかがピクシーでしょう?」

ロックハートは、腕まくりして杖を振り上げながら、格好つけて「ペキスピクシペステルノミ——ピクシー虫よ去れ」という意味不明の呪文を唱える。が、効果は無かった。逆に杖を奪われてしまった。

俺は、ナナカマドの杖を右手に生徒全員に机の下に避難して目を閉じてると言った。

「さて、光や電気によるあの呪文を派生させた幻術でも使ってみるかアンベル・ハゲラな。雷電閃光!」

今回は対象が多かったので広範囲仕様の閃光で放ったが、狭範囲で対象の少ない場合は電流として発射も出来る。閃光や電流がある程度杖から離れると、一瞬ピカッと光る。その時に相手の目を眩ませて、幻を見せつける事で混乱や動揺を誘う呪文だ。ピクシー妖精は、この呪文で全て混乱した。あと、ロックハートもかかった。テキパキとピクシー妖精を籠に戻した。終わったところで、丁度授業ベルが鳴り、教室から出て行った。

その後、何故か皆から拍手された。何でかは、分からん。

第10話 穢れた血

ピクシー妖精の一件から、俺には『ピクシー・ハンター』の異名が付いたらしい。それと、コリン・クリービーからの追跡の対象が主に俺になった。まあ、エックスがささやかな妨害をコリンに行っているのもあって、追跡を振り解くのは凄く簡単だったけど。

後、暇な時にレッドスパークを乗りこなす練習もやっている。購入した直後よりは、ある程度乗りこなせる様になったが、まだまだだな。箒と言えばクイディッチ。クイディッチと言えば、グラントがビーターになったと言っていた。魔法薬学の授業で聞いたんだよな。

何でも、去年の石投げをスネイプが見ていたようで、車で学校に来た事による罰則で退学になるかビーターになるか、どっちかを選べと言われたらしい。で、本人は後者を選択したそう。本人曰く、クイディッチはやってみたかったらしいので、結果的に罰則というよりご褒美になってしまったわけだが。

そんなこんなで、平日が終わった。土曜日の午前にはハグリッドからお茶に誘われたので、主にロックハートの愚痴を言おうかと思っていた。だが、起きる筈の時間よりも数時間早く、オリバーに起こされた。「にやにやと?」

「クイディッチの練習を始めるんだ。」

「マジか、オリバー。夜が明けたばかりじゃん。」

「大マジだ。これも新しい練習計画の一部。君が夏休みに送ってくれたカリキュラムを、僕なりにアレンジした。今日、それを実践する。箒を持つんだ。行こう。」

「新しい箒が使えるか試したいから、そっち持ってって良い?」
「構わない。その箒の使用も想定したプランも考えなければな。ハリー、15分後に更衣室で会おう。」

クイディッチ用のローブを着て、更衣室へ向かった。他の選手達はもう既に来ていたが、目が完全に覚めているのはオリバーだけだった。フレッドもジョージも腫れぼったい目で、くしゃくしゃ髪もまま床に座り込んでいたし、アシリアは壁にもたれかかってコックリコツ

クリやっている。向かい側では、アンジェリーナとケイティがあくびをしている。

オリバーは、クイデイツチ競技場の全図を何枚も掲げた。そのうえで、新戦略についての演説を始めた。俺以外は、全滅寸前になっている。

「という事だ、諸君。何か質問は？」

俺が手を挙げる。

「昨日までに言って欲しかったんだけど。それなら、準備も出来たのになあ。」

皆、激しく頷いた。オリバーは、ムツとしている。

「いいか、諸君。よく聞けよ。我々は確かに去年、クイデイツチ杯に勝てた。そして、優勝した。だが、それを維持していくのは簡単ではない。今年も2回目の優勝をする為には他のチームを凌駕する必要があるんだ！よって、今年は今までよりも厳しく練習していきたい……よーし、行くか。新しい戦術を実践していこう！」

オリバーは大声でそう言うと、箒をぐいとかんで先頭きつて更衣室から出て行った。皆も欠伸をしながら、それに続いた。スタンドにロンとハー子がスタンドに座っているのを見つけた。

「まだ終わっていないのかい？」ロンが信じられないという顔をした。「まだ始まってもない。オリバーが新戦術を教えてくれたばかりだね。」

コリン・クリービーは、最後尾の客席に座っている。俺をつけに来たのか。カシヤカシヤと写真を撮っている。エックスはいないのか。案外、休みの日は寝坊助なのかな？オリバーがスリザリンのスパイじゃないかと疑った。俺は、あいつはグリフィンドールだよ、と答えおいた。

「それに、スリザリンにスパイは要らないぜ。」ジョージが言った。「何でそう言えるんだ？」オリバーは、短気になっている。

「御本人達がお出ましさ。」ジョージが指差しながら、そう言った。

グリーンズのローブを着込んだ集団が競技場に入ってきた。オリバーは怒り心頭で話をつけに行った。俺達も後に続いた。

「フリント！我々の練習時間だ。今すぐ立ち去れ!!」

「カツカするなよ、ウッド。これ、読んでみろ。」

フリントは、こちらにメモを渡した。オリバーがひったくる様に受け取って読み上げる。メモの正体は、スネイプの許可証だった。新しいシーカーにビーター、チェイサーを教育する為と書いてある。

「新しいシーカー、ビーター、チェイサーだど!?誰だ、そいつらは?見せてみる!」

大きな4人の中から、小さな3人組が現れた。ドラコ・マルフォイ、グラント・リドル、それに時々イドゥンと行動を共にしている女だ。

「まさか、グラント。お前、本当にビーターになっていたとはな。」

「やるからには、本気で行かせてもらおうぞ、ハリーよ。絶対によお、俺は負けねえぜ。手加減無しだ。」

「そうこなくては。去年のスリザリン・チームは、あまりに齒ごたえが無さ過ぎたからね。これ位はやって貰わなくては。」

お互いに本気を出し合おうという雰囲気になっていた。他全員は、思わず啞然している。

「何か2人だけで勝手に盛り上がり上がっちゃってるんだけど!」

恐らく新人チェイサーであろう、その女がこちらに割り込んできた。

「……あ！イドゥンと時々一緒にいるいつぞやの癒者だ!」

「どういうあだ名つけられてんの、私。でも、こうやって自己紹介するのは初めてだったよね。私、ルイン・ローズブレード。新しいチェイサーだよ！イドゥンから聞いてるよ、ハリー・ポッター。獅子寮の切札さん。勝負には勝つから。」

愛想の良い奴だが、気が強そうな奴だな。と思ったのが、正直な感想だ。

「シーカーは、もつとマシな人選が出来なかったのか?ビーターならともかく、シーカーは無いだろ。」

俺は、マルフォイを指差しながら2人に聞いた。

「そこは、訳アリなだけだね。」

「言っておくが、実力で入ったぞ。俺らは。」

「言われなくても分かるわ。っーか、グラント。お前、半分罰則じゃねーか。結果的にご褒美になったけど。」

「うっーそ、そこは言わないでくれよお！」

一方で、マルフォの方は不評を買っていた。

「ルシウス・マルフォイの息子じゃないか。」フレッドが嫌悪感を剥き出しにした。

「ドラコの父親を持ち出すとは、偶然の一致だな、ウィーズリー。その方がスリザリン・チームに下さったありがたい贈り物を見せてやろうじゃないか。」

スリザリン・チームの7人は、自分たちの箒を突き出した。グラントとルインは、あまり乗り気では無かったが。ピカピカに磨き上げられた新品の柄に、美しい金文字で銘が書かれている。『ニンバス2001』と。俺の持っているもう1つの箒『ニンバス2000』の後継機じゃないか。

「呆れた。自分の力じゃなくて、金の力でチームに入ったわけか。これなら、グラントとルイン・ローズブレードの方がまだマシだな。この外道め！」

吐き捨てるように言った。

「ふん、ポッター。これが、持つ者と持たざる者の違いって奴だよ。シンプルだけど、分かりやすくて良いだろう？」

得意げに、ニターツと笑っている。

「だったら尚更、俺の、今持っているこいつを一日でも早く乗りこなす必要があるな。」

レッドスパークを握りしめる。

「え？それって、レッドスパークなの!？」

「ルイン・ローズブレード。こレッドスパークいつを知ってるのか？」

俺が聞いた。

「うん。希少価値の高さとスペックにおいて、現状どの箒をも上回る代物だよ！」

「ルイン。本当かい!?ポッターが、どうしてそんな箒を。」

一転して焦りの表情を見せるスリザリン・チーム。

「でも、あまりに性能が高過ぎて乗り手を振り落としたり、時には殺す事もある悪魔の箒と言われているわ、ドラコ。ハリーの言い方からして、乗るのはそう簡単でもない様だけどね。でも、乗りこなせば、それに見合った力を見せてくれる。ニンバス2001が7つあっても勝てるかどうか。」

スリザリン・チームは大変驚いている。そんな物がグリフィンドルにあったとは、予想出来なかったらしい。そこへロンとハリーが駆け寄ってくるのが見えた。

「どうしたんだい？どうして練習しないんだよ。それにマルフォイの奴、こんなところで何やってるんだ？グラントは、まあ分かるけど。」

ロンが、マルフォイとグラントの方を見て言った。

「俺やお。ビーターになったんだぜ。ロン。」

グラントが愛想良くロンにそう言った。だがマルフォイは、ロンを見下すかのように言い放った。

「ウィーズリー、僕はスリザリンの新しいシーカーなのさ。父上が、チーム全員に買ってあげた箒を、皆で称賛していたところだよ。」

全員じゃないけどなど、俺は心の中で訂正した。

「呆れたわ、マルフォイ！何がスポーツよ！こんな不正同然で入った人を、箒提供っていう理由だけで入れるなんて！真剣に打ち込んでいるグラントやルインに失礼だと思わないの!!キャプテンでしょ!?!あなた!」

ハリーが、きつぱりとした物言いでフロントに抗議した。

「うぐっ！………う、うるさい！部外者は引っ込んでろ!」

「そうだぞ、グレンジャー。誰も君の意見に耳を貸す奴なんていない。すっこんでろ………この……『穢れた血』め!!」

「!」こいつ。よりによって。俺は、杖を出そうとする。

だが、俺だけではなかった。途端に轟々と声が上がった。

「良くもそんな事を!」アシアが金切り声を上げた。

「テメエ、マルフォイ!親父から行って良い事と悪い事の区別を学ばなかったのか!」

フレッドが、今にも突っかかろうとしている。が、フロントが立ち

塞がっている。

ロンも、杖を出した。

「思い知らせてやる！ナメクジ食らえ！」

バーンと大きな音が聞こえる。

「フオオオオオオイ!?……………あれ、何ともない。」

そう言えば、ロンの杖って折れてたよな。魔法を使う度に失敗しているんだ。まさか。

「ロン！ロン！大丈夫!?!」

口を開いたが、言葉が出ない。そうか、逆噴射で呪いが自分に当たったのか。という事はだ。それが意味するものとは……………

ロンは口から第1子を産んだ、のではなくナメクジを吐き出した。グリフィンドール・チームの面々も心配そうに見ているが、近寄りたくないようだった。コリンは、第1子が生まれた、おめでどうって言うてる。対して、スリザリン・チームは大爆笑していた。ただ、ルインはドン引きしていて、グラントは状況が付いて行けないようではあった。

「ハグリッドのとこ行くぞ。」

「そうね、そこが1番近いわ。」

「ドラコ、テメエ。今日の借りは、クイディッチの試合で何億倍かにして返してやる！首を洗って待っていやがれ。」

「ざまあないねポッター。さっさとあのデカブツの所へ行ったら?」

オリバー達にこの事態は任せて、ハグリッドの小屋へ直行した。

「ほれ、ロン。皆吐いっちゃまえ。」

「今、第147子まで産んだ筈だよ。」俺が言った。

「結構産んだな。どうしてこういう事に?」

「実は……………カクカクシカジカ。」

さつき会った事を話した。

「あの近親相姦しか取り柄の無い三下小悪党のフオイフオイの倅め。ハーマイオニーにそんな事言ったのか?そりゃロンも、呪いを掛けたくなる。」

ハグリッドは、大憤慨した。

「あいつの思いつく限りの最低の言葉だ。」ロンが、吐く合間を縫ってそう言った。

「殺してやろうかと思ったよ。でもそれ以上に、周りが熱くなり過ぎてたけどな。」

「ハリー。その、穢れた血ってどういう意味？」

「ハリーはマグル出身者だから、分からなくても無理はないな。マグル生まれに対する呼び方の、最低の汚らわしい言葉だ。場合によっては、俺みたいな半純血にも使われる時もある。いずれにせよ、一滴でもマグルの血があれば言うかもな、純血主義者の無能共は。例えば、そうだな。アフリカ系の人をニガーって呼んだり、日本人をジャップやイエローモンキーって呼んだり、と言えば分かりやすいか？」

「そんなー」ハリー、絶句した。そりや、そうだよな。

「俺も、特に義祖父ちゃんや義兄さん、義姉さんには絶対言うなって言われてる。元々マグルの文化や技術には大いに世話になってるから、言うつもりなんて全くないけどね。むしろ、感謝感激の感情しか無いわけだ」

「全くだよ。」またロンが話に割り込む。

「マグルと結婚してなかったら、僕達魔法族はとつくのとうに滅んでるよ。」

「ハリー。お前の方が優秀だから、別に気にするなよ。今日の分は、まとめてクイディッチでやり返してやるさ。俺を悪く言うのは、まだ我慢出来る。だが、マルフォイは、俺を怒らせた。友や仲間を侮辱したり、傷付ける事をしたんだ。あいつに、憤怒の恐怖を味わせてやるからよ。」

俺は、3人にそう宣言した。

「ハリー。ありがとう。」ちよつと泣いているハリー。

「その心意気は凄いでハリー。」

「どうも、ハグリッド。」

「しかし、ロン。お前さんに呪いが跳ね返ったのは、かえって良かったかもしれない。ルシウス・マルフォイが、学校に乗り込んできおったかもしれないぞ。お前さんが奴の息子に呪いを掛けちまったらな。」

「物理的にも社会的にも、抹殺されてたかもな。ま、義祖父ちゃんにその連絡をしておけば軽く出来るけど。流石のマルフォイ家も、全世界に影響を持つてる団体そのものに手を出そうとは思わないだろうしね。どういいうわけか知らんが、ブラックリスト入りしているから。」

その後は、話題を変えて雑談して、小屋を後にした。マクゴナガル先生が、ロンに罰則を言い渡しに来た。何でも、ファイルチとトロフィー・ルームの銀磨きとなった。最悪だ、と本人が嘆いていたが、規則を破ったんでしょと言うハー子の言葉にぐうの音も出なかった。それで、午後8時に罰則が始まるので、余裕をもって出掛けさせた。

第11話 継承者は誰だ？

1992年10月31日。ゴドリツクの谷。イギリス西部にある村。ここに1人の男が花束を持って現れた。ライトブラウンの髪の毛。名を、リーマス・ルーピン。

「……………」

何故、リーマスはここに来ているのか。それは、日付に意味がある。10月31日。彼の親友であったジェームズ・ポッターと、その妻リー・ポッターの命日なのだ。毎年、ここに来ている。

ジェームズとリリーの墓まで来た。花を手向けるリーマス。墓には、沢山の花が供えられていた。

「もう、あれから11年か。何であの時、ピーターを守人にしてしまったんだろうか……………ジェームズ、リリー。私は、君達が今いる世界に行った時になんて謝れば良いのか……………」

11年前のある日。シリウスから話があつた。今、秘密の守人をやっているのだが、闇の陣営の裏をかく意味で変えようかと思つていると言われた。体質の事も考えて、自分が変わろうかとも一時は思つた。

だが、1人でヴォルデモートに出くわした時、果たして奴の誘惑を乗り切れるか自信が無かつた。下手をすれば、心を救ってくれた親友を裏切ってしまう事態になるかと思うと出来なかつた。だから、こう提案した。

『そう言った役目を背負つてそうに無いと思わせる為にも、ピーターを守人にすれば良いんじゃないかな？』

この提案をした。シリウスは、その提案を飲んだ。後日、ポッター家に行き、その旨を話した。ピーターが危うい時は、自分とシリウスが全力で助けると誓つて。

でもこれが、そもその間違いだった。結果、ジェームズとリリーはヴォルデモートの手に掛かって死亡。生き残ったのは、ハリーとエリナの2人だけ。エリナは、額に一生消えない傷を負わされた。一方のハリーは、リリーが離れた場所に隠した為、無傷だった。

シリウスが育てるといふ話で付いていた。だが、後から来たハグリッドはダンブルドアからダーズリー家に預けると言った。ダーズリーの事はリリーから聞いている。あの2人が、素直に歓迎されるとは到底思えなかったから。だけど、ダンブルドアの名前を出されて引き下がざるを得なかった。今思えば、頑なに反対しておけば良かったと思った。

シリウスは、消えたピーターを始末しに行くと言った。私は、シリウスと止めようとしたが出来なかった。自分以上に責任を感じていて、裏切りを許さないシリウスの執念の前に敗れ去ったから。

その後、シリウスはピーターとマグル12人の殺害及び、ジェームズとリリーへの裏切り行為の罪でアズカバンに収監された。しばらくして、ハグリッドは謎の男の急襲を受けた。その戦いの最中で、ハリーが空飛ぶオートバイから落ちてしまった。

親友夫婦を死なせてしまっただけでも充分傷口に塩を塗られた気分だ。なのに、残った大切な人達をもっと失ってしまった。更に、傷口を抉られた様な感じになった。

絶望した。シリウスは無実の罪で捕まり、名付け子のハリーは生死不明。エリナはダーズリー家に預けられ、接触すら許されない。

無実だと知っててシリウスを放置し、まだ生きているかも知れないハリーを探さず、エリナを過酷な環境に放り込んだダンブルドアには、もう失望しかなかった。学校に入れてくれた事には大いに感謝している。だけど、それとこれとは話が別だ。

ドロレス・アンブリッジの立案した法律のせいで、まともな職には就けなかった。だが、後輩であるアルフレッドの実家であるロイヤル・レインボー財団からは定期的に仕事が来た。厄介な魔法生物の捕獲や駆除。その他にも、講師をしたりもした。しかも、必要最低限とは言え、経済的な支援もしてくれた。

「去年の1月が終わる頃かな。アランさんから、ハリーを保護している、しかも日本で平穏に暮らしていると聞いたよ。離れてはいるけど、とにかく生きてて良かったよ。今、ホグワーツへは日本の魔法学校からの留学生として通っているんだってさ。」

会える機会は、今の所無い。だけど、死んだと思われていたハリーが無事に生きていてくれた。それだけでも良かった。嬉しかった。「それじゃあ、私はもう行くよ。また来るね。」

こうして、私はゴドリックの谷を去ったのだった。

*

1992年 10月31日のハロウィーン。授業が終わって、例の如く湖の畔に来た。去年と違うのは、妹のエリナもここにいるのだ。そして、森でハグリッドが見つけてエリナが世話する事になった生き物も。まさしく、お伽話に出て来る妖精と言った外見をしている。

「今日、パパとママの命日なんだね。去年パーティーにいなかったのは、ここにいたんだよね?」

「めいにち?」

「クワノールにはまだ早いかな。ねえハリー。」

妖精の名は、クワノール。エリナに懐いている。見る者を和ませる力がある。

「ああ。早過ぎだな。話を戻すぜ。全ては、11年前の今日から始まったんだ。今日ここに来たのは、己の決意の再確認も兼ねてね。黙祷と感傷をするだけだから、つまらないぞ。ハツフルパフの皆と居れば良かったのに。」

「ううん。やっぱり、ボクもちゃんとやっておかないと。それに、罰則の後の出来事も報告しとこうと思っててね。」

「ロックハートの手紙の返信の手伝いをしてたっていうアレか?書いてる最中に謎の声が聞こえたっていう。」

「うん。確かね。『来るんだ……。俺様の所へ……。引き裂いてやる……。八つ裂きにしてやる……。殺してやる……。』って。」

「ロックハートも聞いたのか?」

「何か、ボクだけにしか聞こえなかったんだ。でも誰にも言えなくて、相談も出来なかったんだ。だから、ハリーに相談しようかなくて。」

「ドビーの警告と何か関係性があるかもな。今年も何か起きるぞ。きつと。用心しろよな、エリナ。」

「うん、分かっている。そろそろ行こう。ハロウィーンパーティーへ。」

「骸骨舞踏団が来るからね。サー・ニコラスには悪いけど、絶命日パーティーに行かなくて正解だったな。」

俺達は、早めに切り上げて城へ戻る。もう殆ど大広間に集まっていた。それぞれの寮のテーブルに座り、メシが来るのを今か今かと待つ。

「トリック・オア・トリート！」

校長が叫ぶと、カボチャ料理を中心に豪華なご馳走が出てきた。俺は、去年食い損ねた分を含めて多く食べた。それだけではなく、人気音楽グループの「骸骨舞踏団」まで招待されていて、最高のパーティーと化した。

エリナ視点

去年とは違うハロウィーンになった。授業が終わってから、クワノールと一緒に外へ向かうハリーを見かけた。

「あ、ハリーだ。どこへ行くんだろう。」

ボクは、ハリーを追いかける。来たのは、大きな湖。ここで、何をするんだろう？

「エリナ。出てきな。最初から俺を付け回してたのは、分かっているんだ。」

バレてた。ここは潔く出てこよう。

「良く分かったね。」

「まあな。俺には、自ら作り上げた魔力感知呪文があつてね。射程距離は、半径5000kmだよ。」

「範囲が広過ぎるって！あ、だから去年のクリスマスはダンブルドア先生が近くにいる事が分かったんだ。」

「そういう事だ。」

「何でここにいるの？」

「今日は、父様と母様がヴォルデモートに殺された日なんだ。それに、俺達の全ての始まりを決定づけた因縁の日でもあるからね。」

「そっか。パパとママが。」

「ここで、黙祷してらってわけ。」

「一緒にやっつていい？」

「どうぞ。」

それから、しばらくパパとママに黙祷を捧げたんだ。その時に、罰則の時の謎の声を報告したんだ。1時間程やって、引き上げた。クワノールは、談話室で待機させた。

夕食は、去年に勝るとも劣らない豪華なものだった。全てを、少しずつ盛っていきながら食事を進める。人気音楽グループの骸骨舞踏団の演奏も素晴らしかった。

デザートもある程度減った頃、また不気味な謎の声が聞こえた。

「……引き裂いてやる……八つ裂きにしてやる……殺してやる……」

また、あの声。冷たく、それも残忍な。

「誰？」ボクは、独り言を呟く。

「……腹が減ったぞー……こんなに長い間……」

「……殺してやる……殺す時が来た……」

「貴様！やらせるものか！」

「黙れ！これこそ、我が主の願い。我は、それを実行するのみ!!」

謎の声は2つ。1つは、何かを殺そうとしていて、もう1つはそれを止めようとしている。

「や……やめ……ろお。」

【臆病者めが。そこで大人しく見ているがよい。そうだ血だ。……血の匂いがする……血の臭いがするぞー！】

早く行かないと。誰かを殺すつもりだ。幸いにも、誰も食事や会話に夢中になっている。止めなくちゃ。ボクは、密かに大広間を後にした。

ハリー視点

パーティーが終わりに近付いた頃、ハツフルパフの席からエリナの魔力が大広間から遠ざかるのを感じた。まさか、あの妙な声を聴いたのか。隙を見て、俺も出ていく。

エリナは、3階をくまなく飛び回っている。俺は、去年ナイロツクが飛び回って手に入れたホグワーツの地理を全て記録し、まだ知らない所も新たに更新していく『アーダチエス・マップ冒険者の地図』を取り出す。3階のエリアを見てみると、『エリナ・ポッター』と書かれた点があった。誰もい

ない廊下で立ち止まっている。

俺もそこへ向かった。10分して到着した。

「そこにいたか。また、あの変な声が聞こえたのか？」

「うん。それに、あれ。」

指差した方向には、大きな水溜り。そして、動かないネコ。フィルチのミセス・ノリスか。そして壁には、血文字が書かれてあった。

『秘密の部屋は開かれたり 継承者の敵よ、気を付けよ』

「秘密の部屋？」

「サラザール・スリザリンが作った部屋だよ。その話は後にするから、ここを離れよう。」

遅かった。パーティーが終わって談話室に帰ろうとする生徒がいた。先頭だつてドラコ・マルフォイが俺達にこう言い放った。そう言えばコイツ、顔に青紫の痣が出来てるな。ハー子の事でグラントに殴られたんだろうか？

「やっぱり父上の言ったとおりだ。継承者の敵よ、気を付けよ！次はお前たちの番だ！不純物が入った生まれ損ないめ！」

「黙ってる、近親相姦しか能のない血統書付きのチワワ如きが！発情期かテメーは!!」

「僕が、近親相姦にチワワ。」マルフォイは、ショックを受けて呆然とした。

「ハリーも言う様になったじゃねえか。やっぱ、フォイについてはハーミーちゃんの事もあるからか？」

グラントがマルフォイの後ろから現れた。

「ダメか？」

「良いんじゃないね？それにしもよお、何か妙な物騒な声が聞こえたんだあ。何か知ってるか？」

「いいや。俺も詳しくは分からん。エリナを追跡してこうなったんだからな。」

「そうかよ。」

その後、フィルチは俺達を犯人だと決めつけ、エリナの首を絞めようとしたが、ダイヤモンドの指輪に宿った盾の呪文で防がれて壁に

吹っ飛ばされた。何も出来ず、すすり泣くフィルチ。その後ダンブルドアや他の先生に呼ばれ、2人で事情を説明した。つーか、何故かグラントも呼ばれた。魔力感知呪文とエリナだけに聞こえた謎の声は勿論伏せて。そして、終わった時にはもう12時になっていたのも、そこで別れた。

それから数日後の薬草学の授業の後、エリナから話しかけられた。何でも、ハツフルパフの一部の人から避けられている事。だから、秘密の部屋について教えて欲しいと。

なので、金曜の午後に話そうという事で話がついた。無論、大幅改訂されたホグワーツの歴史を持って。

金曜の午後、空いた教室でエリナと合流した。念の為、「耳塞ぎ」マフリアートを唱える。

「ハリー、秘密の部屋って何？前にスリザリンがどうのこうのって言うってたけど。」

「分かった。この『ホグワーツの歴史 大幅改訂版』からの内容を引用して話していくよ。」

「お願い。」

「もう伝説に近い話だけだな。まず、約千年前にホグワーツ魔法魔術学校が作られた。そのホグワーツを作った4人の創設者は知ってる？」

「歴史は苦手だから、読んでない。」

「そうか。その4人の名前から察が作られたんだ。4人の名前は、ゴドリック・グリフィンドール、ヘルガ・ハツフルパフ、ロウエナ・レイブンクロー、サラザール・スリザリンだよ。」

「へえ。でも何で、城なの？」

「この時魔法は、一般の人々に大変恐れられていた。恐れるからと排除する。その原因を排除したいのが人間だ。だから、魔法使いや魔女は見つけ次第迫害され、時には殺されることもあった。」

「……」エリナは絶句していた。

「この城は、魔法使いや魔女をマグルから守る目的もあったわけだ。」

一旦、深呼吸をする。

「最初の内は、4人は和氣藹々とやっていったんだ。魔力を持った者を城に誘っては教育してた。だけどね、次第に意見の相違が出て来始めたんだ。スリザリンは根っからの純血主義の思想の持ち主だったらしくて、魔法族の親を持つ者以外はこの学校で学ばせるべきではないと、考えたそうなんだ。しばらくして、この問題を巡ってグリフィンドールとの決闘になった。勝ったのは、グリフィンドール。敗北したスリザリンは学校を去った。」

「その2人って、元からそうだったの?」

「いいや。元々は、仲が良かったんだそうだ。でもね、そう言った関係ほど、崩れるとそう簡単に修復出来るもんじゃないのさ。」

俺は、エリナに告げた。持ってきた水をグイッと飲んで話を続ける。

「でもな、この話には続きがあるんだよ。スリザリンは他の創設者に知られない、隠された部屋を作ったという伝説がある訳なんだが。それによると、スリザリンは部屋を密封したんだよ。学校に自分の真の継承者が現れるまで、何人もその部屋を開けられなくした。その継承者だけがその部屋の封印を解き、その中の『恐怖』を解き放つ。相応しくない者を追放する為にね。」

「それが、秘密の部屋。じゃあ、恐怖って何かな?」

「継承者だけにしか操れない怪物とかかな?もし、怪物だったと仮定しよう。恐らくスリザリンの事だから、大方蛇で間違い無いだろうね。」

「どうしてそう言い切れるの?」

「それじゃあ、何でスリザリンのシンボルが蛇だと思う?エリナ。」

「インドに行つて、蛇使いの修行をしたからじゃないの?」

「へびを操るといふ認識って意味では大正解だな。その答えはな、エリナ。サラザール・スリザリンはパーセルマウス、つまり蛇語使いなんだよ。これは、極稀とも言えるレアな能力だ。闇の魔法使いの印、とも言われている。もちろん、善良且つ立派な魔法使いの中にもパーセルマウスはいる。その力を持つてる奴が、目立って悪行をしていただけの話だ。それに、ちよつと試したい事もあるしな。」

「試したい事？」

「ああ。確認しておきたい事がね。」

セコイヤの杖を取り出し、呪文を唱える。

「さて、論より証拠だな。蛇出サイベンシューテイヤでよ。」

ブラジル産ボア・コンストリクター、大ニシキヘビを出した。エリナはハツとした顔になる。

「もしかして、君。あの時の？」

「知ってるのか？」

「少し会話した事あるんだ。」

「あの時のお嬢ちゃんか。元気だったかい？」

「ブラジルには行けた？」

「ああ。密輸船に乗ってな。お嬢ちゃんのお言葉のお陰で、今の俺がある。感謝している。」

【どういたしまして。】

どうやら、会話は終わったようだな。質問してみるか。

「エリナ。その大ニシキヘビは、どこから来たって？」

「うん。元々イギリスの動物園にいたけど、ボクとの会話でブラジルに向かったって。今、アマゾン熱帯雨林に住んでるよ。」

杖を振って、ヘビをアマゾンに返す。やはりな。エリナは、パーセルマウスだったか。という事は、怪物がいて、正体は蛇になるな。ん？グラントも妙な声を聴いたって言ってたな。あいつもパーセルマウスなのか？

「と、言う事はだ。怪物の正体は蛇になるな。怪物サイズの蛇と言えば、ヒドラにバジリスク、ヤマタノオロチ、ミズガルズオルム、ファエヴニル、ラミア、エキドナ辺りかな？どちらにしても、何が正体かを調べる必要があるんだ。エリナに聞こえた謎の声が蛇語なら、辻褄が合う。」

「じゃあ、これからは怪物サイズの蛇を探せばいいって事？」

「うん、図書館で蛇について調べていこうかなって。話はこれ位かな？」

エリナは、何か浮かない顔をしている。

「スリザリンに入るべきだったんじゃないかって顔してんな。」

「何でそれを？」

「4つの寮でもやっていける。スリザリンなら1番の栄誉を手に出れる。だからそこをお勧めするよって。でも、組み分け帽子は俺達をグリフィンボールやハツフルパフに入れてくれた。要は素質よりも、自分が何者でありたいのか。大事なのは、そこだよ。全て素質だけに委ねたヴォルデモートとの違いは、そこさ。」

エリナに笑顔が戻った。俺は、ニコリと微笑んだ。

第12話 狂ったブラッジャー

それから1週間、事あるごとにエリナを避ける人が増えていった。ハツフルパフは極少数だが、レイブンクローとグリフィンドールの半数はそうだった。スリザリンは、そもそも信じていない。

だが、グラントは崇められている。スリザリンから。他の3寮からは完全に恐れられているけど。エリナよりもグラントの方が、継承者扱いだ。ジジイ、余計な事しやがって。ヴォルデモートと何かしらの関係性があるのは認めるが、アイツはシロだ。

だから俺は、出来る限りエリナと一緒にいる事にした。グラントの元にもいる様にしたのだ。殆どのグリフィンドール生からやめろと言われているけど、知った事じゃない。共闘して来た戦友が例えスリザリン生であつたとしてもだ。別に拒絶するつもりなんて無い。それどころか、下手な同じ寮の人間よりも余程信用出来るんだ。

時々、ロン、ハー子、ゼロもいてくれた。

「どいつもこいつも、何でも簡単に信じるよな。」ロンが憤慨している。「全くだぜ。エリナちゃんは、んな事しないつつうの。」グラントも然り。

「グラントも、今は自分の心配をした方が良いぞ。」

「ハリーよお。気持ちとはとっても嬉しいぜ。だけど、俺は心配いらねえ。こういう扱いは慣れてるからよお。」

胸を張ってグラントが力強く言った。

「お前がそう言うのなら、別に止めはしない。だが、無理はするなよ。お前は1人なんかじゃない。校長がお前に疑いの目を向けようとも、俺は継承者だとは思ってないからな。」

「お、おう。そりゃあ、ありがたいぜ。」

「連中のバカさ加減には見て呆れるな。」ゼロは、溜息をついている。「エリナ・ポッターが継承者だと？寝言は寝て言えだ。」

味方がいるので、結構エリナも落ち着いている。俺達は、3階の事件現場に向かう。血文字はまだ消えてない。が、水溜りは消えていた。水溜りはどこから来たんだ、とロンが口に出す。ハー子は、去年シエ

ルが愚痴っていた『嘆きのマートル』のいるトイレに案内した。男4人は、入らなかつた。エリナとハー子だけが向かつた。結果は何もなかつたが。

その後、それぞれの談話室に戻つた。明日のクイデイツチ頑張つてとか、明日は負けないからとか言われて別れた。戻つてから、ロンはマルフォイがそうなんじゃないとか言い出した。

「あいつの家系は全員スリザリンド。いつも自慢してる。末裔でもおかしくないね。父親も、どこから見ても悪玉さ。何世紀も、秘密の部屋の鍵を代々親から子へ受け継いでいたつて、不思議はないよ。」

「いや、ないな。あんなチキン野郎に命を奪おうつていう度胸なんてあるわけがない。」

「そうね。態度に反して、メンタルは豆腐みたいに脆いもの。殺人を躊躇う事無く出来る筈はないわね。でも、何か知ってるかもしれない。確かめる価値はあると思うわ。」

「じゃあ、どうやって調べるんだよ。」

「スネイプも授業でポリジューズ薬の事を言つてたわ。それを使えば。」

「NEWTレベルだぞ、それ。やめておこうぜ。」速攻で言つておいた。「じゃあ、ハリー。何か手段があるの?」

「開心術で無理やり聞き出す。グラントに協力して貰おう。」

「開心術使えるの!?!」ハー子は、驚いている。

「少しな。そうじゃなきゃ、ポリジューズ薬を却下しねえよ。」

そんなわけで、開心術で聞き出す事が決定した。

翌朝。今日の試合の相手は、スリザリンド。朝食を簡単に済ませて、選手服に身を包む。レッドスパークの最終調整に入る。うん。問題ない。油断や隙を見せなければ従順になつてくれる所まで乗りこなせる様になつた。

そして、試合開始。何と、開始早々ブラッジャー1個が俺だけに集中的に狙つてきた。レッドスパークの力で難無くかわせたが、また向かつてくる。フレッドとジョージが護衛してくれるが、残る1個はグラントが棍棒で飛ばして、グリフィンドール・チームのペースを

乱した。更に、ルインがその隙を突いてどんどん点数を入れていく。

また、1度見つけたスニツチも、グラントの飛ばしたブラッジャーで邪魔されてしまい、見失った。80―20になった時、タイムアウトがかかった。俺は、腹を括って皆に宣言した。

「皆、俺だけを集中的に狙っているブラッジャーがあるでしょ？あれ、俺1人で対処させて欲しい。」

「ダメよー！」アンジェリーナが、反対の意思を見せた。

「バカ言うな。」フレッドが言った。

「頭をふっ飛ばされるどころの話じゃない。下手をすれば殺されるぞ。」

俺は、W―ウイルスの力で、ウイルスモードを発動させた。緑の目から赤き目へと目の色を変える。

「このままじゃ、負ける。俺は、自分の言ったことは曲げない。オリバー、指示を頼む。」

オリバーを見た。もう覚悟は決めた。オリバーは、俺に申し訳ないという表情になりつつも、キャプテンとして冷酷な指示を出した。

「皆、何があってもハリーを無視しろ。少しでも、点数を埋めるんだ。」

「ふざけんなオリバー！」フレッドとジョージが反発した。

「何でもかんでもハリーに背負わせようとししないで！」ケイティが怒った。

「正気の沙汰じゃないわ！」アシリアもだ。

「キャプテンの命令だ。俺は問題ないよ。」

俺は、皆を安心させようと笑顔を見せた。

試合開始。超感覚呪文で、スニツチを探す。僅かな動く音を探る。

あった。マルフォイの目の前をうろついているではないか。しかも、本人は気づいていない。チャンスだ。マルフォイ目掛けて、ロケット弾の弾の方向かった。ブラッジャーもついて来るが、僅かな動きでかわしまくる。その様子をマルフォイが、笑いながら見ていた。

「バレエの練習かい、ポッター。」

「そこを退きやがれええええ!!!」

「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

あまりの迫力ぶりに逆にマルフォイの方がバレエみたいに回る羽目になった。スニッチを追跡する俺。他のスリザリンの選手は、俺の行動を理解した。が、戦神と化したグリフィンドール・チームの対応に手間取っていて俺を邪魔するどころの状態では無かった。

俺とスニッチが一直線に並んだ。マルフォイは、未だに混乱から立ち直ってない。あと少し。俺は、左手で掴もうとする。

バシツ!!

狂ったブラッジャーが、俺の左手を直撃した。超感覚呪文は既に解除しているので、ダメージは減っている。それでも痛い。すぐさま右手に変える。そして、レッドスパークの上に立ち往生した。激しく空を掻いた——指が、スニッチを握りしめるのを感じた。

「やった。勝った。」そう思った時だった。

狂ったブラッジャーが、俺の腹部にぶつかってきた。俺は、落ちてしまった。

*

目が覚めた。フィールド先生が、応急処置をしてくれた。さつき、ロックハートが出しやばろうとしたが、フィールド先生とマクゴナガル先生が必死に守ってくれた。俺は担架に乗せられて、医務室に運ばれる。

結果は、200-100でグリフィンドール・チームの逆転勝利だった。皆、揃ってパーティーを始めようとするが、マダム・ポンフリーが「この子は重症なんですよー」と怒鳴って追い出した。マダム・ポンフリー曰く、橈骨及び尺骨、腰椎が骨折、胸椎の下部はひびが入っていた。骨折に関しては、一瞬で治った。それでも念の為、今夜はここにいろと宣告された。

夜、急に目が覚めた。昼間、あんなに寝たからな。それだけじゃない。誰かが、汗をタオルで拭いている。

「誰だ!?」 大声を出す。

「ドビーー!」

「ハリー・ポッターとエリナ・ポッターは学校に戻って来てしまった。汽車の時も、今日のブラッジャーの事も。あなた方の為にやってまい

りましたのに。」

「やはりそうだったのか。お前が一枚噛んでいたとはな。汽車の一件では、エリナが退学になりかけ、今回は俺に重傷を負わせた。軽減出来たとはいえ、死にかけたんだぞ！どう責任を取ってくれる!!」

ドビーを睨み付ける俺。ドビーの奴はビビっている。

「ドビー、せめてもの慈悲だ。俺が絶対安静になっている間にこの部屋から出て行った方が良い。ありとあらゆる手段でお前を殺すかもしれん。」

だが、ドビーは弱々しく微笑んだ。

「ドビーめは、殺すという脅しにはもう慣れています。ご主人様の夕食を焦がして、鞭打たれるのは当たり前。お屋敷では、1日5回もその言葉で脅されております。その度に、お嬢様が手当てや労りをするのです。」

汚い枕カバーの端で鼻をかんた。余りにもその光景が哀れだったので、怒りが収まった。

「ご主人様って、マルフォイのところか？」

「どうしてそれを？」

「我らが親愛なるドラコの前で、お前の名前を口走った事があってね。その時のアイツは、笑顔が一瞬のうちに消え失せてた。何か知ってるかもなと思つて、接触しようとしてたんだよ。」

「そうでございましたか。」その様子だと、本当にマルフォイ家に住んでいるんだな。

「ドビー。どうして逃げないんだ？本当にどうしようもないのなら、逃げるといふ選択肢だつて取れる筈だ。」

「その事でございますか。ハリー・ポッター様。この枕カバーは、屋敷しもべ妖精が奴隷だという事を示しているのです。ドビーめは、ご主人様から衣服を貰った時、初めて自由の身になれるのです。家族全員がソックスの片方を渡さない様に気を付けているのです。」

「もし渡せば、自由になって屋敷から永遠にいなくなってもいいってわけか。ドラコが妙に整理整頓をやる癖があったのは、その為だった

か。」

「お坊ちやまは、ご主人様から厳しく躰けられているのでございます。ですがお嬢様については、旦那様も甘くなるのです。お嬢様だけが、屋敷でのドビーの味方でございます。」

「成る程ね。さて、俺にここまで怪我を負わせたいという事は、秘密の部屋が絡んでんのか？誰が開けた？」

「もう聞かないでください。哀れなドビーめにもうお尋ねにならないで。」

「俺は逃げない。絶対に！そうじゃなきや、ハー子が真つ先に狙われる。彼女はマグル生まれだ。家族に友、仲間は誰一人死なせやしない！それが俺の、魔法使いとしての信念だ!!」

「ハリー・ポッターは友達の為に自分の命を危険に晒す！何と気高い！何と勇敢な！でも、自分自身を助けなければならぬ。そうしなければ……そうしなければ……」

その時、こちららに向かつて来る足音が聞こえた。

「ドビーは行かなければ！」

妖精式の姿くらましでどこかに行ってしまった。

「待て！まだ聞きたい事が！」

行ってしまった以上は仕方ない。ベッドに潜り込んで、寝る事にする。入って来たのは、マダム・ポンフリーとマクゴナガル先生、それに校長だった。

「どうとう生徒の犠牲者が出ました。そばに葡萄が一房落ちていました。ポッターの見舞いに行こうとしたのでしょうか。」

マクゴナガル先生が言った。

「まさか、ミセス・ノリスと同じ……」

「そうじゃポピー。コリンは、石になってしまったのじゃ。」

校長が囁いた。コリンよ。ストーカーではあったが、あんな状態を見せつけられて正気でいられる筈がねえ。この俺が。

「カメラはどうでしょうか？何か写ってる筈です。」

マクゴナガル先生が熱っぽく言った。

校長がコリンの手から、カメラを抜き取って裏蓋を開けた。

シューツと言う音を立てて、カメラからは蒸気が吹き上がった。

「……熔けてる。」マダム・ポンフリーが腑に落ちない顔をしている。

「アルバス。やはりこれは……………」

「ミネルバ。君の思ってる通りじゃ。秘密の部屋が、再び開かれたのじゃよ。どうやってかは、分からぬがのう。」

重苦しい声が、妙に耳に残った。過去にもあったのか。

そう言えばあの言葉。1年の最後のマクゴナガル先生との面談。気にも留めて無かったが、秘密の部屋ってそういう事か。ヴォルデモート、いや、変態ヘビが絡んでるのか？どちらにせよ、情報が少なすぎる。ゼロ、グラント、ロン、ハリーにも協力を頼んでみるか。

第13話 決闘クラブ（前編）

翌日、退院した俺。昨日あった事を信用出来る人間に喋った。大変驚いてたが。で、談話室に戻ってゆっくりしようとするが、パーシーから話かけられた。

「昨日は凄かったね。あそこからの形勢逆転ぶりは。」
「そりゃ、どうもです。」

約1週間後、レイブンクロー対ハツフルパフの試合があった。今回は、エリナのデビュー戦だった。やはり、ハツフルパフはエリナのスカウトと大幅なチーム編成を行った事により、今までの最弱という汚名を払拭した。終始ハツフルパフはレイブンクローを圧倒、スニッチ自体はレイブンクローに取られたが、試合結果としては250対160でハツフルパフの勝利だった。内、得点の8割はエリナがチェイスーとして稼いだものだ。

それからしばらくしたある日の事、掲示板の前に人だかりが出来ていた。

「今夜、決闘クラブを始めるんだって！」ロンが興奮したように言った。

「合法的に、クソ生意気なマルフォイを潰せるという事か。」

ゼロが、何やら物騒な事を言っているが気のせいだろう。

「マジか。面白そうじゃん。」グラントが返した。

「ロックハートじゃなきゃ誰だっていいよ。」うんざりしたように俺は言った。

「ボクも。あの人、？臭いし。」エリナも俺に同意見のようだ。

「2人は分かってないのよ。あの方の素晴らしさを！」

ロックハートのファンになってすっかり末期患者みたいになったハリー。何言っても、止まらないので皆何にも言わなくなった。

夜8時、俺の予感是最悪な形的中してしまった。ロックハートが担当するのだ。スネイプとフィールド先生を助手にして。この男、俺を骨抜きにしようとしたんだ。助手の2人に勢い余って殺されて死ぬばいいのに。

「私さ。H A H A H A H A。そんな私の名前なくんだ？」

「二「キヤァ、ロックハート先生。愛の戦士。チョー天才。」」

「くだらねえ。」俺が言った。

「全くだ。」ゼロも俺と同意見らしい。

「では、助手のスネイプ先生とフィールド先生をご紹介しますしよう！お二方がおっしゃるには、決闘についてはほんのわずかご存じだそうです。模範演技のために、勇敢にもお手伝いしてくださいという了承をいただきました。さてさて、お若い皆様にご心配をおかけしたくはありません——私が彼らと手合せした後でもみなさんの魔法薬と呪文学の先生はちゃんと存在します。ご心配めさるな！」

「相打ちになって欲しいって思ってるのは僕だけかい？」ロンが俺の耳に囁く。

「スネイプはともかく、フィールド先生にはそうなって欲しくないけどな。」

「そう言えば、フィールド先生ってよお。こここの前の仕事って闇払いじゃなかったか？」

「兄さんが、あんな野郎に負けるなんてことになったら、天地が引っくり返るかもしれねえよ。」

スネイプが激怒しているのは良く分かった。フィールド先生は、呆れて物も言えないらしい。ロックハートの奴、精神だけは無駄に太いな。

そして模範演技。杖を構えてから、3つ数えたら術をかける、というロックハートの説明があった。ロックハート対スネイプとなった。互いに殺す気はないと言い張っているが、スネイプの方はそうでもない。寧ろ、校長からの指示が無ければ屍にする気満々な表情を出しているね。

スネイプの『武装解除』が炸裂し、ロックハートが吹き飛ぶ。スリザリン生から歓声があがった。更に、ロックハートを快く思わない生徒からも。他の寮からスネイプが称賛されるのは、これが最初で最後だろうな。

「さあ、皆分かったでしょうね！あれが『武装解除呪文』です。この通

り、私は杖を失ったわけです。スネイプ先生、確かにあの術を生徒に見せてようとしたのは、素晴らしいお考えです。しかし、遠慮無く一言申し上げれば、あの術を防ぐのは簡単でした。あまりにも見え透いていましたからね……」

「だったら、盾の呪文で防げばいいだけの話だ。負け惜しみもここま
で来ると、清々しいな。そして、スネイプが殺気立っていた。流石の
ロックハートも気付いたらしく、身震いしながらもこう言ったのだ。
「それではスネイプ先生にフィールド先生。生徒を2人ずつ組にしま
す。お手伝い願えますか……」

こうして、エリナはマルフォイ、ロンはシェーマス、ハー子はブル
ストロード、ゼロはノット、グラントはパーキンソンと組むことにな
った。さて、俺はと言うと殆どあぶれてしまったので、さっさと出
ていこうとした。が、ロックハートに目を付けられた。

「おや、ハリーは余りましたか。では、私とやってみましょうか？」

「ロックハート先生。それは……」

フィールド先生が止めようとした。が、俺は手で制した。目を合わ
せて、やってやるという気持ち伝えて。

「分かった。でもハリー。危なくなったら、私が止める。それで良い
ね？」

フィールド先生がニヤリとした。どうやら先生、俺が負けるなんて
微塵も思っていないようだ。

「そうしていただけると、助かります。フィールド先生。」

「殺さないようにね。」

舞台の上に立った俺とロックハート。右手で杖を構える。

「1, 2の, 3……」

杖を振りかぶるロックハート。だが、遅い。ホグワーツ入学前の6
年間でやっていた戦闘訓練の方が1京倍手厳しい位だ。俺の力つて
奴を見せつけてやろう。つい最近複数出来た、あの力だな。

『ストゥーピファイ
麻痺せよー』無言で失神呪文を発動しておく。

俺の使える無言呪文は、武装解除呪文に失神呪文、呼び寄せ呪文、盾
の呪文、火炎操作呪文、つまり『炎よ我に従え』だけ。だが、大抵の

魔法使いならば、無言呪文を5つというのはかなり驚異的な手札だろう。それでも1年生の時は、武装解除呪文だけしか無言で使えなかったけどな。

周囲を見渡す俺。下級生は何で詠唱無しに唱えられるんだと思っているし、上級生は何で2年生が無言呪文使えるんだという反応だった。

他の決闘の状況を見渡す。エリナは、マルフォイに何か妙な光の球を当ててから武装解除呪文を当てて見事に勝利。でも、あの武装解除呪文の威力、多く見積もって10倍つて所だな。あの光の球が、秘密を握ってるのかな。

何がどうあれ、大した奴だ。俺の知らない呪文を使うなんて。しかも、自分で作ったんだろうな。想像力は元々ある方だし。

グラントとハー子は、対戦相手を瞬殺していた。ゼロの方を見る。ノットは、最悪のカードを引いてしまったみたいな表情をしていた。ゼロは、自らの杖をうっとりとした顔で見ている。

「俺が一族から継承した杖よ。ノットと言う哀れな没落貴族に、美しいレクイエムを聴かせてやろうぜ。なあ？」

「ま、待てフィールド。俺は、まだ準備が……」

ノットは、慌てて杖を取り出して態勢を整える。スネイプが『2』と言った時の事だ。ノットは焦りの余り、思わず呪文を詠唱してしまった。しかし、すぐさま反対呪文で涼しく対処するゼロ。ノットに焦りを加速させたのは、言うまでもない。

ゼロは、問答無用と言わんばかりの無言による武装解除呪文を叩き込んだ。ノットは、ロックハートと同じ様に礫にされたのだった。

「フン。所詮お前は、我が身可愛さでぬるま湯に浸かっているだけの害虫に過ぎないのさ。目的の為に、修羅場を幾度となく潜り抜けて来た俺に勝てる道理など無いのさ。」

結構ゼロも、好戦的な性格だったのが分かった。大人しいとはいえ、アイツも戦闘一族の末裔だからな。ゼロは、勝利出来て高笑いした。皆、これには流石に引いてしまったのだ。現に、ノットを快く思っていない者の大多数もやり過ぎだと感じているからだ。

一方のロンは、辛勝に近い引き分けになっていた。

「さて、そろそろ戻ろうかね。」俺は、舞台から降りようとする。やる事無いからな。

「待って下さい。」俺を呼ぶ声がした。

「是非この私と、お手合わせ願います。ですから、あなたのお力をお見せ下さると有り難いのですがね。」

誰だよ、と思いながら後ろを振り向く。腰の辺りまである滑らかな黒い髪、この世にそういない右目が紫、左目が灰のオツドアイの少女がいたのだ。

第14話 決闘クラブ（後編）

俺を呼び止めた声の主は、イドウン・ブラックだった。

「イドウン……という事はルインと決着は付けたって事か。お前にしちゃ、妙に積極的じゃないか。どういう風の吹き回しだ？」

「あなたと無性に戦いたいのですよ。失神呪文を無言で唱えるなど、もう2年生としての一線を化していると感じたのです。」

「常人では出来ない修行方法で身に付けてね。じゃ、さっさとやろうか。」

俺は、黒檀の杖を右手に持つ。

「おや。結構お優しいんですね。右腕で応戦してくるなんて。」

「だからどうした？人間つてのは、大抵右利きなんだぜ。そう言う風に出てくるんだ。問題あるか？」

見ている全員は、イドウンの言葉の意図を分かっていない。先生達もだ。

「あなたの本気、つまり左腕で杖を持った状態で決闘して欲しいのですよ。」

「俺は左利きと言った覚えはないけどな。いつ、俺の本来の利き腕に気付いた？」

「いつもクイディッチでスニッチを取るときは、無意識に左手で掴もうとしているではありませんか。いくら利き腕を偽ろうとも、何処かでボロや癖を出すものですよ。」

これを言われた瞬間、決闘クラブに参加している者全員がざわついた。

「何だ?!?つまり、今までのポッターは、本気じゃなかったと言いたいのか？」

スネイプが何か呟いている。一方のフィールド先生は、感心したような表情を浮かべていた。

「そういう事か。ならば、今夜限りの大出血サービスでもしてやるよ。」

俺は、ウイルスモードを発動した。目が赤くなる。本気で来いと

言ったならば、文字通り応えてやろうじゃないか。

「フツフツフ。アツハツハツハツハツハ!! それでこそ潰し甲斐があるってものですよ! ハンデのある相手に勝ったってちつとも面白くありませんからね!! さあ、正々堂々とかかって来なさい! グリフィンドールの切札! ハリー・ポッター!!」

「じゃあ、遠慮無く。スリザリンの女帝様。刻み込んでやるよ。実力以上に思い上がる奴は自滅するって言う事をな。」

アセビの杖を左手に持った。

イドウンが笑っている。普段のそれではない。戦いへの喜び。狂気の笑みを。おいおい。筋金入りの戦闘狂じゃねえか、あの女。せつかく慣れたつてのに、おっかねえ野郎だぜ。だけど俺は、いつも通りの表情をしている。

一礼して、距離を取る。

「1, 2の, 3……」 3が言い終わってから、行動する。

『武器よ去れ!』

俺は、即座に武装解除呪文を無言呪文で放つ。が、イドウンも全く同じだった。2つの閃光はぶつかり合い、相殺された。

「いきなり無言呪文とはな。」

「ハリーこそ、人の事が言えませんわよ?」

周りの殆どは、2年生にしては次元の違う戦いを見て言葉を失っている。

「麻痺せよ!」

すぐさまイドウンが失神呪文をかけてきた。これは、超感覚呪文をつかって、最低限の動きで以って回避した。

「バカな!?! 呪文を使わずにかわすなど!」

「魔法使いお前らの常識が俺に通じると思うなよ。」

冷静さを無くして、動揺した対戦相手の攻撃なんて、目が曇ってるも同然。イドウンがどんどん呪文を放ってくる。だが俺は、感知呪文をフル活用してそれらをかわしまくる。時には、側方倒立回転や後方倒立回転跳び、前方宙返り、連続バク転とかもして。

「わあ。ハリーの運動能力はボク知ってるけど、あそこまでなんて驚

いたよ。」

「運動神経良過ぎだ。あいつ。」

「俺は驚いてないぜえ。この学校で、俺と拳で渡り合える唯一の魔法使いだからよお。」

エリナ、ゼロ、グラントの声が超感覚呪文を通して聞こえて来た。「す、凄過ぎる。魔法使わないで、イドウンの攻撃を避けるなんて。」
「というか、魔法を使いなさいよ。魔法を。」

別方向を感知すると、スリザリンの女子生徒が主に驚いていた。特に2年生が。イドウンの実力を知ってるのだろうか。じやなきや、あのセリフは出ないだろうからな。

プロテゴ・リフフライト
「反射の盾よ。」インベディメンタ 独自に改良した盾の呪文を発動させた。

「妨害せよ！」

イドウンが妨害呪文を放ってきた。だが、俺には届く事は無い。それを証明するかの様に、逆にイドウンが吹っ飛ばされた。

そう、俺が盾の呪文を形態変化で生み出した呪文。これは、相手に盾の呪文をかける。身を守る為の物ではないのだがな。

この呪文の効果は、相手が呪文を放つと、効果が術者の方にそのまま跳ね返って来る自業自得の呪文だ。しかし、戦闘慣れしてるのか、イドウンは倒れずにギリギリの所で踏ん張ったのだった。

「小賢しい手を使いますわね。」

「ほぼ無尽蔵にある魔力の量を持った相手に、計画的に呪文を出すペースの配分を決めておかないとギリ貧で自滅するからな。」

失神呪文を無言で放つ俺。イドウンは、別の呪文で掻き消した。

「まだ……まだまだ……」

「？」何だ。奴の目の色が変わりつつあるな。

「本気で来いと言った筈よ！ハリー！その気にならないのならば、今すぐそうしてあげるわ!!食らいなさい!!!」

イドウンがそう言いながら杖を振る。すると、炎が出て来た。頭が幾つもある大蛇、日本の古事記に出て来るヤマタノオロチの様なものとなった。

これは、悪霊の火だな。呪われた炎。そして、分霊箱さえも破壊出

来る代物。あつさりと使つて来るといふ事は、余程制御に自信があるのか、それとも業を煮やして本気を出させる為か。あんなの、ささつと対処しなければ。ここで披露したくなかったが、そうも言つてられない。俺も、強力な攻撃呪文を今放つことにした。

「腹を括るか。これでジジイに目を付けられる事になるが、仕方ない。
フアーマル・フレイディオ
邪神の碧炎!!」

今学期になつて初めて、紺碧の炎を出した。狙いは、悪霊の火。だが、これだけでは確実に周囲に被害が出るだろう。なので、もう1つの呪文を無言で唱える。

『炎よ我に従え!!』

すぐさま、紺碧の炎の操作を自在に出来る様にする。杖の先から出て来た紺碧の炎を巨大な剣に形態変化させる。それを悪霊の火目掛けて突き刺した。

「面白い!私の悪霊の火に、あなたの未知の碧い炎。どちらが強いか試みましょうか!!」

だが、流石のイドウンも笑顔がすぐに消えた。碧い炎が、悪霊の火を一方向的に包み込んで焼き尽くし始めたのだ。

悪霊の火は、何やら不気味な音を発しながら、跡形も無く消えてしまった。ターゲットは悪霊の火であつて、イドウンではない。よつて、俺も碧い炎を鎮火させた。

「おいおい。いくら何でも、悪霊の火はねえだろ。」

「本気にさせたまです。で、そのさっきの呪文は何ですか?」

「来るべき日まで、明かさないつもりだったんだがな。今、効果を教える義理はないつてわけだよ。どうしても知りたきや、開心術でも使つて引きずり出すんだな。」

俺は、再び武装解除呪文を無言で放つ。イドウンは、失神呪文を無詠唱で発動した。再び相殺される。同時に、目の色が赤から緑に戻つた。ウイルスモードが解除されたのか。これ以上の戦闘続行は厳しいな。棄権するか、と思つた。

「……もう、これ位ですわね。ハリー、あなたが色々何か隠し持っているのは分かりました。少なくとも、あと2つの術は残しています

か。それも、あなたが独自に作り出したものを。もっと出させようと思いましたが、本気で渡り合える相手に対して、喜びで思わず術を乱射してしまいましたわ。ですので今、私は魔力が不足しています。決着は何時かつけるとして、今日の所は引き分けでどうでしょうか？」

何と、イドウンの方から今日の所はやめにしようと言う提案が来たのだ。

「オーケー。生憎俺も魔力切れでね。イドウン、お前とやるにはまだ早過ぎたと感じたし、あのモードも維持出来ない位にスタミナ切れが起こっているのさ。それに、ここで更なる手札を今見せるわけにはいかないんだ。これ終わったら、棄権するつもりだったんだが、そういうことなら引き分けにしておこう。」

今回、イドウンの方がやや有利だったわけだが、相打ちに持ち込めただけまだ良い方だろう。その後、互いに近付いて握手をする。何故か知らんが、周りからの歓声が上がった。そうして、1回目の決闘クラブは終わりを告げたのだ。

*

「悪霊の火を焼き尽くしただと？ポッター。お前は一体……」

聞いた事が無い。あんな芸当が出来るなど。益々、我輩のハリー・ポッターへの恐怖心が膨れ上がった。

「狼狽えていますね、セブルス。あの未知の呪文、校長は知っているみたいですよ。賢者の石の攻防戦にて、死の飛翔相手に使いましたから。」

「闇の帝王相手にか!？」

信じられない。幾ら史上最悪の闇の魔法使いとはいえ、既に人間相手に使っているのか。

「先程ハリーが唱えたのは、悪霊の火を参考に、それすらを焼き尽くす碧い炎を出す呪文。無言呪文で発動したのは、その碧い炎を鎮火させるだけでなく好きな形に形態変化出来る様にする能力とみて間違いないでしょうね。」

あの憎きメガネを穏やか且つ人の良さそうな感じにした容姿、リーアの瞳を持ったハリー・ポッター。メガネよりはある程度マシだ。

まさか、今も奴を見くびっていたというのか？とんでもない存在で、それこそ本当に敵に回してはいけないのは。

「セブルス。あなた、まさかハリーが恐ろしいのですか？変わりましたね。あれ程憎んでいたのにも関わらず。彼が、死の飛翔に同調するなんて決して有り得ないのに。」

そう言う問題ではない。闇の帝王に同調するのは決して有り得ないと分かっている。もし、それ以上の危険な組織に同調して本格的な敵に回ったらと思うと、止められるかが分からないのだ。

「いざって時は、私は全力で彼を止めると決めていますよ。私自身も彼を気に掛けていますし、エイダからも何かあつたら頼むという連絡が来てますのでね。それでは、私はこれにて失礼します。」

フォルテは立ち去った。独自にポッターを見てはいる。今の所、目に余る様な事はしてない。それどころか、本当に危うい時は忌み嫌っている筈のドラコを助けているのだ。自分なりに一線を構えているのだろうか？

「敵なのか……味方なのか……」

恐らくだが、双子の妹であるエリナ・ポッターの完全な味方ではあるだろう。だからと言って、それがダンブルドアの味方とは限らないわけだが。

ハリー・ポッターの場合、大切な者を守る為ならば手段を選ばないだろう。そこは、開心術を使わずとも自然に分かった。

正確には、真つ当な手段で済むならそちらを優先する。だが、それを通じないと分かったら、即座に非合法なやり方も辞さない。下手なスリザリン生よりもスリザリンらしい素質を持っている人材なのだろう、あいつは。

「……………行くか。」

大広間を後にする。明日も早い。リドルのフォローもしなければならぬからな。

第15話 クリスマスの作戦

決闘クラブから暫く経った頃、ジャスティンとサー・ニコラスが石化した状態で見つかった。目撃者は、不運にも呪文学から戻って来たエリナとグラントだった。2人は、すぐさま校長室に呼び出された。エリナは、蛇語を披露してなかったのでもうここまで被害は無かったが、グラントは継承者なのではと疑われてしまっていた。元々、暴君な性格は周囲にも知れ渡っていたので、それが今回の件で拍車がかかっていった。余談だが、スリザリンの中では神扱いされているのだとか。

そうして、クリスマス休暇に入る直前となった。ゴーストのサー・ニコラスにまで危害を加えるなんて正気の沙汰じゃないという事らしく、生徒の殆どは汽車の予約開始直後に我先にと入れたんだ。残ったのは、グリフィン・ドールだと俺にロン、ハー子、パーシー、フレッドとジョージ、ジニー、エックス。レイブンクローとハッフルパフは、それぞれゼロとエリナのみ。スリザリンはグラント、マルフォイ、クラブ、ゴイル、イドウンの5人だけ。残りは帰るらしい。

そうして休暇に入った。マルフォイから色々聞き出すのいうってつけの時間だ。作戦のプランが出来たので、打ち合わせをする。

「それで、首尾はどうだ？ F I J 作戦の方は？」グラントに質問した。「おうよ。問題は無いぜ。料理を堪能して貰いたいって言ったら、『召使のやりそうな事だ、参加するよ。』だってよ。」

「まずは、第1段階成功だな。マルフォイは有り得んが、万が一もある。とあるルートから、保険として**ペリタセラム**も調達出来たしな。」

ゼロは、無味無臭の薬のボトルを見せる。

「ねえ、3人とも。」

聞いて来たのは、ハー子だった。

「どうした、ハー子。」

「そのF I J 作戦ってどんな略なの？」

「ああ、その事？ そう言えば、ハーミーには伝えてなかったんだよね。F I J 作戦って言うのは、フォイフォイ(F)色々(I)尋問(J)作

戦の略だよ！」

エリナが自信満々に伝えた。

「もつとマシな名前は無かったの!？」

「そこはお約束という事で。」

「そうだ。お約束だぞ、ハー子。」

「じゃ、これからのスケジュールを確認しておくか。」

「ゼロ、皆に分かりやすくな。」

「分かっている。まず、空き教室でグラントのランチショーにマルフォイを招く事には成功したわけだ。ここからは、失神呪文を使っていく。5人分食らえば、流石のマルフォイでもただでは済まないだろう。」

「で、そこから俺の開心術の出番ってわけだ。その後に、記憶を消去、表向き通りにランチをやるわけだ。俺の作った料理を振舞ってやるのさ。」

「それなら行けそうだね！マーリンの髭！」ロンが、高らかに叫んだ。
クリスマス・イブ。11時50分に招いている。透明マントや目くらまし呪文でグラント以外は隠れている。マルフォイが来た。

「リドル、ちゃんと来たぞ。クラブとゴイルも連れて来た。」

「お腹空いた〜。」

デブ2人は、食えれば何でもいいらしい。

「まあ、座れよ。お前らにも、庶民の味つてのを知って貰いたくてな。」

「へえ〜、それはどんな……………」

『『麻痺せよ!!』』
ストウービファイ

『『麻痺せよ!!』』
ストウービファイ

俺はマルフォイに、ロンとエリナはクラブ、ハー子とゼロはゴイルにそれぞれ失神呪文を掛けた。3人共、倒れてしまった。因みに、俺とゼロは無言呪文を唱えている。

「開心！レジリメンズ!!」

マルフォイの記憶を盗み見る。チツ、シロだったか。だが、ドビーとの関係性は知れたから、ある程度の収穫はあったと認めて引いておこう。

「それで、どうだった？」早速ロンが俺に聞いて来た。
「ゴイツは、本当に何も知らないみたいだな。効果は無かった。シロだ。」

今のやり取りの記憶を消し、蘇生呪文を掛けて何も無い状態までに戻しておく。ちなみに、俺の作ったバジルソーセージスパゲッティとたこ焼き、カステラを振る舞った。3人には大好評だったようで、大変満足して帰った。

「ハア。絶対マルフォイだと思ったのに。」言い出しつぺのロンが落胆する。

「また振り出しに戻ったわけね。」ハリーもそうだった。

「ううん。そうでもないと思うよ。」エリナが発言した。

「だな。怪しい奴がいないわけだ。」俺が続けて言った。

「え？」2人は俺とエリナの発言の意図にまだ気づいてない。

「つまり、お前らはこう言いたいんだろ？継承者の正体は、普通の人間から見て、怪しくない人物って事か。或いは、怪しまれない手段を持つている人物とも言える。」

「そういう事だよ、ゼロ。」

「俺らの行動をよお、ある程度手に取る様に分かる奴ってのも追加すれば良いんじゃないか？」

グラントも話に割り込む。

「そうだよな。エリナの行動パターンが読める奴じゃないと、2回も目撃させるなんて出来やしないさ。」

「そういう事ね。それでいて、相当な実力者よ。タダ者じゃないわ。」

ハリーがようやく理解した。ロンは、まだ分かっていない。

「スリザリンの連中とも限らないってわけかい？」

「ああ。とにかく、継承者の正体に関してはひとまず保留しておこうぜ。なあ、ハリー。」

「そうだな、ゼロ。蛇までは特定出来たけど、何の種類かまでは分からない。取り敢えず、解散しようぜ。」

俺達は、また夕食で会う事になった。殆どが帰宅しているので、1つのテーブルになるんだろうな。ふと、スネイプの部屋を通過した。

ん？何やら話し声が聞こえる。

「どうせ暇なんだ。聞くのも悪くないな。」

超感覚呪文、魔力感知防止呪文、目くらまし術を掛けて聞くことにした。

「ミス・ブラック。何故ここへ？」

「これを見せようかと思いましたが。」

話していたのは、イドウンとスネイプの2人だった。イドウンは、何やら手紙と写真を見せている。

「まさか、あなたが私の父と母、母の双子の兄と親しかったなんて。そして、もう1人の伯父とは犬猿の仲だったと知りましたよ。」

「あの2人とレギュラスには、良くして貰った。君の母、アリエス・ブラック。そして君の父の、トーマス・グリーングラスとな。後に婿養子として、ブラックの姓になったわけだが。」

「そして、あなたがエックスの後見人を務めていたとは。私の場合は、ハリーとエリナの父方の伯父でもあるメイナード・ポッターですけどね。フフツ、道理でスリザリンに行った私ならともかく、グリフィン・ドールに行ったエックスにもかなり甘かったわけですね。」

「いずれバレる事は分かっていた。だが、2年生のこの時期だったというのは、流石に想定外だった。メイナード・ポッターも、いつも愚弟のメガネから我輩を庇ってくれた。彼には恩があるのだ。」

「何故言ってくれなかったのですか？それならばハリーに説得も出来ますのに。私からセブルスを敵視するのはやめて欲しいと言えますのに。彼ほど、大切な人との別れ、そこから生まれる孤独の痛みを知っている人間はそうそういない筈ですよ。」

「事情があつてな。」

「そんなに、ハリーとエリナのお父様が怖いと？」

「イドウン、君はジェームズ・ポッターの事を知らないからそう言うのだ。妹はともかく、兄は生き写しと言える位に似ているのだよ。」

「そうでしょうか？ハリーは、ジェームズ・ポッターと違って傲慢でもありませんわ。寧ろ母の、リリー・ポッターに良く似てます。エリナも然りです。敵対者には情け容赦ありませんが、これは育ての親であ

るアラン・ローガーそのものですね。」

「あいつが父親とあまりに中身が違う事は、去年の最初の授業で良く分かった。何もかもが。だから今は、憎いのでは無く恐ろしい。故に、ポッターを注意深く観察している。それが、我輩のやるべき事であるのだ。」

「そうですか。今は、詳しく明かすつもりは無いと?」

「そういう事だ。」

その会話が聞こえた。妙に甘いわけだ、スネイプがブラック姉弟に對しては。それに、エックスの後見人がスネイプだど!?!俺に對しては、恐怖心しかないと言いたいのか?生憎だが、光にも闇にも染まるつもりは無い。観察される筋合いも無い。余計なお世話だ。

「イドウン。」

「何でしょうか?セブルス。」

「2人だけならともかく、他の人間がいる前ではそう呼ぶな。……話を戻そう。君は、母であるアリエスの失踪の原因に探りを入れようと思っているのかな?」

「分かりません。全く無いと言え?にはなります。しかし、私にはまだエックスやクリーチャーがいるのでまだ幸せ者かも知れませんね。」

「トーマスの事があつては無理もない。あれは君が3つになったばかり、そしてエックスが乳飲み子の時に起こった頃だからな。」

「それに、最初は父の事で憎んだりはしましたけど、近くに血のつながりのある家族や、父の最期の言葉、それに去年のハリーの魔力の質を知って、どうでもよくなりました。」

「そうか。イドウン。もう夕食の時間だ。行くといい。」

「分かりました。失礼致します。」

会話が終わったようだな。さっさとずらかるか。憎いというよりも恐ろしい……か。ならば、ジジイの手助けをするのも良いし、滅ぼすのも良いし、魔法界を見捨てる選択肢もアリだな。そう思いながら、大広間に向かう俺であった。

第16話 リドルの日記

クリスマス当日。起きるとクリスマスプレゼントがあった。ロンからは「キャノンズと飛ぼう」と言う本、ハー子はデラックスな鷲羽ペン、ハグリッドは缶一杯分の糖蜜ヌガー、ウィーズリーおばさんからは手編みのセーター及び大きなプラムケーキを貰った。ハイタカの掘り出し魔法道具専門店からは、通販で輝きの手の完全上位互換アイテム、栄光の手を購入した。そして、ロイヤル・レインボー財団からはある品が届いた。

「とうとう完成したか。記録の着火装置。もう一つ。大きさが自在の乗り物、ノアが。」

送られてきたのは、何の変哲もないライター7本に手のひらサイズの空飛ぶ船。前者は記録の着火装置、後者はノア。

まず、記録の着火装置から説明しよう。これは、火に触れた紙媒体全般を燃やす事無く、紙ごと複写が出来るライターだ。貴重な本のバックアップを残したい時に、大いに役に立つ。禁書棚の本を全てコピーでコピーするつもりだ。記録できる紙媒体の数は、無限大とも言える。

色は、赤橙黄緑青藍紫の合計7つ存在する。俺は、藍色をメインに使う。7個全部を口寄せ契約した。ちなみに、契約によるデメリットは無い。ただ、動物の口寄せはまだやってないし、出来たとしても動物側から一定の拒否権が存在する事位だろう。

次にノア。唯の模型に見えるが、正当な所有者たる俺の魔力や意思に応じて大きさがデカくなる。空だけでなく、陸・海・宇宙等あらゆる環境での活動を可能にしている。更に、ステルス機能や魔力感知の防止機能も搭載している。これも当たり前口寄せ契約した。

宿題も含めてやることをやったので、俺は暇だった。ホグワーツには、ゲームもステレオもテレビも無い。マグルの娯楽物が無いのは痛い。他の魔法学校でさえ、テレビは使える様になっている。日本のマホウトコロなんてゲームも出来る様になっている。懐かしいな、マホウトコロ。俺は、退屈だったのだ。FCやSFCがやりたい。

散歩でもするか。だが、ふと思った。マートルのトイレって俺一度も行つて無かつたよな。よし、行こう。ハー子とエリナ曰く水浸らしい。よつて、足元を中心に全身に防水呪文を掛けてトイレに入つていった。

「誰なの？」

「マートル・エリザベス・ウォーレンか？」

「本名は忘れちゃつた。今は嘆きのマートルつて呼ばれてるけど。」

「自己紹介がまだだつたな。俺は、ハリー・ポッター。前に来たエリナの双子の兄さ。」

「エリナの？似てないけど。」

「性別の違う双子は、殆ど二卵性双生児なのさ。俺は父様似だが、エリナは母様似だ。」

「そう言う事なのね。」

「君の事、マクゴナガル先生から聞いた。50年前に死んだ時、何があつたんだ？」

するとマートルは、嬉しそうに答える。普通、そんな風に答える奴なんざいないよ。

「ここで死んだのよ。メガネをからかう奴がいたから、ここで隠れたの。鍵を掛けて泣いていたら、誰かが入つて来たわ。変な事を言つた。外国語、だつたのかしら。喋つてたのは、男子だから出ていけて言うつもりでカギを開けて、そして——死んだの。」

「どんな風に？」

「分からない。けど、大きな黄色い目玉が2つ。体全体がギュツと金縛りにあつたみたいで、それからふーっと浮いて……戻つて来たの。あの手洗い台で見たのよ。」

「そうか。トラウマを呼び覚ます様な事してゴメンな。」

「怖くないの？」

「全然。世の中って広いんだぜ。ゴーストで驚くかよ、今更。魂の状態で彷徨つてる奴もいる位だしさ。」

「最初にあなたを見た時、また私に物を投げつけに来たと思つたわ。そこの黒い物体を。」

「あれか？」

小さな薄い本を拾う。日記帳だった。表紙は消えかけているが、50年前の物だと分かる。最初のページにはこう書かれてあった。『T・M・リドル』と。

そう言えば、リドルって奴は後のヴォルデモートだったはず。マクゴナガル先生からそう聞いたから。これは、ヴォルデモートの日記か？何故こんなものが？

「マートルー!!遊びに来たよー!!」エリナが来た。

「あれ、ハリー。ここ女子トイレだけど。」

「マートルに聞きたい事があってな。それに、ここに来る物好きなんて面白いねえだろ。」

「確かに。」

すると、また来客が来た。イドウンとエックスのブラック姉弟だ。「おや。ここで修行しようとしたら、先客がいましたか。」

イドウンが面白可笑しそうに俺とエリナに言った。

「修行?ここでか?精々、防水・防火呪文位しか役に立たねえだろ。」

「その呪文の修行ですよ。何という偶然。ハリー先輩もそこにいたとは。ところで、その手に持つてるの、何ですか?」

「これか。50年前の日記帳だよ。」

「見せて頂いてもよろしいでしょうか?」

「どうぞ。」イドウンに手渡す。

「T・M・リドル。誰なんでしょう?」

イドウンが呟いた。

「トム・マールヴォロ・リドルって奴の日記さ。尤も、そいつの名前は別の形で世の中に知れ渡っているわけなんだが。」

「それはどういう……」エリナが言いかけるが、止めた。杖を振る。

TOM MARVELO RIDDLE (トム・マールヴォロ・リドル)

一振りして、並べ替えた。

I AM LORD VOLDEMORT (私はヴォルデモート卿だ)

エリナとエックスの顔色が真っ青になった。

「俗に言うアナグラムって奴だよ。自分の名前から、お花畑な思考で名前付けるなんてさ。あの変態ヘビ、よっぼど逸脱したネーミングセンスを持つてる様だね。」

「これって、ヴォルデモートの日記って事?」

「ああ。そうだよエリナ。余程の危険物だろうね。この日記は。」

「という事はハリー。あなたは、この日記は闇の魔術の品と思っているのですか?」

「じゃなきゃ、そんな事は言わないって。それよりマートル、トム・リドルの名前って聞いた事ある?」

「大アリよ。スリザリンの超優秀生徒だったわよ。イケメンで、永遠の2番手と呼ばれていたわ。ハッフルパフのアラン・ローガーと2分する程の人気者だった。」

「へえ。つーか義祖父ちゃんがハッフルパフだってこと初めて知ったよ。時々、エリナやデイゴリー先輩みたいにとんでもない魔法使いが所属するからな。」

「茶番は良いから、それどうするの?先生に届けるの?」

「俺が預かる。そもそも、先生の所に持っていったら操られている奴が罪に問われかねない。操られているのは、生徒の誰かだな。」

「そうした方が良いかもしれないね。仮にも先生が操られていたとしたら、あの狸はすぐに気付くでしょう。」

「だな。去年のクイレルみたいだね。あんな感じで誰かを操るとか下僕にするとかして動いているよ。きつと、今回はこの日記が関係しているのは間違い無いからね。」

「先輩。日記なら何か書かれているのでは?」

「この日記、何にも書かれていないよ。空き教室で書いてみるか。」

空いている教室に俺達4人は移動した。試しに、『私の名前は、トンヌラだ』と記入した。敢えて偽名を使う事にする。

『こんにちは、トンヌラ。それにしても、お話が脱線して申し訳ございませんが、珍しいお名前ですね。僕の名前はトム・リドルです。トンヌラ。君は、この日記をどうやって見つけたのですか?』

『誰かが捨てようとしたんだ。』

『そうですか。僕の記憶を、インクより長持ちする方法で記録していたのは幸いです。この日記を読まれると困る人たちがいるのは分かっていたからです。』

『早速だけど、秘密の部屋の詳細教えて。』

『分かりました。良いでしょう。僕の知っている記憶を全て見せてあげましょう。』

4人とも吸い込まれた。結果。リドルの容姿がグラントに酷似していた。巨大クモを飼っていた上に、魔法生物に生体改造を行っていたという事で、ハグリッドが犯人として捕まった。そして、退学になっただけだ。

「記憶を改竄したりする様な男です。これは、リドルが間違えたか自分の犯行を擦り付けたかって事ですね？」

記憶を見たイドウン。どうやら、話が出来過ぎているので、逆に不信感を抱いたらしい。

「ハグリッドはそんな事をしないよ！」

「確かに。でもな、エリナ。去年、ドラゴンを飼おうとした奴なんだけ。しかも、自分の好きな物は知人もそうだって言う思考を持っている。リドルは、表向きは優等生だ。奴の本質を知らない人間だったら、果たしてどちらを信じるかな？」

「知らないなら、間違い無くリドルだと思います。先輩。」

エックスが言った。

「間違い無く冤罪の可能性が高いですが、万が一間違ってたという可能性もあり得なくは無いですね。ちゃんとした確証も無い今、この情報は私達4人だけの秘密にしておきましょう。ゼロとグラント、ハーマイオニーやウィーズリーには言っても良いかも知れませんがね。今の状況で混乱してるのに、森番が犯人だったなんて信じられませんか。エリナ。私が上げた人間以外には言いふらしてはダメですよ。魔法界で、初めての友を信じなくてどうするのですか？あなたは。」

「分かったよイドウン。ボク、絶対に言わない。」

一先ずは、4人だけの秘密となった。ハグリッドの事に関してはと
りあえず保留にし、日記の対処法に話を戻す。

「とにかくだ。こんな風に意思疎通をするわけだ。奴の記憶が入って
るんだろうさ。この方法で、誰か操ってたんだらうね。」

これ、もしかしたら分霊箱の可能性が高いな。

「書き込まないで、ただ単に持つてる分には大丈夫って事かな？」

エリナが俺に聞いて来た。

「その通り。だから俺が管理するって言ったんだ。」

「じゃあ先輩、お願いしますよ。」

「よろしくね、ハリー。」

「任せとけて。」

エリナとエックスは戻っていった。俺とイドウンの2人だけに
なった。

「それじゃあ、イドウン。これ、もう正体は分かかってんじゃないのか
？」

「ええ。これは完全に、分霊箱の特性そのものです。知っていたの
ですか？ブラック家の書斎には、その手の本なんていくらでもありま
したが。」

「俺も、ロイヤル・レインボー財団でその説明は受けた。それに財団の
総合図書館はマグル界、魔法界問わず世界中の本が殆ど載っているの
さ。」

「そうなのですか。いずれはそこに行ってみたいですわね。ところで
その日記、あなたはどうするつもりなのですか？」

「休暇終了後に、先生やダンブルドアのジジイに悟られない程度で古
い日記を拾ったって情報を流す。それで誰か炙り出せる。元々持つ
ていたそいつならば、何が何でも取り返すつもりだからな。」

「校長先生をジジイ呼ばわりとは、あなたも良い性格をしているでは
ありませんか。」

「イドウンだって、さっき校長を狸爺って呼んでたじゃん。」

2人で笑った。無表情かと思いきや、ここまで砕けたものになるの
か。戦闘狂な一面もあるけど、それも人間の思いもよらない一面と割

り切って、これからも接していこう。

「イドウン。」

「何ですか？」

「俺は、今度は正々堂々と思いつきり君と戦ってみたい。」

「奇遇ですわ。私もです。あそこまで手こずったのは、初めてですの
で。」

「そうか。じゃあ、またな。」

「ええ。あなたこそ。」

俺達は、空き教室から出て行って互いの寮に戻っていった。

第17話 奪われたレツドスパーク（前編）

クリスマス休暇が終わり、再び授業が始まった。ある程度落ち付いてから、リドルの日記を拾った事を皆に報告した。

「これで盗まれたなら、操られているのはグリフィンドールの生徒って事になるな。」

「そんなの持つてて大丈夫なの？」ハリーが聞いて来た。何十回目になっっている。

「あと何回言わせる気だハリー子。持つてる分には、被害は及ばないよ。書き込みをしなきゃ良いんだ。」

「例のあの人の日記か。何かおぞましい気もするけど。」

実際、ロンの言ってる事も間違っちゃいないわけだ。分霊箱は、人を操る力もあるからな。

「そうだハリー子。これ、預かっといってくれないか？誰が盗み出したまでは分からなくとも、盗んだ奴の性別位は分かるからな。」

「どういう事？」ロンが聞く。

「ハリー。成る程ね。ロン、いいこと？校則ではお互いに性別の違う部屋に入るとは禁じられているの。まあ、女子が男子の部屋に行くのは特に禁止されていないけどね。男子が女子の部屋に行くのはどうやっても出来ないわ。ハリーは、そこを利用してリドルの日記を盗もうとしたのが男子か女子かを区別しようとしてるってわけ。」

「そこんところ、ホグワーツに流す予定だけどね。これで盗まれたのなら、継承者に操られているのがグリフィンドールの女子っていう事になる。早速やろう。」

皆に吹聴して回った。俺の拾った古い日記は、ハリー子の部屋に保管してるって。後は、効果をじっと待つのみ。

それからは、レイブンクローとの試合があった。強化されたグリフィンドール・チームの猛攻に敵う筈も無く、終始圧倒した。ちなみに、ニンバス2000を使った。結果は、240対80で勝利した。

金曜日。この日だけは、午前授業になる。魔法薬学を終えて、昼を食べる。それからセコイアの杖だけを持つ。他の杖は、部屋で厳重に

管理する。更衣室に出て、レッドスパークに跨る。大分慣れて来たものだな。レッドスパークも、少しずつだが俺を認めてき始めた。毎日練習しておいて良かった。

練習が終わって帰ろうとすると、ワシミミズクから手紙を届けられた。読んでみる。

『ポッター。お前の大事な後輩は預かった。今すぐ更衣室へ来い。誰も連れて来るな、一人で来い。』

写真も同封されていた。エックスが捕まっていた。これは罠かも知れんが、行かなければ。

更衣室に来た。そこにいたのは、マークス・フリント、グラハム・モンタギューの2人だった。エックスが吊し上げにされている。

「貴様ら……」

俺は、杖を抜こうとした。が、マークス・フリントから牽制される。「おっと。有利なのはこっちだ。そこは忘れるなよ、ポッター。血を裏切るブラックを救いたければ、杖を捨てろ。」

確かに有利なのはあっちの方だな。俺の性格を上手く突いてやがる。大方、マルフォイの差し金か。この一件に関しても。俺は杖を力いっぱい誰にも届かないように投げた。

「聞き分けが良くていいねえ。グラハム、やれ。」

モンタギューが俺に襲い掛かる。奴の拳を紙一重でかわし、逆に強烈な蹴りを背中にお見舞いしてやった。

「ギャアアア！いい、痛え!!」

「バカめ。俺に接近戦で挑もうってわけか。生憎だが、体術には心得があるんだよ。」

「く、くそお。お前ら、やっちなえ!!」

更にマイルズ・ブレッツチリー、ルシアン・ボールもどこから来たのか襲い掛かって来た。しかも、全員杖を持ってやがる。俺は、ウィルスモードを発動させた。

呪いをかわしまくる。隙を見計らって、腹パンをやる。

「ポッター。調子に乗るなよ。こちらには人質がいるんだ。エックス・ブラックっていう人質がな。」

「イドウンが黙ってないぞ。」

「安心しろ。捕まえただけで、何もしちゃいない。穢れた血のクリービーと随分と親しくしていたのは許せん。だが、純血だから手荒なことはしてないさ。」

「先輩！逃げてください！こいつらの目的は、あなたのレッドスパークを奪う事です！」

エックスが意識を取り戻した。

「そう言う事だ。レッドスパークを渡せ。そして、抵抗をやめろ。」

「……………」持つていたレッドスパークを下に置いた。

「物分かりが良くて、大変結構な事だ。ポッター、動くなよ。お前ら、ポッターをやれ！」

人質がいる状態では何も出来ず、ただ無抵抗に暴行を受けた。

「……………」意識が遠退く様だ。それだけ殴られ、蹴られ続けたのだからな。

「これ位にしておくか。明日の試合で、ハッフルパフを潰す。お前の妹を、お前の使つていた力でな。」

そう言つて、スリザリン・チームは笑いながら出て行った。俺も気を失った。

フォルテ視点

今日も授業が終わり、レポートをまとめる私。最近、1年生のジニー・ウィーズリーの顔色が悪い様に見えた。なので、すぐに医務室に行かせた。後は、特に何の支障もなくスケジュール通りに進んだ。「さて。明日は、ハッフルパフ対スリザリンか。教師だから鼻屑は出来ないけど、個人的にハッフルパフを応援したいものだな。」

夕食を終え、部屋に戻ろうとする。そこで、セブルス・スネイプと遭遇した。

「フォルテ。これからどこへ行くのかな？」

「寝る前に見回りですよ。まだいる生徒がいるなら、速やかに寮に戻る様にさせます。罰則を嬉々として与えるあなたと違ってね。」

「ならば、吾輩も同行しよう。それに、好きで罰則を与えるわけではないのだ。丁度話したい事もあるしな。」

私は、セブルスと共に見回りをする事になった。そもそも、魔法薬学を私が3年生以降を教授していたのは彼なのだ。スリザリンだけを鼻屑する。私は何とか立ち回ったが、そのやり方が気に入らない。「それで、フオルテ。2年目になるが、どうかな?」

「特に問題はありませんよ。」

「そうか。最近、パンジー・パーキンソンから君の事について話があったね。」

「何でしょうか?」

「自分に対してあまりに冷た過ぎるといふ連絡が入った。態度を改めていただきたいと思ひましてな。」

こいつ、どの口が言つてやがる。

「その言葉、そのままお返ししましょう。」

「どういう意味かね? 吾輩は特に問題ないが。」

「何も知らないでも思っているのですか? ならば、ハリーへの対応を改めろと返しておくと言いたいのです、私は。」

「ポッターか。成績ついては何も言う事は無い。だが、授業態度が悪いのだ。厳しくして当然だ。対して、ミス・パーキンソンはそうでもない。」

「とても私には、そうは見えませんがね。セブルス。大方、あなたはハリーのお父上が相当トラウマらしいですね。だから、ある程度マシとは言え、生き写しとも思える程似ている彼を憎んでいる。それと同じですよ。あの忌まわしき女とパンジーがあまりにもそっくりなのです。自分から対応を改める事も出来ない癖に、そんな事を私に言う筋合ひは、あなたには一切無い。」

「……それでもやり過ぎだ。」

「どうでしょうね。寧ろ、足りない位ですよ。パーキンソン家が滅ぶまで、或いは私が死ぬまで永遠に許さないでしょう。」

もうその話が来る事は無かった。セブルスとしても、痛い所を突かれてはどうにも出来ないと思つたようだ。

「おや、クイディッチの更衣室が開いている。こんな時間に誰か?」
「グリフィンドールなら退学にしてやる。」

「その時は、私が全力で止めますがね。10年以上も決闘のブランクのあるあなたと、定期的に闇払いの業務をやっている私とでは、あなたの方が分が悪いですよ。」

更衣室に入る。そこにいたのは、吊し上げにされていたエックス・ブラックと血だらけの状態で倒れているハリー・ポッターだった。

「ハリー！」私は、ハリーに駆け寄った。

「エックス！誰がやった!?ポッターか?」

エックスは息を吹き返した。

「やったのは………すりぎ……ちー……む。」また気を失った。

「ハリー！ハリー！しっかりするんだ!!セブルス、2人を医務室へ。」
「分かっている。」

担架で乗せた。

医務室。エックスは、脱水症状だけで済んだ。ハリーは重傷を負っているが、命の別状は無い。2人共、日曜日には退院出来そうだ。

「フォルテ。ご苦労様です。一体、2人は誰にやられたのか。まさか、スリザリンの継承者?!」

「マダム。それはありませんね。石化もしてないし、死んでもいない。そいつは無関係だと思えます。翌朝まで待ちましょう。セブルス、真実薬を用意してください。」

「いいだろう。」

翌朝、全快した2人に事情を聞いた。スリザリン・チームの上級生（マークス・フリント、グラハム・モンタギュー、マイルズ・ブレッツチリー、ルシアン・ボール）に暴行された挙句に、ハリーは新しい箒を強奪されたようだ。セブルスは、幾らなんでもそんな事をする筈が無いと強く否定していたが、真実薬を飲んだ事やその日の出来事を開心術（それ以外の記憶をハリーからは読めなかった）を使って裏付けを取れたので、その反論はすぐさまやめた。

「これは、忌々しき事態です。早く取り上げるべきではないでしょうか?」

「マクゴナガル先生。レッドスパークって、俺でも乗りこなせる様になるまで数ヶ月かかったんです。あいつらに出来るなら話は別です。」

が、大抵は振り落として自滅します。このまま泳がせましょう。」
「それに、クイディッチはみんなが楽しみにしてるんです。中止はマズいと思います。」

ハリーとエックスは、先生たちにそう意見した。私もその意見に賛成する。

「そうだね。というわけで終了後に、嚴重な処罰を与えた方がよろしいと思いますが、どうでしょうか？」

と言うわけで、泳がせる事に決まった。スリザリン。勝つ為なら、他人の持ち物まで強奪するか。本当に、横暴だが勝負事には正々堂々とやるグラントに、他の寮生とも交友関係を持つてるイドウンが異端だと言うのが分かるな。

第18話 奪われたレッドスパーク（後編）

エリナ視点

土曜日の朝、先生達から空き教室に呼ばれた。イドウンと合流した。ボクと同じ事で呼び出されたみたい。だから、一緒に入る。

「実はのお。エリナ、イドウン。君達の兄弟が昨日襲われたのじゃ。」
「スリザリンの継承者に!？」

「いいや。犯人は、スリザリンのクイティッチチームじゃ。ハリーが新しく手に入れた箒目当てで襲ったのじゃよ。」

「そんな!!捕まえたんですか?」

「いいえ。試合終了までは泳がせる事にしました。その時に、事実を全員に伝えるつもりです。あなた方だけには、兄弟であるのでいち早く伝えました。」

—マクゴナガル先生が言った。

「ですからミス・ポッター。今日の試合に勝ちなさい。あなたの出来る事をおやりなさい。人から奪った物で強くなった気でいる人達に負けない様に。」

—スプラウト先生が、激励の言葉をボクに投げかける。

「エリナ。本当に申し訳ございません。私と同じ寮の人間がバカな行動を起こしてしまつて。」

「ミス・ポッター。奴らがここまでするとは思わなかった。我輩の責任だ。本当に済まない。」

—イドウンとスネイプ先生が謝つた。スネイプ先生つて妙にボクに甘い様な気もするけど何でだろう?」

「悪いのはその人達だから、2人が謝る必要なんて無い筈だけど。それに、イドウンもエックス君をやられたんでしょ?エックス君の所へ行つてあげたら?唯一の救いは、2年生3人が直接関与してない事だね。」

「エリナ。試合、頑張つて下さいね。全く、グラントとルイン以外の彼らには失望しました。恐らく、ドラコも絡んでいるでしょう。2人の見舞いは、私がやっておきますので、試合に集中してください。」

イドウンからも激励の言葉を貰った

「うん。よろしく。ハリーには、いつも助けられてばかり。でも今度はボクが、助ける番だから待ってて。必ず、レッドスパークを取り返すからね。」

決意を新たに空き教室を後にする。しばらく歩くと、ドラコ・マルフォイに遭遇した。だけど、ボクは無視した。

「ポッター。話があるんだ。」

「……………」無視をするボク。呪いを掛けたいという思いを抑えて。

「ま、待ってくれ。話を聞いてくれ。」

「ボクは、虫の居所が悪いんだよ。分かっているの?」

「ご、誤解をしているんだ!僕は…………僕は決して…………」

「話しかけないで。先輩達をけしかけて、ハリーを襲わせるなんて最低。どこかに行つてよ。今回は、そうやってボクを襲う気なんだね。この卑怯者。スポーツマンとしての精神が欠落しちやつてさ。よくシーカーになれたね。」

その時に見えた彼の感情。まるで、死刑宣告を受けているかのような悲しそうな顔だった。どうせ演技だと思つて、立ち去つていった。

更衣室で打ち合わせ。キャプテンが最後にこう言った。

「スリザリンには、優れた筈がある!しかし、こちらは選手の質で勝負する!試合を制するのは、必ずしも筈だけでは無い事を示すんだ!グリフィンドールがそうであったように!必ず勝つて、決勝戦に行こう!!」

皆の闘争心が最高潮にまで達した。

「エリナ。何時に無くやる気満々だね。」

声を掛けたのは、シーカーで4年生のセドリック・デイゴリー先輩だ。

「この試合は負けられません。ハリーとクイディツチの高みで正々堂々と戦う為に。そして、ハリーの無念を晴らす為に!!デイゴリー先輩、スニッチの方をお願いします。ボクは、点数をひたすら稼ぎます。」

先輩は、少し驚いている様だ。

「もちろん。そのつもりだよ。行こう！」

「はい!!」

そして試合開始。レッドスパークに乗っているのは、スリザリンのキャプテンであるマーカス・フリントだ。今のところ、乗りこなしている様だ。他はニンバス2001だ。ニンバスは手強かったが、対グリフィンドール戦での徹底的なデータ収集のお陰でさほど苦戦しなかった。

ボクは、フリントが離れている時に得点を入れる。だけど、フリントの乗るレッドスパークはまるで赤い閃光の如く高速で競技場を駆け巡る。流石にその性能の前では手も足も出ない。瞬く間に、得点を入れられた。そして、タイムアウトがかかった。

「得点は？」

「今の所、160対70。スリザリンのリードだ。まさか、フリントの奴がレッドスパークを持ってたなんて。想定外だった。」

「もしかして、ハリー・ポッターの入院も奴らが一枚噛んでいるってわけかい？」

「それしか考えられない。」

「あんなのに勝てるのか？」

「ううん。多分、これはチャンスかもしれません。」

「どういう事だい、エリナ。」

「ハリーでさえ、乗るのに一苦労するんです。本人から聞きました。相応しくない乗り手が調子の乗るのが最高潮になった時に振り落とすという話があります。そろそろ来る筈です。暴走が。」

「セド。エリナの言っている事が本当ならば、フリントの箒の暴走が来るかもしれないが、一刻も早くスニッチを取ってくれ！」

「了解！」

試合再開。クアツフルを持ってゴールに急ぐ。また得点を入れようとした。が、フリントからタックルを食らった。ゴールから大きく逸れ、クアツフルを落とす。クアツフルはルインの手に渡った。

「……………」ボクは、フリントを睨み付ける。

「悪い悪い。よそ見をした。」

そう言つて、スリザリン側のゴールに向かおうとする。でも、何かがおかしい。レッドスパークが止まってしまった。

「おい。どうした？動け！動けよお!!」

レッドスパークは動いた。でも、前にはない。乗り手を振り落とす為に暴れ回り始めたのだ。

「ぐわああああ！た、助けてくれー!」

そんな悲痛な叫びも虚しく、マークス・フrintは振り落とされて自滅した。それを見てから、クアツフルを指して先に進む。その時、金色の小さな球を見つけた。

ボクは、デイゴリー先輩にスニッチの場所を教えてそこに行くようにジェスチャーをした。先輩は、ボクの伝えたい事を読み取ってくれた。早速向かう。マルフォイも気付いた。でも、距離があり過ぎるので少々時間が掛かる。先輩がスニッチを取ろうとしたが、ブラツジャーに邪魔された。

「フォイー・さつきと行け!!」

グラントだった。そこから2人の箒チエイスが始まった。マルフォイは迅速な疾風の如く。先輩は力強い雷電の様に。速さなら、マルフォイに分がある。だけど、先輩は実戦経験と技術で箒の力を最大限発揮してそれを補っている。

そして、スニッチが消えた。2人は、地面に追突した。試合も終了する。勝利の女神が微笑んだのは――

「セドリック・デイゴリーがスニッチを取りました!!」

リー・ジョーダンが叫んだ。勝った。最終的に250対220でハツフルパフが勝った。皆、デイゴリー先輩の下に駆け寄った。嬉しかった。次は、強敵のグリフィンドール。だけど、勝利の余韻に触れておいても問題は無いだろう。

一方のスリザリン。上級生4人は茫然としている。ハツフルパフに負けるなんてと言う表情をしている。マルフォイは、号泣していた。慰めているのは、ルインとグラントだ。

「惜しかったな、フォイ。でもまあ、来年もあるんだ。その時まで、強くなればいいんだよ!!」

「そうそう。私達2人、知ってるんだから。ハリーに負けてから、皆のいない所で練習してたのは。魔法の訓練も、スネイプ先生に弟子入りしてまでやっている事をね。」

「つ、強くなりたい。絶対に、ポッターに勝ってやるんだ。」

ボク、マルフォイを過小評価してた様だね。スリザリンの2年生組は、昨日の事は本当に無関係なように見えたよ、ハリー。後で謝ろうかな。

上級生組には、この後地獄が待っていた。憤怒の形相で、マクゴナガル先生がやって来たのだ。プリントからレッドスパークを引っ手繰る。

「あなたたち。昨日グリフィンドールの選手に危害を加えて、この箒を強奪したそうですね。これは、タチの悪い悪事です！よって、ポッターとブラックの件に関わった4人には、それぞれ一人50点減点します。それに加えて、罰則も与えます。」

「50点!?!」

「そりやないですって!」

「その上無様に負けるとは!恥を知らない!!」

マクゴナガル先生が厳しい口調でそういった。今度はマルフォイ、グラント、ルインの3人の方を向いた。怒られると警戒する3人。しかし、先生が3人に向けた表情は優しげなものだった

「ですが、2年生3人は見事でした。上級生よりも活躍していましたので、25点ずつ与えます。」

結果、スリザリンは125点減点された。最下位に転落してしまっただ。後日、4人が晒し者にされたのは、言うまでもない。

ハッフルパフ寮のパーティーに行く前に、ハリーの所へ行った。エックス君は、退院したらしい。

「そうか。やったな、エリナ。結果的にレッドスパークも取り返してくれて、ありがとう。」

「いつも助けて貰ってばかりだもの!出来る事はこれ位しか無くて。それにね、マルフォイは無関係だったよ。」

「知っている。イドウンから聞いた。じゃ、次は高みで戦おうぜ。」

「うん！またね!!」

医務室を出て行く。さあ、次はグリフィンドールとの決勝戦。最高のチームなら、負ける気はしないとボクはそう思った。

でも、この勝負の直後にまた事件が起こるなんてその時は知らなかったんだ。

第19話 クイドイツ決勝戦

イースター休暇の時に3年次の科目選択の時期が来た。追加科目は『魔法生物飼育学』『占い学』『数占い』『古代ルーン語』『マグル学』の5つ。少なくとも、2つは選べとの事だ。

「何にする？」エリナから相談を受けた。

「魔法生物飼育学と古代ルーン語かな？マグル学はパス。マグルの世界の事は既に知っているからな。占い学は、先輩たちの反応が両極端過ぎるから却下。数占いは、評判が良いが所詮占いだから。」

「ハリーは、消去法で選んだんだね。」

「結果論だよ。」

「マグル学か。マグルの世界にいる俺には必要ねえな。」グラントが言った。

「ハーマイオニーは……何!?全部だと!」ゼロが大声をあげる。

「ええ。全てやるつもりよ。」ハリー子は誇らしげに言った。

「パーシーが言ってた様に魔法生物飼育学と占い学にしようかな？」

ロンが呟く。兄からアドバイスを貰ったらしい。

結局、エリナ、ロン、グラントは魔法生物飼育学と占い学を、俺は魔法生物飼育学と古代ルーン語、ゼロは俺のやる科目に加えて数占い、ハリー子は全部という事になった。

ゼロに、あの事聞いておくか。

「そう言えばゼロ、俺がクリスマスプレゼントにやった世界の蛇百科事典はどうだ？」

「実在する物から魔法生物、挙句の果てに幻獣種まで乗っているアレか？まあ、楽しく読ませて貰ってるわ。」

宿題を終わらせている者が終わってもものを見るといいう事をやっているのだ。それが終わった後、全員の名の陸上の打ち合わせしておく。それで、今日は解散した。

部屋に戻ると、ハリー子が悲鳴を上げていた。

「どうした？」

「ハリーから預かった日記が無くなっての!」

ようやく来たか。

「やはり、操られているのはグリフィンドールの女子生徒だな。」

「どうするんだよー！」

「このまま泳がせる。ハー子の部屋の住人はシロ。ここ以外で、ある程度俺達と通じてる人間だな、恐らくは。」

とりあえず、話は保留になった。俺も、休暇明けすぐの決勝戦に向けての準備をしなくちゃいけないからだ。

イースター休暇が終わり、期末に向けての勉強が始まるしな。

そして、クイディッチ決勝戦当日。早く寝てグツスリとした。バツチリだ。オリバーからの演説が来た。

「ついに決勝戦まで来た、相手はハッフルパフだ。だが、去年までの奴らと舐めてかかると、逆にこちらが惨敗する。エリナ・ポッターはクアツフルによる得点を取るのが得意だ。ハリーのレッドスパークと対を成すプラチナイーグルを持つ。俺でも守り切れるかは分からない。だが、ここまで来たなら絶対に2連覇を達成するぞ!!」

皆、オー！つていう言葉を放つ。競技場に向かった。さあ、約束を果たす時が来たな。始めようぜ、高みつて奴を！

エリナ視点

いよいよ決勝戦の日。キャプテンからの演説を聞く。

「僕は、今年が最後になる。ここで勝てない様なら、絶対に優勝は出来ない！グリフィンドールには、切札と呼ばれるハリー・ポッターがいる!!前のフロントが使っていたレッドスパークを使う。事実上、フロントよりもその扱いは上だ。暴走は殆ど無いと思つて良い。彼自身は、このチームの中で一番上手いエリナよりも強力だ！だが、こちらはチームワークで勝つ！これで最後だ！今日までの苦勞が報われる時！皆、頑張るぞ!!!」

最高潮の状態で、競技場へ向かう。試合が始まった。クアツフルを早速つかんでシュート。決まった。と思いきや、キーパーに止められた。彼からは、そう簡単にはやらせないという表情をされた。

さつきは失敗したけど、不可能じゃない。あのキーパーの人も間一髪と言った所だろう。何度もやっていくだけ。デイゴリー先輩がス

ニツチを掴むまでね。

ハリー視点

「両チーム、正々堂々と戦え！それでは……始め!!」

一斉に飛び立ち、俺は、早速スニツチを探す。超感覚呪文で探す。だが、中々見つからない。エリナがシュートを決めようとしたが、オリバーに阻止された。初めてだろうな。止められるのは。

僅かなスニツチの音を掴む。音を頼りに、スニツチを追う。だが、セドリック・デイゴリーも来た。成る程。俺をマークする作戦に出たか。だが、フロントみたいな仮の力じゃない。レッドスパークの真の力を見せてやろう。俺は急降下してから、急上昇する。セドリックはそれについて来れなかったようで、バランスを崩した。彼を巻いたは良いが、スニツチを見失ってしまう。仕方ない。また探ってみるか。エリナが得点を入れている。本当に、強くなったな。

そうしている内に3時間経った。一向にスニツチが見つかる気配が無い。

「ハツフルパフ。また点数を決めました！エリナ・ポッター、強い！強すぎるぞー！」

今の所、320対280でハツフルパフが推している。試合が始まった時点での持ち点は、ハツフルパフ500点、グリフィンドール440点だ。

勝つには、ハツフルパフがグリフィンドールより140点以内多い形で、俺がスニツチを取る事。今スニツチを取れば、勝てる。グリフィンドールは、やや防戦気味。防いではいるものの、得点を入れるどころの状態では無い。魔力感知呪文も併用して、スニツチを探す。あった。競技場の真ん中を彷徨っているではないか。誰も気付いていない。チャンスだ。スニツチ目掛けて進む。

スニツチが目視出来る距離に詰めた。呪文を解除する。今度は逃がさない。これにセドリックが気づいた。間合いを詰めようとする。しかし、完全にレッドスパークの力を引き出している俺には到底かなわない。詰めるどころか、どんどん開く。

3メートル以内まで詰めた。2、1、そして。

パシッ！スニッチを掴んだ。ゲームセット。ここまで長時間プレイしたのは初めてだ。

グリフィンドールは優勝した。だが、去年と違って辛勝と言った所か。ハツフルパフが強化され過ぎだな。スリザリンもニンバス2001を7本揃えて来た。そして、来年からはレイブンクローもまた、変わってくるだろう。3連覇は難しそうだね、これは。なのでまた、グリフィンドールも変化せざるを得ないわけだ。

優勝杯を手にする。寮に戻り、パーティーを行おうとした。が、それは中止になった。そして、俺とロンが呼び出されたのだ。マクゴナガル先生に。

「2人犠牲者が出ました。ペネロピー・クリアウオーターと……………ハーマイオニー・グレンジャーです。」

とうとう恐れていた事態が起こってしまった。ハー子が、継承者の餌食にされてしまったのだ。

第20話 ハグリツド更迭

「え？」

「今、ハー子が石になったって事を？」

「そうです。2人いっぺんに。」

来てみると、エリナ、ゼロ、グラントは既にそこにいた。

「2人は、鏡を持っていました。これは、何を意味していると思いますか？」

「いいえ、見当が付きません。」

「分かりました。私はここを離れますが、あなた方も遅くならないようになさい。」

先生が部屋を出て行った。それが完了するのを見計らった様に、会話を始める。

「皆、聞いてくれ。恐らく、こんな事が出来る奴はあの大蛇しかない。い。」

ゼロが、俺達だけに分かる様に小さく呟く。

「どんな奴だよ。勿体ぶらずに言ってくれ。」グラントが急かす。

「蛇の王、バジリスクだ。そいつの目を直視した者に死を与え、間接的に見た者は石になる。」

「そうか！」エリナが叫んだ。

「どうしたんだエリナちゃん。」

「今まで、運良く死者が出なかった理由が！分かったんだよ！ハーミーは、鏡で見たから死を免れた！最初のミセス・ノリスはマートルのトイレから流れた水を通して見た。」

「コリンは、カメラ越しだな。」俺が続けた。

「じゃあ、ジャスティンは？何も無かったけど。」ロンが、質問を投げかけた。

「サー・ニコラスを通して見たと考えれば辻褄が合う。サー・ニコラスは直視したんだろうが、1度死んでいるから2度は死ねない。だが、秘密の部屋の場合は分かん。」

ゼロがその答えを言った。

「そう言えば、以前はハグリッドが捕まったけどな。何か事情を知ってるかもしれない。」

俺は、ハグリッドの所へ行こうと提案した。

「ハグリッドさんのところにか？でもあの人よお、そんな事出来るとは俺は思えねえぜ。ハリー。」

「最初からハグリッドがやったなんて思ってたねえよ。あの変態ヘビに嵌められたに決まっている。」

「ヴォルデモート……死の飛翔か。」ゼロが呟いた。

「頼むから、その名前を言うのはやめてくれ!!!せめて、死の飛翔だけにしてくれよ!!!」

「ロン。そいつに何かされたわけじゃないのに、何を恐れる必要がある？今奴は、只の屍同然の犬畜生以下のくたばり損ないなのによ。」

ゼロが問いかけた。項垂れるロン。

「今日は遅いから、明日に集まろうよ。」

その日は、クイディッチをやった体ではそう簡単に動けないという事で、エリナのまた後日と言う案になった。談話室ではパーティーが予定されていたのだが、犠牲者が出てそれどころの雰囲気では無くなってしまっていた。

翌日。授業以外では出るなど言う校則が追加された。そんな事関係無いね。魔法使いらしく、無様に見つかからない様に行動すれば良いだけの事。皆には、今日ハグリッドの所へ行こうという事を伝えたのだ。

夜。殆どが寝静まった。俺とロンは、目くらしし呪文で城の廊下を突き進んだ。俺は、魔力感知呪文でエリナ達を探す。どうやら3人で透明マントに隠れていて、正面玄関で待っていた。

俺達5人は、合流してハグリッドの小屋を目指す。ノックをする時、石弓を持った状態で現れた。だが俺達の存在に気付いたら、すぐに入れてくれた。

「まあ、5人共。とりあえずゆっくり……隠れろ!」

エリナは透明マントに、残る4人は目くらしし呪文で存在を隠す。入って来たのは、ダンブルドアのジジイに見知らぬ男だ。ロン曰

く、見知らぬ男の正体は魔法省大臣のコーネリウス・ファッジと言う名前だそうだ。ファッジは、念のためにハグリッドをアズカバン送りにすると言った。大方、クレームが来て魔法省が何かしらのアクションを起こしたという理由が欲しいだけだね。恐らくは。

全く、こんな清々しいまでの腐敗っぷりを間近で見るとは。ロイヤル・レインボー財団が、英国魔法界を見限るのも充分分かったよ。しかも、ルシウス・マルフォイまで来た。ジジイを停職処分にした。これも大方、他の理事を脅しただろうね、きつと。だけど、疑問が残る。

あのハゲ進行中のルシウス・マルフォイは、詳細不明ながらエイダ義姉さんからの怒りを買っている。イーニアス義兄さんに昔何かした様だが、何をやらかしたんだ？義姉さんが怒るなんて、余程の事なのにさ。

俺達は、ハグリッドの言葉を聞く。森に行つて、蜘蛛を追えつて。ファングも連れて行つてくれつて。ジジイは恐らく、俺達の存在に気付いているだろうな。俺達のいるところを一瞬だけ鋭く見たからな。「これから禁じられた森に行くぞ。」

言い出したのは、グラントだ。

「正気か？今、明日になつた頃だよ!!」

ロンは、また出直そうと言つたのだ。

「いや、すぐに蜘蛛の所まで行ける手段がある。」アレを使おう。

「あるの!？」エリナが驚いている。

「待つてろよ。……アヴォカルク・ベカリット口寄せ召喚せよ!」

口寄せ契約したものを瞬時にこの場に召喚する。口寄せしたのは、ノアだ。魔力を流し込んで、人が乗れる大きさにする。

「す、すっげー!」グラントが感嘆した。

「ファング、おいで。ハリー、これで行くの?」

「ああ。これなら確実だからな。エリナ、この一件が片付いたら口寄せ呪文を教えようか?」

「良いの!？」

「頼んでくれればな。お前らもどうだ?」

「頼む（よ（ぜ）。）」

こうして、5人と一匹の船での生活が始まった。生活と言っても、20分位のものだけだな。小さくして、蜘蛛をつけて進む。30分して、ようやく巣らしきものを見つけた。ある程度離れた所に着地する。

「辛気癡え場所だな。」ゼロが愚痴った。

「もう帰りたいよお。」ロンは、蜘蛛まみれのこの場所から離れたがつている。

「誰が行くか、クジで決めようぜ。ファングと、あと2人でな。」

クジ引きの結果、俺とロンが行く事に。本人は、変わってくれええ、と言いながら俺に引きずられていった。

しばらく歩くと、アラゴクと言う声が聞こえた。俺とロンは、蜘蛛の巣に辿り着いた。

「ここに人間が来るとは。珍しい物だ。ハグリッドの知り合いか？」

「そうだ。俺の名は、ハリー・ポッター。隣の赤毛のノツポがロナルド・ウィーズリー。」

「僕の紹介がなんか雑過ぎない!？」ロンが喚く様に言うが、無視した。

「アラゴク、今日はあなたに話があつてここに来た。じやなきや、さつさとここを焼き払つて出て行くがな。」

「フン。随分と強気な人間だな。よかろう。ワシ等アクロマンチュラを全く恐れないその勇氣に免じて、聞きたい事を教えてやろう。」

アラゴクの話はこうだ。自分は秘密の部屋どころか、城に入った事は無いと。その時に、女子生徒がトイレで死んだ事を。そして、ハグリッドが退学になった事を。

「成る程な。ロン、帰るぞ。」

「やったあ！帰れる！」

ロンは喜んでいる。が、それも掻き消された。

「お前たちはわしらの餌になって貰う。」

「ふくん。素直に俺達を帰せば、お前らは後悔をしない筈だけど？」

「のこのこ来た新鮮な肉をお預けにはできまい。更に3人いるからそいつらも後を追わせてやろう。さらばだ、ハグリッドの友人よ。」

やっぱこうなったか。ま、怪物相手じや所詮こんなものか。

「ロン。目を閉じてろよ。邪神の碧炎!!フアーマル・フレイディオ炎よ我に従え!!」

十八番の呪文で、碧い炎を作り出して制御可能にする。次に、ヘルハウンドの姿に形態変化させる。尤も、黒色ではなく碧色だけだな。そして、日本で習得した生命を司る『陽』の力を注ぎ込む。これで、命を持った碧い炎の身体のヘルハウンドが完成した。

「攻撃！」

ヘルハウンドに蜘蛛を襲うように指示する。ヘルハウンドは蜘蛛を襲い出し、焼き尽くす。ターゲットは蜘蛛のみ。蜘蛛達は、もがき苦しんでる。1体、また1体と次々に倒れて行った。

「やめろーやめろー！わしの家族だ!!殺すな!!」

「俺達を食い殺すんだろう？ならば、この位のリスクは負って貰わないとね。次はお前だ。アラゴク。誰を敵に回したか思い知らせてやるよ。」

碧い炎を無数の鞭に形態変化させて、アラゴクに放つ。アラゴクは危険を察知してよけるが、完全にはかわせなかった。奴の左足の一本を焼いたのだ。

「ぐわああああ！あ、熱い!!水、水をくれえええ!!」

アラゴクは逃走した。他の蜘蛛達もそれに続く。チャンスだね。逃げよう。

「ハリー。助かったよ。だけど、あれって。」

「俺の切札だ。今は、とにかく帰るぞ。」

ノア待機組と合流する。船を発進させて、城の入り口まで戻った。「うわあ。そんな事が。」エリナは、言葉が出ない。

「しかし、ハリーもやるよな。1人で大きい蜘蛛を殆ど殺すなんて。」
「素直に帰してくれれば、奴らもああはならなかったがな。俺を食おうとしたアイツらが悪い。」

「蜘蛛からしてみれば、ずかずかと自分達の居住エリアに入り込んで来て、その上殆どを殺した悪魔みたいな存在だろうな。蜘蛛は苦手だけど、こればかりは彼らに同情するよ。」

「やはり怪物の正体はバジリスクで、犠牲になったのはマートルだっ

たわけか。だが、秘密の部屋の場所はどくなる？」

ゼロが今までのおさらいをしていた。

「ボク、もしかしたら分かるかも！」 エリナが何かに気付いた。

「え？どこなの、エリナちゃん。」 グラントが聞く。

「きつと、マートルのトイレだよ!!」

それは、考えてなかったな。だが、調べる価値はある。トイレで死んで、主にトイレに住んでいる。余程の事が無い限りは、あそこから離れないからな。あのゴースト女。

第21話 いざ秘密の部屋へ

隙を見計らって行こうとした。が、監視の目が日に日に増しているので出来なかった。同じ寮なら、それでも簡単だったかも知れない。だが、俺達5人は寮が見事に分かれているので余計難しかった。

6月の初っ端から試験をやるそうさ。マクゴナガル先生曰く、出来る限り普段の授業通りにやるそうさ。ジジイなら、そう言うだろう。俺は、試験に関しては問題無い。だがロンは、まるで死刑台に立たされたような顔をしていた。

1993年5月28日。試験3日前の朝食。緊急のお知らせがあった。ダンブルドアが戻って来るとか、継承者を捕まえたとか、ロックハートの新作が発売されるとか、そんなことばかり皆予想していた。マクゴナガル先生から出た言葉。マンドレイクが成熟し、収穫が出来る事、及び作られた魔法薬で石になった犠牲者を蘇生出来る事が分かった。

言うまでも無く、歓声が爆発した。大広間の殆どは、これで友達に会えると言っていたし、涙も流していた。全く、バカ騒ぎな奴らだと思いつつ俺は顔が綻んだ。途中、ジニーが何か言いかけてこようとしたが、パーシーの横槍が入って結局聞けず仕舞いになった。

昼食を食っていた時、ゼロとグラント、エリナがこちらに来た。

「さっき、ハーマイオニーの所へ行った。分からなかったバジリスクの移動方法。それは学校のパイプだ。ハーマイオニーは、もう気付いていたんだ。」

「そういや、蜘蛛が逃げ出していた。あれ、バジリスクが来る前触れだったのか。それに、バジリスクの天敵は雄鶏。だから操ってた奴は、雄鶏を殺していたのか。」

「早く職員室へ行こう!!」

俺達5人は職員室に向かう。しかし、到着直前に寮へ戻るようにと言う声が響き渡った。ここまで来たら連絡するという判断をしていたので、戻らなかった。だが、緊急の会議だ。何があつたかじっくり聞こうという事になった。

それによると、今度は連れ去られた事が分かった。それは、ジニーだった。ロンが入り込もうとしたが、俺、グラント、ゼロの3人がかりで押さえつけた。話をそのまま聞いてみる。その途中で、ロックハートが割り込んできた。しかし、厄介払いされた。

俺は疑問に思う。どうして彼女が？血を裏切る一族と言われていても、曲がりなりにも純血の一族なのに。

……まさか。いや、そんなはずは。でも、何か言おうとしたんだ。もしかしたら、それに関係するかも知れない。

「皆、行こう。ロックハートの所へ。逃げるに決まってるが、フリでも討伐しにいかないといけないからな。あいつ。」

ゼロが提案した。

「素直に協力してくれるのかなあ？」グラントがもつともな事を言う。「その時は、無理やりにもやればいいさ。俺達5人がかりなら、奴を制圧出来る。」

「ハリー。それは、ちよつとオーバーしてるよ。でもまあ、ボクもこんな緊急事態だから今は賛成だけどね。」

ロックハートの部屋を目標そうとするが、その前に誰かいた。エックス・ブラックだ。

「先輩、どこに行く気ですか？」

先に行くと、俺は4人に視線で促す。

「これからロックハートの所へな。」

「ジニーが攫われたのは本当ですか？」

「ああ。そうでなきや、あんな奴の顔なんざ見たくもないからな。エックス、そこを退いて貰おうか。それとも、何か俺に行つて欲しくない理由でもあるのかな？」

「僕も部分的に秘密を知っているんです。仲間外れなんて不公平じゃないですか。」

「思い上がるなよ。あいつらは、2年生の中でも卓越してるから連れて行くんだ。遊びで行くんじゃない。お前は、さっさと帰れ！」

「じゃあ先輩も思い上がらないでくださいよ!!僕は、コリンが石になった時、何も出来なかった。今度はジニーも失うなんてイヤだ!あ

の2人、僕の友達なんですよ！折角姉ちゃんから魔法を教えて貰ったのに、それを大切な人の為に使わないで自分だけ生き延びる事は、もう耐えられない！」

エックスが初めて俺に反発した。そうか、いつもつるんでたよな。俺にロン、ハー子みたいに。俺は、その言葉を聞いてとても他人事とは思えなかった。

「勝手にしろ。だが、俺も庇い切れる保証はない。自分の身は、自分で守れよ。俺が言いたいのはそれだけだ。」

「ありがとうございます!!!」

エックスも連れて行く事にした。今度の敵は、去年と違って本物の化け物だからな。最悪死人が出てもおかしくはないだろう。

ロックハートの部屋に辿り着く。既に制圧済みだった。4人ではなく、イドウンによつてだ。

「これで今までの意趣返しが出来てスカッとなりましたわ。あらハリー。予定が狂ってようですが、いいですか？目的が一緒なので、これから共に秘密の部屋に行きましょう。」

「何なの、お前等姉弟は。というかイドウン。お前の性格上、高みの見物をすると思ってたけどな。」

「最初はそうするつもりだったのですが、エックスは何が何でもジニーを助けに行くんだと言って聞かないので、同行する事にしましたの。全く、誰に似たのか。両親よりも、あの男そっくりですよ、エックスは。」

この2人も行くつもりだったのか。というわけで、共闘する事になった。

生徒7人と教師1人の奇妙な集団が誕生した。マートルのトイレに、先にロックハートを入らせる。エリナが、蛇語で開けと言った。手洗い台が移動し、大きなパイプがむき出しになった。

「さて、私の出番は殆ど無い……………」

俺は、ロックハートに杖を向ける。

「これまで散々好き勝手やって来たんだ。人の記憶を奪ったり、名誉を横取りしたり！」

「そうだな。叔父上。あんたには、先に降りて貰おう。」ゼロが冷たく言い放った。

「生徒を見捨てるなんて最低ですよ。」エックスが止めを刺した。

グラントがロックハートに蹴りを入れて奴を突き落とした。肉塊や盾には、相応しいかも知れないな。

「うわああああああああああああああん！ママああああ！！」

落ちながら、情けない声でロックハートが叫んでいた。

「叔父上？」ゼロに聞いてみる。

「あいつと、俺の母さんが姉弟なんだよ。尤も、俺の母さんはスクイブだけだな。」

「へえ。そうだったのかよお。初めて知ったぜえ。」グラントも頷く。

「姉ちゃん。エリナさん。僕ら5人で先に行つて来ます。」

「イドウンちゃん、エリナちゃん。俺達男5人が先に行くから、あとから来てくれ。」

「いや、そこまでしなくてもいいと思うよ。」

「皆行くぜ！」グラントが声を掛ける。

俺達男5人も、奈落の底へ降りて行った。

「大丈夫かな。」

「エリナ。少なくとも、頭のネジは吹っ飛んでいると思いますわよ。それは良いとして、私達も行きましようか。」

「うん！」

滑り台の様に降下したエリナとイドウンであった。

ベトベトするパイプを1分ほど滑った。その後、俺達は広い空間に投げ出された。相当長く滑ったみたいだな。恐らく、ここは学校の何キロも下に存在するに違いない。下手すりゃ、湖の下だろうな、きっと。そんな人工と自然が合わさった洞窟に俺達は、女子2人を待っていた。

10分して来た。どうやら、上手く着地は出来たみたいだ。

「スターの私がやる事じゃない。」泣きながら言うロックハート。

「諦めろ、叔父上。アンタは、文字通り地に落ちたんだ。」ゼロが切り捨てた。

「地に落ちたどころか、潜っちゃってるけどね。」エリナがゼロに言葉を返した。

「清めよ。スコージファイ 拭え。テルジオ 癒えよ。エビスキー 熱を持った水よ……よし、みんな綺麗になったようだな。戦いの時に、服が汚いとモチベーション下がるだろ?」

「ここまで来て潔癖症ですか、あなたは。」

「光よ!!!」ルーモス エックスが呪文を唱えると、杖に灯りが点った。

「ボクも!光よ!」ルーモス エリナも続いた。

「行こうぜ皆。」グラントがまとめ役みたいになっているが、この際どうでもいい。

ポチャン、ポチャン。随分長つたらしい通路だな。湿気も凄まじいし。ロックハートは何で僕がこんな目に、とほざいているし、皆汗だくになっていた。

「ねえ。あれ。」ロンが指差す。

何か大きくて曲線を描いたものがあつた。輪郭が辛うじて見える。

それは、じつと動かない。

「気味が悪いよ。」エリナが嫌悪感を示す。

「これは、抜け殻だな。バジリスクの。」ゼロが分析をする。

「上等だ。潰し甲斐があるぜ。」グラントは、喜びに満ち溢れていた。

「抜け殻で、これ。は、はは、アハハハハ。」

ロックハートは、完全にパニックになっていた。腰を抜かしている。

「立て。」ロンが杖を向ける。きつい口調で言った。

一瞬だった。ロンの杖をひったくり、ロックハートは俺達に杖を向けた。いつものうざいスマイルを放ってやがる。

「坊ちゃん、お嬢ちゃん方。お遊びはこれでお終いだ!この皮を持ち帰って、女の子を救うには遅過ぎたと皆に言おう。君達はズタズタになった無残な女の子の死体を見て、哀れにも気が狂ったと言っておくよ!さあ、記憶に別れを告げる時間が来たようだ!!!」

「どうしよう!ハリー!!!」エリナが取り乱す。

「エリナ、多分大丈夫さ。俺の考えが正しければ、俺達に術は来ない。」

「忘れよ！……………つて、うわあああああああああああああ
オブリビエイト

!!!」

「逆噴射どころか、小型爆弾みたいに爆発したぞ！」ゼロが叫ぶ。

「しかも、壁が崩れやがった。あのクソ教師、覚えてろ！」

グラントは、後でロックハートにお礼参りをする気満々だ。

「ロンが取り残されちゃってるよ！」エリナが皆に分かるように叫ぶ。

ロンとロックハートが、向こう側に取り残された。いや、逆にこちらが閉じ込められたってわけか。とことん使えねえカス野郎だぜ、

ロックハートめ。

「無能な味方は、有能な敵よりも恐ろしいとは言うが、まさかこれ程とはな。イドウン、粉々で破壊出来そうか？」

「出来なくは無いです、少々時間が掛かりますよ。ハリー。」

「やっぱりか。時間も押ししてるしな。ロン！聞こえるか！」

「聞こえるよハリー、皆!!」

「岩石を少しでも多く取り除いてくれ!!!」

「モチの僕さ！」

「行こう、姉ちゃん。行きましょう、皆さん。ジニーを救いに。」

エックスの言葉で、俺達は前に進んだ。

2匹の蛇が絡み合った彫刻が施されている硬い壁が見えた。

「もしかして……………【開け。】」

エリナが蛇語でしゃべる。壁が2つに裂けて、絡み合っていた蛇が分かれ、両側の壁がスルスルと滑るよう見えなくなった。俺達は、その中に進んでいった。

第22話 毒蛇の王と闇の帝王

「そうだ。みんなこれを。」

俺は、ゴーグルを渡した。

「先輩。これは？」

「対バジリスク用に開発した暗視ゴーグルだ。バジリスクの魔眼を防げる。早い話が、魔法の目を再現したものだ。直視しても石化や死ぬという事が起こらないアドバンテージはかなりデカイと思うけど。」

「よし、ボクこれを使う。ロイヤル・レインボー財団の魔法と科学の融合技術に感謝しなきゃね。」

皆これを使う気持ちになった様だ。首元に掛けておく。

先へ先へと進む。蛇が絡み合った彫刻を施した石柱がある。それも、最後の一对の柱の所まで部屋の天井に届く程高くそびえ立つ壁を背に立っている石像が、壁を背に立っている。年老いた猿顔、細長い顎鬚の顔が彫り出されていた。

「イドウン、この石像の魔法使いつて。」

「ええ。我がスリザリン寮の創設者、サラザール・スリザリンですね。」

そして、大きな部屋に辿り着いた。石像の足の間に寝そべる、一人の影。燃えるような赤毛の、黒いローブの小さな姿が、うつぶせに横たわっていた。

「ジニーちゃん！」エリナが大声で叫んで、そばに駆け寄る。

「ジニー！頼むから、返事をしてくれ！死んじやだめだ！」

エックスもジニーに声を掛ける。ゼロがゆっくりとジニーに近付いた。手を持って、何かしている。

「石になってないな。生きてはいる。だけど辛うじてだな、これは。」
「そう。以前僕がバジリスクをけしかけて殺した、穢れた血と同じ寮の彼の言う通りだ。」

物静かな声が聞こえた。制服は、スリザリンの物だ。グラントにそっくり。だが、あいつよりも背の高い少年がそこにいた。

「誰だテメーは！俺の偽物か!!」グラントが、少年に詰め寄ろうとす

る。

「グラント、ストップ！………トム・マールヴォロ・リドルなの？」
「そうだよ、エリナ・ポッター。それにしても、さっき僕に喧嘩を売ろうとしていた彼は、僕に良く似てるね。」

「お、俺の親戚か何かか？こいつはよお。」訳が分からないグラント。
「知るか、そんな事。後でじっくりと考えれば良いのさ。グラント。そして、トム・リドル……いや、こちらの方が敬意を表せるのかな？ヴォルデモートよ。」

リドルの顔が邪悪なものに変化した。

「もうそこまで知ってるのかい？トンヌラ。いや、あんなのは偽名だったっけか。ハリー・ポッター。僕としては、ヴォルデモート卿の名は親しい友人にしか明かしていなかったんだけど。」

リドルの言葉を聞いて、俺は思わず大笑いした。

「何がおかしい!?」リドルがイラツとした様に言った。

「お前が友人を持つだど？笑わせるじゃねえか。下僕の間違いだろ？」

もう笑ってなかった。真顔で、そして侮蔑を込めた目でそう言い放ってやった。

「ハリー。開始早々ヴォルデモートに毒を吐くなんて、ある意味あなたは勇者ですよ。」

「イドウンの言う通りだな。去年と同じじゃないか。まあ、去年の死の飛翔も落ちぶれた残骸そのものだったわけだがな。」

「ゼロも人の事が言えないじゃん。」エリナがツツコむ。

「とりあえずはよお、今回の騒動の元凶である俺の偽物を、ギツタギタのメツタメタにぶちのめせばいいんだろ？」

「厳密には違う。ジニーが………」

「プリンアラモード！良くもジニーを!!許さねえ！ぶつ殺してやる!!!」

「エックス。曲がりなりに也由緒あるブラック家の一員であるならば、もう少し言葉使いを丁寧なものになさい。」

「頭では分かっているさ。姉ちゃん。だけど、あんな厨二病の末期患者

にコリンを石にされて、ジニーを連れ攫われて正気でいろって言う方が無理あるでしょ？どうなんだよ？」

「ふう。こういう時こそ冷静にです。でもまあ、友の仇を取りたいのは分かりますがね。」

頭に血が上っているエックスに対して、落ち着く様に諭すイドウン。

「頭冷やしておきな、エックス。死の飛翔やその一味は、そう言った周りが見えていない感情を付いて攻撃してくるからな。」

ゼロが、エックスの肩にポンと手を置いて、そう言ったのだ。

なんだかんだ言って皆、リドル絶許状態になった。エックスに至っては、イドウンやゼロから落ち付く様に言われたとはいえ、リドルに殺意を向けている。

「僕の見せ場を奪うな！関係の無い奴まで出しゃばりやがって！お前達、一体何者なんだ!？」

リドルが怒鳴っていた。

「よくぞ聞いたな。」

ゼロが前に出て来た。俺とエリナ、グラントに目合わせをする。アレをやるのか。本当に。

「聞いて名乗るのもおこがましいが、取り敢えず名乗ってやるぜ。『無敵の剛腕ガンナー』グラント！」

グラントは、デザートイーグルを持ちながら何とも言えない名乗りポーズをする。

『「秘宝を手に入れしテレジャーハンター」ハリー！』

グラントの言葉に合わせ、俺は左の親指を上に向けながら目に出る。いや、トレジャーの筈だったんだが。

『「風を従えし戦いの神」ゼロ！』

ジョジョ立ち（ジョナサン）をしながら、前に進み出るゼロ。

「最後は、『奇跡のロリ巨乳』ミラクル・エリナ！」

困惑しながらも、前に進み出るエリナ。

「ちよつとグラント！ボクのだけ、何かノリがおかしくない!？」

「そうか？結構良いんじゃないかと思ってるんだがよお。」

「グラント。テレジャーハンターじゃない。トレジャーハンターだ。」
「あ、そこは間違えた。すまん、ハリー。」

「次からは、間違えない様に頼むぜ。」

「俺のは、何か厨二臭い気がするんだが。死の飛翔と同じ様な……」ゼロも言った。

「風そのものになれるんだし、戦闘能力も俺とグラントと互角だから良いんじゃないか？嘘は言っていないだし。」

「それもそうだな。」ゼロは、結構あっさりとなんげか納得した。

「姉ちゃん、あのノリさ。結構気に入ったよ。」

「気は確かですか、エックス。」

「……お前達4人は、この僕を侮辱しているのか!？」怒り心頭のリドル。

「うるせーバカ。」ゼロが切り捨てた。

「黙れ、ロリコンストーカー野郎。去年は俺の妹のエリナ、今年に入って来たばかりの1年生のジニー。年下の女子をつけ狙うその性癖は相変わらずだな、ヴォルデモート。いいや、その年齢からあつたつていったほうが正しいか？え？お前が喋ると虫唾が走るから、その減らず口を閉じていろ。」

ついでに、中指を立てておいた。リドルの奴は、プルプルと震えている。

「とりあえず、私も尊厳は奪われない様にしておきましょうかね。」

「姉ちゃんにまで手を出されたら、僕は正気を保っていられるかどうか分からないよ。」

「僕の話聞けええええ!!」リドルが怒り狂って叫んだ。

「さっさと用件を済ませてよ、この厨二病患者のロリコンストーカー。」

エリナが嫌悪感丸出しで、吐き捨てるように言った。

「後で覚えてろ、エリナ・ポッター。……さてと。バカなジニーのおチビちゃんは、日記にのめり込んでいった。チビガキのバカらしい心配事や悩みを書き続けたんだ。兄さん達がからかう、お下がりの本やローブで学校に行かなきゃいけない、いつもエリナお姉さまと居られ

るわけじゃない、それにハリー・ポッターが自分を好いてくれない事もね。話に合わせるのは苦痛だったよ。そして、屈辱的だった。」

「え？てつきり俺は、ジニーに嫌われてるかと思つたよ。」

だつて、挨拶してもすぐに逃げられるしね。

「ハリー！あなたつて人は……ハア。全く、呆れましたわ。」

「ハリーにも、そんな弱点があつたなんて。」

「どんな弱点だよ！まあいいや。後で聞いわ。おい、変態へび野郎。さつさと続きを話せ。」

「変態へび……だど!?後で思い知らせてやる。」

リドルは、何とか精神を落ち着かせる。

「だけど、チビガキが何度も日記を使つてくれたお陰で僕は徐々に力を付けていったのさ。次第に僕の魂をチビガキに注ぎ込んだ。」

今、魂つて言つたな。やはり、日記は分霊箱だつたか。

「段々おかしい事に気付いたチビガキは、日記をトイレに投げ捨てたんだ。そこで君達が現れてくれたんだ。他でもない君達兄妹が。」

俺とエリナを指差すリドル。

「さつぱり分かんないな。エリナならともかく俺もか?」

「そう。エリナはジニーから色々経歴を聞かされてね。ハリーは、時々見せる姿勢に興味が出て来た。まるで、ハツフルパフという劣等寮所属でありながら、散々僕をコケにくれたアラン・ローガーそのものだよね。」

「義祖父ちゃん。いや、アラン・ローガーは俺の命の恩人であつて、育ての親でもあるんだ。ある程度似てくるのは当たり前だろう?」

「それはそれは……何という事実。運命というのは分からないものだね。さてエリナ。次は未来の僕を破つた、君に質問だ。偉大な魔法使いであるヴォルデモート卿を、赤ん坊に過ぎなかった君が、どうやって打ち破つたんだ? 傷跡1つで済んでいるのは何故だい?」

「どうしてあなたが力を失つたのかは誰にも分からない。だけど、ボクがあなたから逃れられた理由は、今にして思えば分かるよ。ママが、ボクを守つたから! ボクを庇つてくれたから!!」

リドルの顔が歪んだ。だが無理やり、ぞつとするような笑顔を取り

繕った。

「そうかそうか。母親が君を守る為に死んだ。成る程な。それは、呪いに対する強力な反対呪文だ。分かったぞ——結局君自身には、特別なものは何も無いわけだ。実は何かあるのかと思っていたんだ。だが、僕の手から逃れたのは、結局幸運だからに過ぎないからなのか。それだけ分かれば十分だ。」

リドルは、1対の高い柱の前に立ち止まると、ずっと上のほう、スリザリンの石像の顔のあたりを見上げた。口を横に広げ、シューシューという音を漏らそうとする。

「おい、リドル。1つ聞かせろ。」ゼロが止めた。

「冥土の土産位ならいくらでも聞かせようじゃないか。」

「アナグラムまで使って、死の飛翔を自称する理由を聞かせろよ。」

「何だ、そんな事か。どうして汚らわしいマグルの父親の姓と名前を、いつまでも僕が名乗らなきゃいけないんだい？母方の血筋にサラザール・スリザリンの血が流れているこの僕が。汚らしい、俗なマグルの名前を、この僕が生まれる前に、母が魔女と言うだけで捨てたクズの名前を、僕がそのまま使うとでも？ゼロと言ったかな？死んでもノーだね。だから僕は、自分の名前を自分で付けた。いつか必ず、英国魔法界、いいや。世界中全てが口にするのを恐れて、平伏すであろう名前をね。その日が来るのを僕は知っていた。僕が偉大な魔法使いになる！その日が！」

「とことん下らん野郎だ。軽率と過信が弱点なのは、相変わらずだな。それならどうして、校長や義祖父ちゃんがいるイギリスで、多くの罪の無い人間の命を平気で弄ぶ様に殺すという愚行を犯した？そんなの簡単だ。イギリス以外で、それをする力が無かったってわけだ。そんな奴が、世界征服なんて出来る筈もねえ。」

俺は、万感の憎悪を込めてリドルに言い放った。

「それに、偉大な魔法使いがだれかなんて価値観は人それぞれだよ。ボクにとっては、パパやママ、それにハリーだけだ。」

「俺は、父様と母様、義祖父ちゃんだな。」

「俺はよお……俺自身だな。」

「グラント、あなたは本当にブレませんね。両親とゴッド・フアーザーですわね。私は。」

「僕にとつての偉大な魔法使いか。身近になるけど姉ちゃんかな？強いし。あ。でも、ハリー先輩も同じ位強いから………どつちもかな。」

「父さんと兄さん。兄さんに関しては、母さんが違うがな。」とゼロ。「お前なんて、下から数えた方が早いしさ。ぶっちぎりのビリだな。」

俺は、リドルにダメ出しを与えた。

「この僕がビリだと!?そんな事があつてたまるか!!」

「リドル。親から最初に貰えるプレゼントって何だと思う？金か？違う。名誉か？違う。魔力か？それも違う。」

ゼロは、自分を落ち着かせてから次の言葉を言う。

「それはな、名前だ。それを否定するなんて、余程のキラキラネームでもない限り母親の意思に反した事になる。俺は、兄さんとは母親が違うし、兄さんは純血だが、俺はマグルの血が4分の1入ったクォーターだ。母さんは半純血だがスクイブだった。俺が母さんと一緒にいられたのはほんの6年間しかない。癌で死んだからな。でもな、ゼロという名前は父さんや母さんから貰った最初のプレゼントだ。死んだとしてもだ！せめて、両親がいたその証や絆だけでも残そうと俺は思った。」

「やかましい!!知った風な口を聞いて！お前ら、全員殺してやる!!純血も半純血も、穢れた血も関係ない!!まとめてあの世に送ってやる！」

その時だった。何処からとも無く音楽が聞こえた。歌っていたのは、白鳥ほどの大きさの真紅の鳥。

「不死鳥ですか。あの狸が、送って来たのですね。」

不死鳥は、エリナの目の前に止まる。俺の前に、組み分け帽子を落とした。

「あの古いぼれが送って来た物は、そんな役立たずか！歌い鳥に古帽子！お前らにとつては、さぞかし心強いだろうね。古いぼれを恨みながら、浄土にでも行け。「スリザリンよ。ホグワーツ4強の中で最強

の者よ。我に話したまえ。」

最後は、蛇語で何か話すリドル。俺は、ゴーグルを掛けろという合図を送る。それと同時に、俺もウイルススモードを発動した。全員掛け終わったと同時に、スリザリンの顔の口が動く。それは、ぽっかりとした穴になった。そこから何か床の上に落ちて来る。巨大な蛇、毒蛇の王の異名を持つバジリスクだ。今はまだ、とぐろを巻いている。【奴らを殺せ。】

リドルが低い声でシューと言うと、バジリスクはとぐろを解く。

「さあ、お前達がバジリスク相手にどう足掻くか見せて貰うとしようか。」

「おい、グラント。何か寝言が聞こえたぞ。」ゼロがグラントに語り掛ける。

「ハリーやエリナちゃんの言う通り、お辞儀ハゲは最初っから厨二病患者だったんだなあ。俺でも引くぜ。それによお、お辞儀ハゲは寝てそうに無いんだがよお。」

「うくん。って事はグラント。トム・リドルは、今は寝言を言ったわけじゃないんだよねえ……だとすると、今のは——」

「戯言……だな。」俺は、エリナにそう言った。

「どこまでも僕を……このヴォルデモート卿をコケにしやがって!!! すぐに血祭りにしてやるぞ!!!」

激昂するリドル。

「火に油注いじやってるけど、大丈夫かな?」

「これが闇の帝王……の学生時代ですか。何か、思ってたのとは違い過ぎて——かなりショックですわ。」

「僕も……出てきた瞬間にBGMが来る系の帝王かと。こんな残念な小物だなんて思わなかったよ。」

ブラック姉弟の、そんな会話が聞こえてくる。まあ、何はともあれ、俺達6人とスリザリンの継承者との戦いの火蓋が、切って落とされたのだった………多分。

第23話 ネオ・バジリスク

毒蛇の王、バジリスク。奴は、俺達に向けて這いずってきた。クソ。魔眼は効かなくても、まだ牙の毒と俊敏さが残ってやがるか。

アバダ・ケダブラ
「息絶えよー！」

イドウンが死の呪文を放つが、バジリスクは回避した。マズいな。回避能力も結構高いのか。

「何で、イドウンちゃんの呪文の放つ方向が正確に分かるんだ？」

グラント、訳が分からないようだ。突進してきたので、皆避ける。

「グラント、蛇は体温感知と舌で匂いを口内に送り嗅覚感知するんだ。凶体がデカくても、従来の蛇の、その特性は持っているだろうな。」

「随分詳しいね、ゼロ。ボク、これからゼロの事を蛇博士って呼んでいい？」

「徹底的に調べたんだよ。バジリスクを倒す為にな。」

「どうかな？ゼロとやら。いくら蛇博士でも、僕の操るバジリスクは倒せやしないさ。」

リドルが勝ち誇った様にゼロに言った。

「なら、これはどうかな？ヴェステイブルーム エネルギーよ！」

ゼロが、青みがかかった白い光線を発射するをバジリスクに向けて放つ。牙の何本かが抜けたが、それだけだった。

『アクション来い。バジリスクの牙。』無言呪文で、抜けたバジリスクの牙全てを回収する。

「それなら、ディアブマス・アーピス魔塊球!!」

エリナが、決闘クラブの時にマルフォイ戦で使った白い光球をバジリスクに放った。バジリスクの顔が光った。

「ハッ、何だそれは！バジリスクは攻撃を受けてないぞ！エリナ・ポッター。」

「これだけなら、攻撃は無いよ。これは、補助呪文だから。エクスペリアームス武器よ去れ！」

エリナは、すかさず武装解除呪文を当てる。顔面に向けて。当たった瞬間、バジリスクが吹っ飛ばされて、石像に叩き付けられた。これ

は流石のリドルも焦った顔をした。

「唯の武装解除呪文だけで、バジリスクが吹っ飛ばされただど!? どういう事だ?」

「素直にそれを教えるとも思う? このボクが、あなたみたいな小悪党に。」

「教えたくないなら、それでも良いかもしれないね。」

「先輩。あの連携をやりましょうよ。」

「今が使い時かもな。やろう。じゃあ、頼むよ!」

「行きますよ! 水よ!」

エックスが杖の先から水を噴出させる。流石ブラック家。魔力の量も半端なく多い。まるで降水の様な水がバジリスクを包み込む。

「零界の翠氷!!!」

氷河の呪文を上回る絶対零度を杖から放つ。水は、瞬時に凍り付く。水に包み込まれてたバジリスクも凍ってしまった。

「エックス、早く!」

「はい! 口寄せ召喚せよ!」

エックスは、洗面器を口寄せする。

「熱を持った水よ!!!」

熱湯を洗面器に注ぐ。すぐに水が溜まり、俺は杖を持った方の右手を洗面器に付ける。僅かに凍傷を引き起こすのが、零界の翠氷の欠点なんだよな。幾ら回復スピードが速いウイルスモードでも、熱湯での処置で完治に3分はかかるんだよな。

「ハリー先輩は、さっきの術の副作用で3分は戦えません。その間にお願いします。」

「任せな。3分でケリをつけてやるぜ!」

「グラント、そうして貰えると有り難いね。」

「もうあれだ。ハーミーちゃんを傷つけない為に、編み出した俺の力! 見せてやるぜ!!」

グラントが、右の拳を地面につけた状態で何かをしている。しかし、グラントの体に何の変化も無い。失敗したのか? 魔力感知呪文で探ってみる。

!?何だこれは。脳のリミッターが外れている。それによって、主に細胞が活性化してるぞ。成る程。火事場の馬鹿力を任意で引き出すのかな？

「オツシャー！力が漲って来た！アイツをぶつ潰せるぜ！」

グラントは、走る。その速度は、人間を超えている。凍り付いたバジリスクの目の前まで来て、パンチをした。氷が粉々に砕かれて、バジリスクは解放されると同時に、吹っ飛ばされる。続いて胴体にキックをお見舞いした。バジリスクは、悲鳴を上げるように叫ぶ。

「何をやっている！たかが1，2年生のガキだろうが！この役立たずめが！きつさと殺せ!!!」

バジリスクは起き上がるが、もうピクピクしている。

「しぶてえ野郎だ。口寄せアツオカルク・ベカリット召喚せよ！」

グラントも口寄せした。出て来たのは、AT-4。つまり、ロケットランチャーだ。コイツは全く、懲りてねえな。

「ファイアー！」

発射した。バジリスクの腹部に直撃。バジリスクは、悶え苦しんでいる。

「よし、ようやく完治したぜ。」

俺は、組み分け帽子を被って、特攻する。帽子を被ったしばらく後、帽子が話しかけて来た。

『ハリー・ポッター。君は、今まで自分の信じる者や愛する者を守る為に命を張って来た。周りからどう評されようと。君こそ真のグリフィンドール生だ。これを取りたまえ。今は、君こそこの剣に相応しい!!』

何か固い物が出て来た。眩い光を放つ銀の剣が出て来た。柄には、卵の大きき程のルビーが輝いている。俺は、それを右手で持った。

「!!」グリフィンドールの剣だ?!?!どうして?!

「なっ！それはグリフィンドールの………僕でも見つけられなかった……何故、何の力も持っていない小僧に！」

リドルがそう言ってるのが聞こえる。だが俺は、構う事無くバジリスクの傍まで近付く。

「エンジエボルス・ガルドレギオン天魔の金雷！」

黄金の電撃を、左手に持ったアセビの杖から生成する。この魔法は数年前に作った物だ。肉体活性も促すが、人間の情報処理能力がそれに追い付けない。故に、逆にカウンターを取られかねない術だった。実戦で使うには、リスクが高過ぎるから封印した。

だが、去年ウイルスモードを手に入れた事で状況は一変する。身体能力の上昇、動体視力の強化に伴う人間離れた見切り能力。もしかしたら、この魔法の欠点を克服できるのではなと考えて修業を行った。そしたら、見事に成功した。

だから、実戦での使用はウイルスモードとの併用が前提となってくるわけだ。必然的に、Wーウイルスの適合者だけしか使う事が出来ない。実質、俺専用の呪文と言うわけだ。

エンジエボルス・ガルドレギオン天魔の金雷が十分な大きさになった直後、俺はバジリスクへ特攻した。視力を奪う為に、両目を攻撃する。結果、バジリスクの両眼を潰した。バジリスクは、絶叫を上げる。次に、口元の部分まで俺は向かったのだ。

全体重を剣にかけ、鏑まで届く様に深く、バジリスクの口蓋にズブリと突き刺した。腕に牙が刺さり、腐食性の毒が流れ込んできたが、Wーウイルスの適合者故に無効化された。それどころか、今まで負ったダメージすら回復した。

バジリスクは、床に倒れ、ヒクヒクと痙攣した。

「こんな事が、僕のバジリスクが！」

「諦めなさい！トム・リドル!!」エリナが怒鳴るように叫んだ。

「やっぱり、さっきのお前の発言は戯言だったようだな。」

冷たい口調で、俺はそう言い放つ。

「まだまだ、まだ終わらないぞ。こうなったら、最終手段だ!!蘇れ!バジリスクよ!!!新たな力と身体を得て、再び我に従いたまえ!!!」

リドルは、ジニーの杖をひったくり、呪文を唱え始める。すると、バジリスクに4本の足が生え始めた。その次に角が、そして最後に翼が生えた。鱗も強固な物となった。再び目に光が舞い戻ったバジリスクだったものは、周りを威圧するような咆哮を放った。

「蛇から竜になりやがった！」ゼロも、これは予想出来なかったらしい。

「無茶苦茶だー！」エリナも驚いている。

「アハハハハハ!!!これが、僕の切札。ネオ・バジリスクだ！直視した者を即死させ、間接的に見た者を石に変える魔眼は持っていないが、それを補えるパワフルさとタフネスを誇る！お前達に、勝ち目など最初から無いのさ!!やれ！」

ネオ・バジリスクは、新たに生えた足でこちらに向かって来る。皆回避した。が、エリナのかわした方向にネオ・バジリスクが向かって行った。エリナは、気付いていない。

「エリナ！逃げろ!!」

それでも、竜と化したバジリスクはエリナを噛み殺そうとする。エリナ本人も、自分の方向に來たのを気付いたが、もう後の祭り。もう逃れられない所まで、距離を詰めている。竜の牙が、エリナを殺そうとする。

だが、エリナの持っていたダイヤモンドがはめ込まれた指輪が光り、ネオ・バジリスクの魔の手を防いだ。その直後、何か長い物がネオ・バジリスクを突き飛ばす。ネオ・バジリスクは、思わず転倒した。「何故だ？どうして奴が、エリナを守ったんだ!?!」

長い物の正体。それは、さっきの竜の進化前と同じ姿をしたバジリスクそのものだった。

バジリスク。もう1体いたのか!?!しかも、敵である筈のエリナを守っただど!?!継承者たるリドルに従う筈の奴がどうして？

「あれ？何で俺、あの蛇の言葉が分かるんだ？」グラント、何かに気付いたようだ。

「何を言っているのか、翻訳してくれ。グラント。」

「分かったぜ。」

グラントに翻訳して貰った。

エリナ視点

「あの時の声って君だったの？」

ボクは、バジリスクに聞いてみた。

「そうだ。我が片割れを止められなくて、本当に済まない事をした。君達のお陰だ。ようやく、サラザール・スリザリン様の目的を実行出来る。」

「目的？ねえ、蛇さん。サラザール・スリザリンって人は本当にマグル生まれを排斥したかったの？」

「お嬢ちゃん、ならば答えようじゃないか。魔法書の類には、四人の創設者の略歴及びホグワーツでの顛末は書かれている。だが、詳しい人となりについては書かれていない事が殆どだ。」

「うん。ハリー。あのいかにも高級そうな剣を持つてる人がボクの双子のお兄ちゃんなんだけど、あくまで記録だから真実はもつと違うかもねって言ってたよ。」

「良い兄を持ったものだな。そう、誰も主の真意を理解していない。あそこのドヤ顔で継承者を自称している若造もだ。君の兄は疑問には思っていていたらしいがな。我が主とゴドリック・グリフィンドル、君の兄が持っている剣の所有者は大変仲が良かった。主義主張がぶつかり合ったと言われているが、そうではない。本来、ぶつかり合うものではないからだ。」

「どういう事ですか？」

「本来の純血主義とは、マグル生まれを差別するための物じゃない。魔法族である事の誇りを自覚する為にある。『誇りあれ、魔法使い。』とね。そう教える為の物だった。それに、サラザール様は別にマグルを排除する気など無い。迫害されている魔法族を、マグルから守る為に城にその場所を作ろうと考えていた。それだけだ。だから、マグルが何もしなければこちらも何もする気は無いという考えのお方だったのだ。」

「ゴドリック様は、生来の騎士道精神を持ってサラザール様の主義を快く受け入れた。あの方は、『それ採用するわ。』って軽いノリで言ってるんじゃないか。」

「なら良いんじゃないの？それで、グリフィンドルとスリザリンも手に取って仲良く出来る筈だけど。」

「そうだな。それが理想だ。だが、これが上手くいかなかった。周り

の環境がそうさせたのだ。英雄、騎士道の体現者たるグリフィンドール。真の魔法使いの味方、純血以外を排除する者たちの頂点と見做されたスリザリン。サラザール様は、とても後悔なされた。自分の考えが魔法使い達にキッチンと伝わっていなかった事を。」

【そんな。そこで諦めちやったの？グリフィンドールの理想が一番高いから、わざと自分を敗者にして。】

【ゴドリック様は大変苦しんだ。ロウエナ様は髪飾りの件と相まってお亡くなりになり、ヘルガ様はせめて4人が仲良かった頃の証を残そうと料理のレシピを作ったのだ。】

【ゴドリック様は、親友だったサラザール様への謝罪を込めてマグルの地で歌を残していった。マグルの世界では、聖ゴドリックと呼ばれていた。】

【知ってるよ！その人！歌にそういう意味があつたんだ！】

【魔法世界が、グリフィンドールが夢としてきた世界がどう回っているのかを見届ける為に意識を複製したものを2匹のバジリスクに残した。だが、我が片割れは見事にリドルの若造の言いなりになっているがな。】

【ある意味あなたも、サラザール・スリザリン？】

【そうとも言える。私の、即ちサラザール様の目的は唯一つ。この学校の仇名す巨悪を打ち滅ぼす事。私にとっての巨悪は、リドルと進化したバジリスクだ。】

【サラザールさん。】

ボクは、目を開いてバジリスクを、サラザールを見る。スリザリンの真意が分かった今、もう恐怖なんて存在しない。

【大丈夫なのか？私の目を見る事は死ぬ事に……】

【原始的な恐怖さえ抱かなければ、魔眼は効果を発揮しないよ。ボクは何も無いけれど、それでもその器を愛で満たす事なら出来るから。怖くなんかない。サラザール・スリザリンが、世界の敵として居場所を自分で排除するのなら、ボクが居場所になる。存在は永遠に留めておくし、もう傷付けさせない。皆がボクを救ったように、今度はボクがあなたを救います。】

『……………ジエム！創設者様や寮付きゴースト以外で、私を恐れなかった少女に……………このエリナ・ポッターはとても似ている。』もう十分過ぎるほど、私は救われたよ。理解者が出来たという意味でね。』
【宜しくお願いします！】

ハリー視点

「と、いうやり取りがあつた。」グラントが翻訳を終える。

「じゃあ、これからどうする？皆。」俺が皆に聞く。

「創設者の真意が聞けて良かったと思いますわ。」イドウンが力強く言った。

「俺らの代から、また4つの寮の結束をすれば良いんじゃないか？」と、ゼロ。

「僕もやりますよ！グリフィンドールの意思も、スリザリンの意思も両方継いで見せます。」

「そうだ！偽物を倒して、スリザリンの名誉を守るんだよ！ヴォルデモート。いいや、お辞儀ハゲ。あいつこそ、スリザリンの面汚しだぜ！」

「そうだな。俺もやるよ。俺の妹が信じたあのバジリスクを、俺は信じる！皆、行こう！」

俺達も不死鳥のフォークスを連れて、エリナとバジリスクの下へ行く。

「ハリー。ゼロ。グラント。イドウン。エックス君。フォークス。そして、サラザール先生。見つけよう、ボク達の答えを。ボク達自身の手で!!」

全員が頷く。全員杖を構える。バジリスクとフォークスは、臨戦態勢を取る。さあ、最終라운드의始まりだ。

第24話 ラストバトル

リドルとネオ・バジリスクを倒す。それが、俺達の勝利条件だ。ゼロが、皆を一箇所に集めた。

「皆。作戦がある。俺達の強みを最大限に生かして、リドルとネオ・バジリスクを倒そう。」

「ゼロ。作戦立案において、お前の右に出る奴はいない。俺はお前に命を預けるぜ。」

俺は、司令塔の役目をゼロに託した。

「ゼロ。よろしく。」

「完全に勝ちましょう。ゼロさん。」

「じゃあ、俺のプランを言う。カクカクシカジカ……………」

作戦を聞いた直後、ネオ・バジリスクの意識が復活した。

「ようやくお目覚めか。今度こそ仕留めろ。」

ネオ・バジリスクは、咆哮を上げる。ネオ・バジリスクの目の前には、ゼロとイドウン、エックスの3人が立ちはだかる。

「エックスベクト・パトリナーナム!
「ディアフマス・アービス」」

エックスからは黒豹、イドウンは大鷲、ゼロは鮫の守護霊を出し、ネ

オ・バジリスクと激突させる。ゼロは更に、空気弾を掌から発射する。

小さな物だが、連射が出来るものらしい。しかも、真空刃付きだ。

「ディアフマス・アービス
「フアーマル・フレイデイオ」」

エリナが光球を放つ。バジリスク時に術を食らったネオ・バジリス

クはすぐに避けようとする。だが、そうはいかない。

「フアーマル・フレイデイオ
「フアーマル・フレイデイオ」」

ネオ・バジリスクではなく、俺の持っている剣。アセビの杖を左手

に持っているのです、右手に持ち替えた。ロイヤル・レインボー財団の情報通りなら、俺の持つ剣はグリフィンドールの剣。これは、ゴブリン製だ。彼らの加工した銀は、自らを強くする物を吸収する。

先ほどバジリスクの毒の分泌している場所を刺した。バジリスクの毒は、分霊箱を破壊出来る。という事は、グリフィンドールの剣は分霊箱の破壊が可能となった最強の武器という事になる。だが、大本

であるバジリスクに効くかどうかは分からない。だから、俺の作った碧い炎を吸収させる。更にもう一つ。あれを加えよう。

『炎よ我に従え!!』

碧い炎だけじゃない、炎全般を操る術の効果が付与しておく。これでグリフィンドールの剣は碧い炎を安全に纏う事が可能となった。

早速、剣に碧い炎を付加する。更に、槍の様に形態変化させる。これをネオ・バジリスク目掛けて突き刺す。碧い炎の剣の一撃の方が危険と判断したらしく、思わず避ける。だが、これが俺の狙い。

ディアブマス・アービス
魔 塊 球を当てる為の罠に過ぎないんだ。

ネオ・バジリスクに魔 塊 球が当たった。よし、あと2，3発当てれば行ける！

「クソ！あの忌まわしい光の球か！僕が指揮を取らないと。」

それと同時に、リドルの左頬が掠る。少し血が出ていた。

「へへっ。偽物よお。テメエの相手は俺だぜ。不死鳥のフォークスや、サラザール先生も一緒になあ！覚悟しやがれ！」

グラントは、フォークスや、蛇化したサラザールと共にリドルの牽制をしている。44口径マグナムを左手に、杖と言う名のバットを右手に持ちながら。

「ひ、卑怯だぞ！」

「スリザリンの生徒ってのは、狡猾さを理念にしてんだ。目的の為なら手段を選ばないのがウリだ。それを忘れたのか？俺はよお、結構正々堂々としたやり方を好むんだが、目的を成し遂げる事とダチを守る為だったら、いくらでも騙したり、嵌めたり、蹴落したりしてるぜ。」

リドルは苦い顔をした。スリザリン生が、同じスリザリン生を卑怯呼ばわりするのは、それこそ本末転倒だからだ。グラントは、キングコブラに変身。口から毒液を、リドルめがけて発射した。リドルはかわす。しかし、それは罠だった。フォークスに掴まれてしまったのだから。

「クソ鳥め！離せ！おい、何でバジリスクは助けてくれないんだ！」

「私は、お前よりも彼らの方に、彼らという新しい時代に懸けると決め

たからな。」

「ふざけるなあああああ！」

*
「ディアブマス・アレス魔塊球!!」

これで4回目か。ネオ・バジリスクの体に当たった。ネオ・バジリスクは、白い光を体中から放っている。

「おい！グラント！終わったぞー！」ゼロがグラントを呼んだ。

「ようやくか。フォークス、サラザール先生。そいつを抑えといてくれよ!!!」

グラントも合流した。

「ハリー先輩、エリナさん！これが最後です。最後お願いします!!!」

俺とエリナは、杖をネオ・バジリスクに向ける。

「エリナ。前に教えた、あの呪文だ。」

「うん！複数人いれば、その威力が大幅に強化されるあの攻撃呪文をだよな？」

「ああ。そうだ！行くぜ！」

「ボクはいつでも大丈夫だよ！」

「デイ・デイラ二神の怒り!!!」

エリナと同時に、虹色の破壊光線を放つ。2つの虹色の破壊光線は、螺旋状に絡まり、掛け算の如く威力を増加させる。ネオ・バジリスクに光線が直撃。しかも、体全体にディアブマス・アレス魔塊球を纏っているの、元の威力の最大10倍に増幅している。それを差し引いても、2つを融合させたので、単体で放つ物より軽く40倍の威力を持っている。

ネオ・バジリスクは、木っ端微塵となって吹き飛んだ。ネオ・バジリスクの破片が、部屋の所々に降り注ぐ。辺りは、血と肉で染まったのだった。

ネオ・バジリスクがやられて、リドルは絶望した。

「そんな。僕の、僕の切札が!!!」リドルは、酷く狼狽している。

フォークスが、日記を持ってきた。

「偉いぞ、フォークス。」ゼロは、フォークスを撫でる。

「そ、それは！クソオ!!道理で見つからないと思ったら!!……………ま、

待て！待つんだ!!それに手を出すな!!」

「やはり、この日記が本体なのですな。」イドウンが、じつくりと日記を観察する。

「サラザール先生！これに噛み付いて下さい！」エリナが、バジリスクにお願いする。

【任せなさい。」バジリスクは、日記をガブリと噛んだ。

インクみたいな物が日記から溢れ出て来る。

「ギャアアアアアア!!こんな事があつてたまるかあああああ！僕は……イヤ俺様は、不死のヴォルデモートだぞ！俺様は、この世の全てを支配する者!……なのに、こんな……こんな……クソガキ共にいいいいいいいい!!ぬわーっっ!!」

トム・リドルの壮絶な断末魔の叫びが部屋中を轟かせる。リドルは身を振り、悶え、悲鳴を上げながらのたうち回って、消滅した。最後の断末魔、どこかで聞いた事がある様な気がするが、まあ気のせいだろう。

何はともあれ、リドルは犠牲になったのだ。犠牲の犠牲にな。そして、ジニーの杖が床に落ちるのだった。

「リドル。何で負けたか分かるか？お前の敗因はたった1つだ。たった1つのシンプルな答えだ。」

エックスは、小さな声で呟いている。何なのだろうか。リドルの敗因って。

「お前は僕を、いいや僕達を怒らせたんだ。」

エックスは、力強くそう言った。成る程な。リドルは、某吸血鬼と同じ過ちと敗因があつたわけか。妙に納得したな。だけど、どんな形であれ勝った。フォークスに、サラザール・スリザリンの意識が内装されているバジリスクの協力もあつてね。

「はは、やった。勝っちまったよ。本当に。」と、ゼロ。

「ネオ・バジリスクと偽者野郎を倒した。奇跡だぜ、こりや。」グラントが言った。

「ええ、やりましたわね。」

「先輩達のお陰ですよ。」エックスは、また笑顔になった。

「エックス君だつて良くやったと思うなあ、ボク。」

「俺達は勝つたんだ！」俺は、拳を強く握りしめる。

「「「「やったー!!!」」」」

皆で、この勝利を喜んだ。それぞれ、自分以外の5人にハイタッチをする。周りを見渡す。皆汚れているが、生き生きとしている。返り血を浴びていたのは、俺だけだったが。

その時だった。隅の方で、微かな呻き声が聞こえる。俺とエリナ、そしてエックスはそちらに向かった。何と、ジニーが目覚めたのだ。

「こ、ここは……一体。」

「ジニーちゃん！良く頑張ったね!!」

エリナがジニーを力強く抱きしめる。エックスは安心しきった顔をしているし、他の皆も然りだ。ネオ・バジリスクの破片の数々、エリナの持つている壊れた日記帳、返り血を浴びた俺を見て身震いして涙が洪水の様に溢れた。

「私……私……とんでもない事を…………」

「大丈夫さ。俺達は、もう事情を知っている。リドルのクソ野郎も、皆を襲っていた方のバジリスクも俺達で倒したんだ。君に、落ち度は全くないよ。」

俺は、落ち着いたように優しく言った。ウイルスモードも解除した。

「ジニーちゃん、目を瞑っておいてね。」

「はい、お姉さま。」

「サラザール先生。もう行くんですか？」

「ああ。君達という味方が出来ただけでも、私にとっては十分希望だ。もし何かあったら、また私を呼んでほしい。ではさらばだ、私の教え子達よ！」

サラザールは、穴に帰っていった。

*

「ゼロ・フィールドにグラント・リドル、そしてハリー・ポッターか。あの3人を見ていると、アンチオクやカドマス、それにイグノタス进行を思い出す。」

寢床に戻る途中で、サラザールはそう思った。

*

「私、決めましたわ。」

「何をだ？」

「本当の意味でのサラザール・スリザリンの教えを継承させていくと。」

「天下のブラック家でも、それは難しいんじゃないのか？」

「ゼロ。あなたの一族復興よりも大変かもしれませんが、やって見せます。」

「応援はしとくぜ。首席さん。」

「それじゃあ、皆さん。帰りましょう。」エックスが高らかに言った。

「どうやって？」

「えっと、それは……」

「任せる。アヴォカルク・ベカリット口寄せ召喚せよ！」

ノアを口寄せした。

「大きい船ですわね。」

「空も飛べるんだけどな。」

「これなら行けますって！」

おい、という声が聞こえた。ロンが、ロックハートを連れて秘密の部屋に来た。

「ジニー！」ロンが、抱き着こうとしたが、ジニーは拒絶した。哀れ、ロン。

「で、あのペテン師は何やってんだ？」ゼロがロックハートを指差す。

「こんにちは。暗いところですよね？ここに住んでいるんですか？」

「とまあ、奴さん。こんな風に忘却呪文が逆噴射して、今までの記憶が全部パーになったわけさ。」

「こっちの方が、人畜無害だな。」

「今までよりは、随分とマシになったね。」

「おう。愛嬌があるな。」

俺達兄妹とグラントは、こっちの方が親近感は持てるという結論に至った。

第25話 ルシウスへの警告

俺達9人が入って来たと同時に、沈黙が流れた。そしてまた、叫び声が上がった。

「ジニー!!」

ウィーズリー夫妻が、ジニーに飛びついて抱き着いた。その次に、パーシー、フレッドとジョージも駆け寄って来た。

部屋の奥には、校長とマクゴナガル先生もいた。校長はニッコリしているし、マクゴナガル先生は胸を押さえて大きく深呼吸をしていた。恐らく、落ち着こうとしているのだろう。フォークスは、校長の肩に止まった。同時に、俺とエリナ、ロンもウィーズリーおばさんにつきつく抱きしめられた。

「あなた達がジニーを助けてくれた!あの子の命を!一体どうやって助けたの?」

「ここにいる全員が知りたいと思っていますよ。」マクゴナガル先生がポツリと言った。

俺はグリフィンドールの剣を、ゼロが組み分け帽子を、エリナがリドルの日記の残骸をデスクに置いた。あ、ちやっかりと剣を口寄せ契約しておいた俺である。

「さて。どこから話せば良いのやら……」

エリナをちらりと見る。先に話してくれと視線を送った。

「ええと、ボク、じゃなかった。私は、今年度の初めに姿なき声を聴きました。ハリーに相談したら、スリザリンの怪物だから蛇じゃないかって予想したんです。」

「ただ、そこまででした。何なのかを特定までは私は出来ませんでしたからね。」

俺がエリナに続いて言った。次にゼロに視線を送る。

「はい。俺がハーマイオニーの見舞いに行った時の事です。彼女は、パイプの中を通るバジリスクだという事に既に気付いていました。俺は、彼女の持ってた紙で知りました。そして、バジリスクの対処法をハリーから貰った蛇事典で調べました。グラント、次だ。」

「ええと。それで禁じられた森で、ハグリッドさんの飼ってた巨大クモが50年前の最後の犠牲者の死んだ場所を教えてくれたんです。ロン。」

「それで、マートルが犠牲者だと気付きました。それに加えて、トイレの何処かに部屋の入り口があるんじゃないかという結論を出したんです。そこは、ハリーが考えたんですけど。」

「そうでしたか。あなた方5人は、100以上もある規則を粉々に破ったというわけですか。いつもなら処罰するところですが、事が事なので不問にしましょう。それで、一体全体どうやって全員生きて帰って来る事が出来たのですか?」

「そこからは、これを見た方が早いです。」

プレバク・ヒラクリスタル

再生の水晶玉を取り出して、再生させる。秘密の部屋のやり取りの一部始終が記録されていた。ジニーはどうなるのか。操られていたとはいえ、マグル生まれを襲った罪は計り知れないだろう。退学になるのか?そう思っていると、聞き手は全員一部始終を見終えた。見終わった時の周囲の感想。

「し、進化したバジリスクを下級生6人で倒したのですか!?!しかも、バジリスクはもう一体いて、そちらは味方にしたなんて!!」

マクゴナガル先生は、大変驚いていた。ウィーズリー家の面々は、もう言葉も出ないようだ。校長を見る。微かに微笑み、暖炉の火が、半月形のメガネにちらちらと映った。大方、閉心術が使えないエリナ、グラント、エックス、ロンから情報を引き出したのか。とことん食えないジジイだ。

「わしが興味あるのは、ヴォルデモート卿がどうやってジニーに魔法を掛けたかじゃな。あ奴は今、アルバニアの森に潜伏しておるようじゃが。」

アルバニア?確か、変態ヘビがレイブンクローの髪飾りを分霊箱にした場所か。何かある度に逃げてるのか?

「その日記が原因です。」エリナが、校長の疑問に素早く答えた。

「トム・リドル。いや、ヴォルデモートは5年生の16歳の時にこれを書いたんです。」

エックスが、言葉を繋げる。何が何でも、ジニーを責めるなどいう目をしている。

「見事じゃ。確かにトムは、ホグワーツ始まって以来、最高の秀才じゃった。トムとヴォルデモートを同一人物として見る者は殆どおらん。わしがまだ、変身術の教師だった頃に彼を教えた。卒業後、彼は消えた。再び表舞台に出た時には、もう昔の面影は無かったのじゃよ。」

「何でジニーが、その——その人との関係があつたのですか？」

ウイーズリーおばさんが聞いた。

「その日記なの！」ジニーがしゃくり上げた。

「いつも日記を書いていた。そしたらいつも、その人があたしに今学期中ずっと、返事をくれたの。」

ウイーズリーおじさんは、ジニーに向き直った。

「……ジニー。パパはお前に、何も教えなかったと言うのかい？ いつも言い聞かせていただろう？ フレッドとジョージが絡んでいる物以外で、『脳みそがどこにあるか分からないのに、自分で考える事が出来る物』は信用してはいけないって。どうしてパパとママに言わなかったんだい？ そんな妖しげな物は、完全に闇の魔術が絡んでいる事ははつきりしていたのに。」

「あ、あたし。し、知らなかった。ママが用意した本の中にこの日記があつたのよ！ あたし、誰かがそこに置いて行って、すっかり忘れたんだらうって、そう思った。」

「ミス・ウイーズリーはすぐに医務室に行きなさい。」

校長はきつぱりした口調で、ジニーの話を中断させた。

「彼女にとつても過酷な試練じゃった。よって、処罰は無し。もつと年上の、大人の賢い魔法使いでさえ、あ奴に騙されるのじゃ。安静にして、熱いココアを飲むとよい。わしは、いつもそれで元気が出る。」
「ハリー！ エリナ！ それに、グラントにゼロ、イドウンとエックス！ 君達には、何とお礼を言えればいいのか！」

ウイーズリーおじさんが、俺達6人に頭を下げている。

「俺は、偽物野郎が気に食わなかっただけだぜ。ウイーズリーさん。」

「礼には及びませんわ。寧ろ、弟のエックスの方が頑張っていましたし。」

「僕は、いつも一緒にいたジニーとコリンを助けたかっただけですし。」

「ロンを褒めてやってくださいよ。」最後にゼロが言った。

「ロン！見直したわ！」ウイーズリーおばさんが、ロンをギュツと抱きしめる。

「ママ、やめてよ！苦しいよ！」満更でもないようだ。

そのやり取りを見て、俺も思わず笑った。その間、校長が、マクゴナガル先生と何か話している。超感覚呪文で聞いてみる。

「のう、ミネルバや。ここは一つ、盛大に祝宴を催す価値があると思うのじゃが。キッチンにその事を知らせに行ってくれないかの？」

「分かりました。部屋に行った7人の処置はお任せしてよろしいですね？」

「もちろんじゃ。」

マクゴナガル先生がいなくなつた。俺は笑うのをやめた。どうやら、入れ違う様に招かれざるゲストが、怒りの形相で入って来たからだ。

「それで、何であなたもいるのですか？」

俺は、その人物の名前を言った。

「ミスター・マルフォイ。」

「どういう事かご説明願いますようか、ダンブルドア校長。」

「ご主人様！お待ちください！」聞き覚えのあるキーキー声も聞こえた。

「ドビー！やっぱりか。」俺の予想は当たってたようだ。

「マルフォイの所だったんだね。」エリナは、全て繋がったという顔をしている。

「こんばんは、ルシウス。」

ジジイ、機嫌よく挨拶している。

「それで！お帰りになったわけですか！停職処分をしたのに、まだ自分が校長に相応しいとお考えのようで。」

「その事じゃがのう、アーサーの娘が襲われたと聞いて、あなた以外の理事から学校に戻るように頼まれたのじゃよ。そのー、何だったか。家族を呪ったり、物理的社会的問わず抹殺するぞ、とあなたに脅されたと言っておった。」

うわあ、コイツ最低だ。金や力によるごり押しをしてたのか。やはり、蛙の子は蛙だな。

「すると——あなたは犯人を捕まえて、襲撃をやめさせたと？」

「やあ、ルシウス。聖28一族の高貴な雰囲気台無しになっているよ。私も、娘が戻ってきた事だし。ここで言っておこうか。応接間の地下について。睨みを利かせますよ。それでは私はこれで。」

おじさんは、医務室へ行った。

「!?」

パパフオイは、完全に青ざめている。何で分かったんだ、という顔をしていた。

何しろ、我らが親愛なるドラコに俺が開心術を使った時の事だ。その時に、その部屋が存在を知ったんだ。その後、ウィーズリーおじさんに言っておいてやったのさ。

「さて、ルシウス。アーサーもいなくなったから言っておくが、もう二度とヴォルデモートの学用品をばら撒くのはやめにするのじゃ。次は、無いぞ?」

「何を証拠に!」パパフオイが吠えている。

「そういう事だったんだ。エイダさんに蹴り飛ばされる前に、この日記をジニーちゃんの教科書を取り上げた時に滑り込ませたんだ。この日記、返しておきますよ。」

エリナが、パパフオイに向けて言う。そして、日記を自分のソックスの中に入れて、パパフオイに投げ渡した。

「こんなもの!」

ビリビリと破った。それが、ドビーの手に渡った。かかったな、バカめ。

「君もそのうち親と同じ目に遭うぞ、エリナ・ポッター。連中もお節介の愚か者だった。」

「その時は、俺がロイヤル・レインボー財団と共にそんな目に遭わせないようにする。ロイヤル・レインボー財団は、仲間や家族の死を決して許さないのだから。」

俺がすかさず言葉を返した。

「何故そんな事が言えるんだ?」

「それはのお、ルシウス。ハリーの保護者がアラン・ローガーだからじゃよ。その意味は、君はよく理解出来るじゃろ? ブラックリスト入りになっておるからのお。」

校長が話に割り込んだ。癪だが本当だ。ルシウス・マルフォイは、俺達兄妹を苦々し気に見る。もう、俺達に対して迂闊な事が出来ないという事を悟ったらしい。

「とにかく、私はもう戻るとしよう。行くぞ、ドビー!」ドビーからの返事が無い。

「ドビー、来い。来いと言ってるのが聞こえるのか!」

ドビーは動かなかった。ソックスを、大事そうに握りしめている。

「ご主人様がドビーめにソックスを下さった。これでドビーは——自由!」

「貴様らあああああ! 良くも良くも良くも………良くも私の屋敷しもべをおおおおおお!!! 許さん、許さんぞおおおおおおおおおお!!!」

ルシウス・マルフォイがエリナに飛び掛かって来た。

「いけない。エリナ・ポッターに手を出すな!!」

校長室の階段下まで吹っ飛ばされるパフォイ。怒りの形相で、杖を引っ張り出した。だが遅い。俺は、加速呪文でルシウス・マルフォイの目の前まで行く。彼の頭上に杖を突き付けた。チェックメイトだ。

「さて、これだけは言っておきましょうか。良くもまあ、元ご主人様からの預かり物をお粗末に扱っちゃって。絶対、あなたの大切にしてあるものを命の危険に晒すという形で、この代償は支払う事になりますよ。」

日記の残骸を弄びながら、俺はそう言い放った。

「フン。たかが日記だ。問題は無い。」

あくあ。分霊箱をたかが日記って言っちゃったよ。もう知ーらね。「まあ、良いですけどね。一応、警告だけはしておくんで。それともう1つ。俺は、自分への無礼や嫌がらせ、危害に関しては平気です。寧ろ不問にする位ですよ。余程タチが悪くなければの話になりますが。だが、そんな俺でも怒る時はある。自らの親しい者や仲間には危害を加えた事に関しては。」

ここで、俺の本音をぶつける。ルシウスだけに分かる様に、俺の魔力を放つ。去年と違って、威圧したい奴だけに出来る様になったのだからな。それでいて、見る者を安心させるように見せかけて、実は怒りに満ち溢れた笑顔を見せた。

「覚悟しておいて下さいね……この落とし前は、いつかあなたの後悔する形でつけさせてあげますから。首を洗って、待っていて下さいよ。」

ルシウス・マルフォイは、俺をの表情を間近で見て、非常に怯えていた。そして、逃げるように校長室を出て行った。途中、足が震える余り転んでしまった。あくあ。情けない姿だな。貴族らしくない。ああいうタイプは、絶対保身に走るな。

「姉ちゃん。先輩がここまでブチ切れた所を見るのは、初めてだよ。下手をすると、姉ちゃんと同じ、いや、それ以上のレベルで敵に回したくないな。」

「そうですね。ルシウスは、ハリーの逆鱗に触れたというわけですか。ルシウスも、敵対する相手を間違えましたわね。」

ブラック姉弟が、そんな事を言っている。聞こえてるぞ、お前ら。確信犯だろ。

「色んな意味で、死の飛翔よりも敵に回したくないな。全く、ハリーが味方で本当に良かったぜ。」

ゼロも同意見らしい。頷くエリナ、グラント、ロンであった。

「ドビー。俺は、君に対する認識を180度改めるよ。エリナを守ってくれて、ありがとうね。」

俺は、この妖精には決して見せなかった笑顔を見せた。勿論、同じ

目線になった状態だ。

「ハリー・ポッター様が、ドビーめに初めて笑顔を見せてくれた。あなた様も、エリナ・ポッター様同様にお優しい方です。」

ドビーが甲高い声で言った。

「ドビー。これ位しかしてあげられないけど、もうボク達の命を救おうだなんて、2度としないって約束して。」

「はい。誓います。エリナ・ポッター。それに、ドビーめのヒントが役立つ様で、ドビーめは嬉しく思います！」

「ヒント？あれだけ『ヴォルデモートじゃない』って散々言ってたじゃん。」

エリナが首を傾げながらドビーに言った。

「そうか。奴がその名前を使う前、つまり本名だったらいくらでも呼べるってわけだな。」

俺が、ドビーの言葉の真意を分析した。ドビーは、満足そうに頷いている。

「何だ。そんな事だったの。」エリナは力無く答えた。

「あなた方お二方は、ドビーが考えていたよりずっと偉大でした。」

「エリナはともかく、俺は偉大でも何でも無いよ。寧ろ、ろくでなしの方だよ。」

「いいえ！誰が偉大かというのは、個人で異なってきます。ドビーにとっては、ハリー・ポッターもそうでございます。それでは、さようなら！エリナ・ポッター、ハリー・ポッター！」

パチツという大きな音を残して、ドビーは消えた。

「さて、これで君達に話が出る。7人には、『ホグワーツ特別功労賞』が授与される。おまけに1人につき、200点与えよう。」

それを言うのなら、さっさと学校の危険物を取り除いてくれ、俺はジジイにそう思念術で送った。ジジイは、分かっているのか分からんが微笑んでいやがる。財団に伝えて、この学校の事をバラシてやろうかね。然るべき対策を、いざって時に生徒に押し付ける悪質な校長が就いている学校ってな。

「今年も、グリフィンドールの完全勝利ですか。まあ、スリザリンが最

下位から2位に返り咲いただけ良しとしておきましょう。」

イドウンがポツリと言った。

「先生。ハリー先輩は右手が軽度の凍傷になっっているので、早く話を終わらせてください。応急処置はしましたが、ちゃんと医務室で見ても貰った方が良いです。」

「ミスター・ブラック。そういう事なら、わしはエリナと話したい事があるので、ハリーを医務室へ連れて行きなさい。他の皆も、ロックハート先生を連れて行ってくれないかね？」

という事で、エリナ以外の全員が医務室に向かった。俺は、右手が殆ど治りかけていたが、ほんの少し残っているという事で、苦そうで不味そうな黄緑の薬を飲まされた。実際そうだったけど。

少し安静にするようにと言われた。秘密の部屋に関わった全員が。

第26話 監獄での会話

ここはアズカバン。魔法使いの監獄。ハグリッドが送られてから、ハリー達が秘密の部屋を脱出するまでの時間帯まで遡る。

「シリウス。どうしてお前さんは、ダンブルドア先生様の言いつけを守らなかった？ペティグリューに役目を託した事を後悔して仇を取ろうと思うのは、俺でも理解は出来るが。あの時、時を待てと言いなすったんだ。」

ハグリッドは、怒りと悲しみの入り混じった表情で男に問いかける。

「ハグリッド。全て、全て俺が悪いんだ。俺が最初から役目を全うしていれば、ピーターに任せなければ、ハリーとエリナからジェームズとリリーを引き離す事は無かったんだ。だから、その責任を取ろうと、俺は一人でピーターを追い詰めたんだ。」

シリウスと呼ばれた男は、後悔と悲しみを持って答えた。

「でも良かったよ、ハリーが生きていてくれて。ロイヤル・レインボー財団なら、完全に守ってくれるのだから。」

シリウスは、今度は希望に満ちた顔でそう言った。すぐに、表情を戻したが。

何しろ、ここの看守は喜びや希望と言った感情を糧にしている、吸い取るのだ。

「俺もだ。あの虹の目を持った男とバイクの護送中に鉢合わせした。ハリーを寄越せて。自分の後継者に相応しい、と言つてたんだ。そんな碌に素性も分からん奴にハリーを渡す気は無かった。だが、奴は只者じゃないってのは、出会った瞬間によく分かったわけよ。」

「それでハリーが樹海に落ちたって事かい？」

シリウスが、ハグリッドに聞く。

「ああ。その戦闘中にハリーが落ちこちてしまったんだ。ダーズリー家に届ける手紙と一緒に。だが、アランに引き取られたのは、本当に幸運だった。」

「その目の男に見当は？」

「分からん。だが、虹の目を持った奴で不死鳥の騎士団員。それでいてロイヤル・レインボー財団との懸け橋になったのが1人いるだろ。お前さんの3つ下のグリフィンドル出身の。」

「アルフレッド・ローガー……………か。だが、アイツは死んだ筈だ。所属が決まった3週間後に。ヤックスリーが主犯の死喰い人達に殺されて。死体は発見されてないけどな。」

「アルフレッドの祖父であるアラン・ローガーがダンブルドアを信用してないのは、もつと理由はあるが、それが最大の原因だ。先生様は、何とかアランとの関係修復をしようと奮闘したが、今も拗れたままだ。ハリーの生存確認を入学直前まで確認出来なかったのも、それが大きく影響している。」

「確か、協力関係を結ぶ時に、ダンブルドアはアルフレッドを不死鳥の騎士団の一員としてアランに提供させた。ハグリッド。アランへの見返り、ダンブルドアはどうしたんだ？」

「強力な保護魔法だけだった。団員を差し出さなかった。」
「これは。校長が悪いですね。」

1人の男も割り込んできた。クイリナス・クイレルだ。

「クイリナス。君も聞いてたのかい？」

「ええ、シリウス。あなたの正気を保つやり方を実践していると、イヤでも聞こえています。虹の目ですか。それって、天虹眼と呼ばれる物ではないでしょうか？」

クイレルは、2人にそう説明する。

「何だ、それって。」

「私も詳しくは分かりません。ですが伝承として、こう記されているのです。世界が混乱に陥った時に、生まれながらにその目を持って万物を司る、全知全能の絶対なる神の子が生まれてくると言われています。一説によれば、所有者の命と引き換えに死者を完全蘇生させる力もあるらしく、ダンブルドアはその力を持つ彼を手元に置きたかったのではないのでしょうか？何かあった時の為に、それを彼に使わせる気だったのでは？」

2人は言葉を失う。だが、すぐにハグリッドが声を荒げる。

「アルフレッドは死んだんだ。間違いねえ！それに、あんなに愛情に溢れた優しい奴が、赤ん坊のハリーを手に入れる為に、あんな酷い事をする筈がねえ！」

しかし、クイレルは静かに言葉を返す。

「分かりませんよ、ハグリッド。愛情の正反対は憎しみだとよく言われますが、そうではありません。実際は無関心です。憎しみは、愛情と表裏一体です。その愛情が強ければ強い程、裏切られた時の憎しみは強くなるのです。」

「もし、ハグリッドと対峙したのがアルフレッドだとしたら、ダンブルドアの希望に散々応えたのに裏切られたと感じてそういう手段を取る可能性も否定出来ないって事か？そう言いたいのかい？クイリナス。」

「ええ。そもそも、天虹眼を持った人間なんてそうそういやしませんからね。今の所、確かな事は全く言えませんが、ハグリッドの出会った虹の眼の男とはアルフレッド・ローガーかも知れませんよ。」

「俺の出会った男は、アルフレッドとは似ても似つかねえ。アルフレッドの奴は鮮やかな赤い髪だったが、そいつの場合は透き通る程の銀髪だったんだ。それに、お前さんら2人に入っておかなきゃなんねえ事がある。ダンブルドアは誰かを使い捨てにするなんてそんな事はしねえ！誓ってもいい！断じてだ!!」

ハグリッドが声を荒げる。それだけ、ダンブルドアを絶対的な存在と見ている証だ。だがシリウスは、若干冷めた様な顔になる。

「それならば、私をいつでも捕らえる事は出来た筈です。最悪、去年度の学期の初日にでも。なのに、最後の最後でポッター兄妹と他4人をぶつけた。つまり、最初から私と闇の帝王に勝てるのは無理だと見越して戦わせた感じがしますよ。この事から考えるに、彼は結構、冷酷な策士な一面もありますよ。私は一度、闇にいたから分かります。」

そうして、3人の会話が終わった。独房には他の囚人もいたが、皆それどころの状態ではないので、誰も聞いていなかった。

ふと、クイレルが向こう側の女囚人を見る。女の名前は、確かベラトリックス・レストレンジ。吸魂鬼の監視が特に強い囚人の1人で、

ただボーっとしていたのだ。クイレルがハツとなった。

「俺の親愛なる従姉を見て、どうしたんだ？」

「そう言えば、私が1年間の修行の旅をして時の記憶を思い出しましてね。奇妙な2人組を見たんですよ。」

「？」首を傾げるシリウス。

「その内の1人の男。どこかで見た事があると思ったら、今分かったんです。その男は、ベラトリックスに良く似ていたんですよ。」

クイレルの証言を聞き、驚愕するシリウスとハグリッド。

「何だど!? どんな奴だったんだ!?!」

「その時の彼は、見た感じ大体20になるかならないか位の年齢だった筈ですよ。何せ、4年も前の話ですから。」

「レストレンジに1人息子がいるというのか? だけど、そんな話。俺は聞いた事が無いぞ。闇の印にこんな話があつてな。闇の印は、植え付けられた者の体の作りを急激に変えてしまう。男ならば、余程体が弱くなければ体の機能に支障をきたさない。だが、女にとっては子供が作れなくなるそうなんだ。」

「シリウス。あなたの話が真実だとするならば、ベラトリックスに子供がいるのはおかしいと言いたいわけですね?」

「ああ。そっくりさんだとしか言えない……そうだ。体が弱い男のくだりで思い出した。確か、アルフレッドの弟のイーニース。あいつ、実はマルフォイ、クラブ、ゴイルに誘拐されて闇の印を無理矢理植え付けられた事があつたんだ。生まれつき体が弱く、何かと病気になりやすいつてアルフレッドから聞いていたんだ。その後検査をしたわけなんだが、残念ながら男としての機能を完全に失った。」

「彼は、今でもロイヤル・レインボー財団で魔法科学者として海外で活躍していると聞きましたか?」

「まあ、程無くしてマンダンガスが救ったわけなんだけどな。碌でも無いと言われるあいつの数少ない美点の1つが、そのイーニースの救出の一件なんだよ。」

*

そして、数日が経った。ハグリッドの釈放が、ファッジから正式に

言い渡されたのだ。

ハグリッドは出て行く時に、シリウスに対してこう耳打ちしたのだった。

「良いか、シリウス。ペティグリューを捕まえん事には、残念ながらお前さんの無実を証明出来ん。だから今はひたすら、耐え忍ぶんだぞ………安心しろ。ホグワーツには、ダンブルドア先生様がいらっしやる。去年度から、最強の戦闘一族の末裔で元闇払いのフォルテムフリットウィック先生の後任として所属している。ペティグリューを捕まえたら、すぐに解放するから待ってろ。くれぐれも、昔みたい突っ走って、拳句の果てに脱獄しようなんて考えるなよ。」

「……………」シリウスは、黙ってハグリッドの話を聞いていた。

「ハグリッド。本当に済まない事をしたね。さあさ、君は自由だ。ホグワーツまで送っていこう。」

ファツジが気さくにハグリッドに話しかける。ハグリッドは、一瞬シリウスを見る。そして彼は、アズカバンを後にしたのだった。

第27話 2年生修了

次の日の朝。俺達秘密の部屋に関わった者は、全員退院した。犠牲者も、マンドレイクで作った薬で回復した。

皆、体に異常は無かった。コリンは、エックスとジニーに駆け寄られてた。俺にお礼を言う機会を逃がした様だ。ジャスティンは、エリナと会話している。彼は、僅かにエリナを疑っていた事を謝罪してた。ゼロは、ペネロピー・クリアウオーターと話している。ゼロは褒められている。

ハー子も俺とロンに駆け寄ってきた。

「見事に解決したのね！やったわね！」

そして学校からのお祝いとして、試験がキャンセルになった。ハー子は、ガツカリしていた。もう一つ、全員集まり次第、宴をやることが決まった。

宴は、豪勢な食事がいっぱいだった。ローストビーフ、ローストチキン、パエリア、シーザーサラダ、ステーキ、寿司、スパゲッティ、その他もろもろが出た。少しずつよそった。

「これが、日本のお寿司なのね！一度食べてみたかったの！」

ハー子が叫んでいる。だが、ワサビが入っていたらしく、すぐに苦い顔になった。ハツフルパフの席を見ると、エリナが途轍もない速さで食べている。

「あの一、エリナ？そんなに急いで食べなくても、また出て来るからね。」

セドリツクがエリナに言ってる。

「昨日から何も食べてないから、元を取っておきたいなと思って。」

食べながら説明してやんの。

スリザリンの方では、グラントが祭り上げられていた。それを不機嫌そうに見ているマルフォイ。

「何で、あんな穢れた血が人気になるんだ。しかも、父上は理事を辞めさせられた上に、取り引きも一つ潰されたんだ。」

「マグル生まれですか、グラントが。ですが、今回の件でそうとも言え

なくなりましたわ。」

「い、イドウン!?!いつの間に!リドルが、穢れた血じゃないってどういう事なんだ!?!」

「どういう事なの?」ルインも話に割り込む。

「今回の事件の真犯人に良く似てたのですよ。そして、あの能力も。もしかしたら……いいえ。まだ確証が無いから言いません。それにしても、取り引きってルシウスは何をやっていたのですか?」

「バカで無能なマグル向けに風船ドラッグをね。でも、潰されたし、マグルの世界で指名手配を受けたんだ。」

「言っておきますけど、魔法界では麻薬は普通に使われていますが、マグルの世界では麻薬の取引は違法ですよ。それを知らなかったとは、ルシウスも詰めが甘いですね。」

明け方の3時半になって、ハグリッドが戻って来た。大勢の歓声で迎えられた。ちなみに、1000点オーバーしたグリフィンドールの優勝となった。

それから終業式までは、有意義な時間だった。身近な人に口寄せ呪文を教えたり、エックスとコリンから魔法を教えてくれと頼まれたり。

そうして帰りの日になった。汽車に乗っている時、俺はエリナと話していた。

「成る程な。校長とそんな話をしていたのか。」

「うん。大事なものは、持つてる能力じゃなくて、自分は何者なのかという選択をするんだって。」

「そうか。じゃあ、次の話だ。今度は、俺の家に来る?」

「うん!今すぐにでも!」

「そうしてやりたいのはやまやまだけど、2週間はダーズリーのところへいるようにって校長が言ってたからな。」

*

最終日直前、俺は校長室に入った。エリナの事について話がしたいと、アポを取ったんだ。こういう事でもなきや、ジジイと話したくも無いけどな。確認の為だ。

「エリナをロイヤル・レインボー財団に夏休み招待しようと思つてますけど、良いですよね？」

俺は、校長にそう言った。ダメと言わせるものか。

「それで構わないとも。ただ、最低2週間はダーズリー家にいさせるようにするのじゃ。」

「母様の魔法を持続させる為ですか？まあ、バーノン・ダーズリー以外は邪険に扱っていないようなので、そうしておきましょう。それでは、失礼します。」

校長室を出て行こうとした。だが、呼び止められた。

「ハリー。君は、一体どちらなのじゃ？」

校長が聞いて来た。ウイルスモードを発動させる。

「どちらとは一体どういう意味ですか？まさか、英国魔法界側か、闇の陣営側か？」

「極端に言えば、そうなるがのお。」

コイツ、自分の思い通りに俺が動かないからって、何を言つてやがるんだ。闇の陣営に同調する気なんて全く無い。そして、未だに中世から行き遅れているこの国の魔法界なんて、いつその事滅んだ方が良いと思つてるのさ。

「ハッキリ答えましょう。どちらにもなりません。俺は俺だけに従う。誰かに束縛されるのは、もううんざりですからね。ここを救う決断も、滅ぼす決断も、見捨てる決断も。俺の自由ですよ。誰かの指図を受けたり、監視を受ける筋合いはない。ただ、誰の味方かと問われたならば……………」

深呼吸をした。そして、話を続ける。

「エリナ・ポッターの完全な味方と言つておきましょうか。彼女と同じ位、ロイヤル・レインボー財団の面々に、俺を信じ、慕う者達もです。エリナには、あいつには荷が重すぎる。1人でヴォルデモートと戦わせるなんて。だから俺が負担を和らげるんですよ。コイツを使つてね。」

俺は、バジリスクの牙を見せた。ダンブルドアは、それを見てハツとした表情になる。

「君は、まさか。もう気付いてるのかね？日記の正体に。」

「さあ？どうだと思います？只の日記如きが、1人の女子生徒を操れるとでも？」

俺は、デフォルトで閉心術を掛けている。分霊箱については教ええない。ジジイも秘密主義で誰にも教ええないなら、俺も然るべき対応を取るまでだ。

常に自分自身の心をガードしている。だからジジイは、全く俺の心に入り込めないようだ。いいや、それどころか片鱗すら掴めていない。苦い顔をしながらも、俺にこう言ってきた。

「ハリー。良くお聞き。ヴォルデモートの一味と敵対するなら、わたし達は仲間じゃ。君が信頼しているマクゴナガル先生も。そして、スネイク先生もじゃ。」

お花畑の思考を持つてるな、相変わらず。絶対スネイクに裏切られるのは明白なのに。そしてスネイク、奴の最期も碌な物じゃない。敵味方双方から忌み嫌われ、悲しんでくれる仲間も家族も全くいない。永遠に独り、何も残らん。誰かに利用された挙句、ウロウロと彷徨う。失敗だらけのクズが、無様に死ぬだけだ。

「それでは、私からも1つ言っておきましょうか。死喰い人は、どこまでいこうと死喰い人です。それはあなたが良く分かってる筈だ。ヴォルデモートの危険性を分かっているながら、温情なんて与えて、結果、奴による犠牲者を拡大させてきたのだから。そして、いくら改心しようが所詮、変わる事は決して無いと。今回のルシウス・マルフォイみたいにな。」

しばらく沈黙が流れる。そう。全然反省すらしてない。だから、スネイクも同様なのさ。本当に俺を守ろうとしているのなら、そして申し訳ないと思っているなら普段の俺に対する態度なんて取る筈が無い。いずれ俺を、スネイクはヴォルデモートに差し出すつもりだろうさ。それは100%断言出来る。

「あなたには、分からないだろうな。何も失った事が無い……綺麗で偉大なあなたにはね。今回も、前回は、12年前までの戦争でも、救える命を捨て駒の様に扱ったあなたには。俺が何も知らないとしても

思ってるのか？ロングボトム夫妻を、ネビルの両親を見捨てて廃人にする手引きを行ったのだからな。正直、レストレンジ3人とバーテミス・クラウチ・ジュニアよりもあなたは性質タチが悪過ぎるよ。そして何よりも、俺の父様と母様を、エリナがヴオルデモートを倒せる者にする為の生贄にしたのだからね。」

ダンブルドアの顔色が真っ青になった。これは、凶星の様だな。

「1人の子供に、世界の命運を託すだと？バカバカしい。冗談も休み休みに言ってくださいよ。そんなものは、フィクションの中の物語だけで十分だ。」

ダンブルドアに対して、俺は侮蔑の視線を投げかける。

「それでは、今度こそ失礼します。荷造りが途中ですので。例え地獄に落ちてでも、悪魔に魂を売ってでも、そして全ての罪を背負ってでも闇の陣営の破滅の為に行動する。俺の邪魔をするなら、それでも構わない。その時は、あなたと敵対する覚悟は出来ているのだからな。最速の手段を『悪しき手』だという理由で実行しないのなら、そのまま『綺麗で偉大な』ダンブルドアを演じているが良い。臆病者の、今世紀最大の偉大な魔法使い様。」

俺は、談話室に戻った。そうだ。このバジリスクの牙を使い、分霊箱の破壊に特化した杖や兵器を新しく作るんだ。回収出来た牙の数は、16本。多くても半分位の数で作れるだろう。残りは、丁寧に管理しながら研究に使えば良い。エリナ。絶対に、お前への負担は和らげるからな。お前だけでも幸せになる様に俺は動くまでだ。その為だったら、どんな事だってやってやる。

回想が終わる。少しウトウトしてたようだ。

「ハリー。大丈夫？」エリナが心配そうに見てた。

「悪い。少し眠くなっただかも。」

「ちゃんと睡眠は取った方が良いでしょう。」

「そうする。とにかく、2週間後に迎えに行くよ。いいね？」

「うん。お願い。」

「ダーズリー家の人達には話を通しておいてくれよ。一応、こちらからも手紙は出しておくが。」

「分かったよ。」

話し終えたその時、キングズ・クロス駅に到着した。柱の向こうで、義祖父ちゃん達がいた。俺は、エリナを2週間後に招待しても良いか尋ねた。皆、ハリーの家族だから大歓迎だ、ぜひ連れて来なさいと言う返事を貰った。俺は、エリナに許可が取れたとサインを送った。そうして、しばしの別れとなった。

俺の2年生としての1年間は、終わりを告げた。だが、こうした緩やかな日常は少しずつ崩れていく事。そして、闇の陣営以上の脅威もまた、社会の陰で暗躍し始めている事を俺はまだ知る由も無かったのだ。

*

虹色の眼、銀色の髪を持った男。部下の仮面の男『ダアト』から、ホグワーツで起こった出来事の報告を受け取ったばかりであった。

「分霊箱は後5つか。内1つは、思いもよらない正体だって事にはまだ気づいてない様なな。ハリーよ。俺の後継者。」

そこから、青みがかかった黒の髪をしている灰色の両眼を持った美しい女性がやって来た。

「ケテルか。」

「世界中に散らばったメンバーに、伝言を報告しておいたわ。マクルト。」

「……」

「本格的に動き出すのね。私達『終わりを生み出す者』が。TWPFが。」

「そうだ。我が組織の目的は、全てを無に帰す事だ。まずは、闇の陣営に先手を打つ。そして、超古代遺跡から手に入れたロストテクノロジー。その産物であるレプリロイド。全種類完成したのか？」

「ええ。パンテオンシリーズが投入可能だから、実戦さえ積ませればね。」

「そうか。新たなメンバーのスカウトは？」

「ダアトが行っている。もっと有能な奴を引き入れてみせますって、アズカバンの最上層エリアに向かって行ったわ。」

「あいつの能力ならば、どんな強固な守りが施されていても無意味だからな。さてと。闇の陣営、アルカディア、不死鳥の騎士団、ロイヤル・レインボー財団。俺達にどう足掻く気かな？そして、ハリー！ポッターよ。『覚醒』の境地に辿り着いた我らPWPPEに立ち向かえるかな？」

虹の眼の男は、ケテルと呼ばれた女性と一緒に姿くらまして消え去ったのだった。

*

某国某所。どこかの研究施設。大きな容器に、少女は囚われていた。

『もう、死にたい。』

年齢は10歳ほど。透き通る程の水色の髪をポニーテールにしている、薄いピンクの服を着ている。他人から見れば虜になる程の美しさを持つ。しかし、彼女は純粹な人間では無かった。手は小さな水かき、耳は魚のヒレの様で、極めつけは下半身。ビジリアンに輝く魚の尻尾。

自分を3年前に捕まえたあの男がいる限り、自分は一生実験動物として永遠に生き続けるのだろう。光も、希望も見出せなかった。

しばらくして、少女の居る場所が襲撃された。他の同胞には無い特異体質が幸いして、その場所を必死の思いで脱出しようとする。姉や妹を含めた同胞達の断末魔を浴び続けながら。

おまけ 設定集

主な登場人物について

【名前(イメージCV)】と言う風な感じで、登場人物を記載。原作キャラは、映画版の吹き替えに準じる。今作のオリキャラに関しては、完全に脳内イメージ。

ハリー・ジェームズ・ポッター（小野賢章 幼児期まで：矢島晶子）
本作のメイン主人公。しかし、キャラは原作と比較しても、ほぼ別人と化している。1980年7月31日生まれ。獅子寮所属。髪が清潔感溢れるように整えられていて、傷跡が無い等の相違点がある。あらゆる能力が別物レベルで強化されている。オフの時は、普段着の上にブローチ付きのマントを羽織っている。魔法だけを使った戦闘能力だけでも、物語開始時点で上級の幹部死喰い人と同等。更には剣術や射撃、ジークンドーを始めとした体術まで実戦レベルで習得している。また、8歳の時にW―ウイルスに感染し、11歳の時に完全なウイルスモードの能力者となる。得意科目は、闇の魔術に対する防衛術と魔法薬学。この2つに限定すれば、成績は首席。魔法の開発者としての一面性を持っており、彼の創作魔法は主なものとして、いかに敵（特に闇の陣営）を効率良く、それでいてじわじわと苦しめながら殺すかに特化している。性格は、原作での悪い面が大幅に解消されて善い面はより強化されている。だが代わりに、悲しみ、憎しみ、怒りの感情に囚われやすくなっている。スネイプ関連限定だが、セカンドオピニオンが出来ておらず、また気に食わない事に関しても目を向けないと言う悪癖が追加された。

エリナ・リリー・ポッター（東山奈央）

主人公の1人。ハリーに双子の妹（二卵性双生児）で、原作ハリーのポジションを担う少女。1980年7月31日生まれ。穴熊寮所属。リリーを童顔にし、ジェームズと同じハジバミ色の眼を持つ。また、額に稲妻型の傷がある。ジェームズ譲りの変身術が得意で、それ

限定なら学年トップ。それ以外の科目も、原作ハリーより高め。更には、マクゴナガル指導の元、動物もどきの練習アニメーガスもしている。身体能力は女性というのもあって原作ハリーよりも若干低めだが、魔法戦闘の実力はその分高くなっている。強力な味方もいる為、対闇の陣営戦は超イージーモードになっている。マイペース且つのんびり屋な性格だが、勘が鋭く、危険な魔法生物にも懐かれている。ハリーとは、双子の兄妹というよりは仲の良い男友達の関係に近い。

ゼロ・ルーカス・フィールド（梶裕貴）

嘗て、ヨーロッパ最強と謳われた魔法戦闘一族『フィールド家』の末裔の少年。1980年1月1日生まれ。眼の色は、漆黒の色をしている。黒髪に、青いメツシユが入っている。これは、生まれつき。鷹寮所属。成績は、ハーマイオニーを超え、イドウンに次ぐ次席。その中でも、呪文学と魔法史、天文学が得意。戦闘能力も、今作のハリー及びグラントと互角に渡り合える程。魔法を使った戦闘は3人の中で1番強いだが、身体能力に限定すれば1番弱い。それでも、ホグワーツの殆どの生徒どころか歴戦の魔法戦士でも手に負えないレベルを誇っている。賢者の石での戦いにて、自然物化能力を開花。彼の場合、属性は風。余り喋らず、冷静かつ物静かな振る舞いが多いものの、内に秘めた熱さを持つ。実際、レイブンクローらしからぬ勇敢さとフレンドシップを持ち合わせていて、その為ならば自分の命を懸ける程。

グラント・モーフィン・リドル（鈴木達央）

無駄に顔立ちの整っている少年。蛇寮所属。髪の色が金髪で眼の色がワインレッド、嘘偽りのない人の良い表情だという事を除けば、トム・リドル時代のヴォルデモートに瓜二つ。ドラコの天敵。1980年4月16日。バカだが、人間関係は同じ苗字を持つヴォルデモートよりも良好になっている。粗暴な一面が強いものの、義理人情に篤い。古株の教師陣は、見た目だけなら髪と眼の色以外は若き日のヴォルデモートそのものだと感じている。実際に、彼との関連性を疑う者も少なくない。流石に成績は、クラブとゴイル、ブルストロード、パーキンソンよりは上で、頑張れば中の上は取れる。身体能力は6人

組の中で最も高い。魔法も苦手なだけで、全く使えないわけではない。賢者の石での戦いでは、動物変化能力を手に入れる。更に、秘密の部屋編ではパーセルマウスだった事も判明した。

ロナルド・ビリウス・ウイーズリー（常盤祐貴）

ハリーの親友。1980年3月1日生まれ。今作では、キャラの濃い友人が増えた所為で、出番及び活躍が少なくなった。それ故に、自己顕示欲と嫉妬の感情が膨れ上がっている。が、その代わりゲームやギャブル関係の才能と原作以上の成績と実力を身に付けている。今後に期待。

ハーマイオニー・ジーン・グレンジャー（須藤祐実）

ミス優等生。容姿は、映画版仕様と化している。1979年9月19日生まれ。堅物で生真面目だが、論理的思考力が高い。自分よりも成績の良いゼロとイドウン、ほぼ同等の学力で特定の科目限定ならば自分をも超える成績を叩き出すハリーと親密な為、良い意味でライバルが出来、また原作以上に成績が良くなっている。クイレルに服従の呪文をかけられた為（しかも、危うくゼロとグラントを殺す所だった）、服従の呪文がトラウマになっている。この経験がプラスに働くか、マイナスに働くか、彼女次第になる。

ドラコ・ルシウス・マルフォイ（三枝享祐）

蛇寮所属の男子生徒。原作におけるハリーのライバルだが、今作では幾らか関係がマイルドになったとは言え、どちらかと言えばエリナのライバルに。1980年6月5日生まれ。グラントに殴られる、お菓子をとり上げられる、拳句の果てにエリナからは止めようとした事件の主犯扱い（シロと判明してからはキチンと謝罪を受けている）にされる等、原作よりも酷い目に遭っている。だが、本当に危うい時にはハリーに助けられているので、原作ほど彼を嫌悪しておらず、ハリーの実力自体は認めている。後にスネイプに師事し、実技はOWL試験合格レベル、精神面も大幅なレベルアップ、グラントとのやり取りによって反射神経と危険察知能力のスキルも身に付けた。また、クイデイツチでハリーに惨敗してからは、そんな形でも勝負事に対してストイックな姿勢で臨んでいる。

ネビル・ロングボトム（上野容）

ハリーとロンのルームメイト。黒髪の、ぽっちゃりとした少年。1980年7月30日生まれ。両親は闇払いだったが、レストレンジ3人とバーティ・クラウチ・ジュニアによって廃人にされた。が、これについては異説があるらしい。賢者の石攻防戦前に、ハリーに恐れずに立ち向かった事で、それまで最悪な評価しかしていなかった彼を逆に感心させ、いつもハリーと共に行動しているロンを差し置いて敬意を払うに値する存在と化した。薬草学の成績が200点近く取れる様になっていて、魔法薬学以外にも第点は確保している。

ミネルバ・マクゴナガル（谷育子）

ホグワーツ副校長且つ変身術教授で、グリフィンボール寮監。1935年10月4日生まれ。厳しいが、それ以上に今作では生徒思いな一面が強くなっている。ある程の非常事態に対応出来る柔軟さを持っており、ダンブルドアには従いつつも、彼の秘密主義やより大きな善の為に取る強硬的な行動には時々苦言を洩らしている。ハリーが救世主か破壊神のどちらかに転じるかは、彼女（とアラン・ローガー）の決断が多いに関わって来る為、原作以上に重要人物化している。また、変身術が学年トップのエリナに関しても常に気に掛けている。

ポモーナ・スプラウト（山本与志恵）

薬草学教授で、ハツフルパフ寮監。生き残った女の子たるエリナが来たので、常に機嫌が良い。薬草学に優れるネビルを高く評価し、気に入っている。

フィリウス・フリットウィック（田村錦人）

原作の呪文学教授で、レイブンクロー寮監。余生を静かに過ごしたいとの事で、フォルテ・フィールドを後任に指名し、教師生活から引退した。続編で出る予定。

セブルス・スネイプ（土師孝也）

魔法薬学教授で、スリザリン寮監。後にエックス・ブラックの後見人を務めている事が判明する。1960年1月9日生まれ。気苦労さがパワーアップ。他の闇の陣営の関係者全員よりは随分とマシだ

が、人生の難易度が跳ね上がっている。当初、エリナに対しては友好的に、ハリーに対してはより敵対的な感情を持っていた。しかし、ハリーに関して魔法の質を直に感じ取った為、それ以上に恐怖心の方が勝る状態となる。この一件でヴォルデモート以上の闇の魔法使いになるのではと危惧しハリーの監視を独自に始めるが、当の本人からは自分のやる事に過剰干渉していると判断され、挙句にその行動は癌細胞同然と断じられている。そして、過去のポッター夫妻への所業や日頃のハリーへの逆鱗も相まって更に憎まれてしまった。

アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア
(永井一郎)

ホグワーツ魔法魔術学校校長。20世紀最強且つ最も偉大な魔法使いとされている。1881年夏生まれ。茶目つ気たつぷりでユーモアに溢れる好々爺。普段は周囲の人間に穏やかに接している。しかし、冷酷な策士の一面を持っていて、母親譲りの秘密主義を持っている。原作以上に、死を克服する事や永遠の命への憧れが強くなっている。また、より大きな善の為ならば、年端も行かない子供を犠牲にする事も躊躇わない一面を持つ。物語開始の10年前、これが悪い意味で大きく作用してしまい、結果的にアルフレッド・ローガーを死なせてしまった。この一件はロイヤル・レインボー財団を、特に会長であるアラン・ローガーの壮絶な怒りを大いに買う羽目になった。何とか確執を解消しようと交渉しているものの、未だに拗れたまま。計画自体は原作以上に上手くいっているが、人間関係にはそれに比例して非常に恵まれていない。また、ハリーにはエリナを対ヴォルデモート用最終兵器として見ている事を看過され、彼からも怒りを買ってしまった。

イドウン・アリエス・ブラック (井上麻里奈)

ブラック家の現当主をやっている少女。蛇寮所属。1979年9月30日生まれ。シリウスの妹夫婦の娘。腰まで伸ばしたサラサラな黒髪で、右目に紫、左目に灰のオッドアイ。成績は、学年トップの首席。普段はお嬢様口調で、物腰も柔らかい振る舞いをするが、戦闘狂の一面を持っており、ハリーに苦手意識を持たれている。決闘の実

力は、ハリーやゼロ、グラントよりもやや高い。しかし、ルール無用の戦闘になった場合は話が別で、彼らには大きく劣ってしまう。基本的に他の寮生にも社会的に接するので、根は善良。秘密の部屋の一件でハリー達と共闘し、彼らとの親密度がアップした。

シエル・スラグホーン（水橋かおり）

スリザリン寮監の前任者、ホラス・スラグホーンの孫娘。1980年4月4日生まれ。本人は祖父と同じ蛇寮を希望していたが、帽子の後押しで最終的には驚寮所属となった。明るい金色で、空の様に青い目の特徴。カチューシャをかけている。魔法薬学においては、ハリーに次ぐ次席。実は、ゼロを強く意識している。

フォルテ・アルバート・フィールド（森田成一）

ゼロの異母兄で、元闇払いの青年。1968年5月8日生まれ。フリットウィックの後任として、呪文学の担当兼レイブンクロー寮監を担当する。彼もまた、ゼロと同様に自然物化能力の所持者で、水属性を持っている。基本的には穏やかだが、通常形態の戦闘能力でもダンブルドアを除けばホグワーツ教員でも最強を誇る。しかし、それでも自然物化能力以外の特殊能力を隠し持っている模様。詳細は不明ながら、パンジー・パーキンソンには冷酷な態度を取る。それどころか、パーキンソン家はこの世に存在するのが許せないと思う程に憎悪している。これには、彼の生い立ちが深く関わっている。

アラン・ローガー（玄田哲章）

ロイヤル・レインボー財団会長。1927年3月14日生まれ。今作におけるハリーの保護者で、孫が3人いる。だが、元は4人いた上に、妻や息子夫婦も存在していた。ヴォルデモートとは同期の間柄。穴熊寮のOB。その為、実年齢は60代半ばの筈だが、見た目は完全に20代後半から30代前半。ダンブルドア以外で、ヴォルデモートが何をやっても勝てなかった24人の魔法使いの1人。味方に対しては極めて寛大だが、敵対者にはとことん残酷非道になる。味方や仲間間の被害が少なく済むものならば、それ以外は平気で見捨てる。闇の陣営の関係者をして、極悪とも言われる。ヴォルデモートがまた戻って来るのは分かり切っている為、それを見越してハリーを日本で育て

ていた。妻や息子夫婦の不幸、拳句の果てに初孫アルフレッドの一件で、ヴォルデモートの一味は勿論の事、後継者たるアルフレッドを半ば無理矢理騎士団に入れ、むざむざと見殺しにしたダンブルドアを完全に敵視している。

エイダ・ローガー（大本眞基子）

アランの孫の1人。ハリーの剣術の師でもある。1968年8月8日生まれ。 hogwarts 在籍時には驚寮に所属していて、現在はマホウトコロという日本の魔法学校で教師をやっている。基本的に温厚且つ丁寧な口調で話すが、キレると物凄く怖い。ハリーと2人だけで会話する時は、英語ではなく日本語がメインになる。フォルテ・フィールドとは同じ寮の同期で、在学中は成績トップの座を競い合っていた良きライバルや友人と言った関係。しかし、彼に対してはそれ以上の感情を持っている。嫌いなタイプは、昔のやらかしを完全に忘れる様な人間。

イーニマス・ローガー（私市淳）

アランの孫の1人。ハリーに座学を教えた。1970年11月23日生まれ。ビル・ウィーズリーとは同期の間柄で、それなりに交流はあった。在学中は蛇寮に所属していたが、純血主義的な思想は真つ向から否定している稀有な人物。ハリーが原作と違ってスリザリンに悪感情を抱かないのは、彼の存在があつてこそ。体は生まれつき弱いが、その分知識量は凄まじく、ロイヤル・レインボー財団が分霊箱の存在を突き止めるに至った最大の功労者。とは言え、最近では体の方も鍛えている。現在は、オーストラリアで魔法と科学の融合の研究を行っている。幼い頃、ルシウス・マルフォイら3人に誘拐され、闇の印を無理矢理刻み込まれ、その後マンダンガス・フレッチャーに救われた経緯を持っている。決して出しゃばらず、ひたすら周りのサポートに徹する縁の下の力持ちタイプ。

アドレー・ローガー（神谷浩二）

アランの末孫。上の兄弟達を兄上や姉上と呼んでいる。ハリーに戦闘に関する技術を身に付けさせた。1973年6月1日生まれ。在学中は穴熊寮に所属していて、現在はアメリカでFBIの仕事をし

ている。チャーリー・ウィーズリーやニンファドローラ・トンクスとは同期。前者とは、定期的に連絡を取り合っている関係。実は、アランの後継者に指名されている。これは、エイダやイーニアスもそれに同意している。常に危険と隣り合わせな仕事をしている為か、エイダやイーニアスよりも戦闘能力はツーランク程高い。マイペースな性格。趣味はテレビ鑑賞、インターネット、読書（但し、A V関係に限る）。
クイリナス・クイレル（横堀悦夫）

1991年度の闇の魔術に対する防衛術の教師。辿った軌跡は原作と同じ。しかし、ギャンブルにおけるイカサマの才能が追加されている。原作でもそれなりに優秀な魔法使いであるとは言われていて、本作でも強く活かされている。具体的には、頭に血が上って冷静な判断が出来なかつたとは言え、通常形態のハリーに圧勝する程の戦闘能力を持っている。また、許されざる呪文も全て使用可能になっている。但し、不測の事態にはめっぽう弱い、最終的には、エリナの説得によって改心。その後、罪を認めて潔くアズカバンに送られるが、そこでシリウスと仲良くなる。後に、シリウスとハグリッドに天虹眼の伝承を教えた。

ヴォルデモート卿（江原正士）

原作ラスボス。サラザール・スリザリンの末裔。だが、サラザール本人の意識が少々劣化しながらも内装されているバジリスクからは良く思われていない。1926年12月31日生まれ。やたらお辞儀にこだわる、厨二病患者でロリコンストーカー。名前を言っていないので、特にハリー達からは不名誉なあだ名で呼ばれている。通称『名前を言って貰えないあの人』。今作では更に上には上がいる為か、ダンブルドア以外にも勝てない奴は最低でも24人はいる模様。ホグワーツに在籍していた最初期は、寮は違えどもアララン・ローガートもそれなりに仲良くやっていた。賢者の石編で、クイレルを憑依調教して下僕にする。賢者の石を手に入れ、復活する予定だった。しかし、エリナに宿るリリーの魔法で焼かれる、クイレルの拒絶される、ハリーの創作魔法で本体の魂を焼かれるなど結構酷い目に遭っている。更に言えば、もしエリナやハリーに勝っていたとしても、ダンブルド

アか、異空間より成り行きを見ていた仮面の男ダウトに邪魔されていたので、いずれにしても失敗するのは明白だった。本作終了時点で、分霊箱である日記のみならず髪飾りも破壊されている。

シリウス・ブラック（辻親八）

ジェームズ・ポッターの親友の1人。原作に先駆けて初登場（尤も、名前だけならハグリッドの口から出ている）。1959年11月3日生まれ。エリナの後見人。ポッター夫妻の敵を取る為にピーターを追い詰めたはいいが、それと同時に嵌められてしまい、アズカバンにぶち込まれてしまった悲劇の人。但し、真実を知っている味方がいるだけ幸せ者ではある。原作と違い、普段は左眼を使い回しの包帯で隠している。今作ではクイレルと仲良くなったり、ハグリッドと監獄でトークをやったりしている。

リーマス・ルーピン（郷田ほづみ）

ジェームズ・ポッターの親友の1人。彼も、原作に先駆けて初登場。1960年3月10日生まれ。今作のハリーの後見人。毎年のハロウィーンにて、ポッター夫妻の墓参りをしにゴドリックの谷に訪れている。ロイヤル・レインボー財団からかなりの頻度で仕事を貰っている。経済的にマシになっていて、身なりも悪くない。原作と違い、シリウスの一件で彼を助けなかったダンブルドアを見限っている。

エックス・トーマス・ブラック（田村睦心）

イドウンの実弟。1981年5月31日生まれ。両親や姉とは違い、ブラック家史上2番目となる獅子寮へと組み分けされた。性格も幾分か落ち着いているとは言え、両親よりも伯父のシリウスに似ている。コリン・クリービーやジニー・ウィーズリーと仲が良く、3人で共に行動をしている。入学初日にハリーとも知り合い、時々勉強を見て貰ったりしている。秘密の部屋の戦いにも参加し、バジリスクの魔眼で石化したコリンと、リドルに攫われたジニーの仇を取った。事実上、秘密の部屋での戦いにおける裏主人公。

ルシウス・マルフォイ（諸角憲一）

ドラコの父で、マルフォイ家現当主。1954年生まれで、ジェームズよりも5学年上。元死喰い人の経歴があるが、服従の呪文にかけ

られたと報告、更に金色のお菓子を渡した事で無罪となった。その為、闇払いやウィーズリー家からは常にマークされている。権威を手に入れるのと、お金儲けの才能、子育てのスキルは超一流だが、その代償として死喰い人や闇の魔法使いとしては無能になっている。ロイヤル・レインボー財団からはブラックリストに登録されている。よって、英国魔法界以外の全世界は敵同然と化している。親しい人を傷つけたため、ハリーから宣戦布告され、彼の魔力の質に怯えながら逃走した。また、メイナード・ポッター及びウイルスモードの眼がトラウマ。

ギルデロイ・ロックハート（内田直哉）

無能のハンサム。驚察のOB。1964年1月26日生まれ。2人の姉がいるが、両者共にスクイブ。12歳年上の長姉の方がゼロの母親の為、フィールド家とは一応親戚になっており、ゼロの母方の叔父となっている。これでも在学中はそれなりに優秀だったが、目立ちたいとの事で度々騒ぎを起こしている。結果、魔法は忘却術と、ヴォルデモート以上の開心術、スネイプに匹敵する閉心術しか使えない。但し、文才や記憶力、世渡りの能力は健在。原作と同じく、記憶喪失になるが、生徒達からはそちらの方が好感が持てるという印象になった。

トム・マールヴォロ・リドル（石田彰）

ヴォルデモートの本名且つ青年期まで使っていた名前。今作では、本人が最初に作った分霊箱、『リドルの日記』に宿る魂として登場。一応は、『再会と因縁の章』のラスボス。原作と違い、終始ハリー達に振り回されっぱなしとなる。しかし、自分に付き従うバジリスクに超強化目的で生体改造を施したり、ジニーを操ってマグル生まれ狩りをしていたりなど、悪役としての仕事はキッチリとこなしている。

ジェームズ・ポッター（後藤敦）

ハリーとエリナの父親。1960年3月27日生まれ。故人。髪型や表情以外は、ハリーに瓜二つ。成績はトップで、特に変身術は動物もどきになれるほど最も得意。また、クイディッチのチェイサーにも選ばれているので、箒の腕前もプロチームからスカウトを受ける

程。7年生は首席をやっていた。原作と同じく、6年生までの態度はDQNそのもの。だが、態度を改めてからは自分が今までにやった所業に対する報いはちゃんと受け止める位の覚悟を持つようになった。戦闘能力も、シリウスやリーマスと組めばヴォルデモートには勝てずとも痛いダメージを与えたり、無事に逃げおおせるだけの实力はある。実際、ヴォルデモートの左腕をシリウスやリーマスと共に切り落とした事もある。

リリー・ポッター（田中敦子）

ハリーとエリナの母親。1960年1月30日生まれ。故人。エリナを大人っぽくしたような容姿。ハリーの魔法薬学の実力は、彼女譲り。機知に富み、偏見を持たない人物。と、ここまで来れば完璧超人にも見えるのだが、羞恥心が全く無く、プライベート空間では暑いからという理由で服を全て脱ぐという困った一面がある。両親やペチュニアから改善しろと言われていたが、本人は全く意に介してない。本人だけの固有能力としては、開心術とはまた違う、生まれつき心眼のような能力も持っていて、ハリーには金目の物や宝の真贋を見抜く力、エリナには人間や動物の本質を見極める力としてそれぞれに遺伝している。死の間際に発動した自己犠牲による護りの魔法は、ヴォルデモートを倒す者の宿命を背負ったエリナの助けとなっている。

メイナード・ポッター（井上和彦 少年期まで：小野賢章）

ジェームズ・ポッターの兄。家系と違って数少ない驚察に所属している、監督生と主席を担当していた。よって、ジェームズよりも礼儀正しい性格。更には、イドウンの後見人だという事も判明する。一見、クール且つ掴みどころの無い性格に見えるが、実際は内に秘めた熱さと、時に周囲を驚かせる大胆さを持つ。メイナードを知る者からは、本作のハリーの性格は彼によく似ていると評している。ルシウス・マルフォイとは同期の関係で、彼がヴォルデモート以上に恐れている人物。経緯は不明だが、甥のハリー同様にウィルスモードの能力者だったらしい。卒業後は闇払いの職業に就き、ムーデイの部下になった。魔法戦闘だけでも、ジェームズ、シリウス、リーマス、ピーター、リリーの5人が共闘しても足元にも及ばず、対闇の陣営戦でも

ベラトリックスと互角、それ以外の死喰い人に対しては圧倒する程の戦闘能力を持っていた。ジェームズ達4人を逃がす為に殿を3日3晩務めて、死喰い人数十人を道連れに死に、彼の遺体は救援に来た闇の陣営に回収されたというのが通説になっている。

アルフレッド・ローガー（風間勇刀）

アラン・ローガーの初孫。エイダ、イーニース、アドレーの長兄。獅子寮に所属していた。艶のある金髪で、生まれつき虹色の眼を持つ。1963年7月31日生まれ。悪戯仕掛人とは3学年も離れていたが仲は良かった。彼の作った細胞分身は、ハリーも度々使用している。卒業直後にダンブルドアによって不死鳥の騎士団に所属した。しかし、その3週間後にヤックスリーが主犯の死喰い人に、遺体すら残されない状態で殺害されてしまった。彼の死が、祖父アランのダンブルドアへの不信感の増長及び拒絶や確執を生む事になってしまった。

ハイタカ（古谷徹）

ダイヤゴン横丁に存在する『ハイタカの掘り出し魔法道具専門店』の店長の男性。この店は、廃業となった店の地下に存在する。30代前半の容姿をしているが、100年前から変わっていない。フィールド家とは、ゼロとフォルテの4世代前から深い親交があり、魔法族の客の中では1番のお得意様でもある。また、ジェームズのみならずその兄のメイナードとも面識があった模様。元々は、隠居した大人のような口調をしていたのだが、ゼロの先祖との関連性を深める設定があるので、余程の相手でもない限りはどんな相手にも敬語を使う口調になった。

【オリジナル設定】

ロイヤル・レインボー財団

アラン・ローガーが会長を務める財団。英国魔法界以外の全魔法界、マグル世界でも殆どの国に多大な影響を及ぼしている。絶大な資金力を誇り、世界の主要国全てに活動拠点が存在する。また、新技術の開発にも積極的で、科学者やマグル界で生きる魔法族達を擁している。関わっている国のマグルは、政府の上層部のほんの一握りのみ魔

法使いの存在を知り、ある程度魔法使いと戦えるようにしている。基本的に、医療や歴史、新技術等を中心に、あらゆる分野に力を入れている。資金提供をし、その見返りとして提供した所の技術を頂戴している。組織内交流も盛んで、『会長を囲む会』や『黄金屋敷の立食パーティー』等をやっている。そう言った意味では、秘密結社の不死鳥の騎士団や、首領以外全メンバーを把握していない闇の陣営とは一線を化す。闇の陣営と不死鳥の騎士団が仮に協力しても、瞬く間に全滅するのが目に見える程の戦闘能力を持っている。

ローガー家

魔法族の家系の1つで、血統としては限りなく純血に近い半純血。元々、凡そ150年前に家風に馴染めず出走し、実家から除名されたアポロン・ブラックが決別の意味を込めて苗字を名実共に改名したのが始まり。後に世界中を旅している途中で油田を発見し、石油を掘り当てた為に多大な財産を手にする。これを基にロイヤル・レインボー財団の前身の企業を立ち上げた。魔法族でありながら、非魔法族世界と積極的に交流し、その文化や技術を手にした。他の魔法族とは異なる発展をして来た特異な一族である。ローガー家の者は殆ど全員、非魔法族の戦闘技術を絶妙に組み合わせた独自の戦闘スタイルを持つ。

不死鳥の騎士団

ダンブルドアが第1次魔法戦争時に、闇の陣営に対抗する為に結成した組織。現在は解散状態になっている。魔法省の役人や一部の闇払い、実力あるダンブルドア信者が主な構成員。人数だけなら、闇の陣営の5%程しかないが、その代わり個々の力が驚異的な高さを誇っている。原作よりは上手く戦えている。

闇の陣営

ヴォルデモートが首領を務める組織。純血主義思想を持つ差別主義者、闇の帝王のカリスマに惹かれる者、恐怖心から従う者、嘗て正義の名の下に魔法使いによって歴史の表舞台から退場させられた存在が主な構成員となっている。資金稼ぎ、裏工作、洗脳教育は優れているものの、戦闘においては極一部を除いて烏合の衆である。

フィールド家

ヨーロッパ最強とされた戦闘一族。主要人物はゼロとフォルテ。火、水、風、土の自然物を操り、実力者の中には身体そのものを自然物化出来る。1970年代初め、闇の陣営が動き始めた時にフォルテとその父アルバートを残して全滅した。ゼロは、アルバートの後妻の子である。

ゴーント家

聖28一族の1つに数えられている魔法族の家系。全盛期時には、あらゆる動物との会話も可能な上に体の作りを変えて動物の姿になる事も出来た。しかし、純血を重視し過ぎた為に近親婚を繰り返した結果、次第にその能力は失われていき、モーフインの死を以って断絶した。しかしヴォルデモートは、母メローピーを通じてこの一族の血を引いている。

ポッター家

魔法族の家系の1つ。主要人物は、主人公のハリーと双子の妹のエリナ。12世紀に存在したリンフレッドが始祖。基本的に獅子寮ではあるが、最低もう1つ別の寮への適性を持っているので、他の魔法の一族からはどこに行っても大成すると言われる。また、ある特定の分野に対する能力が並の専門家よりも優れているのも特徴。極めつけは、W―ウイルスへの耐性及び適合率が魔法族にしては非常に高い。実際、数百年の間で数は少ないながらもそれなりに適合者はいた模様。

魔力の量

これが多いと、魔法をどれだけ行使しても問題無い。魔法は使う度に、魔力が消費されていく。使えば使う程、空になる。基本的には、ちゃんとした休息をとるしか回復手段は無い。多いと言われるのは、アルバス・ダンブルドア、ヴォルデモート、イドウン・ブラック、エックス・ブラック。特にイドウンとエックスのブラック姉弟は、ほぼ無尽蔵の魔力の量を誇る。

魔力の質

魔力の量とは違う概念。こちらは、魔法の成功率を表す。質の高さと魔法の成功率は比例する。また、無詠唱や杖無しでの魔法行使の適

性も、これに該当する。大抵の魔法使いは、これはあまり高くない。ハリーは魔力量も多いが、それ以上にこちらが優れている。他の人物とは次元が違う程に。スネイプ曰く、ヴォルデモートなど比ではない。

自然物化能力

ゼロの特殊能力。フィールド家でも、ほんの数人しか発現させた事が無いと言われる程の代物。能力者の身体を自然物に変化させ、ありとあらゆる物理攻撃を弱点以外はツすべて無効化する。ゼロの場合は風。しかし、まだこの能力は火、水、土の3種類、計4種類存在する模様。

動物変化能力

グラントの特殊能力。自らの体質を動物の姿に変化させる。見た事がある、存在を知っている種類であれば何でも可能。しかし、絶滅種やこの世界に存在しない種類には変化出来ない。今作では、チャーにアナコンダ、サイ、狼、クロコダイル等になった。

W—ウイルス

魔法使いだけに感染して、長時間苦しませて殺す。正確には、魔力を持った生物に死を与える。魔力を持った生命体からすれば、究極の天敵となるウイルス。しかしどういうわけか、極稀に感染しても死なずに適合する者もいる。それをまとめた文献も存在するが、余り知られていない。今の所は、ハリーだけが適合者に該当する。

ウイルスモード

W—ウイルスの適合者のみが見える強化形態。使用時には、眼の色がルビーレッドとなる。特殊能力としては、自分に関係する過去の出来事の予見、身体能力が少なくとも通常時の1.6倍以上になる。五感も上がるが、特に視力の上昇が著しい。そして、目を合わせる事で相手を幻覚に陥らせる事が出来る。この時には杖も要らず、また詠唱が無くても発動する。これは、眼に特殊な魔力が宿っている為。そして普通の魔法を使った場合、魔力の消費量が通常時よりも半減される。但し、ウイルスの力を使っている間は、スタミナを消費し続けるという副作用が存在する。尤も、スタミナ消費に関しては修行等によつて

大幅に緩和させる事は可能。

魔封石

特殊な海域のみに存在する鉱石。成分は、鉄と変わらない。しかし、魔力を持った生物がこの鉱石に触れると、力が抜ける感覚に襲われてしまう。特殊な素材で作られた道具を介して、触る事が出来る様になる。魔法族が安全に扱っていくには、今の所この方法しか無い。

【オリジナル呪文】

フアーマル・フレイデイオ
邪神の碧炎

悪霊の火を参考に、更なる発展改良を行った呪文。その威力は、元となった悪霊の火すらも焼き尽くす効果がある。また、分霊箱の破壊も出来るという効果も持っている。そして、引き裂かれていない健全な魂すらも完全に焼き尽くせる。この呪文で生物に止めを刺した場合、魂は消滅し、ゴーストになる事も、あの世に行く事も、リンボに囚われた状態にも、転生する事も不可能になってしまうと言う極悪性能が存在する。その反面、悪霊の火以上にコントロールが困難。1988年、ハリー・ポッターが開発。

アフソリユス・グラキジエイド
零界の翠氷

氷河となれよりも更に強力な凍結効果を持つ呪文。追尾機能を持ち、狙われた標的は容易に振り切れない。但し、使用者の魔法を行使した方の腕が凍傷に陥ると言うデメリットがある。1989年、ハリー・ポッターが開発。

エンジエボルス・ガルドレギオン
天魔の金雷

電流、抵抗、電圧を最大100億まで調整可能で、これによって電力を設定する。次に、そこから発せられた黄金の電撃を放つ呪文。人間の情報処理能力では追いつけない程の肉体活性を促す為、普通の魔法使いが使用する事は不可能。この呪文を実戦で使うには、ウィルスモードとの併用が必要不可欠となる。1990年、ハリー・ポッターが開発。

フッロクス
炎よ我に従え

邪神の碧炎の形態変化を可能にする。それだけでなく、ありとあらゆる炎を操ることが出来る効果もある。邪神の碧炎と同時期に、1

フアーマル・フレイデイオ

988年、ハリー・ポッターが開発した。
幻覚を見せつける

精神攻撃を行う。空間、質量、時間を意のままに操れる、使用者の精神空間へ引きずり込む。その内容は何でもありで、磔にして切れ味の悪いナイフで1週間刺し続ける、96時間溺れさせる、かけた相手のトラウマを再び見せつけると言った芸当が可能。これを一瞬の内に食らわせるので、廃人と化したり、ショック死に追い込む事が可能。しかし、魔力の消費が激しいので、乱用は禁物。1985年、イーニアス・ローガーが開発。

細胞分身

使用者の細胞から、使用者自身の分身を作り出す。自分の意思で呪文を解除すると、分身の経験がオリジナルに還元される。その性質から、分身というよりある種のコピー人間、或いはクローン人間と言った方が正しい。1974年、アルフレッド・ローガーが開発。
口寄せ召喚せよ

日本にある術、口寄せをヨーロッパ式で再現させた魔法。通常は、詠唱した所で効果は全く出ない。専用の契約書を使い、口寄せしたい物品との契約を行う事で初めてその効果が発揮される。契約した物ならば、呼び寄せ呪文以上に確実かつ迅速に使用者の目の前に現れる。1992年、ハリー・ポッターが開発。

雷電閃光

天魔の金雷と幻覚を見せつけるの融合魔法。使う対象が少ない場合は電流が、逆に多い場合は閃光となって発射される。この電流が閃光を見た者は、幻覚に陥る。よって、視力が悪い、目を閉じられると効果が発揮されない。
神の怒り

虹色の破壊光線を撃つ呪文。单体でも、人間程度なら軽く消滅させる事が出来る。この呪文の最大の特徴は、2人以上が同時に発動させると単体に比べて最低40倍の威力になる事である。1992年、ハリー・ポッターが開発。元々は、製作者のハリーが死喰い人を1人残らず殺す目的の為に作った呪文である。

フリベンド
攻撃せよ

ゲームに出て来る攻撃呪文。今作では、ゼロ専用の杖に宿るオリジナル魔法として登場。効果は一緒。
ヴェステイブルーム
エネルギーよ

こちらも、ゼロの杖に宿っているオリジナル魔法。前述の攻撃せよの応用版。青白いエネルギー波の光線を発射する。威力の調整が可能で、最大出力の場合はハンガリー・ホーンテール種を一撃で粉碎可能。

ディアブマス・アレイビス
魔塊球

白い光球を放つ呪文。これ自体に攻撃力は皆無。しかし通過、又は命中した使用者の他の魔法の威力が最大20倍に強化される。武装解除呪文の場合は、死の呪文を相殺出来る様になる。1992年、エリナ・ポッターが開発。

魔力感知呪文

ハリー自身が開発。魔力を探る事で、誰が何処にいるのかが分かる。また、1度感知した者に対して再感知した場合、より詳細な情報を拾う事が出来る。射程距離は、熟練度によって変動。ハリー・ポッターの場合、半径5000キロである。

再会と因縁の章終了時点の強さ

ダンブルドア<<<<<<アラン、その他>>ヴォルデモート<<フォルトン
アドレー<<ベラトリックス>>エイダ、イーニマス<<マクゴナガル、ス
ネイプ<<クイレル、上級死喰い人(アスカバン組)>>ハリー、ゼロ、グ
ラント<<イドウン、セドリック、上級死喰い人(日和見組)>>下級死
喰い人(実力者)、エリナ、エックス、ドラコ、双子<<コリン、ジニー、
下級死喰い人(雑魚)><ロン、ハーマイオニー<<<<越えられない壁<<<<
一般の魔法使い

但しこれは、魔法だけの戦闘の場合に限る。格闘術や杖以外の武器、他の者では容易に真似出来ない特殊能力による補正は省いている。